平成二十五年度博士学位請求論文「『うつほ物語』論――書かれたものの機能」正誤表

武藤　那賀子

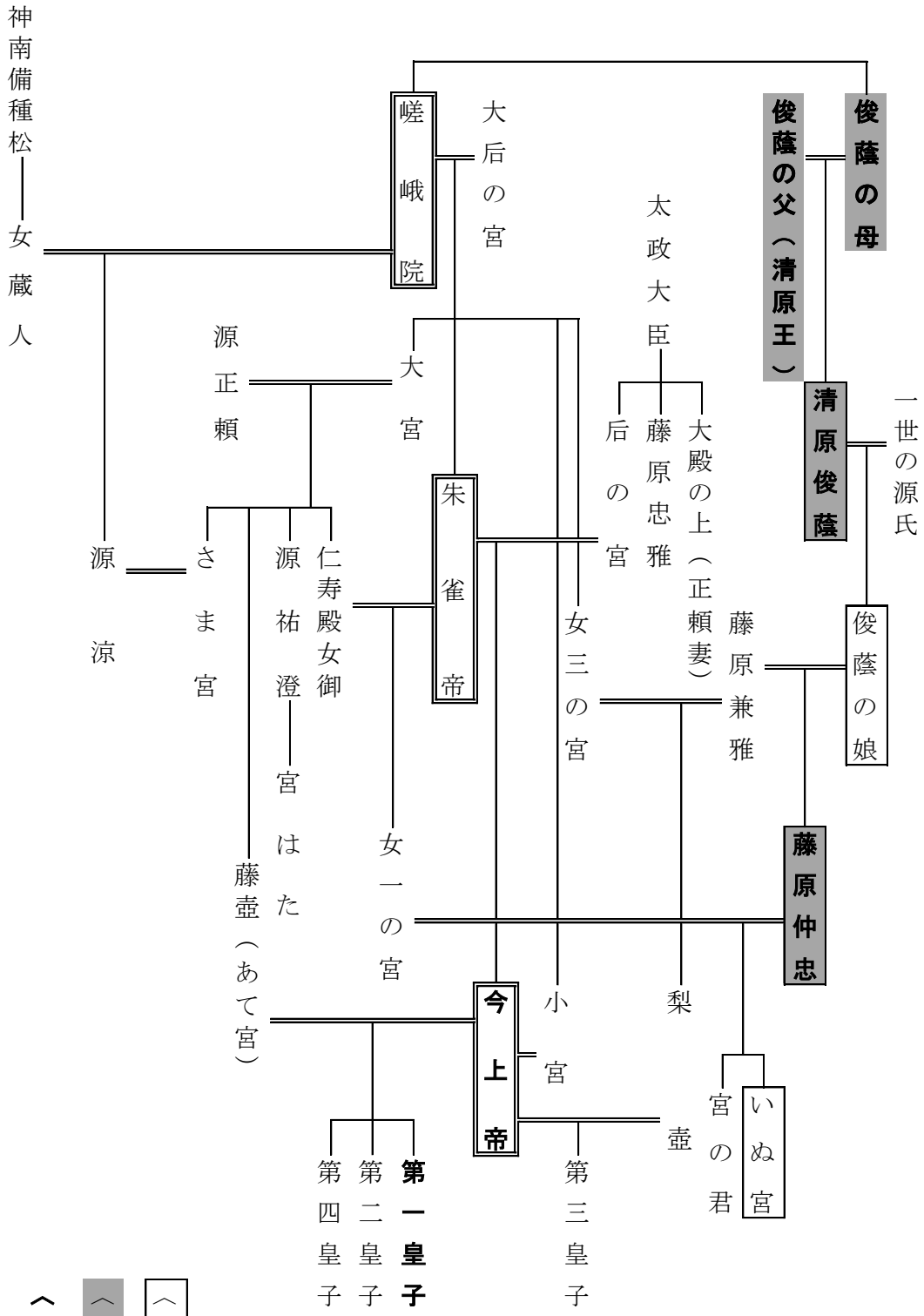
頁数	箇所	誤	正
三十三	五行目	一方の仲忠は⑩～⑭にあるように	一方の仲忠は⑦～⑫にあるように
三十三	第三節三行目	また、文字を書きつける対象の転換点が⑥と⑨にあることも述べた。	また、文字を書きつける対象の転換点が②と⑤にあることも述べた。
三十三	第三節三行目	⑫は、あて宮が春宮に入内することが決まり、	⑨は、あて宮が春宮に入内することが決まり、
三十四	八行目	仲忠が初めて物に文字を書きつけた⑥において、	仲忠が初めて物に文字を書きつけた②において、
三十六	二行目	そして、⑫で見たように、仲忠以外の人物の贈り物は簡略的に書かれ、あたかも仲忠の贈り物が至上のものであるかのように書かれる。これは、⑭でも同様のことが言える。	そして、⑨で見たように、仲忠以外の人物の贈り物は簡略的に書かれ、あたかも仲忠の贈り物が至上のものであるかのように書かれる。これは、⑫でも同様のことが言える。
三十八	三行目	例えば、⑨において、仲忠があて宮に贈った和歌は	例えば、⑤において、仲忠があて宮に贈った和歌は
三十九	一行目	仲忠と藤壺の関係は、⑨において、特別なものとなる。	仲忠と藤壺の関係は、⑤において、特別なものとなる。
五十四	二行目	**ここでは**、〈手〉の判定者としての兼雅の地位が、	**ここは**、〈手〉の判定者としての兼雅の地位が、

平成二十五年度　博士学位請求論文

『うつほ物語』論――書かれたものの機能

学習院大学大学院　人文科学研究科
日本語日本文学専攻　博士後期課程
武藤　那賀子

『うつほ物語』主要人物系図



〈琴〉の〈系譜〉

〈学問〉の〈系譜〉

〈手〉の系譜

『うつほ物語』論――書かれたものの機能

目次

序章　本論の目的　……1
一．問題意識と研究の目的　……1
二．本論の構成と方法　……1

第一章　物に文字を書きつける　……6
一．物に文字を書く仲忠　……8
二．自然の景物に文字を書きつける　……13
三．作り物に文字を書きつける　……15
四．あて宮求婚譚収束後の変化　……18
五．物に文字を書きつける　……20

第二章　「書きつける」ことから見える言語認識　……26
一．実忠からの文字を書きつけた贈り物　……26
二．実忠と仲忠からの文字を書きつけた贈り物の比較　……30
三．あて宮と仲忠の意思疎通　……33

四．あて宮への求婚からいぬ宮の入内へ　35
五．『うつほ物語』における言語認識　38

第三章　書かれた〈手〉　42
一．手紙の書き手を判断する材料としての〈手〉　42
二．あて宮求婚譚以降、頻出する〈手〉　44
三．〈手〉の美しさへの評価　49
四．仁寿殿の女御の〈手〉と藤壺の〈手〉　51
五．仲忠の〈手〉　54
六．春宮・若宮の〈手〉　57
七．卓越する仲忠　61

第四章　紙に字を書く――手紙の機能　66
一．手紙の遣り取りの有無＝人物関係の有無の開示　66
二．手紙の内容の隠蔽――人物関係の変化に対する可能性の提示　69
三．見られ、代返される手紙――人物関係が再度成立する可能性の示唆　70
四．見られる手紙――隠されていた人物関係の表出　74
五．差出人と受取人の特定の重要性――関係の明確化　76
六．証明としての手紙――保険としての情報開示　78

七．人物関係を可視化する手紙 …… 80

第五章 〈手〉の相承――文字の伝授と〈琴〉の伝授 …… 86
一．『うつほ物語』における「手本」 …… 86
二．〈蔵開き〉で出てきた書物と仲忠の〈手〉 …… 93
三．仲忠が作成する「手本四巻」 …… 98
四．すれ違う仲忠と藤壺の思惑 …… 101

第六章 清原家の〈学問〉の〈系譜〉を担う仲忠――先祖が書いた書物と学問の継承 …… 112
一．〈蔵開き〉 …… 113
二．女一の宮の懐妊～いぬ宮の産養 …… 115
三．籠る仲忠 …… 122
四．朱雀帝への進講 …… 124
五．〈学問〉の〈系譜〉 …… 128

第七章 清原家の〈学問〉の進講 …… 133
一．「一氏族の書物」という枠を超えた清原家の書物 …… 134
二．清原家の書物の進講における春宮 …… 135
三．清原家の書物の進講と史実の進講 …… 138
四．『日本紀』の進講と清原家の書物の進講 …… 142

五．「献家集状」と『日本紀』進講を踏まえた清原家の書物の進講 ・・・・・・ 144

第八章 〈琴〉と〈学問〉の公開の場の論理――後半の巻々を中心に ・・・・・・ 150
一．時刻表現の偏り ・・・・・・ 150
二．香る様が描かれる香り ・・・・・・ 154
三．雪と声が作りだす空間と楼 ・・・・・・ 159
四．〈琴〉の公開と〈学問〉の公開の相似性 ・・・・・・ 163

第九章 清原家の系譜の全てを担う仲忠と次世代の者たち ・・・・・・ 169
一．〈琴〉と〈学問〉の〈系譜〉 ・・・・・・ 170
二．〈手〉の〈系譜〉 ・・・・・・ 174
三．三つの〈系譜〉と継承されていくものの行く末 ・・・・・・ 177

資料 『うつほ物語』における文字が書かれた物・文字と対になった贈り物一覧 ・・・・・・ 187

序章　本論の目的

一・問題意識と研究の目的

本論は、『源氏物語』より数十年前に成立したとされる『うつほ物語』における「書かれたもの」に着目し、その機能について考察するものである。

これまでの『うつほ物語』の研究は、巻々の論や人物論、琴や学問、羅列される物の論考といったものが主であった。しかし、『うつほ物語』には、これらとはまた別の、固有の特徴として挙げられる事項がある。それは、物語の最初から最後まで、紙だけではなく物に文字を書きつけるという行為が多くみられ、かつ物語の展開の中でこの行為が重要な役割を担っていることである。これまで、物に文字を書きつけるというこの物語独自の人物間のコミュニケーションについて述べた論考は少ない。本論では、物に文字を書きつけるという行為を中心に据え、『うつほ物語』において贈与される言葉と、それに付随する物について見ていき、過去に「稚拙」の一言で片づけられていた本物語において行なわれてきた「言葉」を贈る行為について考える。そして、これを発端として、この特徴的な行為を行なう藤原仲忠という人物について見ていくことで、「清原一族」が作り出した三つの〈系譜〉(注1)を考察する。

二・本論の構成と方法

本論では、九つの観点から『うつほ物語』における「書かれたもの」の機能を考察しており、それぞれの観点を章としている。各章の概要については、以下の通りである。

第一章では、紙以外の物に文字（和歌）を書く場面が多くあることが『うつほ物語』独自のものであることに着目し、物語内で一貫して物に文字を書き続ける藤原仲忠に焦点を合わせる。仲忠は、あて宮（藤壺）への手紙のいくつかを物に書く。これらを経時的に比較することにより、仲忠が文字を書く対象を変えていることを指摘した。この検討から、『うつほ物語』における物に文字を書きつけるという行為がただやみくもに描かれているのではなく、一定の論理の元に描かれている可能性があるということを指摘した。

第二章では、仲忠以外の他の登場人物に比べ、文字を書いた贈り物を多く贈る源実忠が文字を書きつけた物を取り上げ、第一章で見た仲忠が文字を書きつけた物と比較した。両者の描かれ方の相違は、あて宮から返事を貰える法則に気付いていたか否かにあると指摘した。また、文字を書きつけることによるあて宮との意思疎通に成功した仲忠の方法を詳細に見てゆくことで、「書きつける」ことから見えるこの物語の言語認識が、あて宮求婚譚という祝祭空間において贈与される、物に書かれた文字としての言葉こそが力を持つという考え方であり、それは、和歌（文字）を書きつける対象物をいかに和歌に合わせた物にできるかという、差出人の数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという構造、言い換えれば文字に対する『うつほ物語』独特の認識を根底に置いた上で成り立っていることを示した。

第三章では、人物たちの筆跡、すなわち〈手〉（注2）に着目した。筆跡は、書いた人物を特定するものであると共に称賛の対象となっている。特に素晴らしいとされるのが仲忠の筆跡である。仲忠が「国譲・上」巻において春宮・若宮の手本を作るということと、「蔵開・上」巻において〈手〉の判定者として父兼雅を上回ることは、「蔵開・上」巻の冒頭において仲忠が俊蔭伝来の蔵を開き（注3）、清原俊蔭や俊蔭の父母といった人々の書物を手にし、その学問を習得したことと関係があることを示した。

第四章では、手紙の機能について述べた。『うつほ物語』に出てくる全ての手紙についてその特徴を七つに分けた。『うつほ物語』では、人物関係の補強・拡大、もしくは信頼の獲得として手紙が機能しているといえる。また、最初は一対一の人物関係を作るという機能を課されていた手紙が、物語の後半において、人物関係の変化の可能性を示すものから、実際に物語に影響を及ぼすものとしてその機能を変えていくさまが見られる。また手紙によって、許容されていない男女の関係が露呈する、あるいは特定の人物が

窮地に陥るといったことはなく、手紙がひたすらに人物関係の構築に使用されることから、『うつほ物語』における手紙の「安定性」が見えてくる。また、『うつほ物語』では、手紙の差出人と受取人、そして、その使いをする者以外の一部の人物たちにも公開される手紙が人物たちに重要視され、なおかつ、信頼に足るものであるという認識があると考えることができる。手紙が公開されるまでは、登場人物たちは、特定の人物同士の関係の有無を疑うしかないが、公開されることによって、人物同士の関係の有無ばかりでなく、関係の深度までもが明白になるのだ。このように考えると、『うつほ物語』における手紙には、登場人物同士のつながりの有無を、様々な形で可視化する機能があると読める。

第五章では、仲忠が藤壺の若宮に献上した「手本四巻」について論じた。俊蔭伝来の蔵を開いた仲忠の筆跡は称賛されるものであった。仲忠の「手本」は、受け取り手から見れば至上のものである。しかし、仲忠の「手本」とは、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物の文章を写したものではなく、その書物から学んだであろう筆跡で書かれた、仲忠自作の和歌や「あめつち」であった。すなわち、仲忠にとっては「手本」は至上のものではない。このことから、至上のものとして「手本」を認識し、またしたがって、それに続く〈琴〉(注4)を求める藤壺と、「手本」は「手本」でしかなく、〈琴〉を教えるつもりのない仲忠の思惑がすれ違うことが明らかになるのが、若宮への手本献上の場面であると指摘した。

第六章では、俊蔭伝来の蔵から書物が出て来てからの仲忠の行動を追った。仲忠は、俊蔭伝来の蔵を開いたことにより、「清原氏」としての自覚を持った。そして、母屋に八ヶ月間籠って〈学問〉(注5)を継承するとともに〈手〉も継承した。またいぬ宮を〈琴〉の継承者とした。このことから、〈琴〉のみならず、〈学問〉においても、「籠る」ことによって継承者が継承者たりえることを示した。

第七章では、「蔵開・中」巻における朱雀帝の御前での〈学問〉の進講に着目した。従来、菅原道真の「献家集状」との関連が指摘されてきたこの進講を、本論では史実の進講と比較し捉え直している。進講の歴史を辿ると、『日本紀』の進講と仲忠の進講が一致する点が多い。また、「清原家」の学問が、一つの家の学問でしかないものであるにも拘わらず、それを公のものにするべく、『日本紀』の進講と同じ形式を採っていたことを指摘した。また、『日本紀』の進講と同じ形式を採ることにより、春宮の権威付けと、清原家の学問の家としての権威付けを図っていることを示した。

第八章では、〈琴〉と〈学問〉の公開の場を比較し、時刻表現・〈香〉（注6）・空間の三点において、この二つの場の構造が相似関係にあることを指摘した。また、秘曲を披露する前に必ず学問披露の場があることから、〈琴〉の公開の場と〈学問〉の公開の場が一対のものであるといえることを示した。

第九章では、清原家の系譜――〈琴〉・〈学問〉・〈手〉――の全てを担っている仲忠に着目し、これらの継承されるものが、どのようにして次世代に伝わっていくのかについて考察した。〈琴〉はいぬ宮が継承者となっているが、〈学問〉を伝える先は決まっておらず、また、手本は春宮と藤壺の若宮という、清原家とは無関係の人々へと伝わっていく。また、「楼の上・下」巻での秘琴披露において、俊蔭の娘の体調が思わしくないことも踏まえ、「清原家」の継承されてきたものが、消えていくことを示した。

過去の論考において、〈琴〉の系譜について述べたものは多く、また、「蔵開・上」巻において、仲忠が清原家の「学問」を継承したことを述べたものも多い。しかし、仲忠が継承した〈学問〉を「系譜」として捉え、また、「学問」から仲忠が独自に作成した手本もまた、「清原家」を負うものとして位置付けられていると述べるものは見られない。本論が、『うつほ物語』の「清原氏」を「書かれたもの」から捉えるという、新たな知見を示すものとなれば幸いである。

なお、本論における『うつほ物語』本文の引用は、室城秀之『うつほ物語　全　改訂版』（おうふう、二〇〇一年）を使用し、適宜傍線を付し、巻名とページ数を括弧内に記した。また笹淵友一『前田家本　宇津保物語』（古典文庫、一九五七～一九五九年）により異同を確認し、本文の解釈に関わる異同のある箇所には傍線を引き、その下の括弧内に前田家本の本文を示した。その他の本文については、その都度注に記した。

注１　本論において、〈系譜〉とは、血脈が関わるか否かということは関係なく、継承する者たちの繋がりを指す。このため、世代が隔たる場合もある。

注２　本論において、〈手〉とは、筆跡の「手」を指す。

注３　本論において、俊蔭伝来の蔵を開くことを〈蔵開き〉と記す。

注４　本論において、〈琴〉とは、琴の琴（キンのコト）を指す。

注５　「学問」というと、漢籍や漢文で書かれた物を指すことが多い。しかし、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物は漢籍だけではなく、和歌などの仮名で書かれたものもあった。そして、漢文で書かれたものだけではなく仮名で書かれたものも朱雀帝の御前で進講されているため、これらを全てまとめて本論では〈学問〉と表記する。

注６　本論において、〈香〉とは、香る様が描かれる香りを指す。

第一章　物に文字を書きつける

『うつほ物語』では、様々な登場人物が多くの手紙や物を贈与している。王朝物語において登場人物同士が手紙や物を贈与することは珍しくはない。しかし、『うつほ物語』の手紙や物を贈与する場面には、他の王朝物語ではほとんど見られない描写が出てくる。それは、紙以外の物に文字を書くという描写である。『うつほ物語』以外の作品でも、物に文字を書くという行為は多くはないものの行なわれている。しかし、杉野恵子が述べるように、「花びらや葉に歌を書くという表現自体は歌物語に既にあったが、恋の歌を書くという用法は、『うつほ物語』独自のもの」である(注1)。つまり、他作品とは別の論理が『うつほ物語』の物に文字を書く行為にはあると考えられる。

物に文字を書く場面では「書きつく」という表現が多用される(注2)。『うつほ物語』に限らず、「書きつく」という表現の解釈については、「文字を紙に書いて、その紙を物に貼りつける」のか「物に直接文字を書く」のかという二つの考えがある(注3)。『うつほ物語』の「書きつく」については、田中仁が以下の二つの結論を示している(注4)。

〈一〉原則として、「直接に書き付ける」という意味である。

〈二〉内容の価値を「低く言いなす・高く言いなす」という二面性を持つ。(注5)

物に文字を書く場面では、時に文字を書くのに適さない物にも文字を書きつけている。以下に例を掲げる。

・源実忠からあて宮へ(藤原の君　七一)

宰相、めづらしく出で来たる雁の子に書きつく、

「卵の内に命籠めたる雁の子は君が宿にて孵さざるらむ
とて、日ごろは」

・源実忠からあて宮へ（藤原の君　七三）

かくて、源宰相は、なほ、かの兵衛の君に、思ふことを語らひつつ、「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」となむのたまひける。花桜のいと面白き花びらに、

「思ふこと知らせてしかな花桜風だに君に見せずやあるらむ

これをだに」とて書いて、

・藤原仲忠からあて宮へ（春日詣　一五〇）

かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所に詣でて帰るに、をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色をだに見で

『かくなむ』とだに」

・藤原仲忠からあて宮へ（祭の使　二〇五）

仲忠、空蝉の身に、かく書きつけて奉る。

「言の葉の露をのみ待つうつせみもむなしき物と見るがわびしさ

まして、いかならむ」と聞こえたり。

この他に「面白き萩を折りて、葉に」、「かはらけに」、「朽ちたる橘の実に」、「中のおとどの東面なる竹の葉に」、「黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に」、「合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ……蝶ごとに」、また作り物の洲浜や鶴などがあるが、いずれもそれぞれの物には三十一文字の和歌が書かれたことになっている。

右記のように『うつほ物語』の登場人物たちは、様々なものに文字を書きつける。では、このように物に直接文字を書く場面は、どのように描かれるのか。また物に直接文字を書くということに、何か意味はあるのか。本章では、物語内で一貫して物に文字を書き続ける仲忠に焦点を合わせて、考えてゆきたい。

一・物に文字を書く仲忠

仲忠は『うつほ物語』の登場人物の中で、物語の最初から最後まで物に文字を書きつける人物の一人である。もちろん、仲忠はいわゆる普通の「手紙」も数多く送っている。しかし、文字を書きつけた「物」を贈ることが、他の登場人物に比べ多い。では、仲忠はなぜ手紙ではなく、「物」に文字を書きつけなければならなかったのか。以下に、仲忠が物に文字を書きつける場面を全て掲げる。

①仲忠からあて宮へ（1）（春日詣　一五〇）（注6）

かの仲忠の侍従、内裏の御使に、水尾といふ所に詣でて帰るに、をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに、かく書きつく。

「奥山にいく世経ぬらむ藤の花隠れて深き色をだに見で

『かくなむ』とだに」とて、孫王の君に、「これを御覧ぜさせ給はば、この花賜はりて置き給へれ。今、ただ今」とて、内裏に参りぬ。あて宮、御覧じて、人々の中に、「こともなし」と思す人なれば、かく書きつけて、賜ふ。

深しともいかが頼まむ藤の花懸からぬ山はなしとこそ聞け

孫王の君、仲忠に見せ給ひけり。

②仲忠からあて宮へ（2）（嵯峨の院　一五九～一六〇）（注7）

仲忠、「あて宮に、いかで聞こえつかむ」と思ふ心ありて、かく来歩くになむありける。さて、おのづから殿人になりて、御達などに物言ひ懸けなどする中に、孫王の君とて、よき若人、あて宮の御方に候ふにつきて、この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへつつあるに、さてのみは、えあるまじければ、面白き萩を折りて、葉に、かく書きつく。

秋萩の下葉に宿る白露も色には出づるものにざりける

とて、孫王の君に、「これ、折あらば」とて取らす。持て参りたれば、あて宮見給ふ。

③仲忠からあて宮へ（3）（祭の使　二〇五）

仲忠、空蝉の身に、かく書きつけて奉る。

「言の葉の露をのみ待つうつせみもむなしき物と見るがわびしさ

まして、いかならむ」と聞こえたり。あて宮、

「言の葉のはかなき露と思へどもわがたまづさと人もこそ見れ

と思ふになむ、聞こえにくき」と聞こえ給へり。

④仲忠からあて宮へ（4）（祭の使　二一三）

藤侍従、五月のつごもりの日、朽ちたる橘の実に、かく書きつけて、

「橘の待ちし五月に朽ちぬれば我も夏越をいかがとぞ思ふ

五月雨の過ぐるも、恐ろしくなむ」。

⑤仲忠からあて宮へ（5）（祭の使　二三六～二三七）（注8）

侍従、龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先して、かく書きつけて、奉る。

「浅き瀬に嘆きて渡る筏師はいくらのくれかながれ来ぬらむ

かく思う給へては久しくなりぬるを、いかで、今宵だに、一言だに聞こえさせてしかな。いらへこそのたまはざらめ。聞こし召すばかりには、何の罪もあらじ」とてなむ奉る。

宮、見給ひて、「いづこにあるぞ」とのたまふ。孫王の君、「東の簀子に」。「さは、琴弾きつるは聞きつらむな。あな恥づかしや。皆、上手ぞや。我は、聞かじ」とて入り給ひぬ。

侍従聞きて、「あな心憂のことや。なほ、あが君仏、今宵ならずとも、たばかり給へ。人よりも、『親に仕うまつらむ』と思ふ心深きを、かかる思ひつきにしより、片時世に経べくは思ほえねば、今更に不孝の人になりぬべきがいみじければ、『いささか思ひ静まるや』とてなむ」と、泣く泣く、夜一夜物語し明かして、つとめて、黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に、かく書きつけて奉れたり。

夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき

とて奉れたり。

あて宮、物ものたまはず。孫王の君、「この度は、なほのたまはせよ。殊に物ものたまはせず、静かなる人の、心魂もなく泣き惑ひ給へば、いとほしくなむ」と聞こゆれば、「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」とて、白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ、書きつけて遣はす。

川の瀬に浮かべるおのが篝火の影をやおのがこひと見つらむ

などのたまふ。

⑥和歌を詠みあう(1)(吹上・上　二五一)

かくて、御かはらけ始まり、箸下りぬ。人々の御前の折敷どもを見給ひて、仲忠の侍従、花園の胡蝶に書きて、

花園に朝夕分かず居る蝶を松の林はねたく見るらむ

⑦仲忠からあて宮へ(6)(吹上・上　二七六)

仲忠は、大殿に車牛二つ・馬二つ、侍従の君に鶴駮なる馬の丈八寸ばかりなる一つ。置口の衣箱一つに、あるが中に清らなる女の装ひ一具畳み入れ、一つには麗しき絹・綾など入れて、孫王の君に心ざし、黄金の船に物入れながら、かく聞こえて、あて宮に奉る。

荒るる海に泊まりも知らぬうき船に波の静けき浦もあらなむ

とて奉り給へり。

⑧仲忠からあて宮へ(7)(菊の宴　三三三)(注9)

かくて、御船ども漕ぎ寄せて、御船ごとに祝詞申して、一度に御祓へするほどに、藤中将の、御祓への物取り具して奉る、黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、かく聞こえ奉る。

月の輪のかけてや世々を尽くしてむ心を遣らむ雲だにもがな

と聞こえたり。あて宮、

雲にだに心を遣らば大空に飛ぶ車をばよそながら見む

とて返しける。

⑨仲忠からあて宮へ(8)(あて宮　三五四～三五五)(注10)

仲忠の中将の御もとより、蒔絵の置口の箱四つに、沈の挿櫛より始めて、よろづに、梳髪の具、御髪上げの御調度、よき御仮髻・蔽髪・釵子・元結・えり櫛より始めて、ありがたくて、御鏡・畳紙・歯黒めより始めて一具、薫物の箱、白銀の御箱に、唐の合はせ薫物入れて、沈の御膳に、白銀の箸・薫炉・匙、沈の灰入れて、黒方を、薫物の炭のやうにして、白銀の炭取りの小さきに入れなどして、細やかにうつしげに入れて奉るとて、御櫛の箱に、かく書きて奉れたり。

唐櫛笥あけ暮れ物を思ひつつ皆むなしくもなりにけるかな

とて、孫王の君に、夏冬の装束して心ざす。御使、さし置きて帰りぬ。

⑩仲忠から藤壺へ(1)(蔵開・中　五四七)

殿上に、酒飲みののしりて、鍋の蓋の返り言は、物取り食ふ翁の形を、御膳まろがして作り据ゑて、それに、かく書き給ふ。

「白妙の雪間掻き分け袖ひちて摘める若菜は一人食へとや

羹時は、まだ過ぎ侍らざりける」とて奉れ給ふ。

⑪和歌を詠みあう(2)(蔵開・下　六〇五～六〇六)(注11)

かくて、いぬ宮に餅参り給ふとて、女御の君折敷の洲浜を見給へば、例の、鶴二羽、しかよろひてあり。……尚侍のおとど、折敷ながら、外にさし入れ給へれば、右大将、

姫松は乙子の限り数へつつ千歳の春は見つと知らなむ

とてさし出づれば、異人は見給はず。おとど、宮たち、宰相の中将、良中将、蔵人の少将、宮あこの大夫、皆、詠み給へれど、書かず。

⑫仲忠から藤壺へ(2)(国譲・中　六九四～六九五)(注12)

右大将殿、大いなる海形をして、蓬萊の山の下の亀の腹には、香ぐはしき裏衣を入れたり。山には、黒方・侍従・香衣香・合はせ薫物どもを土にて、小鳥・玉の枝並み立ちたり。海の面に、色黒き鶴四つ、皆、しとどに濡れて連なり、色は、いと黒し。白きも六つ、大きさ、例の鶴のほどにて、白銀を腹ふくらに鋳させたり。それには、麝香・よろづのありがたき薬、一腹づつ入れたり。その鶴に、

薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥
いづくよりともなくて、夕暮れのまぎれに舁き据ゑたり。

以上の十二例が、仲忠が物に文字を書いて送る場面である(注13)。このうち、⑥⑪について先に述べておく。⑥は、吹上浜で迎えた三月三日の節供の酒宴の場面である。源涼の祖父にあたる神南備種松が、仲忠たち客人をもてなすために用意した折敷に描かれた「花園の胡蝶」に、仲忠は文字を書きつけている(注14)。⑪は仲忠と女一の宮の娘であるいぬ宮の百日の祝いの日に、兼雅と俊蔭の女から贈られた洲浜に、兼雅、仁寿殿の女御、俊蔭の女、女一の宮、仲忠の五人が和歌を書きつけた場面である。これらは、大勢の人物がいるところで物に文字を書きつけており、仲忠とある特定の人物の間で遣り取りされたものではない。よってこの二例は、仲忠が物に文字を書きつけている場面ではあるものの、他の例とは異なる。この⑥と⑪を除いた例について、以下に考察し

ていく。

二・自然の景物に文字を書きつける

仲忠についてもう少し詳しく見ておこう。仲忠は、俊蔭の女と藤原兼雅との間に生まれた一人子である。俊蔭の女の父親、清原俊蔭は、「かたちの清らに、才のかしこきこと、さらに譬ふべき方なし」(俊蔭　九)と言われ、「婿にせむ。婿にせむ」(俊蔭　二〇)と娘や妹を持つ人々から請われた。また、俊蔭の女も「十二、三になる年、かたち、さらに言ふ限りなし。あたり光り輝きて、見る人まばゆきまで見ゆ」(俊蔭　二二)と言われ、帝や春宮、上達部や親王から求婚された。仲忠の父親である藤原兼雅も、「玉光り輝くうなゐ」(俊蔭　二四)であり、兄弟の中でも特に親に大切にされていた。そして仲忠自身も、誕生時にも成長してからも「玉光り輝く男」(俊蔭　三四)であったことが書かれ、十二歳のときには「かたちの麗しくうつくしげなること、さらにこの世の者に似ず」(俊蔭　四二)という状態であった。

その仲忠が初めて物に文字を書きつけたのは、②のあて宮に求婚する場面である(注15)。そもそも仲忠は、「婿にせむ。婿にせむ」(俊蔭　五六)と方々から請われていたのを一切承諾せず、その心中は「左大将殿にこそ、さるべき世の有職は籠りためれど、また、をかしき君たちあまたありて、心も遣らめ。そこならではあらじ」(俊蔭　五六)といったものであった。正頼の姫君とならば結婚してもよいが、それ以外は一顧だにしなかったのだ。

そのように考えている仲忠は「殿人」になり、正頼邸に出入りするようになる。そこで知り合った孫王の君というあて宮付きの若い女房にあて宮への想いをときに手紙を懐に「ほのめかし言」いはするものの、孫王の君は「つれなくのみいらへつつある」という反応しか返してこない。そこで、このままでは一切の進展が望めないと悟った仲忠は、「面白き萩を折りて」その葉に和歌を書きつける。すると、それまではそ知らぬ顔をしていた孫王の君が、そのままあて宮に和歌を書きつけた萩を持って行く。つまり、あて宮に近づく

ためには、手紙を送る・求婚の意志があることを示すといった求婚の仕方では効果がなく、そのために仲忠は、物に文字を書きつけるという手段を取ったのだ。

では、なぜ仲忠は文字を書きつける対象に「面白き萩」という自然の景物を選択したのか。そこで、付け枝と比較してみよう。付け枝は、その時節にあった植物に手紙を結びつけて送るものである。そのため受取人――ここでは孫王の君とあて宮である――は、付け枝が贈られてきた際に、差出人の言葉が書かれた手紙がどこにあるのか、すぐに見つけられるだろう。しかし、付け枝ではなく、手紙を結びつける対象である植物に直接文字が書かれる場合はそうはいかない。受取人が真先に目にするのは、手紙が結び付けられた「植物」ではなく、付加物なしの植物そのものである。差出人の言葉が書かれた手紙もない、使への言伝もない。それは、差出人の意図が全く掴めないということである。差出人の意図を探るための手がかりは目の前の植物しかない。ならば、受取人が差出人の意図を知るためには、贈られてきた植物をじっくりと見るよりほかない。たとえ、受取人が差出人に対して興味が無かったとしても、全く意図の読めないものが贈られてくれば気になるものである。差出人たる仲忠の狙いはそこにあったのではないか。また紙ではないものに文字を書くということも、重要なことである。紙に書かれた文字は記号に過ぎないが、物に書かれた文字は記号としての役割を果たすだけではなく、その物と一体化し、記号以上の機能を発揮する。それは、差出人の思いの強さや、差出人が最も強く伝えたい言葉といった、ある意味呪的な機能だといえる。

さて、話を付け枝に戻すが、付け枝はその時節にあった植物を選択することで贈り物としての価値を付加するとともに、差出人が最も強調したい自身の気持ちを表出するという効果もある。そうであるとすれば、手紙が結び付けられず、真先に受取人の目にとまる植物とは、差出人の一番強い気持ちそのものではないか。そのように考えると、ここに出てくる植物や自然の景物は、メッセージ性の強いものということになる。そこに和歌、もしくは和歌と少しの散文が書かれる。文字が書かれることで、この自然の景物は、自身が持つメッセージを確実なものとされ、強化される。

また、物語の前半部にあたる①から⑤、⑦から⑨までの仲忠の歌は、あて宮求婚者たちの歌の中の一つとして書かれたものである。このうち、仲忠が自然の景物に文字を書いた①から⑤の例を以下に見ていく。

①は、帝の使いで水尾に参詣した仲忠から、孫王の君を介してあて宮に贈り物をした場面である。あて宮からは返歌があった。②は、前述したように、初めて仲忠があて宮に物に文字を書きつけて送る場面である。ここでも、孫王の君が仲介人になっている。しかし、あて宮からの返事もしくは返歌は書かれておらず、あて宮が仲忠からの贈り物を見たことだけが記されている。③は、仲忠が蝉の抜け殻に和歌を書いた場面である。これに対しあて宮からは返事があった。④は、仲忠が朽ちた橘の実に和歌を書いた場面である。これに対するあて宮からの返事・返歌は書かれていない。

ここまでに仲忠が文字を書きつけたのは、全て自然の景物であることに注目したい。そして、次の⑤で仲忠が文字を書きつける対象物は変化を見せる。

三、作り物に文字を書きつける

⑤の場面を詳しく見るために、⑤の直前の場面を以下に引用する。

月の面白き夜、今宮・あて宮、簾のもとに出で給ひて、琵琶・箏の琴、面白き手を遊ばし、月見給ひなどするを、仲忠の侍従、隠れ立ちて聞くに、「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と聞くに、静心なし。「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」など思ふにも、母北の方の御ことを思ふに、なほ、いとほしく思ほゆ。思ひわづらひて、隠れたる簀子に立ち入りて、孫王の君に、「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」。いらへ、「侍従の君と、御碁遊ばす折なりしかばなむ」。……侍従、「いくそ度か、思ひ返さぬ。されど、さてのみは、えこそあるまじけれ。いかがせむ」。孫王の君、「物なのたまひそ」とて立ち入れば、「見給へ。さ聞こゆとも、よに悪しきわざせじや」などて引きとどめて、「まめやかには、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな。さはありぬべしや」。「いで、あなむくつけ。時々のたまふ返り言、いと聞こえがたうし給ふを、とかくし

てこそあれ。思ほしだにかくるこそ、いとめざましけれ」。（祭の使　二三五～二三六）

仲忠があて宮の弾く箏の琴と今宮の弾く琵琶を立ち聞きしている場面である。あて宮の弾く琴の音色を聞いて「調べより始め、違ふ所なく、わが弾く手と等しく」と思った仲忠は、「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」と考える。これは、仲忠が初めてあて宮に文字を書きつけた物を贈る②の「あて宮に、いかで聞こえつらむ」と考える場面に通じるものがある。さらに、孫王の君には「などか、一日の御返りはのたまはずなりにし」と手紙を送っても返事がなかったことを問うている（注16）。②の場面で仲忠が「この思ふことをほのめかし言へど、つれなくのみいらへ」て障害となっていたのは孫王の君であるが、仲忠からしてみれば、あて宮から返事が貰えないことには変わりはなく、②の場合も⑤の場合も仲介をしているのは孫王の君である。

その後、仲忠は孫王の君に「まめやかには、いかで、よそながら、物一言聞こえさせてしかな」と頼み込んではいるものの、孫王の君はとりあってくれない。ならばと仲忠は、⑤に引用したように、「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先して」和歌と散文を書きつけるのだが、あて宮は仲忠に自身の琴の音を聞かれたことに対し「恥づかしや」と言って奥に入ってしまう。つまり、②の時とは違い、紙以外のものに書いたのにも拘らず、⑤ではあて宮からの返事はない。

すると、仲忠は「泣く泣く、夜一夜物語し明かして」、翌朝に今までのような自然の景物ではなく、作り物である「黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に」文字を書きつけてあて宮に贈る。この結果、あて宮は、「白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ」て、そこに文字を書きつけて仲忠に返事をする。この時、孫王の君があて宮に返事を催促したこと、また、あて宮が「聞きにくきこと出で来ば、君の御罪になさむ」と言ったことが書かれているが、仲忠にとってはあて宮と孫王の君の遣り取りは知らないことであり、あて宮から返事があったという結果だけが残る。この⑤の場面を契機として、仲忠は、これ以降、文字を直接物に書くときには、対象となる物を自然の景物から作り物に変える。

では、作り物に文字を書きつけるとは、どういうことだろうか。仲忠にとって、自然の景物に文字を書きつけることは、手紙を書くだけでは得られなかったあて宮からの返信を得るために講じた手段であった。しかし、今回はそれも通用しない。もちろん、②や

④のように、これより以前に自然の景物に文字を書きつけたものを送っても、返信が得られなかったことはある。だが⑤は仲忠が、あて宮への想いを一層強くし、「身はいたづらになるとも、取りや隠してまし」と考えている場面である。そんな肝心な場面で仲忠があて宮から返事を貰うためにはどうしたらよいだろうか。まず、自然の景物に文字を書くことの何がいけなかったのかを考えるべきであろう。では、自然の景物の何がいけなかったのか。先に述べたように、紙に書かれた文字は記号に過ぎないが、物に書かれた文字は記号としての役割を果たすだけではなく、その物と一体化し、記号以上の機能を発揮する。しかし、自然の景物は時間が経てば経つほど、劣化していくという問題がある。仲忠があて宮に贈った自然の景物の中には、「朽ちたる橘の実」もあったが、それ以外は生き生きとした植物や形が壊れやすいものであった。これらのものは、仲忠がそこに文字を書いて使に持たせた時よりも、使があて宮に届けた時の方が、確実に形は悪くなっているだろう。また、仮にこれらのものが、仲忠が出したときとほぼそのままの形態を保てていたとしても、それほど時間をかけずに、劣化していくはずである。中には、変色して、せっかくの文字が見えなくなるものも出てきたのではないだろうか。そうなると、物と一体化することによって記号以上の機能を発揮した文字は何の役にも立たなくなる。ならば、劣化しない、作り物を贈ればよいということになる。腐ったり劣化したりしない作り物に書かれた文字は永遠に物と一体化し続けるため、その機能を失うことはない。

では、どのような贈り物をするべきだろうか。次の⑦⑧の例を見ていく。

⑦は、源涼のいる吹上浜から帰還した仲忠たち四人の貴公子が、吹上浜で涼から贈られた宝物を、都の人々に配る場面の一部である。仲忠は、吹上浜から持ち帰った「白銀の馬は父おとどに、破子は嵯峨の院に、透箱より始めて、細けの物は北の方に、船と被け物の中に清らなる物は、思ふ心ありて、まだ持」(吹上・上　二七三)っていた。この「思ふ心ありて」持っていたものが、⑦の「黄金の船に物入れながら」あて宮に贈った物である。しかし、これは返歌とともにそのまま返されてしまう。それを再び仲忠が贈り返し、「情けなきやうにもあり」(吹上・上　二七七)という理由から、あて宮はこれを受け取る。

⑧はいよいよあて宮が春宮に入内することが決定しそうな時期の、上巳の祓の場面である。仲忠があて宮に贈ったのは、⑦と同様、金銀で作られたものであった。文字を書きつける物が変わる転機となった⑤から⑧までに仲忠があて宮に贈った文字を書きつ

けた物を、再掲する。

⑤黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に、かく書きつけて

⑦黄金の船に物入れながら

⑧黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて、

これらはいずれも金や銀で光り輝くものであり、素材もさることながら、その細工も細かいものであることがわかる。つまり、贈り物としては最高級の品物である。しかも、⑤よりは⑦、⑦よりは⑧と、素材がよりよいものになっていく。このことは、自分に対してなかなか良い返事をくれないあて宮に対する仲忠の焦りを表しているといってもよい。さらに、これらの物が日常では使用しないもの、実用的ではないものであることも着目するに価するだろう。

⑨は、あて宮が春宮に入内することが決まり、入内の準備をしている最中に仲忠が入内の祝いの品として贈ったものである。この時に贈られた物は⑤から⑧までとは違い、日常で使用するもの、実用的なものが多いことが特徴として挙げられる。

以上、この⑨までがあて宮求婚譚において、仲忠があて宮に贈った文字を書きつけた物である。では、あて宮求婚譚が収束を迎えた物語の後半では、仲忠はどのような物に文字を書きつけるのだろうか。

四．あて宮求婚譚収束後の変化

第一節で挙げた十二の用例のうち、⑩以降は『うつほ物語』の後半にある。あて宮求婚譚も終わり、女一の宮を正妻に迎えた仲忠は、どのような物に文字を書きつけていくのであろうか。

⑩は、俊蔭と俊蔭の父母が遺した書物の進講を朱雀帝の御前で行なっていた仲忠が殿上の間に下がり、そこで宴会を催した際の場面である。殿上の間で源涼、藤原季英、良岑行正などの人々と一緒にいるところに、藤壺(あて宮)から贈物が来る。

藤壺より、大きやかなる酒台のほどなる瑠璃の甕に、御膳一盛、同じ皿杯に、生物・乾物、窪杯に、果物盛りて、同じ瓶の大きなるに、御酒入れて、白銀の結び袋に、信濃梨・干し棗など入れて、白銀の銚子に、麝香煎一銚子入れて奉り給へり。炭取に、をのこ炭取り入れて奉り給へり。

集まりて、興じて、皆取り据ゑて参るほどに、大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形を作りたり。それに、孫王の君の手して、かく書きたる、

「君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

羹をば、かくなむ仕うまつりなりにたる。聞こし召しつべしや」と書きつけて、小さき黄金の生瓢を奉り、雉の足、折り物に高く盛りて添へ奉り給へり。

(蔵開・中　五四五～五四六)(注17)

これに対する返事が⑩である。この場面は、宴会という大人数がいるところで行われているという点で、⑥⑪に通じるものがあるが、和歌の贈答をしているのは仲忠だけである。しかし、孫王の君と仲忠の遣り取りは⑨までとは違い、軽快なものとなっている。この後の場面を読んでいくと、やはり軽快な遣り取りが続く。

物など食ひ果てて、大将、この物ども奉れ給へる物どもを、さながら取り集めて、返し奉り給ふとて、孫王の君の御もとに、「これを、いと全く返し奉るは、『朝にも、いととく賜はらむ』とて、『器物侍らずは、求めさせ給はむほど、遅くや』とてなむ」とのたまへり。孫王の君など、いみじく笑ひ給ふ。「空言人にて、今さへも空めき給へるかな」とて、「いとよき御厨子所の雑仕なり

けり。わきても、かはらけをぞ一つ失ひてける。衣の袖解かれぬべう」と聞こえたれば、集まりて笑ふ。（蔵開・中　五四七）（注18）

求婚時代とは違い、冗談を言い合うなんとも和やかな場が広がっている。

求婚譚を終え、落ち着くかのように思えた仲忠だが、実はそうではない。物に文字を書きつける回数は激減したが、それに反比例するかのように、藤壺への手紙がその数を増やす。その理由はおそらく、手紙に書かれる内容が複雑なものになり、和歌のみかもしくは和歌に少しの散文といった短文では足りなくなったからではないだろうか。

しかし、⑫では、求婚時代を髣髴とさせるような贈り物が再び出てくる。⑫は、藤壺の第三皇子（今上帝にとっては第四皇子）の九日の産養の夜に、仲忠が贈り物をした場面であるが、ここで仲忠が藤壺に贈ったものは、あて宮の春宮入内が決まった後の⑨で贈った物よりあて宮に求婚している最中の⑤⑦⑧で贈った物に近い。だがこれは、仲忠が藤壺に求婚をしているわけではない。この時行われていたのは藤壺の第三皇子の産養だが、今上帝の第一皇子を生んだのも藤壺である。まだこの時点で第一皇子は立坊していないものの、藤壺の生んだこの皇子が立坊する可能性は高い。また、この時すでに、仲忠には女一の宮との間に一女いぬ宮が生まれていた。これらのことから、仲忠はいぬ宮を次の春宮に入内させようという考えがあったと読める。

五．物に文字を書きつける

仲忠が物に文字を書きつけるようになったのは、手紙や自分のあて宮への想いをあて宮付きの女房である孫王の君に託しても仲立してもらえないことが契機であった。そして、そこで文字を書きつけたのは、花びらや葉などの、自然の景物であった。自然の景物に文字を書き始めた時点では、あて宮から返事が来ることが多かったが、しかし、「祭の使」巻において「龍胆の花押し折りて、白き

蓮の花に、笄の先」で文字を書いたものには、返事が来なかった。そこで、仲忠は作り物に文字を書きつけるようになる。そして、あて宮求婚譚の最中に仲忠があて宮に贈ったものは、金や銀で作られた非実用品であった。

あて宮が春宮に入内することが決まったときに仲忠があて宮に贈ったものは、実用品に変化する。あて宮求婚譚が終結したことで、宴の席では文字を書きつけた物を使用した軽快な遣り取りが行われる。しかし、いぬ宮の入内を視野に入れたとき、仲忠は再び、あて宮に非実用的で華美な贈り物を贈るようになる。以上、仲忠が物に文字を書きつける場面を追ってきたが、仲忠が文字を物に書きつける背景には、あて宮との繋がりが関係しているといえる。また、このことから、『うつほ物語』における物に文字を書きつけるという行為がただやみくもに描かれているのではなく、一定の論理の元に描かれている可能性があるということが言えるのである。

注1　杉野惠子「花びらや葉に歌を書く（書きつく）という表現について――「うつほ物語」を中心に――」（『実践教育』一九号、実践女子学園中学校・高等学校、二〇〇〇年三月）

注2　「書きつく」の先行研究は、私見では以下の二論がある。田中仁は「和歌を書き付けることが、書き付ける対象に魂をこめること」とし、「魂をこめることは、その対象に自己の心を確実に達せしめることにほかならない」としている（「和歌を書きつけること――八代集の「書きつく」――」『芸文東海』第一八号、一九九一年一二月）。また、永井和子は『枕草子』の「書きつく」について「歌・手紙に関わる例と、口上に用いられた例の双方に偏在する」と述べている（「枕草子の跋文――「書きつく」という行為をめぐって」『国語国文論集（学習院女子短期大学）』第二七号、一九九八年三月）。

注3　論者は、「文字を紙に書いて、その紙を物に貼りつける」場合は、「書きてつく」が使用され、「物に直接文字を書く」場合は「書きつく」という表現が使用されているのではないかと考えている。

注4　田中仁『『書きつく』の意味――宇津保物語を主な資料として――』（『言語表現の研究と教育』三省堂書店、一九九一年）

注5　〈二〉の結論については「実際には『書きつく』は常にこうした二面性を生かした使い方をされているというわけではない。一方の面のみに依拠して用いられている例もごく少数だが存在する。……しかし、『書きつく』の用例のほとんどには、何らかの形で〈二〉のような二面性が生きているはずである。」（一一九頁）と補足されている。

注6　前田家本では、「花びらに、かく書きつく（つつ）……孫王の君に、「これを（これ〳〵）」」（二八四）となっている。「書きつつ」という箇所に問題があるものの、その後に仲忠が「これ〳〵」と言っていることから、藤の花に文字を書きつけたと解釈してよい。

注7　前田家本では、「葉に、かく書きつく（つつ）」（二九九）となっている。やはり「書きつつ」という箇所に問題があるが、注6と同じ異同であること、「葉に」とあることから、やはりここも萩の葉に文字を書きつけたと解釈してよい。

注8　諸注釈によっては、「黒方に（を）、白銀の鯉くはせて（にくはせ）」とするものがあり、これは黒方を白銀で造った鯉に食わせたと解釈できる。状況に多少の差は出るが、続く「その鯉に、かく書きつけて奉れたり」に大きな異同がないことから、作り物に文字を書きつけたことに変わりはないと考えた。また、前田家本では、「白銀の川に、沈の松燈（まろと）して……」（四五三）となっているが、ここもやはり、「沈」の物を「沈の男」に持たせ、そこに文字を書きつけたことに変わりはない。

注9　前田家本では、「藤（頭）中将」（六三九）となっているが、諸注「藤原仲忠」で解釈している。また、この箇所には他に、「皆金銀（こん〳〵／こんかく／こう〳〵／香具）に調じて、かく（にてうしてかく／てはく／てはかく／にててうしてかく）聞こえ奉る。……とて返しける（かへし給ひける／かへしけり／うへしける）。」という異同がある。材料が明確になっていない上、続く「に調じて、かく」の異同も多い。しかし、この前にある「黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人」とこの後の「聞こえ奉る」に大きな異同はないため、作り物に言葉を添えていることは確実であろう。

注10　この箇所は、物の名称の異同などが非常に多いが、注9と同様の理由から言及しない。また、「右大将」が「左大将」になっている本文がある。左大将は右大将である藤原仲忠の父兼雅だが、兼雅は、藤壺に対して、文字を書きつけた豪華な作り物

を贈った例がないため、ここは「右大将」と解釈した。また、「孫王の君に」は「そわう」「そわ」「そは」などの異同があるが、仲忠とあて宮の仲介を孫王の君が行なっているため「孫王の君」であるとする従来の解釈に従った。

注11　前田家本では、「尚侍(うへ)のおとど」(一二一二)となっているが、諸注「かんのおとど」で解釈している。また、この箇所では、続く「大将」が重要であり、ここに異同がないので、特に問題はない。

注12　前田家本では、「右(左)大将殿……亀の腹(はゝ)には、香ぐはしき裏衣(なび)を入れたり。……皆、しとどに濡れて連(そら)なり、色(を)は、いと黒し(ナシ)。……よろづのありがたき薬、一(菓ひ)腹づつ入れたり。」(一三九二～一三九三)となっている。この時の左大将は藤原兼雅であるが、兼雅はこの前の「国譲・上」巻において右大臣と兼官しているため、兼雅を指す場合は「右大臣」となるはずである。このことから、底本の「左大将」は「右大将」つまり藤原仲忠として解釈するべきである。その他の異同については、本論に直接関わるものではないため、割愛する。

注13　なお、「蔵開・上」巻(五一九頁)に次の例がある。

御折敷見給へば、洲浜に、高き松の下に鶴二つ立てり。一つは箸、一つは匙食ひたり。松の下に、黄金の杙して、帝の御手して書かせ給へり。

緑子は松の餅を食ひ初めてちよちよとのみ今は言はなむ

とあるを、大宮見給ひて、白き薄様に書きて、押しつけ給ふ。

我下りて松の餅を食はすれば千歳も継ぎて生ひよとぞ思ふ

女御の君に、「かかる言ありけりや」とて奉り給へば、書きて、押しつけ給ふ。

生ひの間にちをのみ知れる緑子の松の餅をいかが食ふらむ

とて、一の宮に奉り給へば、物ものたまはず。これかれ、「いかでか」などのたまへば、

食ひ初むる今日や千代をも習ふらむ松の餅に心移りて

と書き給へれば、女御の君、折敷ながら、中納言の御もとにさし入れ給へば、取りて見るやうにて、

千歳経る松の餅は食ひつめり今は御笠の劣らでもがな

と書き給ふを、弾正の宮、「見む」と聞こえ給へば、「いとかしこき御手侍れば、え見給はず」とてさし入れつ。

ここでは一見、仲忠が洲浜に刺さった杙か何かに直接文字を書きつけたかのように読めるが、「黄金の杙」に和歌を書いたのは朱雀帝であり、その直後に続く大宮は「白き薄様に書きて、押しつけ給」い、仁寿殿の女御も「書きて、押しつけ給ふ」とあることから、朱雀帝以外の仲忠を含む登場人物は、文字を紙に書いたものと考える。

また「国譲・下」巻（七七四～七七五頁）に次の例がある。

大将、持たせ給へりし唐櫃・御衣櫃、山籠りに奉り給ふ。唐櫃には、……夜の装束、綾の指貫に、織物の襖、綾の袿どもなどして、その襖に書きて、結びつけたる、

露けくて山辺に一人臥す人の夜の衣に脱ぎ替へよとぞ

子どもの装束、女子のも、いと清らにし入れて、奉り給ふ。

これは、紙か何かに文字を書き、襖に結びつけているため、今回の用例群には入れていない。

注14　この箇所について、『新編日本古典文学全集　うつほ物語①』は、現代語訳で「人々の御前に置かれた見事な折敷どもをごらんになって、仲忠の侍従が、『花園の胡蝶』を題として歌を詠む」としている。しかし、本論では、「花園の胡蝶に書きて」という記述から、折敷の「花園の胡蝶」「林の鶯」「水の下の魚」「山の鳥」のところに、和歌を書きつけたと読んだ。

注15　『うつほ物語　全　改訂版』においては、「春日詣」巻は「嵯峨の院」巻の前に配置されているが、年立の上では、「嵯峨の院」巻は「春日詣」巻に先行する。

注16　『うつほ物語　全　改訂版』では、この部分に「仲忠の二二一頁の贈歌は、答歌を得ている。物語には見えないが、それ以後にも仲忠が歌を贈っている趣きである」という注がついている。

なお、「二二一頁」の仲忠とあて宮の贈答歌を引用しておく。

藤侍従、祓へしに、難波の浦まで下りて、それより、

惑ひつつ摘みに来しかど住吉の生ひずもあるか恋忘れ草

あて宮、

あだ人の心を懸くる岸なれや人忘れ草摘みに行くらむ

注17　前田家本では、「大きやかなる酒台(りしふた、い)のほどなる瑠璃の甕に、御(ゐ)膳一盛、同じ皿杯に、生物・乾物、窪杯に、果(ナシ)物盛りて、……聞こし召しつべ(い)しや」……雉の足、折り物に高く盛り(も)て添へ奉り給へり。」(一〇八四～一〇八五)となっている。贈り物に異同が大きくあるものの、文字を書きつけた物に関しては異同が全くないため、本論においては考察の必要はないと判断した。

注18　前田家本では、「……「空言人(とく)にて、今さへも空めき(み)給へるかな」とて」(一〇八八)となっている。「空言人」の異同は「そらこと」の他に「そらとく」「そうとく」があるが、諸注釈は共通して「空言人」と校訂している。一方、「空めみ」については、「空言し」(塚本哲三、有朋堂書店、一九一八年・宮田和一郎『朝日古典全書』朝日新聞社、一九五一年)、「空眼見」(河野多麻『日本古典文学大系』岩波書店、一九五九年)、「空めき」(原田芳起、角川書店、一九六九年・室城秀之、おうふう、一九九五年、改訂版二〇〇一年・中野幸一『新編日本古典全集』小学館、一九九九年)と一致していない。しかし、「そら」という言葉が双方に入っていることから、この場面が冗談を言い合っている場面であると解釈した。

第二章　「書きつける」ことから見える言語認識

『うつほ物語』には、他の作品ではあまり目にすることのない「物に文字を書きつける」という行為が多く見られる。この行為は、とくにあて宮求婚譚で多く行なわれている。源涼や源仲頼などの求婚者たちがあて宮にたくさんの手紙と贈り物をするが、その中でも、藤原仲忠があて宮に贈った手紙や文字を書きつけた物の多さが群を抜いているということは、前章で述べた通りである。

仲忠ほどではないが、他の登場人物たちよりも多く、文字を書きつけた物を贈る人物がもう一人いる。源実忠である。仲忠は、俊蔭の娘と藤原兼雅との間の一人子で、容姿・才能ともにすばらしいことが何度も語られている。一方の実忠は、あて宮の父源正頼の兄季明の三男であり、将来有望な人物であることが随所で言われている。

この二人の物語については、既に大井田晴彦を始めとする先行研究（注1）で述べられているが、「手紙」や「贈り物」という観点からの論及は、これまでにはない。また、これまでに仲忠を源涼と比較する研究は多かったが、実忠と比較した研究はほとんどなかった。

本章では、仲忠と実忠を比較することにより見えてくる、仲忠と実忠の描かれ方の相違のもつ意味について考えていくとともに、「書きつく」ことは「物に直接文字を書いた」ことであると結論づける田中仁を始めとした先行研究の成果（注2）を受けつつ、さらに一歩踏み込んで、物に文字を書きつける意味とは何かということを考えていく。実忠・仲忠があて宮に贈る、文字が書きつけられた物が変化することによって、実忠・仲忠とあて宮との関係も変質してゆく。まずは、第一節で、実忠について見てゆく。

一・実忠からの文字を書きつけた贈り物

実忠は、「藤原の君」巻から「菊の宴」巻までに、計四回、あて宮に文字を書きつけた贈り物をしている。流れを見るために、最初の三例を掲げる。

①雁の子（藤原の君　七一）（注３）

宰相、めづらしく出で来たる雁の子に書きつく、

「卵の内に命籠めたる雁の子は君が宿にて孵さざるらむ

とて、日ごろは」とて、「これ、中のおとどにて、君一人見給へ。人に見せ給ふな」とて取らせ給へば……兵衛、賜はりて、あて宮に、

「巣守りになり始むる雁の子御覧ぜよ」とて奉れば……

②花桜の花びら（藤原の君　七三）（注４）

かくて、源宰相は、なほ、かの兵衛の君に、思ふことを語らひつつ、「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」となむのたまひける。花桜のいと面白き花びらに、

「思ふこと知らせてしかな花桜風だに君に見せずやあるらむ

これをだに」とて書いて、兵衛に、「これ御覧ぜさせ給へ」とて取らすれば、「いと恐ろしきこと。かかる聞こえあらば、兵衛が身は、何の塵泥にかならむ」と聞こゆれば、「何の。殊なること聞こえさせたらばこそあらめ。花御覧ぜさすばかりにこそ。『何心ありて』とかは見ゆる。なほ、おいらかに参り給へ」。

③白銀の薫炉（藤原の君　七四）

白銀の薫炉に、白銀の籠作り覆ひて、沈を搗き篩ひて、灰に入れて、下の思ひに、すべて黒方をまろがして、それに、

「ひとりのみ思ふ心の苦しきに煙もしるく見えずやあるらむ

雲となるものぞかし」と書きて、「兵衛の君の御もとに」とてあれば、……

これらの贈り物に対し、あて宮は一度も返事をしない。実忠とあて宮の仲介人であり、あて宮の乳母子である兵衛の君の立場も苦しくなる一方である。これら三つの例は、記事と記事の間隔があまり開いていないため、時間の上でも間を置いていないことがわかる。つまり、実忠は、短期間でこれら三つの贈り物をしたことになる。多くの場合、文字は紙に書かれるが、実忠は試行錯誤の末に、短期間で文字を書きつける物を変えているのだ。このことから、少なくともこの期間、実忠はあて宮のことを考え、どうやったらあて宮の興味を引くことができるかということばかり考えていたのではないかと推測できる。しかし、あて宮は返事をくれない。そこで、③の直後、実忠は兵衛の君に絹・綾などを入れた「をかしげなる蒔絵の箱」(藤原の君　七四)を贈り、引き続きあて宮との取次ぎを頼む。その際に、あて宮に贈ったものが、次の例である。

④川島の洲浜(藤原の君　七五～七六)

例の宰相、川島のいとをかしき洲浜に、千鳥の行き違ひたるなどして、それに、かく書きつく。

浦狭み跡かはしまの浜千鳥ふみや返すと尋ねてぞ書く

この贈り物を持ってきた兵衛の君に対し、あて宮は、続く場面で以下のような反応をする。

「あやしく、例の、むつかしき物、常に見せ給ふ」。兵衛、「常に見知らぬやうなり」と聞こゆれば、「例のごと、のたうべかし」などのたまひて、書きつけ給ふ。

「浜千鳥ふみ来し浦に巣守り子のかへらぬ跡は尋ねざらなむ

とこそは、君の御言にてはのたまふべかなれ」とのたまふ。

実忠への返事として書いたわけではない、という体裁を採りながらも、実忠と同じものに文字を書きつけ、きちんと返事をしてい

る。この場面は、あて宮が、初めて実忠に返事をする場面である。

以上のように、実忠からあて宮への贈り物は、短期間で雁の子、花びら、金属でできた作り物、自然の景物を模した作り物と変化している。そこに、実忠があて宮を想って考えたがゆえの工夫が見えることから、これらの贈り物には、実忠の「あて宮から何とかして返事をもらいたい」という想いが表れていると読むことができるのではないだろうか。そして、その実忠の想いに突き動かされるかのように、③で、贈り物が自然物から作り物に変化したときに、あて宮は「をかしげなる物にこそあめれ」(藤原の君　七四)と、贈られてきた物に対してやっと興味を示す発言をする。さらに④で、③よりも趣向を凝らした贈り物をして初めて、実忠は返事がもらえるのだ。ここまでに見てきた用例からは、文字を紙に書くのではなく、物に書くという工夫の他に、文字を書きつける対象を選択する工夫があり、さらに、選択した「物」に関する言葉を、そこに書きつけた和歌に詠み込むという、贈り物の差出人である実忠の工夫の数々があると分かる。そして、こうした差出人の数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという構図が見える。

④の後、十五回は物を伴わない手紙を送るものの、再び実忠はあて宮に文字を書きつけた物を贈る。しかし、それは、「鈴虫」(吹上・下　二九七)、「草木」(菊の宴　三二三)といったものであった。贈り物に工夫を重ねて、④で返事を貰えた実忠だが、「鈴虫」「草木」に対するあて宮からの返事はない。これは、実忠が贈ったものが、自然物から作り物へと変化した後に、再び自然物へと戻ったからだと考えることができる。つまり、「鈴虫」「草木」の例を見る限り、実忠は、自身が④まででやってのけたあて宮から返事をもらうための法則に気付かず、贈り物の質が落ちたということができるのではないだろうか。

「鈴虫」「草木」を贈ったものの返事を貰えなかった実忠は、あて宮宛の手紙を兵衛の君に託す。その際に、兵衛の君にあて宮への取次ぎを頼むべく、「蒔絵の置口の箱一具に、綾・絹畳み入れ、夏の装束、綾襲にて入れて」(菊の宴　三四三)渡している。兵衛の君はそれらを受け取り、あて宮に手紙を見せるが、あて宮はやはり返事を出さない。

それでも諦めきれない実忠はこれに続き、「をかしげなる沈の箱一具に、黄金一箱づつ入れ」たもの(菊の宴　三四三)、また「白銀の箱に黄金千両を入れ」たもの(菊の宴　三四四)を兵衛の君に贈ろうとするが、両方とも兵衛の君は受け取らない。

以上のように見ていくと、兵衛の君は、最初は実忠からの手紙を受け取り、あて宮に見せていたが、最後には実忠から自身に対しての贈り物すら受け取らなくなっている。これについて実忠側から考えると、実忠は、兵衛の君という仲介人を通してあて宮との距離を縮められたにも拘わらず、原因不明なまま、あて宮から返事を貰えないばかりか、肝心の仲介人との距離までも開いてしまったことになる。

実忠からあて宮・兵衛の君への贈り物の流れを一通りみたところで、次に仲忠についてみていく。

二・実忠と仲忠からの文字を書きつけた贈り物の比較

仲忠が物に文字を書いて送る場面については、第一章「物に字を書きつける」で検討した。第一章の最後を再掲しておく。

仲忠が物に文字を書きつけるようになったのは、手紙や自分のあて宮への想いをあて宮付きの女房である孫王の君に託しても仲立してもらえないことが契機であった。そして、そこで文字を書きつけたのは、花びらや葉などの、自然の景物であった。自然の景物に文字を書き始めた時点では、あて宮から返事が来ることが多かったが、しかし、「祭の使」巻において「龍胆の花押し折りて、白き蓮の花に、笄の先」で文字を書いたものには、返事が来なかった。そこで、仲忠は作り物に文字を書きつけるようになる。そして、あて宮求婚譚の最中に仲忠があて宮に贈ったものは、金や銀で作られた非実用品であった。

あて宮が春宮に入内することが決まったときに仲忠があて宮に贈ったものは、実用品に変化する。あて宮求婚譚が終結したことで、宴の席では文字を書きつけた物を使用した軽快な遣り取りが行われる。しかし、いぬ宮の入内を視野に入れたとき、仲忠は再び、あて宮に非実用的で華美な贈り物を贈るようになる。以上、仲忠が物に文字を書きつける場面を追ってきたが、仲忠が文字を物に書きつける背景には、あて宮との繋がりが関係しているといえる。また、このことから、『うつほ物語』におけ

る物に文字を書きつけるという行為がただやみくもに描かれているのではなく、一定の論理の元に描かれている可能性があるということが言えるのである。

仲忠が文字を書きつけたものの変化について見通した第一章をふまえて、本章では、さらに考察を加えていくことにしたい。仲忠が文字を書きつけたものと実忠が文字を書きつけたものの変化を以下で比較する。(注5)。なお、次の表で仲忠が文字を書きつけたものの一覧に付した番号は、第一章の番号と一致するようにしたため、⑥と⑪はない。

〔表　仲忠と実忠が文字を書きつけたものの変化〕

【実忠】

①めづらしく出で来たる雁の子（藤原の君　七一）

②花桜のいと面白き花びら（藤原の君　七三）

③白銀の薫炉（藤原の君　七四）

④川島のいとをかしき洲浜（藤原の君　七五～七六）

＊この後、実忠は「鈴虫」「草木」をあて宮に贈り、返事を貰えなくなる。

①藤のかかった松（春日詣　一五〇）

②面白き萩の葉（嵯峨の院　一五九～一六〇）

③空蝉の身（祭の使　二〇五）

【仲忠】

自然の景物に文字を書きつける

④朽ちたる橘の実（祭の使　二一三）

⑤白き蓮の花と白銀の鯉（祭の使　二三五～二三七）

作り物に文字を書きつける

⑦黄金の船（吹上・上　二七六）

⑧黄金の車と黄牛、金銀に調じた人々（菊の宴　三三三）

⑨御櫛の箱（あて宮　三五四～三五五）

⑩御膳の翁（蔵開・中　五四七）

⑫鶴（国譲・中　六九四～六九五）

以上を振り返ると、実忠が文字を書き付ける対象の変化を示した①から④と、仲忠が文字を書きつける対象の変化を示した①から⑧は、変化の仕方がほぼ同じだといえる。このことから、実忠の場合には詳しい描写はないが、文字を書き付ける対象が変化する理由は、実忠と仲忠で、大差はないと考えられる。

時間軸に注意して見ていくと、実忠の求婚の後に、新たな求婚者として登場する仲忠の求婚の仕方は実忠のそれと重なり、また、両者は共に、将来有望であることが述べられていることから、実忠と仲忠の人物像が、一時的ではあれ、重なったことを示しているかと思われる。実忠の場合と同様、数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという構図は、この仲忠の例からも見える。しかし、両者には大きな違いがある。「吹上・下」巻で実忠はこれ以降に文字を書く対象を元に戻してしまい、一方の仲忠は⑩～⑭にあるように、実忠とは異なって、文字を書き付ける対象をさらに変化させていくのだ。この違いは何だろうか。実忠の行動に焦点を合わせて考えてみると、仲忠が意識的に文字を書きつける対象を変化させていたのに対し、実忠はあて宮から返事を貰うための法則には気付かずに文字を書きつける対象を変化させていたと言える。よって、実忠は、自身がなぜあて宮から返事を貰えたのか、その理由が分からず、文字を書く対象を自然物へと戻してしまったのだ。このことを踏まえて、いま一度、物に文字を書くことの意味について次節で考えてみたい。

三．あて宮と仲忠の意思疎通

第一章では、仲忠があて宮に贈った文字が書かれた物の流れを見てきた。また、文字を書きつける対象の転換点が⑥と⑨にあることも述べた。本章では、あて宮の春宮への入内が決まった⑫以降に注目する。

⑫は、あて宮が春宮に入内することが決まり、入内の準備をしている最中に、仲忠が入内の祝いの品を贈った場面である。ここで贈られているものは、入内の祝いとしてはオーソドックスなものではあるが、他の求婚者たちの贈り物に比べ、豪華である。参考まで

に、他の求婚者たちからの贈り物を挙げておく。

・涼からの贈り物（あて宮　三五五）

源中将、夏冬の御装束ども、装ひなど麗しうして、沈の置口の箱四つに畳み入れて、包みなど清らにて

・実忠からの贈り物（あて宮　三五五）

源宰相、さるいみじき心地に、え聞き過ぐし給はで、兵衛の君に、装束して心ざし給ふとて

他の(元)求婚者たちとは一線を画する豪華な贈り物をする仲忠であるが、この場面以降、仲忠からあて宮に贈られる物は、そこに書かれる和歌の内容と一致しなくなるという変化が起こる。一見、何かしらの意味をもった贈り物に、違う内容の和歌が書かれるようになるのだ。このことについて考察する前に、第一章を簡単に振り返りながら考察してゆく。

仲忠が初めて物に文字を書きつけた⑥において、あて宮のもとに手紙を持って行ってくれることのなかった孫王の君が、和歌を書きつけた植物は持っていってくれたということは、和歌そのものというよりは、和歌、ひいては文字を書きつけた「物」が重要になってくるということである。だが、多くの場合、手紙とは保管しておくものである。この物語においても、手紙を保管する場面は数例ある。自然物に書いた文字は、受け取った際には読めても時間が経過してしまえば読めなくなってしまうという欠点があり、このようにして文字が消えてしまえば、差出人の想いの強さも同時に掻き消えてしまうことになる。

そもそも、物に文字を書きつけるとは、どういったことなのだろうか。仲忠・実忠を含むあて宮求婚者たちは、最初の求婚の際に、必ず文字を書きつけた物を贈っている。しかし、一般的には「求婚」する際には、手紙などの、言葉のみを贈ることが主になるはずである。仮に物があっても、物は物、手紙は手紙というように弁別的に機能している。『うつほ物語』内でも、帝や春宮、上達部などが俊蔭の娘に求婚した時は、手紙のみの求婚であった。手紙は、文字の書き方、和歌の出来、紙の選択などから、差出人がいかに受取人を想ってそれを書いたかが分かるものである。しかし、そこでは文字を書く対象は、いかに工夫をこらそうとも、紙以外で

はない。それに対し、物に文字を書く場合は、書き得る対象が無限であるため、手紙よりも様々な戦略をとることが可能である。文字を書き得る対象が無限であるということは、それだけ差出人が頭を悩ませ、工夫を凝らす必要があるということも意味する。つまり、差出人が一つの贈り物をする際に、多大な労力を要するということでもあるのだ。そのような大掛かりなことをしてまで文字を書きつけた贈り物をするということが、差出人の想いの強さを示していると言える。また、あて宮求婚譚では、文字が書かれた贈り物とは、贈り物それ自体がそこに書かれた言葉が示す内容を端的に表している。贈り物としてある物が、和歌のメッセージそのものと一致しているわけであり、受取人は、文字と物との一致したことによる言葉のパワーに直截にふれることとなる。そしてこのようなあて宮求婚譚にみる言葉に対する認識のあり方は、手紙のみで行なわれる一般的な求婚譚とは根本的に異なっているのではないだろうか。

言葉が元来非実体的な記号現象としてあるなかで、物にそれと一体化する言葉を書きつけるという行為は、言葉を物それ自体にすることと同義だということである。ただたんに言葉だけを贈るよりも、贈り物がそれと不即不離の状態にあることで言葉に強度が生まれ、差出人の想いの強さを表出することができる。文字を書きつける対象の選択と、文字を書きつけるという行為そのものの両側から、差出人は、自身の想いの強さを表出しているのだ。求婚譚という場において、いかにして自分の言葉をあて宮に受け取ってもらえるかという試行錯誤の結果が、これまでに見てきた実忠・仲忠の例なのではないだろうか。そしてここには、物化した言葉という、求婚譚という祝祭の時空ならではの言語認識があると言えるのではなかろうか。

あて宮求婚譚におけるこれらの試行錯誤は、仲忠によって、黄金・白銀などを細かく加工したものに様々な物を入れるという形態で極められる。そして、あて宮求婚譚が収束を迎え、言葉が物を必ずしも必要とはしなくなった物語の後半において、文字が書かれた贈り物はまた変容するのだ。その第一段階として、⑫があるのではないだろうか。つまり、求婚ではなく、あて宮との意思疎通の一貫として、求婚譚において出来上がった文字の書かれた物を贈るという行為が存続しているのだ。

四．あて宮への求婚からいぬ宮の入内へ

あて宮求婚譚において、文字が書かれた物を贈るという行為が求婚の意思を伝える手段としてあて宮と仲忠の間で確立した。あて宮が春宮に入内した後には、文字が書かれた物を贈るという行為があて宮と仲忠の意思疎通の手段として残り、しかし、和歌の内容と贈り物の意味が一致しなくなるということは、前節までに確認してきた通りである。そして、⑫で見たように、仲忠以外の人物の贈り物は簡略的に書かれ、あたかも仲忠の贈り物が至上のものであるかのように書かれる。これは、⑭でも同様のことが言える。藤壺の第三皇子の九日の産養の夜を描いたこの場面において仲忠が贈っているものは、産養の品としてはオーソドックスなものではあるが、他の元求婚者たちからの贈り物についての言及がほとんどないことから、仲忠からの贈り物が注目に値するほど豪華であったことがうかがわれる。

また、これと類似した場面がある。

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。『みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らする』と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。（国譲・上　六五四～六五五）（注7）

仲忠は、「手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて」藤壺の若宮たちに贈っており、藤壺あてに手紙もある。実用的な手本は冊子の形態を採ることが多いが、ここでは「四巻」と言っているように巻子の形態を採っている。しかも、藤壺の若宮が使用する

ことを知った上で、仲忠は巻子の形態の手本を贈っている。つまり、仲忠が藤壺の若宮に贈った手本は贅沢品ということになる。手本自体は藤壺が所望したものではあるが、ここで贈られた手本は、これまでに仲忠が贈ってきた物以上に価値のある、仲忠自作の豪華な贈り物だといえる。

これらの贈り物は、立坊争いの渦中で贈られたものである。藤原氏には梨壺が生んだ若宮がいるにも拘わらず、仲忠は、藤壺の若宮たちに贈り物をしている。しかしこれは、仲忠が藤壺に求婚をしているわけではない。この時行なわれていたのは藤壺の第三皇子の産養だが、今上帝の第一皇子を生んだのも藤壺である。まだこの時点で第一皇子は立坊していないものの、藤壺の生んだこの皇子が立坊する可能性は高いと考えられる。また、この時すでに、仲忠には女一の宮との間に一女いぬ宮が生まれていた。⑭の「薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥」という和歌と手本の場面からは、藤壺の第一皇子が立坊した際にはいぬ宮を入内させたいと仲忠が考えていたことが窺える。

さらに、「蔵開・上」巻に、次のような場面がある。

さて、赤き薄様一重に、「御文賜はるべき人は、まだ、目も驚きて、え。『なほ、聞こえさせよ』とて侍ればなむ。『思ほすやうに』とのたまはせたるは、なさは、所狭きやうに思されけむ。誰も恨み聞こえつべしや。まこと、『御ために』とのたまはせたるは、何ごとか。勧むる功徳こそ侍るめれ。あぢきなき御怒りなりや。

『同じ巣に孵れる鶴のもろともに立ち居む世をば君のみぞ見む

と聞こえさせよ』となむ」とて、裏に引き返して、私には、「いでや、『今は限り』と言ふなれば、なほこそ、

千歳をば今なりと思ふ松なれば昔も添ひて忘られぬかな

と書きて、同じ一重に包みて、面白き紅葉につく。（蔵開・上　四八三）

藤壺が仲忠夫妻に、いぬ宮の産養の贈り物をした際に、女一の宮の代筆という体裁で、仲忠が藤壺へ返信した場面である。そこ

には、「同じ巣に孵れる鶴のもろともに立ち居む世をば君のみぞ見む」と、藤壺若宮の立坊といぬ宮入内を願う気持ちが書かれている。この歌と、「薬生ふる山の麓に住む鶴の羽を並べても孵る雛鳥」(国譲・中　六九五)が類似していることから、仲忠が藤壺に対し、いぬ宮を次の春宮に入内させたいという意思表示を数度行なっていることがわかる。

では、言葉が物を必ずしも必要としなくなった中で、あたかも求婚時代のような、言葉が書かれた物を贈る意味とは何であろうか。誰が見ても求婚の意を示す和歌を、その和歌に使用している言葉を具現化した物に書いて贈るということは、差出人が和歌の、特に強調したい言葉を物によって表現しているということである。例えば、⑨において、仲忠があて宮に贈った和歌は「夜もすがら我浮かみつる涙川尽きせずこひのあるぞわびしき」であったが、この中の「夜」「涙川」「こひ(鯉)」を物としてあて宮に提示することによって、和歌という文字だけのメッセージよりも分かりやすく、より強く自分の想いを表出しているのだ。このような、贈り物によって和歌の言葉を取りだし、強調するのとは逆に、和歌の言葉とは関係のない贈り物をするようになった理由は、登場人物を取り巻く状況が、「想い」を露骨に表出してはいけないような状態に変わったためではないか。求婚譚というある種の熱気を帯びた空間が終結し、冷静さを取り戻した物語内の空間においてなお、贈り物に文字を書きつけて贈り合う藤壺と仲忠の間には、求婚譚の空間が持続しているのだ。しかし、両者とも、既に日常となった宮廷社会に生きる人物でもある。だからこそ、かつての求婚者であった仲忠は、いまなお自分との間に特殊な空間を持つ藤壺だからこそわかる方法で、自分の娘であるいぬ宮を次の春宮に入内させたいという意思表示を行なったのではないだろうか。このように考えると、仲忠が藤壺や藤壺の若宮に贈った、簡単に人の目に触れる贈り物は、日常でも通用するような「産養」「手本」といった意味を持つものとなり、読まなければ意味を把握できない、言い換えれば人の目に容易く触れない文字は、求婚譚という熱気を帯びた空間で贈与された、贈与物に書かれた文字と同じような意味を持つようになったのだと読める。しかし、求婚譚の時とは違い、贈り物自体の持つ意味とそこに書かれた和歌の内容は一致しない。ここでは、何に文字が書かれているかということよりも、「物」に文字が書かれるということが大事なのではないか。

五・『うつほ物語』における言語認識

実忠と仲忠は、あて宮に対するアプローチの仕方から、一時的に人物像が重なる。それが分かれた大きな要因は、あて宮へのアプローチの変化の意義を自覚していたか否かによる語り分けにある。仲忠と藤壺の関係は、⑨において、特別なものとなる。求婚譚が終わった後も、仲忠と藤壺との関係においては、文字が書きつけられた豪華な贈り物を贈与するという行為が依然として行なわれている。このように、求婚譚で確立した物化した言葉を贈るという方法は、求婚譚が収束した物語の後半において、人と人との関係を象る主たる方法ではなくなったものの、特化した関係を浮き彫りにする方法として機能していることが解る。また、ここから『うつほ物語』における言語認識の何たるかもみえてくる。

元来、言葉とその指示対象とは一体化した状態にあったのだが、時が経つにつれて、言葉は言葉、物は物、というように分離し、言葉は実体の裏付けのない記号となっていったと思われる。そのような仮説が成立するならば、『うつほ物語』、特にあて宮求婚譚にあっては、分離してしまった言葉と物とを不即不離な関係にある原初的状態へと還元しようとしていることになる。そして、言葉と物とが分離した世界を語る――言葉が物を必ずしも必要としなくなった――物語の後半においてなお、仲忠と藤壺の関係を言葉と物とが一体化したものとして語ることにより、物に根拠づけられた求愛の言葉こそが力を持つという、この物語固有の祝祭の言語観がその全貌を現しているのではなかろうか。

繰り返すが、『うつほ物語』における祝祭の言語観とは何か。それは、言うまでもなく、あて宮求婚譚という祝祭空間において贈与される、物に書かれた文字としての言葉こそが力を持つという考え方である。それは、和歌(文字)を書きつける対象物をいかに和歌に合わせた物にできるかという、差出人の数々の工夫の結果としての贈り物に表れた差出人の想いに突き動かされ、受取人が返事をするという構造、言い換えれば文字に対する『うつほ物語』独特の認識を根底に置いた上で成り立っている。これは、物語後半で多くの人々が遣り取りしている日常的な長文の手紙のあり方とは歴然と異なる。「藤原の君」巻から「あて宮」巻までは、求婚譚という熱気に包まれた祝祭世界が語られている。それ以降は、祝祭の熱気を引きずりながらも、物語世界は日常の言語

世界に回帰していくがゆえに、文字は物から再び離れ、物に文字が直截に書かれるようなことは粗方なくなったといえる。が、そのような日常の世界に回帰しても、いまだなお文字を書きつけたものの贈与を行なうのが藤壺と仲忠の二人なのだ。これはこの二者間のみで祝祭的気分が依然として持続していることを意味する。祝祭の終焉した世界を語る物語世界にあって、藤壺と仲忠との間で交わされる言葉は一種異様にして特異である。仲忠が藤壺に贈ったものは、藤壺の受け止め方と、日常に身をおくそれ以外の者たちの受け止め方とでは大きく異なる。たとえば、先掲した「国譲・中」巻（六九四～六九五）の場面で贈られた品物と和歌は、日常世界を生きる者たちから見れば、藤壺の若宮への産養の贈り物以外でないが、「蔵開・上」巻（四八三）での和歌を知っている藤壺から見れば、いぬ宮を次の春宮に入内させたいという仲忠の意思表示の言葉となる。また、「国譲・中」巻（六五四）で、仲忠が藤壺の若宮たちに贈った手本四巻は、日常側からすれば若宮の手習いという意味合いだけのものであるが、藤壺から見れば、自身への恋文とも取れるのであった。日常空間に身を置きながらも、藤壺と仲忠の間においてのみ、祝祭空間があるのだ。祝祭と日常的世界とが交錯するといわれる『うつほ物語』だが、本章では、それを言語構造の問題として捉えるとともに、登場人物同士の関係をもそこに読みとるべく試みた。

注1　大井田晴彦『うつほ物語の世界』（風間書房、二〇〇二年）の他に、竹原崇雄「『宇津保物語』「菊の宴」における実忠物語の構想」（『文芸研究』一一五号、一九八七年五月）、齋藤正志「藤原仲忠の人物形成――〈秘琴〉〈漢学〉〈官職・御帯〉」（『二松』3、一九八九年三月）、室城秀之『中古文学研究叢書2　うつほ物語の表現と論理』（若草書房、一九九六年）、中嶋尚「うつほ物語の人物映像――源実忠――」（『文学論叢』七六号、二〇〇二年三月）などを参考にした。また、『うつほ物語』における手紙については、室城秀之「『うつほ物語』の手紙文――特に、「蔵開」「国譲」の巻について――」（『古代文学論叢　14』一九九七年七月）などがある。

注2　田中仁『『書きつく』の意味――宇津保物語を主な資料として――』（『言語表現の研究と教育』三省堂書店、一九九一年三月）の他に、杉野惠子「花びらや葉に歌を書く（書きつく）という表現について――「うつほ物語」を中心に――」（『実践教育』一九号、実践女子学園中学校・高等学校、二〇〇〇年三月）などがある。

注3　流布本系では「宰相、めづらしく出で来たる雁の子に（こと）書きつく（つつ）、」となっている。雁のことを書いたという本文であるとして、実忠は物に文字を書きつけていないと捉えることもできるが、この後に、実忠が物に文字を書きつける例が出てくることと、杉野論（注2）の指摘を考えれば、ここは雁の卵に文字を書いたと捉えて良いと考えた。また、「書きつつ」と「書きつく」という表現にはなっていない本文もあるが、雁の卵に文字を書いたことに変わりはないと解釈した。

注4　九大本（文化版本書入本）では「花桜のいと面白き花びらに（おもしろくはなのひらけしに）」となっている。花が開いている状態を示しているか否かの違いがあるのみで、ここは実忠が桜の花びらに文字を書いたということで間違いはない。また、和歌にも「……風だに君に見せずやあるらむ（よせすやあるらむ（流布本系）／みせすやありけん（南葵文庫書入諸本）」という異同があるが、歌意に大差はないため、今回は重要視しない。

注5　仲忠があて宮に贈った、文字を書きつけた物の場面の異同は、第一章「物に字を書きつける」も併せて参照のこと。

注6　巻の順序は「春日詣」巻が「嵯峨院」巻に先行するが、時系列上、「嵯峨の院」巻は「春日詣」巻に先行するため、仲忠が物に文字を書きつけた最初の例は⑥ということになる。

注7　この箇所も、大きな異同がある。この箇所の異同については、大友信一「「右大将殿より」の「手本四巻」考」（『就実論叢』第二六号　其の一（人文篇）一九九七年二月）が詳しい。

第三章　書かれた〈手〉

前章までは、『うつほ物語』における文字の書かれた物や手紙を扱ってきた。本章では、〈手〉を取り上げる。『うつほ物語』では、「手」を、化粧・舞・相撲の勝負・碁・楽譜・音楽の奏法・筆跡といった意味で使用している。ここでは、その中で「筆跡」を取り上げる（注1）。〈手〉とは、それを書く人物の教養を表わし、またそれを書く人物の何たるかを表わす。そのため、〈手〉を見ることで、その文を誰が書いたのかを特定できる。これら〈手〉の特徴を、『うつほ物語』はどのように活かしているのだろうか。『うつほ物語』の〈手〉に関する先行研究は僅かである。室城秀之（注2）は、「蔵開」「国譲」巻における〈手〉について、多少の言及をしているが、それでも〈手〉全体を見渡した研究ではない。

『うつほ物語』において、〈手〉に関する記述は、物語の後半に偏っている。また、〈手〉についての言及がされる人物は、登場人物の多いこの物語において十名未満と少ないが、そこから人物関係が見えてくることもある。本章では、『うつほ物語』に出てくる〈手〉の用例を全て取り上げた上で（注3）、人物の〈手〉を通して、『うつほ物語』における人物同士のつながりについて考えてゆく。

一・手紙の書き手を判断する材料としての〈手〉

〈手〉の最初の例は、「藤原の君」巻で、実忠が、あて宮の乳母子である兵衛の君を使いとして、あて宮に花びらに書いた手紙を渡そうとする一連の場面である。

兵衛、「さらば、賜はらむかし。例の、おぼつかなうこそあらめ」とて、取りて、御前にて書きつく。

ほのかには風の便りに見しかどもいづれの枝と知らずぞありける

と書きて、「かく言ひたらば」など聞こゆれば、「誰ぞ、君を、かく言ふらむは」などのたまふ。兵衛、持て出でて、「御覧ぜさせつれば、『兵衛がもとに賜へるなり』と聞こえつれば、のたまひまぎらはして、笑ひ給へれば、御前にて、これかれが聞こえつるなり」と聞こゆれば、「さればよ。君の御手にこそあめれ」。（藤原の君　七三～七四）

あて宮宛ではなく兵衛の君宛の手紙だとして、あて宮に相手にされなかった兵衛の君は、実忠に「これかれが聞こえつるなり」と返事を渡すが、その筆跡を見た実忠は「さればよ。君の御手にこそあめれ」と兵衛の君の〈手〉だと判断している。

これと同様に、手紙の〈手〉を見て誰が書いたのかを判断する例は多い。同じ「藤原の君」巻で、滋野真菅があて宮に求婚するべく、あて宮の兄、忠澄の乳母である長門に手紙を書かせる場面がある（藤原の君　九七～九八）。長門は、孫のたてきに「殿の大君の御文」（注4）とあて宮の元へ手紙を持って行かせるが、その筆跡は「鬼の目を潰しかけたるやうなる手」であり、あて宮は、「長門が得たるにこそあめれ」との判断を下して手紙を返す。また、あて宮の返事を心待ちにしていた真菅は、長門の差し出した報告書を、あて宮からの返事だと勘違いしたまま開いてしまう。この時、真菅も「嫗の手なり」（注5）と長門の手による手紙だと判断している（藤原の君　九八～九九）。

しかし、長門の〈手〉のような劣悪な筆跡は他には出てこない。また、〈手〉によって手紙の差出人を判断する例も、物語の前半では「藤原の君」巻に出てくる三例のみである。逆に、物語の後半では、判断材料としての〈手〉、そして〈手〉に関する話題そのものも、その数を増す。以下に、これらの例を見ていく。

二．あて宮求婚譚以降、頻出する〈手〉

手紙が「誰」によって書かれたのかを〈手〉によって判断する例は、先に挙げた「藤原の君」巻の三例以外では、物語の後半「蔵開・上」巻以降に出てくる。資料を整理するために、以下に全て掲げる。

①いぬ宮の五十日の祝宴（蔵開・上　五一九）

御折敷見給へば、洲浜に、高き松の下に鶴二つ立てり。一つは箸、一つは匙食ひたり。松の下に、黄金の杙して、帝の御手して書かせ給へり。（注６）

②俊蔭の〈手〉（蔵開・中　五三五）

俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。

③藤壺からの贈り物（蔵開・中　五四五～五四六）

集まりて、興じて、皆取り据ゑて参るほどに、大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形を作りたり。それに、孫王の君の手して、かく書きたる、

「君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる……

④涼からの贈り物（蔵開・下　五八五）（注７）

源中納言殿より奉り給へる物ども、糸を藁にて、白き組をあららかにて、絹一匹を腹赤にて、そを五葉の作り枝につけつつ十枝、鯉・鯛は生きて働くやうにて、同じ作り枝につけたり。雉の嘴には黒方、皆白銀どもなり。鳩は黄金、その嘴には黄金入れたり。小鳥には、黒方をまろがしたり。折櫃は白銀、沈の鰹、黒方の火焼きの鮑、海松・青海苔は糸、甘海苔に綿を染めて、下には綾、衝重二十六、蘇枋の物入れたり。洲浜を見給へば、中納言殿の御手にて、

行く水の澄む影君に添ふるまで汀の鶴は生ひも立たなむ

とあり。

⑤いぬ宮の百日の祝宴（蔵開・下　六〇五）

かくて、いぬ宮に餅参り給ふとて、女御の君折敷の洲浜を見給へば、例の、鶴二羽、しかよろひてあり。松、生ひたり。左大将の手にて書き給へり。

百日川今日と知らせつ乙子をぞ数へて千代となせよ姫松

⑥兼雅の妻妾たちの筆跡（蔵開・下　六一三～六一四）

かかるほどに、花盛り興あるに、おとど、大将に、「一条の、人気もなかなるを、『いかが住みなしたる』と、行きて見む。いざ給べ」とて、もろともにおはして、まづ、北のおとどに入りて見給へば、居給ひし所に、かの君の御手にて、

妹背川すまずなりぬる宿ゆゑに涙をもなほ流しつるかな

⑦涼からの手紙（国譲・上　六四二）

かくて、その日暮れつ。つとめて、今日もよき日なれば、鍵の小唐櫃を開けて見給へば、白銀に塗物したる鍵ども、ふさにつけつつ、いと多かりける中に、見給へば、源中納言の御手にてあり。

君がためと思ひし宿のかきを見てあけ暮れ嘆く心をも知れ

とあり。見つけ給ひて、北の方見給ひて、「うたてあり」と思して、隠し給ひつ。

⑧藤壺から源実忠への手紙（国譲・上　六四五）

蔵人、かの君の近く使ひ給ひし侍の人に、「『これ、定かに参らせよ』となむ仰せられつる」とて取らすれば、「いみじう思し嘆くに、この文を御覧ぜば、少し思し慰めてむ」とて喜びて、物も聞こえで奉れば、「いづくよりぞ」。「知らず。『参らせよ』とぞ、人の申しつる」と申す。引き開けて見給ふ。かの御手なれば、見果てで、泣きに泣き給ふ。民部卿の、「藤壺のなりな。賜へ。見給へむ」。い

らへ、「まだ見給へずや、目も見え侍らねば。親と聞こゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳うれしきものなりけり。ここらの年ごろ、身をいたづらになして侍りつれど、音もし給はざりつるものを」とて、いみじう泣き給ふ……

⑨藤壺が第四皇子を出産した際の仲忠夫妻からの贈り物（国譲・中　六九三）

一の宮の御方より、子持ちの御前のおととの御膳、稚児の御衣・襁褓、いと清う調じて奉れり。白き折櫃に、黄ばみたる絵描きて、白き、黄ばみたる銭積みたり。御石の台に、例の、鶴あり。洲浜に、

行く末も思ひやらるる石にのみ千歳の鶴をあまた見つれば

と、大将の君の手にて書き給へり。

⑩仲忠からの贈り物（国譲・中　六九六）

岩の上に立てたる二つの鶴どもを取り放ちつつ見給へば、沈の鶴は、いと重くて、取る手しとどに濡る、……白銀のは、金なれど、殊に重くもあらず、腹に物の下に入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して葦手なり。「これは、誰が手ぞ」と、集まりて見給へど、え知り給はず。御方、御覧じて、「大将の御手にこそあめれ。『若君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」

⑪石作寺での仲忠と宰相の上の遣り取り（楼の上・上　八三一）

取り入れさせて、見給へば、「大将の御手なめり。いといみじう恥づかしう。いかに見給ふらむ」とおぼえ給へど、「仏の御しるしもあらむ」と、うれしう思す。白き色紙に、「……」とも書き給へり。

思ひ当てに、かの見給ひし手よりは、いとなまめかしう貴に書きたれど、「それなめり。げに、まがへる心かな」と思す。

①⑤⑨は、それぞれ、いぬ宮の五十日の祝宴、いぬ宮の百日の祝宴、藤壺（あて宮）の若宮出産祝いの場面である。①は、折敷の洲浜にある作り物の松の下の黄金の杙に、いぬ宮の母方の祖父である朱雀帝の筆跡で和歌が書かれており、⑤は、折敷の洲浜に、いぬ宮の父方の祖父にあたる兼雅の筆跡で和歌が書かれている（注8）。また、⑨では、仲忠が洲浜に和歌を書いている。

②は、朱雀帝の前で俊蔭や俊蔭の父である式部大輔の集を開けた際の場面である。

③は、俊蔭や俊蔭の父母の書物を朱雀帝の御前で進講する合間に、殿上で仲忠をはじめとした人々が語らっていた折に、藤壺から贈り物が届いた場面である。凝った細工を施した鍋に、藤壺付の女房である孫王の君が和歌を書いている。

④は、涼とさま宮の間に生まれた子どもの七日の産養のお祝いの品への返礼が、仲忠たちの元へ届けられた場面である。これとは別に涼からの手紙もあるのだが、そちらには「中納言の御手」などの記述はない。洲浜に書かれた和歌にのみ、この記述があることが注目されよう。

⑥は、顧みられなくなった兼雅の妻妾たちが一条殿を去った後に、一条殿の様子を兼雅と仲忠が見に行った場面である。ここに挙げたのは、兼雅の妹の歌だけであるが、この後に、梅壺、宰相の娘、千蔭の妹、仲頼の妹の歌が続く。かつての住居であるため、どこに誰がいたかということは兼雅には明白なことではあるが、書かれた和歌の〈手〉を見ることで、かつてそこにいた女性の存在感がより強まっている。

⑦は、殿移りをした涼とさま宮夫妻から送られた部屋の鍵などが入った小唐櫃を、後日、藤壺が開けた場面である。恋文と取れる和歌が涼の〈手〉で書かれており、それを偶然にも見つけてしまった藤壺は、「うたてあり」と思い、たまたま隣にいたさま宮に気づかれないように隠している。

⑧は、元あて宮求婚者の実忠の許に、藤壺から手紙が送られた場面である。藤壺は、「りやうの鈍色の薄らかなる一重に」「藤の花」を付けた手紙を、自分の乳母子である兵衛の君の兄で、今は春宮の蔵人になったこれはたを使いとして届けさせた。その際に、「これ、太政大臣殿に持て参りて、人々あまたものし給へらむ、源宰相に定かに奉れ」(六四四)と命じている。その命を受け、これはたは、実忠が「近く使ひ給ひし侍の人」に手紙を渡している。この構造は、差出人が、自身にとって信用のおける使いへと手紙を渡し、その使いが受取人にとって信用のおける使いへとさらに手紙を渡すという、読者の目線から見れば、差出人も受取人も明白な人物関係を構成している。しかし、実忠も侍も手紙がどこからのものかはわかっていない。それでも、手紙の筆跡を見た実忠は、そ

れが藤壺からのものであることを理解するのだ。

この場面で興味深いのは、手紙を見た実忠の「泣きに泣」く姿を見ただけで、実忠の兄である実正（民部卿）が、実忠の持つ手紙の差出人が藤壺であることを見抜くことである。また、実正が手紙を見せるように言った後に、実忠は「親と聞こゆるものは、おはしまさぬ世にも、御徳うれしきものなりけり。」と述べ、「いみじう泣」いたとある。実忠のこの様子を見て、春宮妃である妹の宮の君は、同じく春宮妃である藤壺の悪口を言い始める。その直後、春宮から宮の君に手紙が来る。以下に、その場面を掲げる。

春宮より、宮の進を使にて、御文あり。喜びて見給ひて、声を放ちて、「わが親の、今々とし給ひしまで、『我は、きんぢを思ふにぞ、冥途も、え行くまじき。宮仕へに出だして、人数にもあらず、かかる折にだに、あはれとものたまはねば、おぼろけに、憎しと思すにあらざめり。かかるを見捨つること。いかさまに惑はむずらむ』と、泣く泣く隠れ給ひにし。あが君、今日の御文を見せ奉らずなりにし。かくぞたまへる。天翔りても見給へ」と、泣きののしり給ふ。（国譲・上　六四七～六四八）

「親」を引き合いに出し、泣いている様子が、実忠が藤壺から手紙を受け取った際の様子に近いものがある。実正・実忠・宮の君の父である季明は、この場面よりひと月半からふた月ほど前に亡くなったばかりであるため、両者の言葉に「親」が出てくるのかもしれない。それにしても双方ともにあまりの嬉しさに激しく泣く様子は、全く同じである。

⑩は、第四皇子を出産した藤壺に、仲忠が贈り物をした場面である。仲忠は孫王の君と示し合わせて贈り物をしたため、孫王の君は、何も知らないふりをしている。そのため、女房たちは「誰が手ぞ」と疑問に思うが、誰にも分からない。ただ一人、若宮の手本を頼んだ藤壺のみが、仲忠の〈手〉であると分かる。

⑪は、物忌のために石作寺に出かけた仲忠が兼雅の妻妾の一人であった宰相の上と、その子である小君に会う場面である。宰相の上は、以前に仲忠の筆跡を目にしているため、手紙の差出人が誰かがすぐに分かった。対する仲忠は、「かの見給ひし手よりは、

いとなまめかしう貴に書きたれど」と判断に困ってはいるが、宰相の上であろうとの判断を下している。

以上のように、隔たった人物同士の間で手紙や物が遣り取りされる場合、そこに書かれた文字が誰の〈手〉であるかを見ることが、最重要事項となっている。これはごく当然の事象ではあるが、たとえば、⑦⑨のように、複数の人物から贈られた物に特定の人物からの和歌が書かれていた場合には、「誰」が書いたものなのかということが特に重要になってくるのではないか。

判断材料としての〈手〉の資料を一通り見たところで、他の〈手〉についても見ていく。

三・〈手〉の美しさへの評価

〈手〉に関する記述は主に物語の後半に偏っていることは先に述べた通りだが、〈手〉の美しさを評価する記述は、物語の前半にあたる「内侍のかみ」巻に出てくる。

「仁寿殿は、うるせき人にこそありけれ。昔より後の世までの、いはゆる嵯峨の御時の女御ぞかし。今、それに殊に劣らぬ手など走り書きけり。など、正頼がもとに遣する文、これにおぼえたる筋の思ほえぬ」（内侍のかみ　三九〇）

源正頼と藤原兼雅が、各々が持つ手紙の優劣を競う場面である。正頼は嵯峨院の承香殿の女御からの手紙を、兼雅は正頼の娘である朱雀帝の仁寿殿の女御からの手紙を持ち寄って、どちらの持つ手紙がより素晴らしいかを競っている。この場面は、『うつほ物語』において、初めて〈手〉への批評が行なわれた場面でもある。結局、この勝負は引き分けとなってしまうのだが、このことから分かるのは、仁寿殿の女御の筆跡が、当代の一、二を争うほどの筆跡であるということである。

仁寿殿の女御の筆跡については後に見ていくことにして、ここではその他の、〈手〉の美しさに言及した例を見る。物語の後半になって、ある人物が能筆であったことが語られる場面が出てくる。「蔵開・上」巻では、「俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに」(五二七)と、俊蔭が能筆であったことが書かれ、「蔵開・中」巻では、「歌・手、限りなし。」「この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。」(五四八)と、俊蔭の母の筆跡の素晴らしさが述べられる。「国譲・下」巻では、「あはれ、源少将法師あらましかば、いかならまし。かたち・心めでたかりしはや。手を書き、歌をよく詠みしぞや」(七九六)と、源仲頼が能書の人物であったことが書かれる。

しかし、「楼の上」上下巻では、〈手〉を評価する際の表現は、「をかし」「うつくし」という表現に変わる。

「これ見給へ。手をこそ、この気近く見し人々よりは、よく書きたれ。見所ある様に、をかしくぞ書きたるや。」(楼の上・上　八三五)

これは、宰相の上からの返事を見た兼雅が、俊蔭の娘に対して述べた言である。「内侍のかみ」巻で、正頼と手紙の優劣を競った兼雅が、「この気近く見し人々よりは、よく書きたれ」と言うほど、宰相の上の〈手〉は素晴らしいのだ。

宰相の上の〈手〉が評価された例を見たが、その子息である小君の〈手〉も評価されている。

「……この君、仲忠らが教へむことも聞きつべし、手などもいとうつくしう書き、声もいとをかしうぞ侍る」(楼の上・上　八四六)

朱雀院と今上帝の要望により、仲忠が小君を連れて参内した場面である。涼もいる場で、仲忠と女一の宮の第二子である宮の君

については「不用の者なり」と言っているが、兼雅と宰相の上の子である小君については、右記のように評価している。

また、梨壺の皇子の〈手〉も評価されている。

「かの梨壺の宮は、いとなつかしううつくしげに、手も書き給ひ、書も読み給ふなれば、春宮、教へ奉らば、いとよく、さやうにおはしぬべきを、……」（楼の上・下　八八八）（注９）

藤壺が父正頼と話している場面である。梨壺の宮を引き合いに出して、自身の皇子たちへの教育が行きとどいていないことをこの後に述べている。

これらの例は、各人物の〈手〉の評価は行なっているが、それらの人物の〈手〉の素晴らしさが語られるのは一回限りである。また、「内侍のかみ」巻の例のような比較も行なわない。そのため、〈手〉の素晴らしさを語られても、その程度が把握できない。そこで、以下に、〈手〉の美しさが複数回語られ、なおかつ比較される人々について見ていく。

四．仁寿殿の女御の〈手〉と藤壺の〈手〉

「内侍のかみ」巻で、初めて〈手〉が評価されたが、物語の後半部、「蔵開・上」巻以降、評価される〈手〉は頻出する。以下に、これらの例を見ていく。

左近の幄より鶴二つを出だして、その楽を、上下、揺すりてすれば、鳥も折れ返りて舞ふにはやされて、このおとど、……かは

らけを見給へば、女御の君の御手にて、

一よだに久してふなる葦鶴のまにまに見ゆる千歳何なり

と、例よりもめでたく書き給へり。大将、「いとめづらしく、今年二十年あまりといふに、この御手を見るかな。いみじうかしこくもなりにけるかな」と見給ふ。

（蔵開・上　四八九～四九〇）

いぬ宮の七夜の産養の祝いで、人々が舞を舞っているさなか、仁寿殿の女御から文字が書かれた「かはらけ」が来た場面である（注10）。ここでは、「女御の君の御手」とあるように文字を書いた人物が特定されるための判断材料としての〈手〉の役割は健在であるが、それとは別に、「いとめづらしく、今年二十年あまりといふに、この御手を見るかな。いみじうかしこくもなりにけるかな」との評価が下されている。二十年以上前に仁寿殿の女御と手紙の遣り取りをしていた兼雅だからこその評価であるが、この手紙は当時以上に「いみじうかしこくもなりにける」とその上達ぶりが評されている。

仁寿殿の女御の妹にあたる藤壺（あて宮）の〈手〉も評価されている。

藤壺、見給ひて、「これこそ、わづらはしげなりけれ」などて、御返り、……白き薄様一重に、いとめでたく書き給へり。

三の宮、取り給ひて、「よの御手や。そこの御手をこそ、『よし』と、世人も思ひためれ。これ、はた、こよなかめり。かかる折ならでは、心と、え見ずなりにしはや。『人にのたまはす』と見ましかば、つらくもあらまし」。（蔵開・上　四九三～四九四）

いぬ宮誕生の祝いの品を送った藤壺に、仁寿殿の女御が返事をし、再びそれに対して藤壺が返事をした場面である。藤壺からの返事を見た三の宮が、藤壺の〈手〉を「よの御手や、そこの御手をこそ、『よし』と、世人も思ひためれ。」と評価している。ここでは、「世

人」が藤壺の〈手〉を「よし」と思っており、評判になっていることが伺える。物語の前半において、藤壺の手紙の記述は数多くあったが、藤壺の〈手〉についての記述はここにきて初めて書かれるのだ。

また、仁寿殿の女御と藤壺の〈手〉を比較する記述もある。

中納言まだものし給ふほどにあり。北の方の、女御の御文見給ふ、中納言も、「まだこそ見給へね」とて見給ふ。「これも、いとよき御手にこそ」。父おとど、「昔より名取り給へる上手にて、藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」。中納言、「一日見給へしかば、これにまさりてこそ侍りしか」などのたまふ。（蔵開・上　五〇四）（注11）

いぬ宮の九日の産養の翌日、兼雅・俊蔭の娘夫婦とともに仲忠が三条邸に移った後に、仁寿殿の女御から手紙が届く。仲忠は、初めて見る仁寿殿の女御の〈手〉を見て「これも、いとよき御手にこそ」と述べる。ここでも、二十年以上前から仁寿殿の女御と手紙を交わしていた兼雅が、仁寿殿の女御が「昔より名取り給へる上手」であることを述べ、「藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」と述べている。しかし、仲忠は先日藤壺の手紙を見たことを伝えた上で、やはり藤壺の〈手〉は仁寿殿の女御の〈手〉に「まさりてこそ侍りしか」との判断を下している。

仲忠が知り得ない昔の女性たちの〈手〉を知っている兼雅は、「内侍のかみ」巻では、正頼と共に手紙と〈手〉の優劣論を繰り広げていたが、この場面では、仲忠が知っている藤壺の〈手〉を兼雅が知らないことが明かされる。兼雅は「藤原の君」「春日詣」「祭の使」「菊の宴」の各巻であて宮から返事をもらっているが、あて宮が藤壺となってからは手紙の遣り取りはしていない。「菊の宴」巻で兼雅があて宮から手紙の返事を貰ってからこの場面までは、四年間の隔たりがある。僅か四年前のあて宮の〈手〉を知っている兼雅が「藤壺のものし給ふに劣らざるらむ」と現在推量「らむ」を使用しているのはなぜか。これは、おそらく、「藤壺」となった今、「あて宮」であった頃の筆跡とは変わっていると兼雅が考えているためであろうと考えることができる。そして、あて宮であった時も、藤壺になっ

てからも手紙の遣り取りをしていた仲忠は(注12)、父とは違い、藤壺の筆跡を知っているため、仁寿殿の女御と藤壺の筆跡を比較し、「これにまさりてこそ侍りしか」との判断を下すことができる。ここでは、〈手〉の判定者としての兼雅の地位が、仲忠にとって代わられた場面でもある。

また、仁寿殿の女御の〈手〉は他の人物とも比較される。

さて、御書仕うまつるほどに、宮はた、青き色紙に書きて、呉竹につけたる文を捧げて来て、「宮の御返り言」ともて騒ぎて、大将殿、「しばし、今」と言へば、上、「持て来や」とて取らせ給へば、大将殿、「いとかたはらいたく、苦し」と思ふめり。上、御覧ずれば、……と、いとをかしげに書き給へり。「女御の君の御手の、貴に若くは見ゆれど、大人しくも後見おこするかな」と思して、押し巻きて、投げ遣はしつ。大将、賜はりて見て、「何ごとにか侍らむ」とて、懐に入れつ。(蔵開・中　五三八～五三九)

朱雀帝の命で仲忠が俊蔭の遺文集の進講を行なっているところに、女一の宮からの返事を持った宮はたが帰ってきた場面である。女一の宮の手紙を見た父朱雀帝は、「女御の君の御手の、貴に若くは見ゆれど、大人しくも後見おこするかな」と、仁寿殿の女御と女一の宮の〈手〉が似ていると感じる。

以上をまとめると、仁寿殿の女御と女一の宮の母子は〈手〉が似ており、仁寿殿の女御と藤壺の姉妹では、藤壺の〈手〉の方が勝っているということになる。

五・仲忠の〈手〉

藤原仲忠の〈手〉の初例は、「内侍のかみ」巻にある(三八四)。この場面では、仲忠が、あて宮とおぼしき人物と手紙を遣り取りしているところを源正頼に見られ、手紙を隠したという一連の話を正頼が大宮に話している。仲忠が持つ手紙に書かれた文字を、正頼は「こともなく走り書いたる手」であったと話している。ここでは、特に〈手〉についての批評はない。

しかし、次に掲げる場面以降、仲忠の〈手〉への評価は頻出するようになる。

宰相の中将、藤壺にまうで給ひて、ありし御物語し給ふ。……宰相の君、「……昔の人の中に、『あはれ』と思ほすやありし。左衛門督なりけむかし。それにぞ、下臈なれど、返り言などし給ふなりし」。「それは、手のよかりしかば、『見む』とてこそ」。宰相、「今やは御覧ぜぬ。いとかしこくなりにて侍るめるを」。(蔵開・上　五一二～五一三)

宰相の中将である祐澄と藤壺の兄妹の会話である。あて宮求婚時代、数多くの求婚者たちがあて宮に手紙を送ったが、その中であて宮は、身分が低いにも拘わらず仲忠には返事をしていたと、祐澄は指摘している。それに対し、藤壺は「それは、手のよかりしかば、『見む』とてこそ」と、理由を述べている。祐澄は、「いとかしこくなりにて侍るめるを」と今の仲忠の〈手〉がさらに素晴らしいものになっているだろうことを言い、藤壺は、先日それを見た旨を伝えている。また、あて宮求婚時代から仲忠の〈手〉が素晴らしかったことが、ここで初めて明かされることも、注目に値しよう。

仲忠の〈手〉の素晴らしさがどの程度のものなのかを示す例を次に掲げる。

これこそ、被け物を持ちて思ふやう、「こればかり賜はむとにやあらむ」とて、つくづく見る。腰の方に、文結ひつけられたり。……この文を、「いとうれし」と思ふ。「かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。これ、一行にても、持ちたる人は、心憎くせしものを」と思ひて、隠しつ。

（蔵開・下　五八三～五八四）（注13）

承香殿の女御に仕えていた女童のこれこそは、仲忠から受け取った被け物に文が結びつけられているのを見つけ、「いとうれし」と思う。続くこれこその「かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。これ、一行にても、持ちたる人は、心憎くせしものを」との思考から、仲忠の〈手〉が世間で評判になっていること、それを内裏の人々が見たがっていること、仲忠の〈手〉を一行でも持っている人間はそれを大事にするものだということが分かる。

また、仲忠は、物語内で唯一、他人の〈手〉を真似る人物でもある。

大将、三条殿に、米一石と炭二荷奉り給ふ。また、同じ数に、米も炭も、御厩の草刈・馬人召して仰せて、小さき童二人、大きなる童子請じ求めさせ給ひて、一条殿に、少将の妹に遣はす。……と書きて、ちうしのすくよかなるに包みて、「山より」と、少将の手にいとよく書き似せて、近く使ひ給ふ上童添へて、「栗出だしし所に教へ入れて、帰りまうで来ね」とて遣はしければ、至りて、「水尾より」とて入れたれば……

（蔵開・下　五九六～五九七）（注14）

仲忠が、兼雅の妻妾の一人である仲頼の妹に贈り物をした場面である。仲忠が仲頼の〈手〉を真似したのは、この後にある、仲頼の妹の所にいる御達の言に『かの君の御もとの』と聞きて、行き集まりて、誓ひ呪ひぞせむ」とあることから、他の妻妾たちに気づかれて面倒なことにならないようにする必要があったからである（注15）。また、この際に「小さき童二人、大きなる童子請じ求めさせ」たのは、仲頼からの使いに見せかけるためである（注16）。しかし、実際に手紙を託したのは、自身の側近くで使っており、信頼のおける上童である。手紙は信頼のおける上童に託し、その上童を手配した童たちに紛らわせたところに、仲忠の慎重さが覗わ

れよう。

さらに、もう一例、おそらく仲忠のものであろうと思われる例がある。

かかるほどに、孫王の君、藤壺にある夕暮れに、側離れて黒き水桶の大きやかなる、四つつい重ねて、女どもさし入れて往ぬ。局の人々、「あやしき物かな。御前に、かかる物をさし入れて往ぬる」とて見れば、大きなる葉椀を白き組して結ひて、五つさし入れたり。……葉椀の蓋に、なま嫗の手にて、「……」とあるを、孫王の君、「誰にか。例の人のすさびにこそあめれ。久しく、かやうのことなかりつるを」とのたまふ。

（国譲・中　六九一～六九二）

誰からの贈り物だかわからないが、書かれている文字は「なま嫗の手」である。それでも、孫王の君は心当たりがあるようで、「例の人のすさびにこそあめれ。久しく、かやうのことなかりつるを」と述べている。贈り物の形状や、孫王の君を使いにしていること、孫王の君の反応、また、物語内で他人の〈手〉を真似るのが仲忠一人であることから、この贈り物は仲忠からのものであろうとの予想がつく。

以上を見ていくと、仲忠は〈手〉が素晴らしいばかりでなく、他人の〈手〉をも真似てしまえる他の登場人物が持たない能力を持った人物であることがわかる。

六・春宮・若宮の〈手〉

〈手〉を習う場面が多い人物として、春宮と若宮の例を見ていく。

かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、宮より。御使、蔵人。開けて見給へば、「……」とあり。おとど、「この御手こそ、久しく見ね」とて見て、「いとよくなりにけり」とてさし入れ給へば、女御の君、「かしこけれど、この御手こそ、右の大将の御手におぼえ給へれ」。藤壺の、「ただ、その書きて奉られたる本をこそは、男手も女手も習ひ給ふめれ。『それ、昔のぞ』とて、今の召すめれど、まだ奉られざめりしかば、『それ驚かせ』などぞのたまはせし」。（国譲・上　六三五）

叔父である季明の喪に服するために里邸に戻った藤壺の元へ、春宮から手紙が届いた場面である。正頼は、春宮の〈手〉を見て「この御手こそ、久しく見ね」「いとよくなりにけり」と述べている。それに対し、藤壺は、春宮の〈手〉が仲忠の〈手〉に似ていると言う。続けて、仲忠が書いた手本を基に春宮が字の練習をしたこと、その手本は古いため、新しい手本を所望しているが、未だに仲忠から献上されていないことを伝えている。

次に掲げるのは、この後日談である。

「心地こそ、頭白くなりにたるやうなれ、かく大きになり給ひにたれば。御手習ひなどはし給ふや。何わざかし給ひつる」と問ひ聞こえ給へば、若君、「何わざも、せさする人もなければ。かしこに、『書習はさむ』とのたまひしかば」。母君、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」なんど聞こえ給へば、大将、うち笑みて、「……さても、宮には、『いかで仕まつらむ』と思う給ふべきを、今は、いとよう物遊ばしなどし給ひつべかめるを、さる仰せ言もなければ」と聞こえ給へば、「誰かは。ここには、知らで籠り侍れば、おほぞうなるやうなれば。ここに、かくて侍るほどに、いかで習はし奉らむ」。大将、「いと易きことなり。御書を仕まつらむ。……」。藤壺、「手なども、まだ習ひ給はざめるを、本をこそ、まづものせさせ給はめ。ま

ことや、宮にも、『書きて』と聞こえ給ひける、『のかし聞こえ奉れよ。使がらか、見む』とのたまひしを、賜はりて奉らばや」。

（国譲・上　六四一～六四二）（注17）

この場面は、第三節の最後に挙げた例で、藤壺が父正頼に、自分が産んだ若宮がきちんとした教育を受けていないと語った証拠ともいうべき場面でもある。「書」も「手」も習っていないという若宮たちに、仲忠が師となって教えるように藤壺は要請する。そして、そのついでとばかりに、春宮も、仲忠の手本を欲していることを伝えている。

この話には、さらに後日談がある。

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。『みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らする』と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。初めには、男にてもあらず、女にてもあらず、あめつちぞ。その次に、男手、放ち書きに書きて、同じ文字を、さまざまに変へて書けり。

わがかきて春に伝ふる水茎もすみかはりてや見えむとすらむ

女手にて、

まだ知らぬ紅葉と惑ふうとふうし千鳥の跡もとまらざりけり

さし継ぎに、

飛ぶ鳥に跡あるものと知らすれば雲路は深くふみ通ひけむ

次に、片仮名、

いにしへも今行く先も道々に思ふ心あり忘るなよ君

葦手、

底清く澄むとも見えで行く水の袖にも目にも絶えずもあるかな

と、いと大きに書きて、一巻にしたり。（国譲・上　六五四～六五五）

仲忠の手をつくした若宮のための手本に対し、藤壺は「よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな」と言う。書かれた和歌には、未だ冷めやらぬ藤壺への思いが見て取れるが、それでも、非常に手の込んだ手本である。これまでに、仲忠は藤壺に対し、様々な趣向を凝らした贈り物をしてきたが、この手本はそれら以上の贈り物と言える。この後、「国譲・中」巻において、仲忠が若宮たちに手紙と魚を贈ったところ、若宮からの返事があったとの記述がある。その〈手〉を見た仲忠は、「いとかしこうも書き給ひつるかな。ただ先つ頃こそ、手本召ししかば、奉れしか。いとよう似させ給へり」（国譲・中　七二三）と述べる。それを受けて、弾正の宮は、若宮たちが手習いをしていたことを話す。

先掲した場面では、仲忠が若宮の手本だけではなく、春宮の手本も届けたことが書かれている。こうして、ますます春宮の〈手〉は仲忠の〈手〉に似てくることになる。

内裏より、また、大将殿の御文、宮の御もとに、「……」と聞こえ給へり。藤壺、見給ひて、「いとよく、宮の御手に似たりかし」とて、「さし比べて見るに、まさりには、えぞあるまじき。……」（国譲・上　六六七）

藤壺を見舞った女一の宮へ、仲忠が内裏から手紙を送った場面である。仲忠の〈手〉を見た藤壺は、「いとよく、宮の御手に似たり

かし」と言いはするが、両者の〈手〉を比べると、春宮が仲忠の〈手〉を超えることはないとも言っている。

七・卓越する仲忠

『うつほ物語』において、〈手〉の用例は、前半にはほとんどなく、後半になってから多出してくる傾向があることは述べた。また、前半後半関係なく、誰が書いた文字なのかを判断するための手掛かりとして〈手〉が働いていることも見てきた。「内侍のかみ」巻における正頼と兼雅の会話で、〈手〉の美しさが語られるようになり、その後、兼雅が〈手〉の美しさを評価する場面が何回か出てくるようになる。しかし、「蔵開・上」巻で、それまで判定者としてあった兼雅の地位は、仲忠にとって代わられる。

また、何人もの登場人物の〈手〉の美しさが評価されるが、それらはいずれも一回性のものであり、比較もほとんどされない。その一方で、仲忠、藤壺、仁寿殿の女御の三人の〈手〉の美しさは繰り返し述べられ、また、彼らの中での比較も行なわれる。さらに仲忠はその〈手〉の素晴らしさを買われ、春宮、若宮の手本を作るまでになる。このように見ていくと、藤壺や仁寿殿の〈手〉が素晴らしいとされていたのにも拘わらず、物語の最後には仲忠の〈手〉が最も素晴らしいものとして位置づけられていることが分かる。仲忠の〈手〉が最も素晴らしく、「国譲・上」巻において春宮・若宮の手本を作るということと、「蔵開・上」巻において〈手〉の判定者として父兼雅を上回ることは、「蔵開・上」巻の冒頭において仲忠が俊蔭伝来の蔵を開き、清原俊蔭や俊蔭の父母といった人々の書物を手にし、その学問を習得することと関係があると考えられるのである。

注1　〈手〉については、序章の注参照。

注2　室城秀之「『うつほ物語』の手紙文――特に、「蔵開」「国譲」の巻について」（『古代文学論叢』一四、一九九七年七月）

注3　『うつほ物語』に出てくる全ての〈手〉の用例を表にすると、次のようになる。

巻名	判断材料としての手	評価される手	その他
俊蔭			
藤原の君	3		
忠こそ			
春日詣			
嵯峨の院			
祭の使			
吹上・上			
吹上・下			
菊の宴			
あて宮			

巻名	判断材料としての手	評価される手	その他
内侍のかみ		1	1
沖つ白波			
蔵開・上	1	5	
蔵開・中	2	2	
蔵開・下	3	1	1
国譲・上	2	2	1
国譲・中	2	1	1
国譲・下		1	
楼の上・上	1	1	
楼の上・下		2	

注4　「殿の大君」が誰を指すのかという問題があり、諸注釈は以下のように述べている。河野多麻（日本古典文学大系、一九五九年）は、「あて宮の姉大君（弘徽殿女御）の御文」と注をつけている。ただし、あて宮の姉大君は仁寿殿の女御であるので、「弘徽殿」とあるのは間違いである。塚本哲三（有朋堂、一九一八年）と宮田和一郎（朝日古典全書、一九五一年）では、「仁寿殿」としている。原田芳起（角川書店、一九六九年）は「仁寿殿女御ではあるまい。長兄忠澄でないとたてきが文使いをする理由がない。これも言語の偏向」と述べ、中野幸一（新編日本古典全集、小学館、一九九九年）と室城秀之（『うつほ物語　全　改訂版』おうふう、二〇〇一年）でも同様の注をつけている。これより前に長門の発話で「御文を賜はりて、あて宮に参らむ。嫗は、男君になむ仕うまつりて侍る。孫なむ、この御方に仕うまつり侍る」（藤原の君　九六）とあることから、「殿の大君」は男性として採るのが妥当であろう。

注5　前田家本では「女の手なり」（一八七）となっている。ただし、この場面において、室城秀之（おうふう）で「嫗」としている箇所がすべて「女」となっていること、手紙を見た真菅が怒っていることから、この「女の手」は「あて宮の手」ではなく、「嫗の手」として解釈するべきである。

注6　この場面は、以下のように続く。

……とて、一の宮に奉り給へば、物ものたまはず。これかれ、「いかでか」などのたまへば、

食ひ初むる今日や千代をも習ふらむ松の餅に心移りて

と書き給へれば、女御の君、折敷ながら、中納言の御もとにさし入れ給へば、取りて見るやうにて、

千歳経る松の餅は食ひつめり今は御笠の劣らでもがな

と書き給ふを、弾正の宮、「見む」と聞こえ給へば、「いとかしこき御手侍れば、え見給はず」とてさし入れつ。

この部分は、室城秀之（前掲書）の注には『『いとかしこき御手に侍れば』に同じ。女一の宮の筆跡を戯れて言ったものか」とあり、中野幸一（前掲書）の注には「女一の宮の筆跡を戯れにいったもの、と解す説に従った」とある。論者はこれらの注に従った。この「いとかしこき御手」は仲忠の戯れの上での発言であり、また「判断材料」にもなっていないため、今回の例からは省いた。

注7　前田家本では、「絹一匹を腹赤（いらか）にて、そ（す）を五葉の作り枝につけつつ……鳩（いと）は黄金、……黒方の火（つぼ）焼きの鮑、海松・青海苔は糸、甘海苔に綿（はら）を染めて」（一一六五）となっており、異同が多い。だが、ここでは「中納言殿の御手にて」という部分に異同がないため、特に考察しない。

注8　①では、この後に、大宮、仁寿殿の女御、女一の宮、仲忠、忠康（弾正の宮）、大輔の乳母が、紙に和歌を書いてこの黄金の杙に順々に貼っていく。一方、⑤では、この後、仁寿殿の女御、俊蔭の娘、女一の宮、仲忠が和歌を詠んだことは書かれているが、①の例とは違い、それをどこかに書いたなどの記述はない。

注9　前田家本には「手」(ナシ)も書き給ひ」(一七九四)となっている。ただし、この箇所は、朱雀帝の御前での進講の話題・いぬ宮の秘曲伝授・藤壺の若宮たちが遊びにしか興味を示さないことという話の流れがあるため、必然的に、「書く」ものは絵ではなく字であると考えられる。また、この物語においては「字を書く」という言い方はなく、「手を書く」が使用されているため、この箇所も「手も書き給ひ」で統一してよいと考えた。

注10　「かはらけ」に和歌を書くことについての論考には、宮谷聡美「「かはらけ」に書かれた歌――『うつほ物語』実忠物語における歌物語の継承と発展――」(『叢書想像する平安文学』四巻、一九九九年五月)、「『伊勢物語』における歌物語の達成――「狩の使」の場合――」(『国文学研究』一一一集、一九九三年一〇月)などがある。

注11　前田家本では「藤壺のものし給ふ(ゝし)に劣らざるらむ」(一〇〇二)となっている。この箇所について、河野多麻(『日本古典文学大系』)は、他の異同「藤壺の物しに」「藤壺のもこれに」が共に藤壺の手の意になり、本文としては「藤壺の物の師」の方が良いとする。だが、本文においてあて宮の師が出てこないことと、他の異同においては「手」の話であることから、ここはあて宮の「手」として解釈した。

注12　仲忠が藤壺の手紙を見た例は「沖つ白波」巻(四五二)にある。

宮の君の御もとより、一の宮に、かく聞こえ給へり。……宮、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとならむ。見給へばや」と聞こえ給ふ。「あらずや」とて見せ給はず。手を擦る擦る聞こえ取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて物も言はず。宮、「をかし」と思ほして、御返り聞こえ給ふ……

また、藤壺からの手紙を見た後にそれに返事をする場面が「蔵開・上」巻にある。

かかるほどに、「藤壺より」とて、……御文あり。……宮、開けさせ給ひて、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとにか侍らむ。見侍らばや」。「『人に、な見せそ』とあれば」とて見せ給はねば、「わが君は、思し隔てたるこそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。……君、見給ひて、うち笑ひて、「久しく見給へざりつるほどに、か

しこくも書き馴らせ給ひにけるかな。この御返りは、仲忠聞こえむ。まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほほ笑みつつ見るに、あはれに、昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゆしくて置きつ。

さて、赤き薄様一重に、……と書きて、同じ一重に包みて、面白き紅葉につく。宮、「見ばや」とのたまへば、「さぞ、見給へまほしう侍る」とて出ださせつれば、召し寄せて、はた、え見給はず。（蔵開・上　四八二～四八三）

注13　前田家本では、「かくののしる御（つ）手持ちたる人もなきものを」（一一六二）となっている。「のゝしる御て」「のゝしるつて」の他に「のゝしりつゝ」「のゝしりつて」という異同もあるが、この続きが「持ちたる人」となっていることから、「のゝしりつゝ」は不適切だと考えた。また、「のゝしるつて」「のゝしりつて」では文意が通らないため、「のゝしる御て」で解釈した。

注14　前田家本では「大きなる童子請じ（ほうし・ざうし）求めさせ給ひて」（一一九一）となっている。「大きなるほうし」である方がより仲頼からの使らしさがあるが、「ざうし」がいるのは不可解である。ここは「大きなるほうし請じ」であっても問題ないか。

注15　室城秀之（前掲書）の注には「仲忠は、手紙の上書きを仲頼からと見せかけて書いて、一条殿に残された、ほかの女性たちの目を配慮したのである。」とあり、また、中野幸一（前掲書）の注にも「手紙上書きを仲頼からと偽装して、他の妻妾たちに気づかれぬように配慮する」とある。

注16　室城秀之（前掲書）の注には『童子』は、寺などに仕える剃髪得度前の少年。仲忠は、仲頼からの使と見せかけるために、童子を選んだのである。」とあり、また、中野幸一（前掲書）の注には「底本『ほうし』を改めた。寺などに働く剃髪得度前の少年。仲忠は、仲頼の使いに見せかけるため、わざわざ童子を選んだのである」とある。

注17　前田家本では「……かしこに（う）、『書習はさ（さら）む』とのたまひしかば」（一二八一）となっている。「かしこう」では意味が通らないため、「かしこに」と校訂する説に従った。

第四章　紙に字を書く――手紙の機能

前章までは、文字が書かれた物や、筆跡について見てきたが、ここでは、字が書かれた紙、すなわち手紙について見てゆく。『うつほ物語』において、手紙は、あて宮求婚譚における和歌だけという形態のものから、夫婦関係・親戚関係において遣り取りされる文字数の多いものへと、その形態を大きく変えている。

これまで、『うつほ物語』の手紙はその形態、折枝・付け枝の問題などとともに論じられてきた(注1)。また、物語の後半部、特に「蔵開・上」～「国譲・下」巻において、長文の手紙が増えるということも指摘されている(注2)。しかし、『うつほ物語』全体を通して、手紙とは何かという問題について巨視的に論じたものはない。本章では、手紙によって明確になる人物関係を見ていくことで、『うつほ物語』における手紙とは何かを考えていきたい。

一・手紙の遣り取りの有無＝人物関係の有無の開示

「藤原の君」巻から始まるあて宮求婚譚では、多くの手紙が行き交う。その差出人は主に、あて宮(注3)に求婚する男性である。求婚者たちは、あて宮に近い女房たちを味方につけ、あて宮に手紙を届けてくれるように頼む。しかし、あて宮宛の手紙が多く描かれるわりに、あて宮がそれらを見たという記述はあまりない。また、求婚者たちの側からしてみれば、手紙があて宮まで届いたかどうかは定かではない。求婚者たちは、あて宮から返事が来て初めて、自分が送った手紙があて宮まで届いたとわかるのだ。このように考えると、物語内には、あて宮に届かない手紙が多数存在するといえる。王朝物語においてはごく当たり前の事ではあるが、あて宮が手紙を受け取るということは、あて宮と男君は手紙を遣り取りする関係になる、つまり、あて宮が手紙の差出人である

男君の気持を受け入れることと同義である。逆に、そういった関係を結びたくない場合、あて宮は、来た手紙が自分宛であることを認めない・返事を出さない・見ないといった対処をする。たとえば、源実忠が「夢ばかりの御返りをだに見せ給へ」という文字を書いた花びらを、あて宮に「御覧ぜさせ給へ」と兵衛の君に頼んだ場面がある（藤原の君　七三）。兵衛の君は「いと恐ろしきこと」と拒絶するが、実忠は「花御覧ぜさすばかりにこそ。」と是が非でもあて宮に花びらを見せるように言う。ここからは、なんとしてでもあて宮からの返事を得て、あて宮との関係を取り付けようという実忠の意思が読み取れる。

実忠だけではなく、あて宮は、男君たちになかなか返事をしない。しかし、春宮に対しては返事をしている。それは、春宮から手紙が来ると、父である正頼があて宮に返事を書かせることも関係しているだろう。この事に関連して、三浦則子は、春宮への返事だけが他の男君たちに比べて群を抜いて多いことを指摘している（注４）。

また、返事をすることで一つの人物関係が成立するのは、あて宮求婚譚にとどまらない。「内侍のかみ」巻には、朱雀帝と仁寿殿の女御の、手紙に関する会話がある（三七七～三七八）。仁寿殿の女御と藤原兼雅の仲を疑う朱雀帝に対して仁寿殿の女御は、兼雅の言葉の使い方や走り書きした手紙が趣深く良かったので感心したのだという。このことによって、過去に兼雅が仁寿殿の女御に手紙を送ったことが読者に示される。この仁寿殿の女御の言葉に対し、朱雀帝は「時々物聞こえ、今もあめるは」と、兼雅が未だに仁寿殿の女御に手紙を送っていることを知っていると仁寿殿の女御に明かしている。この事実は、読者からは見えなかった、仁寿殿の女御と兼雅の関係が顕にされた場面である。それと同時に、手紙の遣り取りがあるという事実を朱雀帝が知っているということを仁寿殿の女御が知らされる場面でもある。この場面で重要なことは、仁寿殿の女御と兼雅との間には何もなかったということではなく、仁寿殿の女御が兼雅からの恋文に目を通したようだという憶測が、手紙の内容はさて置き、二人の仲を疑う要因になっているという点である。そしてこの直後、兼雅と正頼による文比べにおいて、正頼は嵯峨院の承香殿の女御からの手紙を、兼雅は朱雀帝の仁寿殿の女御からの文を持ちよることから、兼雅と仁寿殿の女御との間に手紙の遣り取りがあったことを読者は知るのだ。

「内侍のかみ」巻の冒頭から正頼と兼雅の文比べまでの手紙の扱われ方は、『うつほ物語』では特殊である。朱雀帝が「知っている」

ことを開示する相手は、仁寿殿の女御であると同時に我々読者である。そして、仁寿殿の女御が兼雅に返事を出したか否かを明確にしないのは、朱雀帝に対してと同時にやはり我々読者に対してである。そして、朱雀帝も仁寿殿の女御もいない、正頼と兼雅の文比べの場面で初めて、我々読者は、兼雅と仁寿殿の女御の間で手紙の遣り取りがあったこと、それと同時に、正頼と承香殿の女御の間でも同様のことが行なわれていたことを知る。「内侍のかみ」巻の冒頭は、登場人物間の秘密の開示と保持を同時進行的に読者も共有するようになっており、またそれぞれの事項の種明かしが、会話をしていた人物たちが不在の所で行なわれるという、少々複雑な構造になっている。

返事をすることで一つの人物関係が成立することを示す会話場面が「蔵開・上」巻にある(五一二～五一三)。祐澄は、あて宮が、仲忠には「下臈なれど、返り言などし」ていたことを指摘する。それに対しあて宮は、「それは、手のよかりしかば、『見む』とてこそ」との返事をする。嵯峨院の承香殿の女御・朱雀帝の仁寿殿の女御に続き、あて宮も臣下と手紙の遣り取りをしていることが再度示されるこの場面では、あて宮が誰に返事をし、また誰に返事をしなかったのかを祐澄が知っていることが、読者に対して初めて明らかにされている。それと同時に、前掲した「内侍のかみ」巻の場面にある、仁寿殿の女御が兼雅に返事をしていた理由と同様の理由で、あて宮が仲忠に返事をしていたことが、真実はどうであれ、明らかにされている。

さらに、宮はたと仲忠の会話でも、同様のことが言える(蔵開・中　五四三)。宮はたは、父親である祐澄が仲忠の妻である女一の宮を慕っているから自分も女一の宮を慕っているのだと、仲忠から女一の宮への手紙の使いを申し出た人物である。祐澄が女一の宮を慕っていることを宮はたから再度聞いた仲忠は、「『いづれの宮を』とかのたまふ」と、祐澄が気にしている皇女が自分の妻であることを確認したうえで、「さて、御文は取り入るるか」と祐澄から女一の宮への手紙の行方を気にしている。その結果、女一の宮は祐澄からの手紙を受け取っていないことがわかり(注5)、仲忠は安心する。この場面からは、手紙のやり取り自体がないということから、人物関係が成り立っていないと判断されていることがわかる。ここでもやはり、手紙の遣り取りの有無が問題になっている。

また、絶対に関係を作ってはいけない状況下において、手紙をなかったことにする例もある。それは、あて宮が、涼の妻であるさま宮が隣にいる状況下で、涼・さま宮夫妻から贈られた鍵と錠の贈り物の中に、涼の手で書かれた手紙を見つける場面である(国

譲・上　六四二)。涼の手で書かれているということ、その内容が、あて宮が入内してもなお関係を求めようとする涼の気持ちを証明するものであることから、あて宮は「うたてあり」と思って手紙を隠す。そしてこの後にこの手紙が出てくることはない。これは、涼からの手紙自体をないものとすることで、あて宮と涼の間で成立する可能性のあった関係をなくしてしまうという意味を持つと読める。

二・手紙の内容の隠蔽――人物関係の変化に対する可能性の提示

このように、手紙の遣り取りの有無が人物関係の有無を表わすという法則は、物語の前半部、特にあて宮求婚譚において成立しているといえる。では、あて宮求婚譚が終わった後の物語において、手紙はどのように扱われているのだろうか。「内侍のかみ」巻には、仲忠が恋文と思われる手紙を隠していたことを、正頼が大宮に話している場面がある(三八四)。仲忠の懐から見えた「ともなく走り書いたる手の、薄様に書」かれた手紙を見つけた正頼は、「『見せよや』と、戯れ心に請」うたが、仲忠は笑うだけで見せてくれない。その様子をみた正頼は、「なほ、気色ある文にやあらむ。」と推測している。

そして、この話には後日談がある(内侍のかみ　三九一)(注6)。「そこに、やはかはに書きたる文の、御懐より見えしを、切に惜しまれしは、誰がぞ。」と手紙の内容を聞こうとする正頼に対し仲忠は、「あらず。里より要事のものし給ひしなり」と大した内容の手紙ではないと言っている。しかし、「いで、この、空言なせられそ。なでふ、里よりは、様の御文は奉れ給はむ。心ばへあるべくこそ見えしか。いとしるかりきや」と正頼が言う通り、手紙の形態は恋文そのものである。それでも仲忠は、「紙をこそは取りあへず侍りけめ。」と、あくまで恋文ではないと否定する。仲忠の手紙の相手は明らかにされてはいないが、おそらくあて宮であろうと思われる。手紙の相手があて宮であることの根拠は、先に引いた場面において正頼自身が述べている。

「……宮も、はた、『仲忠、今も昔も、さる心あなり』と聞こし召したなれば、返り言時々せられなどするをば、切にのたまふまじかめり。『ことわり』と許されたるこそは、この中将はいとかしこけれ」などのたまふ。

（内侍のかみ　三八四）

あて宮と婚姻関係にある春宮が、仲忠のあて宮への「さる心」を知っており、あて宮が仲忠に返事を書くことについても「ことわり」と許容している。大事なのは、春宮が仲忠とあて宮の間で手紙の遣り取りが行なわれていることを知りながらも許容していることを、正頼が知っているということだ。しかし、仲忠の立場からすれば、既に入内しているあて宮の父親である正頼相手に、自身の持つ恋文の相手があて宮であることを堂々と明白にすることはできない。その一方で、仲忠に恋文を完全に隠そうという意志が見られるわけでもない。これは、春宮が許容する、手紙を遣り取りするだけの関係であることを強調しているのではないか。この場面では、右記のように手紙の内容を知りたがっている正頼のみならず、読者である我々にも、仲忠の持つ手紙の実際の内容は分からない。正頼に手紙を見られた場合の物語の大きな動きを可能性として提示するという危うさを、この場面は描いているのだ（注7）。

三．見られ、代返される手紙――人物関係が再度成立する可能性の示唆

第三者が手紙を見、さらに代返する場面もある。

①あて宮から女一の宮への手紙を仲忠が見る（沖つ白波　四五二）

宮の君の御もとより、一の宮に、かく聞こえ給へり。……宮、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとならむ。見給へばや」と

聞こえ給ふ。「あらずや」とて見せ給はず。手を擦る擦る聞こえ取りて見るに、心魂惑ひて、いとをかしく思ふこと昔に劣らず、思ひ入りて物も言はず。宮、「をかし」と思ほして、御返り聞こえ給ふ……

これは、あて宮から久々に女一の宮に手紙が来た場面である。あて宮からの手紙を見て笑った女一の宮を見て、仲忠は「何ごとならむ。見給へばや」と手紙を見たいと言う。それに対し、女一の宮は「あらずや」と言って見せてくれない。仲忠は手を摺り合わせて再度、手紙を見たいことを強調し、その後に手紙を見ている。ここで重要なのは、仲忠が初めて女一の宮とあて宮との関係を知るということである。この場面とよく似た場面を次に掲げる。

②あて宮から女一の宮への手紙を仲忠が見る（蔵開・上　四八二～四八三）

かかるほどに、「藤壺より」とて、……御文あり。……宮、開けさせ給ひて、見給ひて、うち笑ひ給ふ。中納言、「何ごとにか侍らむ。見侍らばや」。『『人に、な見せそ』とあれば」とて見せ給はねば、「わが君は、思し隔てたるこそ」とて、手をさし入れて取りつ。見れば、かく書き給へり。……君、見給ひて、うち笑ひて、「久しく見給へざりつるほどに、かしこくも書き馴らせ給ひにけるかな。この御返りは、仲忠聞こえむ。まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。さらぬ時だに侍るものを」とて、ほほ笑みつつ見るに、あはれに、昔思ひ出でられて悲しければ、ゆゆしくて置きつ。

さて、赤き薄様一重に、……と書きて、同じ一重に包みて、面白き紅葉につく。宮、「見ばや」とのたまへば、「さぞ、見給へまほしう侍る」とて出ださせつれば、召し寄せて、はた、え見給はず。

これは、あて宮から女一の宮に手紙と贈り物が来た場面である。「宮、開けさせ給ひて、見給ひて、うち笑ひ給ふ。」、「中納言、『何ごとにか侍らむ。見侍らばや』。」、「『「人に、な見せそ」とあれば』とて見せ給はねば、」、「『わが君は、思し隔てたるこそ』とて、手をさし入れて取りつ」と、この一連の女一の宮と仲忠の遣り取りは、①の女一の宮と仲忠の遣り取りと酷似している。しかし手

紙を見た仲忠の反応が①とは異なる。①では、久々にあて宮の手を見た仲忠は挙動不審になっているが、②の二回目ともなると、自ら女一の宮の代返(注8)をかって出ている。

①は、今まで開示されていなかった女一の宮とあて宮の関係が、初めて仲忠に見えた場面である。ゆえに、仲忠は予想外の出来事にうまく対応できず、挙動不審になるしかない。しかし、②の場面では、仲忠は女一の宮とあて宮の関係を①で既に開示され知っているため、自らも手紙の遣り取りに参加している。ここで一つ注意したいのは、仲忠はあて宮から女一の宮に来た手紙を勝手に見ているのにも拘わらず、その代返として書いた自身の手紙は、「見ばや」と言った女一の宮には見せていないということである。読者には、仲忠があて宮に送った手紙の内容が開示されているが、女一の宮からはこの手紙の内容は見えていない。だが、ここで仲忠が送った手紙が「赤き薄様一重」を「同じ一重に包みて、面白き紅葉につ」けたものであることを考えると、この場面は、女一の宮が、手紙の形態から仲忠のあて宮への思いをはっきりと確認できる場面であるとも言える(注9)。しかし、これに対するあて宮からの返事は書かれておらず、この後日談が「蔵開・上」巻(四九三)に書かれているのみである。そこでは、仁寿殿の女御が女一の宮の代筆をし、それに対してあて宮が「白き薄様一重に、いとめでたく」返事を書いている。この仁寿殿の女御の手紙は、②で仲忠が書いた手紙の代わりとなっている。それは、仲忠が②において、「酔ひて」手紙を書いたためであった。つまり、②の場面においては、女一の宮とあて宮が手紙の遣り取りをする仲だと知っていた仲忠が、二人の間に無理やり入って行ったことになっていたが、後日譚で、それは酔っていたせいだとされているのだ。仲忠が本当に酔っていたかどうかは定かではない。妻女一の宮の目前で、あて宮への恋文と取れる形態の手紙を送ったために、体裁を取り繕うべく、女一の宮の母である仁寿殿の女御が、仲忠が酔っていたことにしたのかもしれない。真偽は定かではないが、しかし、この場面は、「内侍のかみ」巻の仲忠と正頼の会話に通じるものがある。形態は確実に恋文としての体を為している文を見せない仲忠と見たがる正頼・女一の宮という構図である。一度存在が確認された手紙をあえて隠すことは、その存在を知った第三者に対し、たとえ手紙の相手が見えないとしても、その相手との人物関係をより強調することになるならば、仲忠は女一の宮に対して、あて宮との関係を強調してしまったことになるのだ。それは、女一の宮や仁寿殿の女御にとっては非常に体裁が悪い。さらに、女一の宮に宛てて書いた手紙の返事を仲忠にされてしまったあて宮も返事はできない。よって、仁

寿殿の女御は、仲忠が酔っていたことにして、後日、改めて返事を出しているのだ。

酔って代返をしたとされた仲忠と同様、酔った第三者が代返をする例が、あて宮からいぬ宮を出産した女一の宮に手紙が来た場面にある。

③あて宮からの手紙への返事を弾正の宮が代筆する（国譲・中　七一八～七一九）（注10）

かかるほどに、赤き色紙に書きて、常夏につけたる御文持て参りたり。弾正の宮、「いづくのぞ」と、取り給ふ。「藤壺の御方の、宮の御方に参らせ給ふ」と聞こゆれば、「我こそは、宮」とて見給へば、……と聞こえ給へり。弾正の宮の、御時よく酔ひ給ひて、参れり。……弾正の宮、「『この御返りは聞こえさせよ』とか。さらば、いらへ聞こえむ」と、いらへ給ふ人のなきに、空答へをし給ひつつ、「さらば」と聞こえ給へば、一の宮、「あな見苦しや。御使の見るに。賜へ、その御文」とのたまへば、なほ、聞こえ取り給ひ、「『御心地苦し』とのたまはす」などのたまへば、大将、「いとをかし」と思して、うちほほ笑み給へば、「いで、宣旨書き奉らむ。のたまへ」とて書き給ふ。

使いが、「宮の御方に参らせ給ふ」と言ったところ、酔った弾正の宮が、「我こそは、宮」と言って、女一の宮宛ての手紙を勝手に見てしまう。さらに、弾正の宮は、「『この御返りは聞こえさせよ』とか。さらば、いらへ聞こえむ」と、答える人がいないのを良いことに、無理やり代筆までしようとする。さすがに見かねた女一の宮が「あな見苦しや。御使の見るに。賜へ、その御文」と止めようとするものの、「『御心地苦し』とのたまはす」「いで、宣旨書き奉らむ。のたまへ」と勝手に代筆をしてしまっている。

以上の例で共通していることは、いずれもあて宮から女一の宮に手紙や贈り物が贈られてくるということ、それを、元あて宮求婚者である男君が無理やり奪ってしまうことである。男君たちの反応から言えることは、彼らが元々あて宮求婚者であることを考えると、あて宮が春宮に入内し、藤壺になった今でもなお、あて宮との関係を持っておきたいという心が見えるということだ。ただし、仲忠と弾正の宮には大きな違いがある。弾正の宮の場合、「国譲・中」巻の場面以降、あて宮との間で手紙の遣り取りなどは

特に行われないが、仲忠の場合には、②の場面を契機に、求婚時代以来途絶えていたあて宮との手紙の遣り取りが再開される。そして、この二人の関係が、後にいぬ宮の入内の話にまで影響する。

四・見られる手紙――隠されていた人物関係の表出

隠そうとされた手紙でありながら、第三者に見られてしまうものもある。

④女一の宮から仲忠への文を朱雀帝が見る（蔵開・中　五三八）

さて、御書仕うまつるほどに、宮はた、青き色紙に書きて、呉竹につけたる文を捧げて来て、「宮の御返り言」ともて騒ぎて、大将殿、「しばし、今」と言へば、上、「持て来や」とて取らせ給へば、大将殿、「いとかたはらいたく、苦し」と思ふめり。上、御覧ずれば、……

天皇の命により、仲忠が清原家の書物の進講を行なっているところに、女一の宮からの返事を持った宮はたが帰ってきた場面である。宮はたが「宮の御返り言」と騒いだために、女一の宮の父である朱雀帝に気づかれ、仲忠は、自身が見る前に朱雀帝に女一の宮からの手紙を見られてしまう。後日、仲忠は朱雀帝に手紙を見られまいと、女一の宮からの返事を見てから朱雀帝の御前に参ろうと、参上するのを遅らせた（蔵開・中　五四四）。しかし、仲忠・女一の宮夫妻の仲を懸念する朱雀帝が夫妻の手紙を見るのは、④の一回だけにとどまらない。

⑤女一の宮から仲忠への文を朱雀帝が見る（蔵開・中　五四六）

例の宮はた、陸奥国紙のいと清らなるに、雪降りかかりたる枝に文をつけたる持て来て、「宮の御文」と捧げて、ひろめかす。……大将は、……取りて見給ふ。後ろに、上も御覧ずれば、「……」とあるを、いとよう見給ひて、「度々文遣りなどするは、いとないがしろにはあらぬなめり。いかで、今しばし据ゑて、せむやう見む」と思して、御心地落ち居給ひぬ。

同じ過ちをしないように心がけたはずの仲忠であるが、宮はたにその場にいる人々の目前で女一の宮からの手紙を広げられてしまっている。このため、後ろから朱雀帝に見られながら、仲忠は女一の宮からの手紙を見ることになる。仲忠と女一の宮との間で手紙の遣り取りがあるということは、仲忠が女一の宮をないがしろにしていないということだと朱雀帝は安心している。この場面において注意すべきは、朱雀帝が、仲忠と女一の宮が恋文のような手紙のやり取りをしていることを知って二人の現在の関係を知るということと、それに加えて手紙の内容を知って安心していることである。朱雀帝は、女一の宮がいぬ宮を出産する直前にも仲忠と女一の宮の関係を心配している(蔵開・上　四七二)。この時は、仁寿殿の女御が朱雀帝に、仲忠が女一の宮を大切に世話している話をしている。しかし、朱雀帝が本当に安心するのは、清原家の書物の進講の合間に、仲忠と女一の宮の手紙の遣り取りの様子を見てからなのだ。

第三者が手紙を見ることで、夫婦の仲を知るという場面は他にもある。

⑥実忠から北の方への手紙を実正が見る(国譲・中　七三八)(注11)

昼つ方、御文書きて、中戸のもとにて、姫君を招き寄せて、「これ、母君に奉れ給ひて、御返り取りてを」とのたまへば、持ておはして、さらぬやうにて奉り給へば、民部卿もものし給ふ、北の方、「かくこれかれものし給ふに、『物言はず』と見給ふらむ」と思せば、取りて見給ふに、民部卿、「あなたのか。賜へ。見む」とのたまへば、姫君、「かしこに立ち給へり。『人に見すな』とのたまひつるを」。「『いかが思しなるらむ』と、いとゆかしく思ひ給ふるに」とて、取りて見給へば、……

妻との別居が長く続いてしまった源実忠が、北の方に手紙を送る場面である。手紙の使いである袖君（実忠と北の方の娘）が、北の方に手紙を渡そうとしたところ、実忠の兄である実正（民部卿）が来て、実忠からの手紙と見るや、見せるように袖君に言う。それに対し、袖君は父親から手紙を他の人には見せないよう言われたと拒絶するが、実正は強引に実忠からの手紙を見てしまう。実正は、この場面までに実忠夫妻の仲を取り持とうと動いていた人物である。この場面において実正は、実忠からの手紙を見ることで、一度は離れてしまった夫婦が再びよりを戻しつつあるということを知る。この事実は、読者にとっては既に明白になっているが、作中人物でありなおかつ当事者ではない実正にとっては、新しい情報として入ってくる場面となっている。

④から⑥までの手紙は、間柄が懸念されている夫婦の間で遣り取りされている手紙が第三者に見られることによって、その第三者が夫婦仲を懸念する必要はないと知って安心するという役割を果たしていることが分かる。

五．差出人と受取人の特定の重要性――関係の明確化

差出人から受取人へと渡る手紙であるが、両者が「誰」であるかが特定されることが重要になる場合がある。

⑦嵯峨院の女三の宮への手紙（蔵開・中　五六四～五六五）

大将、「いともうれしくも、参り来たる効ありて、かく仰せらるること。今、二十五日ばかりに、御迎へに参り来む」と聞こえ給ひて、御返り申し給へば、「何か。かうなむものし給ひつるに」とのたまへば、「いかでか。『空参りしたり』ともこそ。ただ、しるしばかりにても」など聞こえ給ふほどに、御供の人々は、宮の家司ども、政所に呼びつけて、皆、さまざまに酒飲ます。……大将、「御返りなくは、えまかり帰らじ。ここにこそ候ふべかめれ」と聞こえ給へば、「あなわづらはし」とて、……

この場面では、兼雅に嵯峨院の女三の宮への手紙を書かせた仲忠が、その手紙を持って女三の宮の所へ行っている。返事を貰おうとした仲忠に対し、女三の宮は、「何か。かうなむものし給ひつるに」と答える。しかし、仲忠は『空参りしたり』ともこそ。ただ、しるしばかりにても」と譲らない。さらには「御返りなくは、えまかり帰らじ」とまで言い始め、女三の宮は返事を書くことになる。この場面では、本人の筆跡による手紙が証拠として必要になっている。もちろん、本人直筆の手紙が必要とされるのには、離れてしまった兼雅と女三の宮の関係の修復のためもあるだろう。だが、仲忠の「空参りしたり」と言われてしまうという発言から、この場面では、本人直筆の手紙が、仲忠が女三の宮を訪ねた証明になると同時に女三の宮が兼雅からの手紙を読んだことの証明にもなり、また女三の宮自身が返事を書いたことの証明にもなっている。差出人と受取人を特定することの重要性が『うつほ物語』において初めて問題視される場面である。

嵯峨院の女三の宮と同様の例が、この直後(蔵開・中　五六六～五六七)にも出てくる。嵯峨院の女三の宮からの返事を貰い、帰宅しようとした仲忠に、兼雅宛の手紙入りの果実が三つ、投げられた場面である。柑子を投げたのは故式部卿の宮の中の君、栗を投げたのは源仲頼の妹、橘を投げたのは橘千蔭の妹である。仲忠は、自分に向って投げられた果実が父の妻妾たちからのものであると確信したため、兼雅の元にそれを届ける。また兼雅の妻妾たちは、果物を使用し、なおかつ仲忠という確かな使者を使うことによって、間違いなく手紙の出所が自分たちであるということを示しているのだ。

また、手紙が来たことそのものが重要であり、その証拠として手紙を保管する例もある。

「蔵開・下」巻(六一八)では、春宮から手紙があったことが重要視されている。春宮から梨壺に手紙が来たことにより、梨壺の父である兼雅は「心地落ち居ぬる」とひとまず安心している。また、「この御文は、櫛の箱の底に、よく納め置き給へれ」と、手紙を大事に保管しようとしていることから、春宮からのこの手紙が、春宮が梨壺を気にかけたことの証明となるものとして意識されていることがわかる。

これに近い例が「国譲・上」巻にある(六四七～六四八)。あて宮から実忠への手紙が来たことを契機に、宮の君があて宮を批判した直後の場面である。ここでは、宮の君の元に、宮の進を使いとして春宮から手紙が来る。この場面には手紙を保管したなどの記

述はないが、宮の君は亡き父季明に見せたかったと述べている。あて宮にばかり向かいがちな春宮の気持ちが、少しでも宮の君に向いたのだということの証明として、ここの手紙は位置づけられていると考えられる。

春宮からの手紙を持ってくる使いは特定の人物であるため、春宮の手紙であることがわかる状況にある。その上でここに挙げた例を考えると、差出人ないし受取人を「手」や「使」によって示すことで、あやふやだった人物関係が明確化されているといえるのではないだろうか。

これらの場面では、俊蔭の娘一人しか見ず、他の妻妾たちをないがしろにしていた兼雅と、あて宮一人に固執し、他の女性たちにはあまり目を向けなかった春宮が、久しぶりに各々の妻妾たちに目を向け、手紙を送っている。心情的にも空間的にも隔たった人物同士の関係を修復するには、空間を飛び越えるツールであるだけではなく、言葉の発信者が確実に特定できる本人が直筆した手紙を使用する必要性があったのではないだろうか。

六・証明としての手紙――保険としての情報開示

人物関係を明確化するだけではなく、人物関係を証明するための手紙もある。物語において、人物関係を表す最初の例は、俊蔭が異郷に行き、三十面の琴を入手する際の場面（俊蔭　一三）である。童が持ってきた黄金の札は、天女と俊蔭の関係を示し、俊蔭を襲おうとしていた阿修羅を引きとどめる効果があった。これは手紙の用例ではない上に人間同士の例でもないが、人物関係を証明するものとして働いている。人物関係を証明するものとして機能する手紙には、以下のようなものがある。

⑧春宮からあて宮への手紙（国譲・上　六四九～六五〇）（注12）

春宮は、白銀・黄金の結び物ども毀たせ給ひて、ほかなるなる竹原にして、下には、白銀のほと皮結び、餌袋のやうにして、黒方

を土にて、沈の笋、間もなく植ゑさせ給ひて、節ごとに、水銀の露据ゑさせて、藤壺に奉らせ給ふ。「昨日、一昨日は、物忌みにてなむ。かの、『訪はむ』とものせられし人のもとに遣りたりしかば、かくなむ。……」とて、例の蔵人して奉れ給ふ。……御返りは、「承りぬ。賜はらせたる人の御文は、げに、さも思すべきことにこそは。のたまはせたることは、いとよう侍るなり。……」

春宮から、里下がりをしているあて宮宛に手紙が来た場面である。春宮は宮の君からの手紙の返事を、あて宮への手紙に同封している。そうすることにより、あて宮と宮の君との間の確執を取り除くと同時に、宮の君と自身の関係がそれほど深いものではないということを、あて宮に対して証明しようという春宮の気持ちが表れている。

このように、自身とある人物との手紙を第三者に見せることにより、二者間での遣り取りとして完結させずに、他の人々も巻き込んで事態を解決に向かわせようとする手紙は、他にもある。「国譲・下」巻(七六六～七六七)では、后の宮からの手紙を、受取人である兼雅が仲忠に渡している。后の宮から来たこの手紙には、兼雅の娘である梨壺の産んだ皇子を立坊させるように藤原氏で結託し新帝に訴えること、また、もし梨壺の皇子の立坊に仲忠が反対するようならば、そんな息子は自分の子とも思うなといったことが書いてあった。兼雅は、妻妾たちの身の振り方の一切を仲忠の言うままに行なっており、また后の宮からの手紙を見て「坊をば、据ゑずは据ゑず。大将を、疎かには、いかが思はむ。かくのたまふが、恐ろしく、かしこきこと」と、梨壺の皇子の立坊に対し意欲的ではなく、仲忠を子と思わないなどとんでもないと思っている。そのような兼雅だからこそ、后の宮からの手紙を仲忠に渡すことは当然と言っても良いかもしれない。しかし、問題は、兼雅から渡された后の宮の手紙を見た仲忠が、人にも見せないでその手紙を隠したということである。この手紙は、次にあげる場面に再度出てくる。

⑨后の宮からの手紙を仲忠があて宮に見せる(国譲・下　七九一)(注13)

大将、参り給ひて、夕方、西のおとどに参り給ひて、簀子に褥参り給ひて、これかれ物聞こえ、大将、女御の君に物聞こえ給ふ。……「……ある所より、かの三条に、とかくのたまはすることなむありける。『さる心も思ひ知れ』とて、かの宮消息にて侍りし、

『こと定まりて御覧ぜさせむ』とてなむ、まだ失はで侍る」とて、この君して、宮の御文を奉り給ひて、聞こえ給ふ、……

仲忠によって隠された后の宮からの手紙は、立坊争いが終結を迎えた後にあて宮のところに持っていかれる。この手紙はあて宮や大宮に見られ、そのまま歌を書きつけられて仲忠に戻される。この場面は、后の宮が梨壺の皇子を立坊させようとしていたことの証拠となる手紙をあて宮方に見せることで、仲忠が自身や父兼雅の潔白を証明しようとしていると読める。そして、この手紙にあて宮の手で和歌が書きつけられることにより、仲忠があて宮にこの手紙を見せたことも証明されるのだ。この場面においては、仲忠が自身や父の潔白を示すために手紙を利用したことだけではなく、あて宮が同じ手紙に和歌を書くことが、「証明」という意味上、重要となる。

これらの例は、状況の悪化を恐れ、その回避の術として、手紙の公開、情報の公開をしているととることができる。次の図に示したように、『うつほ物語』は、物語の前半ではほとんど使用されなかった「消息」という言葉が後半になって多く使用されるようになり、しかし「楼の上・上」巻から再びほぼ使用されなくなる。それは、「国譲・下」巻までは、情報を公開する手段として手紙が機能していることと関係するのだろう。物語の前半では、手紙はもちろん和歌一首だけであっても全てその中身が書かれていたために「消息」という言葉はほとんど使用されなかった。それが、物語の後半に入って、内容が書かれる手紙と書かれない手紙に分かれ、内容が書かれないもののその存在を示す必要のある手紙が「消息」という言葉で示された。一方、内容が書かれる手紙というのは、情報を公開するという機能が新たに付け加えられた手紙であった。しかし、立坊争いが終結し、情報を公開して身の潔白を証明する、手紙の遣り取りの有無によって人物関係を示すなどの行為が必要なくなり、隔たった空間を飛び越えて情報を遣り取りするという機能のみが手紙に必要とされるようになる「楼の上・上」巻以降は、「消息」という言葉は使用されなくなるのだ。

七．人物関係を可視化する手紙

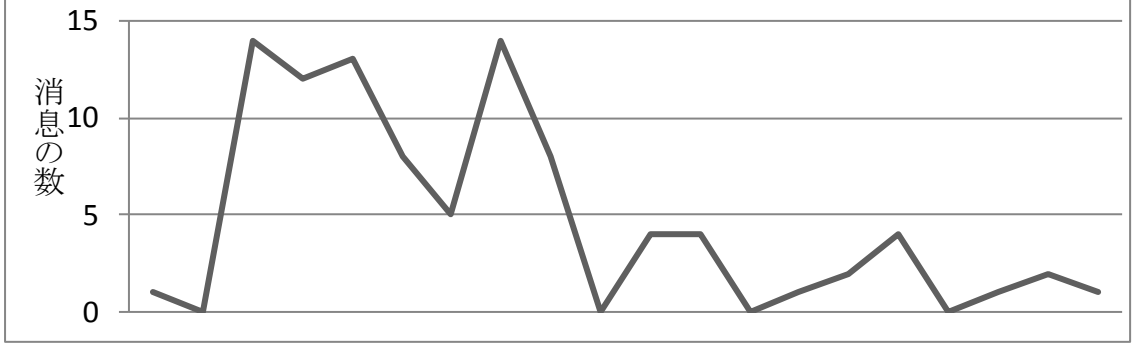
物語の前半、特にあて宮求婚譚において、返事をすることで一つの人物関係が成立する、つまり、手紙の遣り取りの有無がそのまま人物関係の有無につながるという方法が成立した。この方法はあて宮求婚譚が収束した後にも息づいており、『うつほ物語』において、人物関係の根幹を成すものになったといえる。

一方、あて宮求婚譚後の手紙は、あて宮求婚譚の時とは違い、宛先に届くものが多くなる。これは、相手に手紙が届くことによって登場人物同士の関係性を様々な視点で示すというやり方が新しく出てきたことを示すと考えてよいだろう。また、それと並行して「藤原の君」巻（一〇〇～一〇一）にあるような、手紙が羅列されることもなくなる。そして、このことと同時並行的に「消息」という単語が増える。「消息」という単語が増えるということは、物語が、手紙を、その内容が重要なものとそうでないものに分け、それらを書き分け始めたと考えることができる。

また、手紙の扱われ方が変化に富むことで人物関係を表わす方法も多種多様になる。変化の示唆、再成立する可能性の提示、隠されていたものの表出、明確化、円滑にするための保険としての情報開示として手紙が機能している。そしてこういった手紙の機能が次第に複雑化していることが注目に値するであろう。

物語の後半になって出てくる、人物関係を修復する手紙、情報開示と

図：『うつほ物語』における消息の数の推移



巻名	用例数
俊蔭	1
藤原の君	2
忠こそ	1
春日詣	0
嵯峨の院	4
祭の使	2
吹上・上	1
吹上・下	0
菊の宴	4
あて宮	4
内侍のかみ	0
沖つ白波	8
蔵開・上	14
蔵開・中	5
蔵開・下	8
国譲・上	13
国譲・中	12
国譲・下	14
楼の上・上	0
楼の上・下	1

しての手紙は全て、手紙が書かれた時点で、その内容が読者に対し公開されている。これは、〈見えない〉ものとしてあった人物関係を〈見える〉ものとしているといえる。〈見えない〉ものとしてあった手紙や人物関係を読者に〈見える〉ものとして提示する一方で、人物同士の間では相変わらず〈見えない〉手紙・人物関係が多い。こういった手紙を、時間が経過した後にどのように活用するのかが、登場人物たちの手腕の見せどころであり、また、どのように開示していくのかというところに面白さがあるのだ。

以上のように見てくると、柏木からの手紙を源氏に見られてしまった女三宮のその後が大きく暗転してしまったように、手紙によって物語が深刻な局面を迎える『源氏物語』とは違い、『うつほ物語』では手紙はそのような使われ方はされない。『うつほ物語』では、人物関係の補強・拡大、もしくは信頼の獲得として手紙が機能しているといえる。また、最初は一対一の人物関係を作るという機能を課されていた手紙が、物語の後半において、可能性を示すものから、実際に物語に影響を及ぼすものとしてその機能を変えていくさまが見られる。手紙によって許容されていない人物同士の関係が露呈する、特定の人物が窮地に陥るといったこともなく、ひたすらに人物関係の構築に使用されることから、『うつほ物語』における手紙の「安定性」(注14)が見えてくるのではないだろうか。

その一方で、里下がりをしたあて宮と春宮との間で遣り取りされる手紙は、手紙の使いであるこれはたの言葉よりも軽視される傾向にある。「蔵開・中」巻において、春宮とあて宮の間で遣り取りされた手紙は、宮はたに、「上・大将などの御前にて、な奉りそ」(五四一)と言ったあて宮の配慮により、差出人と受取人との間のみで完結された手紙となっている。外部に対して開かれない春宮とあて宮の手紙は不信感を生み、「国譲・下」巻では、手紙の使いの言葉への信頼が春宮からの手紙の信頼を上回ることになる。ただし、これは、手紙が契機となって人物関係が危うくなるということではなく、あくまで使いの「言葉」が人物関係に影響しているといえ、手紙の「安定性」を脅かすものではない。

また、公開するか否かというところに焦点を合わせると、俊蔭が蔵の中に残した書物は、公開されることによって初めて、その信憑性が表出すると言ってもよい。同様に「楼の上」上下巻においては、公開されているようで公開されていない秘琴の披露が行なわれる(注15)。これらと同じ理由から、『うつほ物語』では、手紙の差出人と受取人、そして、その使いをする者以外の一部の人物

たちにも公開される手紙が人物たちに重要視され、なおかつ、信頼に足るものであるという認識があると考えることができる。手紙が公開されるまでは、登場人物たちは、特定の人物同士の関係の有無を疑うしかないが、公開されることによって、人物同士の関係の有無ばかりでなく、関係の深度までもが明白になるのだ。このように考えると、『うつほ物語』における手紙は、登場人物同士のつながりの有無を、様々な形で可視化する機能があると読めるのである。

注1　田中仁「宇津保物語の手紙―その形」(『古典文学論注』一、一九九〇年七月)、「『うつほ物語』の贈り物と手紙」(『親和国文』四一、二〇〇六年一二月)

注2　室城秀之「『うつほ物語』の手紙文――特に、「蔵開」「国譲」の巻について」(『古代文学論叢』一四、一九九七年七月)

注3　本章では、あて宮が春宮に入内する「あて宮」巻以降の巻においても「あて宮」と表記し、統一する。

注4　三浦則子「『うつほ物語』の装束をめぐる表現――手紙の使いへの禄を通して」(『国文白百合』三二、二〇〇一年三月)

注5　この時、宮はたは「さてかし」と答えている。この宮はたの返事について、『うつほ物語　全　改訂版』(室城秀之、おうふう、一九九五年)では、「「さて」は、そのままの意味で、受け取ってもらえるだけで、お返事まではいただけませんの意か」としている。この注に何ら問題はないが、ここで注意しなければならないのは、手紙の使いである宮はたから手紙を受け取るのは女一宮ではなく、女一宮の側の使いであるということだ。よって本論では、宮はたの「さてかし」から、女一の宮自身にまでは手紙が届いていないと判断した。

注6　「内侍のかみ」巻冒頭には諸伝本に共通した錯簡があり、仲忠が恋文と思われる手紙を隠していたことを、正頼が大宮に話している場面(内侍のかみ　三八四)の前に、正頼と仲忠の遣り取り(内侍のかみ　三九〇～三九一)がある。この箇所の錯簡については、室城秀之「「内侍のかみ」の巻の錯簡をめぐって」(『中古文学研究叢書2　うつほ物語の表現と論理』若草書

房、一九九六年)が詳しい。また、前田家本では、「そこ(もと)に」「里より要事(らうし)のものし給ひしなり」(七三三)となっている。この箇所、「えうし」と「らうし」で解釈が変わるが、里からの文ということに変わりはない。この箇所の異同については、河野多麻の『日本古典文学大系　宇津保物語』の補注が詳しい。

注7　朱雀帝が兼雅の妻である俊蔭の娘を「私の后」とすること、兼雅と朱雀帝の仁寿殿の女御・正頼と嵯峨院の承香殿の女御がそれぞれ手紙の遣り取りをすることと、仲忠とあて宮の関係は酷似しており、これらの実事には至らない男女の関係は、「内侍のかみ」巻の特徴であるといえる。

注8　手紙を奪った上での返事を果たして「代返」と言うのかという問題があるが、仲忠は、出産直後の女一の宮を気遣うかのように「まだ、御手震ひて、え書かせ給はじ。」と述べている。また、この後で引用した弾正の宮もまた、「『御心地苦し』とのたまはす」と、女一の宮の体調を理由に返事を書いているため、ここでは「代返」という言葉を使用する。

注9　岡田ひろみは、「〈赤〉色の手紙――『うつほ』『枕草子』と『源氏物語』」(『文学芸術』第三四号、共立女子大学総合文化研究所、二〇一一年二月)において、『うつほ物語』『枕草子』『源氏物語』の三作品における〈赤〉色の手紙に着眼し、比較することで、『うつほ物語』『枕草子』においては〈赤〉は美点として捉えられているものの、『源氏物語』においてはマイナスな表現をする際に〈赤〉が使われていることを指摘している。

注10　前田家本では、「弾正の宮の、御時よく酔ひ(こんい)給ひて、参れり。……「いで、宣旨書き奉らむ。の(み)たまへ」とて書き給ふ。」(一四六八～一四六九)とある。しかし、河野多麻『日本古典文学大系』の異同を見ると、「ゑひ」「ゑね」「ゑい」「えい」「えゑ」としかない。このため、やはり弾正の宮は酔っているものとして解釈する。また「のたまへ」か「みたまへ」かという異同があるが、弾正の宮は女一の宮の言葉を書くことも、自身が書いた手紙を女一の宮に見せることもしないと考えられるため、ここはどちらでも良いかと思われる。

注11　前田家本では、「民部卿、「あなたのか。賜へ。(たざま)見む」」(一四八六)となっている。「あなたざま見む」であったとしても、実正が実忠の様子を知りたいと解釈できる。

注12　前田家本では、「春宮は、白銀・黄金の(金)結び物ども毀たせ給ひて、ほかなるなる竹原にして、下には(したひに)、白銀のほと皮結び、餌袋のやうにして、黒方を土にて、沈の笋、間も(まり)なく植ゑさせ給ひて、……賜はらせたる人の御文(ふ)は、……」(一二九九～一三〇〇)となっている。春宮が装飾を施した贈り物をあて宮に贈ったことが分かればよいため、贈り物の異同については割愛する。問題となる「賜はらせたる人の御ふ」であるが、春宮があて宮に送った手紙には、宮の君から春宮への手紙が同封されていたことを考えると、「賜はらせたる人の」手紙であると考えて良いと判断した。

注13　前田家本では、「この君(かく)して、」(一五九八)となっている。「このかくして」では意味が通じないが、「かくして」という底本を採った場合、仲介人である孫王の君の存在が省略されることになる。仲忠とあて宮の仲介人は孫王の君と決まっているため、「この君」という本文を採らなくても意味は同じと考えた。

注14　ここで言う「安定性」とは、手紙が契機となって物語が登場人物たちにとって悪い方向へと転換することはなく、手紙によって自身の身の潔白を証明できる、人物関係があることを証明できるということである。

注15　伊藤禎子「秘曲の醸成」(『『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇五年一〇月初出)

第五章　〈手〉の相承――文字の伝授と〈琴〉の伝授

第一章では、藤原仲忠があて宮に贈った手紙や贈り物を見ていき、そこから、仲忠が意識的にあて宮への贈り物の質を向上させることで返事を得ていたという結論を得た。また、仲忠が藤壺、つまりあて宮に贈った「手本四巻」が、仲忠が贈ったものの中で最も価値のある、仲忠自作の豪華な贈り物であることも指摘した(注1)。本章ではそれを踏まえて論じてゆく。

そもそも、「手本」という言葉が使用されたのは、『うつほ物語』が初めてである(注2)。中国漢籍を引いてみると、『うつほ物語』以前の「手本」の使用例は僅かであり、さらに上手な字が書けるようにするためのお手本という意味では「手本」という言葉は使用されていない(注3)。中国漢籍からの影響のない「手本」が、どのように物語で扱われているのかについて見てゆく必要がある。

仲忠が「手本四巻」を送る場面については、大友信一が、異同の多いこの箇所を整理している(注4)。また、「女手」に関しては、藤本憲信の論考が詳しい(注5)。本章では、これらの先行研究を踏まえた上で、「手本」の初例である『うつほ物語』「国譲・上」巻の「手本四巻」の場面を中心に、『うつほ物語』における「手本」の意味について考えていく。

一・『うつほ物語』における「手本」

他人の筆跡を真似て上達する意味での「手本」の初例となる場面を以下に引用する。

①仲忠から藤壺と藤壺の若宮へ、手本四巻の贈り物　(国譲・上　六五四～六五六)(注6)

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。「『み

づから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らする』と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。初めには、男にてもあらず、女にてもあらず、あめつちぞ。その次に、男手、放ち書きに書きて、同じ文字を、さまざまに変へて書けり。

わがかきて春に伝ふる水茎もすみかはりてや見えむとすらむ

女手にて、

まだ知らぬ紅葉と惑ふうとふうし千鳥の跡もとまらざりけり

さし継ぎに、

飛ぶ鳥に跡あるものと知らすれば雲路は深くふみ通ひけむ

次に、片仮名、

いにしへも今行く先も道々に思ふ心あり忘るなよ君

葦手、

底清く澄むとも見えで行く水の袖にも目にも絶えずもあるかな

と、いと大きに書きて、一巻にしたり。見給ひて、「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。一日、戯れにものせしに、宮の、年ごろ召しつるも、今日こそは奉るなれ。この返り言は、我せむ。使は、誰ぞ」と問はせ給へば、「奉り置きてまかりにけり」と聞こゆれば、「いと心地なき、所の人かな。かれよりかかる物あらむ使遣る心よ」とのたまひて、白き色紙の、いと厚らかなる一重に、「賜はせためれど、『人を訪ふとも』と言ふなればなむ。この本どもを、かくさまざまに書かせて賜へるなるなむ、限りなく喜び聞こえ。なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。まことに、後に求められたるは、何ごとにかあめる。『我ならぬ人にや』と思ふこそ、後ろめたけれ」と、例より、めでたう、筋つきて、大きやかに書かせ給

ひて、「これ、また、心あらむ者して奉らせて、帰り来ね」とて奉れつ。

藤壺は、自分の若宮たちが書を習っていないことを不憫に思い、仲忠に手本を献じるように依頼する。その藤壺の要望に応えて、仲忠が藤壺の若宮に手本を贈ったのがこの場面である。

仲忠は、藤壺の若宮に手本を献じると同時に春宮にも手本を献じたため、「みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。」と、春宮には自分で届け、藤壺の若宮には使いを出して献じている。仲忠が藤壺の若宮に献上した手本は、「黄ばみたる色紙」に書いて山吹につけたものが楷書で書かれた春の詩、「青き色紙」に書いて松につけたものは草書で書かれた夏の詩、「赤き色紙」に書いて卯の花につけたのは仮名といったものであった。また、最後の卯の花につけたものは、最初は、万葉仮名でも仮名でもない字で「あめつち」を書き、さらにそれぞれの文字を様々な字母で書いたと読める。その次に万葉仮名は放ち書きで、次に女手、連綿体、片仮名、葦手で、それぞれ和歌を大きく書いて一巻にしている。仲忠から贈られてきたこれら四巻の手本を見た藤壺は、「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。」と言い、「この本どもを、かくさまざまに書かせて賜へるなるなむ、限りなく喜び聞こえ」と、仲忠への返事の文でも、喜びを表わしている。また、後述するが、この続きにある藤壺からの返事、「なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。」は、仲忠と藤壺の関係性において問題となる部分である。

ここで、『うつほ物語』における手本の話題が出てくる場面を全て見ておきたい。

②春宮から藤壺への手紙（国譲・上　六三五）（注7）

かかるほどに、紫の色紙に書きて、桜の花につけたる文、宮より。御使、蔵人。開けて見給へば、「『ただ今のほどは、いかが』となむ。かくては、えあるまじかりけり。何せむ、まかでさせて。ねたうこそ。

吹く風に花はのどかに見ゆれども静心なきわが身何ぞも

『先々、いかでありけむ』とこそ」とあり。おとど、「この御手こそ、久しく見ね」とて見て、「いとよくなりにけり」とてさし入れ給へば、女御の君、「かしこけれど、この御手こそ、右の大将の御手におぼえ給へれ」。藤壺の、「ただ、その書きて奉られたる本をこそは、男手も女手も習ひ給ふめれ。『それ、昔のぞ』とて、今の召すめれど、まだ奉られざめりしかば、『それ驚かせ』などぞのたまはせし」。女御の君の、「『御文書かむとてなり』と聞きしは、さにやあらむ」。おとど、「よろづのこと、人にはまさらむとなれる人にこそ」とて、宮の御使に饗し、物被け給ふ。

③藤壺が仲忠に若宮と春宮の手本を要請する（国譲・上　六四一～六四二）（注８）

母君、「いとめづらしう、あはれ」と見奉り給ひて、「心地こそ、頭白くなりにたるやうなれ、かく大きになり給ひにたれば。御手習ひなどはし給ふや。何わざかし給ひつる」と問ひ聞こえ給へば、若君、「何わざも、せさする人もなければ。かしこに、『書習はさむ』とのたまひしかば」。母君、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」なんど聞こえ給へば、大将、うち笑みて、「大人しう、目に見す見す、人の親げにならせ給ひて。さても、宮には、『いかで仕まつらむ』と思う給ふべきを、今は、いとよう物遊ばしなどし給ひつべかめるを、さる仰せ言もなければ」と聞こえ給へば、「誰かは。ここには、知らで籠り侍れば、おほぞうなるやうなれば。ここに、かくて侍るほどに、いかで習はし奉らむ」。大将、「いと易きことなり。御書を仕まつらむ。『その日』と、仰せ言を」。藤壺、「手なども、まだ習ひ給はざめるを、本をこそ、まづものせさせ給はめ。まことや、宮にも、『書きて』と聞こえ給ひける、『のかし聞こえ奉れよ。使がらか、見む』とのたまひしを、賜はりて奉らばや」。大将、「いとあやしく、異様なる物をぞ召すや。早く書きて候ひたれど、慎ましうて、え参らせ侍らず」と聞こえ給へば、「『早う奉りけるをこそ、この頃は持たせ給へ』となむ」。大将、「さらば、とまれかうまれ、今参らせ侍らむ。若宮の御料には、ただ今も侍りなむかし」と聞こえ給ふ。

④孫王の君姉妹の会話（国譲・上　六六二）（注９）

「……一日は、御方の御ことによりて、おとどに、かしこく騒がれ奉りしはや。奉り給へりし御文を、下仕への者持てまうで来たり

しかば、『侍りながら聞こえぬ』と、『君こそ、などかは、「参り来ぬ」とは聞こえさせざりし、侍りながら。すべて心地なき』など、例の、殊にものし給はぬ人の、むつからせ給ひしこそ、いとほしく侍りしか。さて見給ひて、御文は、『これば かりの宝はあらじ。今行く末は、かくてしも、え賜はじ』とて、人に手も触れさせ給はぬ御厨子に納めさせ給ひてき。かくはしたなき目をなむ見給へてし」。藤壺、「孫王の君の御もとにあめりし本どもを、いとわづらはしく書かせ給ふめりしが、その喜び聞こえさせしぞや。ここにこそ、『いと心地なし』とはものせしか。賜へりける人に、御文を取らせずなりにけることを」などのたまふほどに、日暮れぬ。

⑤藤壺の若宮出産後、仲忠が贈り物をする(国譲・中　六九六～六九七)(注10)

かうて、大宮は、孫王の君に、二夜取り置かせし物どもして参れり。蓬莱の山を御覧じて、「いとわづらはしくしたる物かな。いづくのならむ」とのたまふ。孫王の君に語らひて、参らせ給へれば、「をかし」と思ひつれども、岩の上に立てたる二つの鶴どもを取り放ちつつ見給へば、沈の鶴は、いと重くて、取る手しとどに濡る、「あな、いみじの物どもや」と言ひののしる。白銀のは、金なれど、殊に重くもあらず、腹に物の下に入れたり。書きつけたる歌は、黄金の泥して葦手なり。「これは、誰が手ぞ」と、集まりて見給へど、え知り給はず。御方、御覧じて、「大将の御手にこそあめれ。『若君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」と聞こえ給へば、おとど、「げに、さなめり。異人のすべきわざにはあらず。これを見知らぬやうなるは、いと心なきわざかな。いかにせむ」とのたまひて、御薫炉召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す。

⑥藤壺の若宮から贈り物のお礼の手紙を受け取った仲忠(国譲・中　七二三)(注11)

かくて、御使参りければ、青き色紙に書きて、桔梗につけたり。見給ひて、「いとかしこうも書き給ひつるかな。ただ先つ頃こそ、手本召ししかば、奉れしか。いとよう似させ給へり」とのたまへば、右のおとど、取りて見給ひて、「なほ、かしこき君なり」。弾正の宮、「先つ頃見給へしかば、手をこそ習ひ居給ひしか」。大将、「かたちも、いとをかしげにおはすや。坊にこそ」。帥の宮、「若宮よりは、この君こそ、生ひ出で給ひぬべかめれ。いとらうらうじく優にぞ生ひ出で給ひぬべかめる」など。

⑦藤壺の若宮についての藤壺と正頼の会話」（楼の上・下　八八八）（注12）

「……この宮たちの、遊びにのみ心を入れたる、さておはすること。かの梨壺の宮は、いとなつかしううつくしげに、手も書き給ひ、書も読み給ふなれば、春宮、教へ奉らば、いとよく、さやうにおはしぬべきを、皆人々、引き引きに思ひ挑まれてある身なれば、宮たち、心に入れず、物習はし奉る人もなかめり」。「たいだいしう、誰か、さは思ひ奉らむ。学士こそは、明け暮れ、参りて仕うまつらめ」。あて宮、「いさや。まづ、いとあやしきは、『学士には読まじ。大将・源中納言にこそ、書も読み、何ごとも習はめ。顔醜き人には向かはじ。憎し』とあめる」。「なでふことぞ」。「手ばかりは、大将の本あめりし。『いとよう書き似せ給へるめり』とぞ、帝のたまふめり。書も何も、行正の中将のをぞし給ふ。

②は、春宮から来た手紙を、藤壺と仁寿殿の女御、父である源正頼が見ている場面である。春宮の筆跡を褒める正頼に対し、仁寿殿の女御は、「かしこけれど、この御手こそ、右の大将の御手におぼえ給へれ」と、右大将、つまり仲忠の筆跡の方が良いと言う。

また、藤壺の発言「ただ、その書きて奉られたる本をこそは、男手も女手も習ひ給ふめれ。」から、物語には記述がないが、これより以前に仲忠は春宮に手本を贈っており、しかし、それは男手と女手しか書かれていないとわかる。このことから、仲忠が以前に春宮に贈った手本は、①で、仲忠が藤壺の若宮に贈った手本よりも簡素なものであったことがわかる。

③では、「手習などの教育は受けているか」という藤壺の問いに対し、若宮は、受けていないと答えながらも、「かしこに、『書習はさむ』とのたまひしかば」と、仲忠から書を習うのだと答えている。それを聞いた藤壺は、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」と、若宮に仲忠からさまざまなことを学ぶように言う。これを受けて、仲忠は「御書を仕まつらむ。『その日』と、仰せ言を」と言うが、それに対し、藤壺は、「手なども、まだ習ひ給はざめるを、本をこそ、まづものせさせ給はめ。まことや、宮にも、『書きて』と聞こえ給ひける、『のかし聞こえ奉れよ。使がらか、見む』とのたまひしを、賜はりて奉らばや」と、まず

は手本を献上するようにと要請している。

④は、①で藤壺が書いた手紙を孫王の君が使いとなって持っていった時のことを、孫王の君姉妹が話している場面である。仲忠は、藤壺からの手紙を、「『これぱかりの宝はあらじ。今行く末は、かくてしも、え賜はじ』」と言って、「人に手も触れさせ給はぬ御厨子に納め」たとある。この場には、藤壺と、仲忠の妻・女一の宮もいるため、藤壺は孫王の君のところに来た手本がとても素晴らしかったからそのお礼をしただけだと、女一の宮の前であるために気を使って、手本を仲忠と藤壺の仲介人である孫王の君宛てに来たと言っている。

⑤は、作り物の鶴が差出人不明の状態で贈られてきた際に、そこに書かれた文字を見た藤壺が、「御覧じて、「大将の御手にこそあめれ。『若君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」」と、若宮に贈られてきた手本の筆跡と同じだから、これは仲忠からの贈り物であると判断している。

⑥は、藤壺の若宮に贈り物をした仲忠に対し、若宮がお礼の手紙を贈った場面である。手紙を見た仲忠は、手本を献上したばかりであるのに自分の筆跡によく似せていると感心している。

⑦では、藤壺は、春宮となった自分の子どもの教育が行き届いていないと嘆く。その原因は、春宮が容貌の良くないものからは習わないと駄々をこねているためである。しかし、「『いとよう書き似せ給へるめり』とぞ、帝のたまふめり」とあるように、若宮は①で仲忠からもらった手本を所持しており、仲忠の字に似せて書くことができるようになったと言われるとある。

以上の「国譲・上」巻以降に出てくる「手本」とは、どのようにとらえれば良いのであろうか。ここで指摘できることは、『うつほ物語』には、「手本」を作成する人物が藤原仲忠ただ一人だということ、そしてそれを使用しているのが春宮と若宮であることから、仲忠作成の手本が至上の物であるということだ。では、なぜ、仲忠は「手本」を作成できるようになったのであろうか。それは、「蔵開・上」巻で、仲忠が開いた俊蔭伝来の蔵から出てきた書物と無関係ではないと考えられる。

二、〈蔵開き〉で出てきた書物と仲忠の〈手〉

仲忠は、俊蔭伝来の蔵を開け、書物を入手する。仲忠が書物を入手したことに関しては、伊井春樹をはじめとした諸先行研究がある(注13)。ここでは、今までに述べられていない、「書物」が出てくることと、仲忠の〈手〉の評価の変化の関係を指摘したい。

⑧〈蔵開き〉をする仲忠(蔵開・上　四六七～四七一)(注14)

さてあり経給ふほどに、小さかりし世のことなれど、京極などおぼえければ、「昔より、祖の伝はり住み給ひける所にこそありけれ。わが親の御時になくなりにたるを、我造らせて、母北の方に奉らむ」と思して、霜月ばかりに、むつましき人少し御供にておはして見給へば、このほどは、野中のやうにて、人の家も見えず。さる所に、昔の寝殿一つ、巡りはあらはにて、塗籠の限り見ゆ。また、西北の隅に、大きに厳しき蔵あり。中納言、御前したる人の馬に乗りて、巡りて見給へば、この蔵は、この地のほどにも見えず。御供なる人に、「この地の内か、見よ」とのたまふ。巡りて見て、「この内なり」と申す。近く寄りて見給へば、蔵の巡りに、人の屍、数知らずあり。「恐ろし」と見つつ、なほうち寄りて見給へば、世になく厳しき鎖かけたり。その鎖の上をば、金を縒りかけて封じたり。その封の結び目に、故治部卿のぬしの御名文字縒りつけたり。中納言、見給ひて、驚きて、「これは、書どもならむ。昔、累代の博士の家なりけるを、一枚書見えず。その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、ここにも残りたるものを。これ開けさせむ」と思すほどに、河原のほどより、歳九十ばかりにて、雪を戴きたるやうなる嫗・翁、這ひに這ひ来て、「まづ、ここ去らせ給へ。去らせ給へ」と泣く。「なぞ、かく申す」とて、御随身問へば、「なほ、まづ、ここ去らせ給へ。多くの人取り殺しつる蔵なり。まづ御覧ぜよ、ここらの人の屍を。去らせ給ひなむ時、有様は申さむ」とて言へば、あやしがりて、うち去りて立ち給ひたり。……

三条におはして、北の方に、ありつるやう申し給ひて、この書の目録を見給へば、いといみじくありがたき宝物多かり。書どもはさらにも言はず、唐土にだに人の見知らざりける、皆書きわたしたり。薬師書・陰陽師書・人相する書・孕み子生む人のこと言ひたる、いとかしこくて、多かり。母北の方、「あなゆゆしや。昔人は、ことさら、『おのれをば惑はさむ』とこそ思しけれ」。中

納言、「いとかしこくものし給ひける人なりければ、思すやうこそありけめ。これらをそこに持ち給ひては、いかにかはせさせ給はまし。今まではありなましやは」などのたまひて、すなはち、国々の受領などの、さしつべきを、対一つづつ預け、しつべき人々に、皆のたまひ預けつつ造らせ給ふ。……

かくて、返る年の睦月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの蔵なる産経などいふ書ども取り出でて、並べて、「女御子にてもこそあれ」と思ほして、「生まるる子、かたちよく、心よくなる」と言へる物をば参り、さらぬ物も、それに従ひてし給ふ。参り物は、刀・俎をさへ御前にて、手づからと言ふばかりにて、我、なほ、添ひ賄ひて、参り給ふ。

かくて、その年は、立ち去りもし給はず、かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ。

ここに挙げた例は、「蔵開・上」巻の冒頭から、仲忠が蔵を開き、中の物を持ちだすところまでである。仲忠は、母・俊蔭の娘が昔暮らしていた三条京極邸に赴き、その敷地の西北の隅にあった蔵を開け、中から様々な書物や香を見つける。仲忠は、蔵に納められているものが書物であることに気付くと、清原家は累代の博士の家であったのに書物が全くないと思っていたらこんなところにあった、と驚きを露わにする。この蔵の中に入っていたのは、とても貴重な宝物ばかりであった。書物は特に豊富で、唐土でさえ人の目になかなか触れないようなことが全て書かれている。医薬の書物・陰陽師の書物・観相の書物・妊娠や出産に関する書物など、とても素晴らしく量も多い。仲忠はこれらを自邸に持ち帰り、翌年の睦月に女一の宮がいぬ宮を身籠ったこともあって、その年は女一の宮の御前を離れずに世話を焼き、それと同時に、蔵から出てきた書物を見て昼夜を問わず学問をして過ごす。

この後、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物は帝の御前で披露されることになる。

⑨進講を要請する朱雀帝（蔵開・上　五二六～五二八）（注15）

大将の君、蔵人して、上に喜び奏せさせ給ふ。……「日々に参り来べく侍るを、月ごろ、仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、捨てたるやうにて侍りけるを、さすが、人の、え取り失はで侍りけるを、いと見つけ

がたくて取り出でて侍り、『累代の書の抄物といふ物見給ふ』とてなむ、文書といふ物見給へつきぬれば、世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」。上、「よきことにこそはあなれ。学問など、心に入れてものせらるるは、朝廷のためにも、いと頼もしきことなり。高麗人も来年は来べきほどなるを、博士の男どもとても、昔のごとくかしこき者どもも、藤英がため殊に軽しや、殊になければ、そこにあり次ぎては、吏部の朝臣をこそは頼もしきことには。『それを離れては、かしこしと思ふ者どもぞあらぬ』と思ふに、さる文書・書などをさへ尋ね出でられたらむ、いとかしこきこと。よろづの書どもなど、具して、皆ありや」。大将、「皆具して、なき書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りける、それが、皆書き読みて侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読みて侍りける、全く細かにして侍るめり。それをぞさるものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」。上、「いかなる物ぞ」。大将は、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、「などか、今までものせられざりつる。有職どもの、いみじき悲しびをなしてし置きたる物、げに、いかならむ。なほ、朝臣は、ありがたき物領ぜむとなれる人にこそ。かれ、とく見るべき物ななり」。大将、「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの書の序に言ひて侍るやうにも、『唐の間の記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間、霊添ひて守る』と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ』となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せで侍りつる」。上、「かしこかりし人なれば、『朝臣を、後に得べし』と知りたるにこそは」。大将、「げに、その文書置きて侍りける所、年ごろは、あたりにまかり寄る人は、皆死に侍りける。その蔵開かせ侍りしかば、辺に侍りし者、『いとおどろおどろしきわざせさすめり。多くの人ぞ、いたづらになりぬ』と怖ぢ侍りし」。上、「朝臣の読みて聞かせむには、その霊ども、よも祟りはなさじ。今日は、府の者ども労ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」とのたまふ。

⑩進講開始（蔵開・中　五三五）（注16）

開けさせて、文箱を御覧ずれば、文箱には、唐錦を二つに切りて、えふしそそめて、厚さ二、三寸ばかりに作れる、一箱づつあり。俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。今一つには、俊蔭のぬしの父式部大輔の集、草に書けり。

⑪進講三日目の夜から四日目の暁（蔵開・中　五四七～五四八）（注17）

亥の時ばかりよりは、これはしばしとどめさせ給ひて、小唐櫃開けさせて御覧ずれば、唐の色紙を、中より押し折りて、大の冊子に作りて、厚さ三寸ばかりにて、一つには、例の女の手、二行に一歌書き、一つには、草、行同じごと、一つには、片仮名、一つは、葦手。まづ、例の手を読ませ給ふ。歌・手、限りなし。四所さし向かひて、人に聞かせで聞こし召す。……

かくて、暁方になりて、上、「かかる、理なり。この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。院の御妹の、女御腹なりけり。さりける人の、さる折々にし置きたりけることなれば、かくいみじきなり。これは、女一の宮には見せたりや」。

⑨で、大将昇進の喜びを朱雀帝に奏上した仲忠は、そのまま俊蔭伝来の蔵を開いたことも奏上する。仲忠の発言である、「俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りける、それが、皆書き読みて侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読みて侍りける、全く細かにして侍るめり。」「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。」から、俊蔭が能書の人物であったことと、蔵の中に入っていたものが、さらに詳細にわかる。それに対して、朱雀帝は、仲忠が「ありがたき物領ぜむとなれる人」になったと述べた上で、俊蔭や俊蔭の父母の書を「とく見るべき物」であると述べる。さらに仲忠から、霊が蔵を守っているという話を聞いた朱雀帝は、「朝臣の読みて聞かせむには、その霊ども、よも祟りはなさじ。今日は、府の者ども労ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」と、蔵から出てきた書物を進講するようにと要請する。

⑩は、まだ、朱雀帝と仲忠のみで進講を開始したばかりの場面である。「俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。今一つには、俊蔭のぬしの父式部大輔の集、草に書けり。」とあることから、この二人が見た俊蔭の集は古い字体、俊蔭の父大輔の集は草書体で書いてあったことがわかる。

⑪では、俊蔭や俊蔭の父の集を一度脇に置き、次に小唐櫃に入った俊蔭の母の草子を見ている。「唐の色紙を、中より押し折りて、大の草子に作りて、厚さ三寸ばかりにて、一つには、例の女の手、二行に一歌書き、一つには、草、行同じごと、一つには、片仮名、一つは、葦手」とあり、これらにかかれたものは、「歌・手、限りなし」と評価されている。この場には、朱雀帝と仲忠だけではなく、仲忠の従兄弟にあたる春宮と五の宮もいる。三人を前にして、朱雀帝は、「かかる、理なり。この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。院の御妹の、女御腹なりけり」と、俊蔭の母が能筆の人物であったことを述べ、清原一族(注18)が皇族から分かれたものであることを述べる。また、この俊蔭の母の歌集は、仲忠が藤壺の若宮に献上したものと、様々な字体で書いているという点において一致することも注目に値する。ただし、俊蔭の母の歌集は、「女の手」「草」「片仮名」「葦手」で書かれている上、その形態は大冊子であるのに対し、仲忠の手本は「真」「草」「仮名」「男にてもあらず、女にてもあらず」「男手」「女手」「さし継ぎ」「片仮名」「葦手」で書かれ、巻物であるという違いがあることにも注意したい。

俊蔭伝来の蔵を開いたことにより、仲忠は、自身が清原一族であることを再認識する。そして、蔵から出てきた書物の進講において、朱雀帝の口から、清原一族が皇族から分かれた一族であったことが明かされる。これらの事項はここで初めて語られるものであり、仲忠が蔵を開いたことによって、俊蔭の父母から仲忠までの系譜を、仲忠だけではなく、朱雀帝・春宮・五の宮に示したことになる。また、春宮と五の宮は、共に后の宮腹の皇子であるため、この場にいる仲忠以外の人物は、いずれも皇統に直接関わる人物だと言える。そして、この三人を前に一族の書物を進講したということは、仲忠が蔵から持ち出したものが至上のものであり、朱雀帝の言うように、仲忠が「ありがたき物領ぜむとなれる人」となったことが世の中に広まってもおかしくないということである。

このように、「蔵開・上」巻から「蔵開・中」巻にかけて、俊蔭伝来の蔵から出てきたものが何度も朱雀帝によって評価されること

で、清原一族が皇族から分かれた一族であり、さらに能筆家の多い一族であることが示される。また、筆跡が評価されている俊蔭と仲忠は顔を合わせたことはなく世代も隔たっており、仲忠の母である俊蔭の娘の筆跡への評価は皆無であることから、俊蔭伝来の蔵を開くまで、仲忠が清原家の能筆家たちの筆跡を見ることはかなわなかった。このことと、物語の後半において仲忠の筆跡が素晴らしいものであり、そのことが宮廷社会においては周知の事実となっていること(注19)を考え併せると、仲忠は、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物によって学問を修得すると同時に、優れた筆跡をも修得したと考えられる。

三・仲忠が作成する「手本四巻」

以上のように見てくると、能筆家の多い一族であり、自身も筆跡の素晴らしさを何度も語られる仲忠が書いた「手本四巻」は、至上のものであることは疑いないように思う。しかし、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物と仲忠の「手本」、それぞれの仲忠の扱い方を比較すると、仲忠にとって「手本」はさほど重要ではないことに気付く。たとえば、書物の進講は、蔵から出てきた書物そのものを用いて、「音読」によって行われる(注20)。「音」はあとには残らない。そして、このときに朱雀帝の御前に持っていかれる書物は、その場で仲忠によって読まれはするものの、書き写されることはなく、進講が終わり次第、仲忠が持って帰る。つまり、書物は、他人の手に渡ることはないのだ。それに比べ、この「手本」は、春宮や若宮に献上される。

俊蔭伝来の蔵から出てきた書物と手本の違いについて、もう少し考えてゆきたい。仲忠が俊蔭の書を使用する場面を以下に引く。

⑫七月七日、楼にて俊蔭の娘・仲忠・いぬ宮、琴を弾く(楼の上・下　九〇六)

大将、次に、横笛を、声の出づる限り吹き給ふ。面白き折に合ひて、あはれにすごう、これも、世になく聞こゆ。聞き驚き給ひて、

「笛は、昔、我と等しうこそありしか。『殊に好み給はず』と聞くに、いとこよなうまさり給ひにけり」と、あさましうおぼえ給ふ。暁になりゆく空静まり、のどかなるに、治部卿の集の書の中に、唐土より、知らぬ国に至りて、下りて、道を行き給ひけるに、いみじうあはれに面白き所々に、四季の花咲き乱れ、ある所には、恐ろしくいみじきかたちしたる者集まりてあるわたりを過ぎ給ふとて、道のままに長く思ひ続けてあはれなる、声を出だして誦じ給へる、また、帰りて後、家の寂しきを眺めて、時につけつつ作り集め給へる詩を、誦じ給へる、聞き知らぬ人だに、涙落とさぬはなきに、まして、大将のこの所にて誦じ給へるは、声より始めて、面白うあはれなるに、御直衣の袖、まして、絞るばかりになる。琴の声、楽の声、もろ声に染みたり。尽きておぼえ給へど、音せずなりぬれば、飽かで帰り給ふ。道のまま、世の中いとはかなくもあはれにて、紀伊国に年経給ひしなど、よろづ思ひ続けられ給ふ。

⑬（楼の上・下　九一四）（注21）

「また、嵯峨の院、返す返す、かたじけなく仰せられしを、『しか』など啓し申さむに、人、ただ、便なく言ひなしてむ。おのづから、聞こえ申して、さらば、『さり』と思はむ。おはしまさむ様の用意せむ」とて、治部卿の集の中にある、唐土よりあなた、天竺よりはこなた、国々の詩を、その年ごろの有様を、かの大将書かせ給へる屏風、例に似ず、清らに麗し、皆ながら唐綾に描きて、縁の錦、裏より始めて、清らなり、……

⑫は、七月七日に、秘曲伝授を行なう場面である。俊蔭の娘・仲忠・いぬ宮が揃って琴を弾いた後、仲忠は「治部卿の集の書の中に、唐土より、知らぬ国に至りて、下りて、道を行き給ひけるに、いみじうあはれに面白き所々に、四季の花咲き乱れ、ある所には、恐ろしくいみじきかたちしたる者集まりてあるわたりを過ぎ給ふとて、道のままに長く思ひ続けてあはれなる、声を出だして」誦み、また、俊蔭が帰朝した後、両親のいなくなった家の寂しさを眺めて作り集めた詩も誦んだ。朱雀帝への進講の場面で、仲忠の声が良いことは「声いと面白き人」（蔵開・中　五三五）、「書読む声、誦ずる声も、いとあはれに面白し。」（蔵開・中　五三七）、「いと

面白く読みなす。その声、いと面白し。しろくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし。」(蔵開・中　五四二)というように、再三にわたり、強調されている。そして、仲忠が読むと、朱雀帝や春宮は「泣」く(蔵開・中　五四八)。さらに、面白き声の仲忠が「読む」のではなく「誦む」と、「聞こし召す帝も、御しほたれ」「大将も、涙を流」し(蔵開・中　五三五)、この場面でも、「聞き知らぬ人だに、涙落とさぬはなきに、まして、大将のこの所にて誦じ給へるは、声より始めて、面白うあはれなるに、御直衣の袖、まして、絞るばかりになる」。程度の差はあれど、清原一族の書を仲忠が読(誦む)ことにより、仲忠自身を含めた人々は、泣くのだ。

⑬は、秘曲伝授に行く意思を示す朱雀院の言を聞いた仲忠が、嵯峨・朱雀の両院を迎える準備をする場面である。「治部卿の集の中にある、唐土よりあなた、天竺よりはこなた、国々の詩を、その年ごろの有様を、かの大将書かせ給へる屏風、例に似ず、清らに麗し、皆ながら唐綾に描きて、縁の錦、裏より始めて、清らなり」とあることから、ここでは、仲忠が俊蔭の集から詩を選び、描き写していることがわかる。ここで注意したいのは、この場面では「清ら」「麗し」という言葉が使用されていることである。

これらの例から、俊蔭や俊蔭の父母が作った物を仲忠がそのまま読(誦)み、書く場合には、その素晴らしさが語られていることがわかる。それに対し、同じく、俊蔭や俊蔭の父母の集から学んだ文字を書いた「手本」には「清ら」「麗し」という言葉は使用されず、藤壺や若宮が泣くこともない。俊蔭の漂流中の集や詩には人々を感動させるものがあるが、仲忠が書いた歌にはそれがない。つまり、人々を感動させる俊蔭の集や詩を仲忠の「声」で読(誦)み、能筆揃いの清原一族らしい筆跡で書くことで素晴らしさが相乗されるのだ。以上のことから、仲忠が若宮に献上した「手本四巻」は、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物そのものではなく、仲忠が書物から文字だけを借りて作った、いわば二次創作のようなものだと言える。そして、二次創作としての「手本」は、清原一族の書物からは隔たったものとなっているのだ。他人の手に渡ってもよいものとして位置付けられるのが、この、仲忠が藤壺の若宮に献上した手本である。仲忠は、手本は献上するが、書物は献上しない。俊蔭の書物そのものを用いながらも、書写をさせて手元には置いておくことはできず、音のみで行なわれる朱雀帝の御前での進講と、自分の手元に置いておけはするものの、俊蔭の書物を元に、仲忠が二次創作をした手本では、その差は大きいといえるだろう。仲忠が若宮に献上した手本というのは、清原一族の書物からは

切り離されたものと考えてよい。ただし、このような手本の位置付けは、あくまで仲忠の視点においてであり、藤壺を筆頭とした他の人々にとっては、やはり、仲忠の手本は至上のものとして位置付けられている。

四．すれ違う仲忠と藤壺の思惑

仲忠が「蔵開・上」巻において俊蔭伝来の蔵を開け、それを、朱雀帝をはじめとした皇統の人物たちに見せたことで、清原一族が天皇の一族と近い関係であったことが示されたことと、これらの事柄と時を同じくして、仲忠の筆跡が褒められるようになったことは、既に見てきたとおりである。

ここで、⑤の例を振返りたい。

⑤再掲・藤壺の若宮出産後、仲忠が贈り物をする（国譲・中　六九六～六九七）

……「これは、誰が手ぞ」と、集まりて見給へど、え知り給はず。御方、御覧じて、「大将の御手にこそあめれ。『若君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」と聞こえ給へば、おとど、「げに、さなめり。異人のすべきわざにはあらず。これを見知らぬやうなるは、いと心なきわざかな。いかにせむ」とのたまひて、御薫炉召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す。

贈り物にかかれた筆跡を見た藤壺が、贈り物に書かれた字が仲忠のものであることを見抜いた後、正頼は、「げに、さなめり。異人のすべきわざにはあらず。これを見知らぬやうなるは、いと心なきわざかな。いかにせむ」と述べている。やはり、宮廷社会において、仲忠の筆跡は、知らなくてはならないほどに称賛されるものであり、これこその言うように、「一行にても、持ちたる人は、心憎くせしもの」（蔵開・下　五八四）だということがわかる（注22）。このように筆跡を称賛される仲忠は、物語の前半・あて宮求婚譚

においては、俊蔭→俊蔭の娘→仲忠と引き継いできた琴の「手」が上手であることが多く書かれる。しかし、物語の後半に入り、俊蔭伝来の蔵を開いて、俊蔭の父母からの系譜が明らかになってからは、同じ「手」でも、筆跡を褒められるようになるのだ。

以上のように考えると、仲忠が藤壺の若宮に献上した「手本」が、清原一族を背負った仲忠によって書かれていることの重要性が分かるのではないだろうか。しかし、藤壺は、それだけでは満足しない。それは、前掲した③の場面からわかる。

③再掲・藤壺が仲忠に若宮と春宮の手本を要請する（国譲・上　六四一～六四二）

母君、「いとめづらしう、あはれ」と見奉り給ひて、「心地こそ、頭白くなりにたるやうなれ、かく大きになり給ひにたれば。御手習ひなどはし給ふや。何わざかし給ひつる」と問ひ聞こえ給へば、若君、「何わざも、せさする人もなければ。かしこに、『書習はさむ』とのたまひしかば」。母君、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」なんど聞こえ給へば、……

③で、若宮が、仲忠から書を習うのだ、と言ったのを聞いた藤壺は、「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」と述べている。ここでは「書」の話をしていたはずなのだが、藤壺は、「よろづのわざし給へ」と言う。この「よろづのわざ」とは何だろうか。仲忠が様々なことができる、素晴らしい人物であることは、物語の随所で語られているが、「御弟子にな」って教えてもらえるもの、特に、仲忠といえば、これが抜きんでて素晴らしいとされるものは、「琴」と「書」である。つまり、ここでの藤壺の発言は、「仲忠の弟子になって、「書」だけではなく、「琴」も習いなさい」と受け取れるのではないか。また、この後日譚である①の場面にも、同様の藤壺の発言がある。

①再掲・仲忠から藤壺と藤壺の若宮へ、手本四巻の贈り物（国譲・上　六五四～六五六）

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。「『み

づから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。これは、「若宮の御料に」とのたまはせしかば、習はせ給ひつべくも侍らねど、召し侍りしかばなむ、急ぎ参らする』と聞こえさせ給へ。さて、御私には、何の本か御要ある。ここには、世の例になむ」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。……見給ひて、「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。一日、戯れにものせしに、宮の、年ごろ召しつるも、今日こそは奉るなれ。この返り言は、我せむ。使は、誰ぞ」と問はせ給へば、「奉り置きてまかりにけり」と聞こゆれば、「いと心地なき、所の人かな。かれよりかかる物あらむ使遣る心よ」とのたまひて、白き色紙の、いと厚らかなる一重に、「賜はせためれど、『人を訪ふとも』と言ふなればなむ。この本どもを、かくさまざまに書かせて賜へるなるなむ、限りなく喜び聞こえ。なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。まことに、後に求められたるは、何ごとにかあめる。『我ならぬ人にや』と思ふこそ、後ろめたけれ」と、例より、めでたう、筋つきて、大きやかに書かせ給ひて、「これ、また、心あらむ者して奉らせて、帰り来ね」とて奉れつ。

若宮への手本は使いに持たせ、自身は春宮へ手本を持っていったということを書いたあとで、仲忠は「さて、御私には、何の本か御要ある。」と述べている。この言葉と、後に若宮の手本として書かれた和歌から、仲忠の、未だ絶えぬ藤壺への思慕と、なんとか繋がりを濃くしたいという意志が汲み取れる。それに対しての藤壺の言葉、「なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。」は、仲忠の言葉はさておき、③での、若宮に向かっての発言「かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」と同様、「これならぬこと」つまり「書ではないこと」、すなわち、「琴」も若宮たちに教えてやってくださいね、といったものだ。

以上をまとめると、次のようになる。俊蔭伝来の蔵を開いたことにより、仲忠は、多くの価値ある書物を手に入れる。この書物には「清原一族」の存在を物語内に再登場させる働きがあった。また、仲忠の朱雀帝への進講を通して、仲忠と朱雀帝の口から、「清原一族」が皇族の血を引く一族であり、能書・能筆の一族であることが語られる。これらのことを受けるかのように、仲忠の筆跡が素晴らしいことが物語内で語られるようになる。

このように見てくると、仲忠は、琴とは別の、新たな「手」を入手したといえるのではないだろうか。そして、書物によって明らかに

なった系譜と、朱雀帝の言葉、そして、世間の評価が重なり合い、仲忠が、能書・能筆の人物であり、「手本」を書くに相応しい人物として位置付けられていったのではないか。

③と①で見てきたように、藤壺は、諦めることなく仲忠に対し、「琴」を若宮に教えるように要請する。しかし、「俊蔭一族」である仲忠は、それに応えることはしない。それは、①にある「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな」という藤壺の発言からも推察される。また、俊蔭は、春宮に琴を教えることを拒んだ人物である。祖父と同様、「琴」を教えることを拒んだ仲忠が、代わりに若宮に献上したのが、この上ない〈手〉を持つ自身が書いた「手本」だったのではないだろうか。だが、前節で確認したように、あくまで「手本」は清原氏を背負った仲忠によって書かれてはいるものの、清原一族の書物からは切り離された二次創作物でしかないのだ。

「手本」によって藤壺とのつながりを求める仲忠と、「手本」ではないもの、すなわち、「琴」を所望する藤壺というように、仲忠と藤壺の思惑はすれ違いを起こしている。この二人は、婚姻状態にはないものの、これまで、周囲の人物たちにはない、特別な方法で意思疎通を行なってきたことは第四章で見た通りである(注23)。しかし、「国譲」巻に至ってその均衡は崩れ、繋がっていたはずの意思疎通はすれ違いを起こす。そして、最高の贈り物である「手本四巻」を最後に、仲忠は、藤壺に対し、藤壺の第三皇子の産養の贈り物以外の贈り物をしなくなる。

ここで、今一度、①を見てみると、仲忠からの手本の贈り物を見た藤壺は、「この返り言は、我せむ。」と述べ、「白き色紙の、いと厚らかなる一重に」「例より、めでたう、筋つきて、大きやかに」文字を書いたとある。藤壺の仲忠に対する評価は、「よろづのことに手惜しみ給ふ人」であり、仲忠が若宮へ手本を献上するかどうかは確信が持てずにいたが、そこに、仲忠からとても豪華な手本が届いたことで、このように、喜びを表している。この喜びとは、これだけすばらしい手本をくれるのだから、琴も教えてくれるかもしれない、という藤壺の期待をも表しているといえる。

このように見てくると、①は、さらに、以下のように読み解くことができる。それは、とても貴重なものをもらったと思い、喜ぶ藤壺に対し、仲忠は、俊蔭伝来の蔵から出てきたものではないもの、つまり、一番大事なものはあげていない、と考えているということ

だ。この「手本」は、「琴」を教えて欲しいと要請する藤壺に対する、仲忠の最大限の譲歩であるといえるのではないだろうか。だとすれば、藤壺の若宮は、決して仲忠から琴を習うことはできない。それにも拘わらず、藤壺は、「よろづのことに手惜しみ給ふ人」である仲忠からすばらしい手本をもらったと思い、琴の伝授にまで思いを馳せている。この場面は、仲忠と藤壺との意思のズレが大きく出てくる場面としても読むことができるのである。

注1　「あて宮」という呼称が一般的だが、本章では『うつほ物語』の後半部(「蔵開・上」巻以降)を中心に見てゆくため、「藤壺」という呼称を使用する。

注2　「手本」という言葉を『日本国語大辞典』(日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編、小学館、二〇〇〇年-二〇〇二年)で引くと、以下のように出ている。

て-ほん【手本】〔名〕

①文字や絵画などを習うときに、そばに置いて模範とするために書かれた本。臨本。

宇津保〔九七〇～九九九頃〕国譲上「『右大将殿より』とて、て本四くわん、いろいろのしきしにかきて」源氏〔一〇〇一～一四頃〕若紫「いまめかしきてほむ習はば、いとよう、書い給ひてん」……

②物事を行なうのに、模範とすべき人や物、または行ない。見ならうべきこと。模範。

平家〔一三C前〕九・木曾最期「是を見給へ、東国の殿原、日本一の甲の者の自害する手本とて」……

③標準となる型、様式。また、商品などの見本。

＊評判記・野郎虫〔一六六〇〕玉木権之丞「面体はにんぎゃう屋につかはして、わかしゅ人形の、手本(テホン)にさせたき人なり」……

注3 『大漢和辞典』(諸橋轍次、大修館書店、一九八九年-一九九〇年)には、「【手習】112シュウ」と「【手本】259シュホン」という項目があり、それぞれ、以下に引用するように出ている。

【手習】112シュウ

㊀手で練習する。主として習字にいふ。又、手づから練習する。〔論衡、程才〕文吏幼、則筆墨手習、而行無二篇章之誦一、不レ聞二仁義之語一。

㊁テナラヒ ㋑文字を書くことを練習すること。習字。㊂轉じて、学問・修業・稽古。

【手本】259シュホン

㊀下級官吏が上官に見える時、又、門生が初めて座師に見える時に差し出す名刺。折本の形をしてゐる。〔通俗編、儀節、手本〕五石瓠、官司移會用、六扣白束、謂二之手本、萬曆間、士夫朝亦用二六扣一、自稱二名帖一、後以二青殼、粘二前後葉一、而綿紙六扣、稱二手本一、爲下下官見二上官一所上レ投、其門生初見二座師一、則用二紅綾殼一、爲二手本一、亦始二萬曆末年一。〔燕子箋、入幕〕作下見末叩首掌二手本一見介上。〔服恵全書、筮仕部、晝憑領憑〕具二脚色手本互結供状、京官印結一。

㊁テホン ㋑手習のかたとなるべき文字を書いた本。習字帖。臨本。〔源氏、梅枝〕手本多くつどへたりし中に、中宮の母御息所の、心に入れず走り書いたまへりし。㊂倣って作るべき基となるもの。先例。模範。〔太平記、十、高時幷一門以下於二東勝寺一自害〕早早御自害候へ、高重先きを仕りて、手本に見せ進らせ候はん。

さらに、論者が調べたところによると、中国漢籍には「手本」という言葉は多用はされておらず、使用されている場合でも、以下のようなものしかない。

・「詩品」　↓ 訴状

・「重刊宋本十三經注疏附校勘記」(十三經)(宋)　↓ 公文

・「關漢卿戯曲集」(戯劇)(十三世紀)　↓ 覚書

・「金史」（正史）（十三～十四世紀）　　↓　覚書
・「醒世姻縁」（小説）（清）　　↓　名刺・手帳・上申書
・「閲微草堂筆記」（筆記）（清）　　↓　覚書

注４　大友信一「「右大将殿より」の「手本四巻」考」（『就実論叢』第二六号　其の一（人文篇）一九九七年二月）

注５　藤本憲信「女手考」（『国語国文学研究』三二、一九九七年二月）

注６　異同の多いこの箇所については、大友信一（注４）が整理をしているが、以下に前田家本の異同を載せておく。

……さて、御私には、何の本（ほ）か御要ある。……山吹につけたるは、真に（しのひ）て、春の詩（じ）。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩（じ）。……同じ文字を、さまざまに変へ（かへき）て書けり。

わがかきて春に伝ふる水茎（みづせき）もすみかはりてや見えむとすらむ……

いにしへも今行く先も道々に思ふ心あり（る）忘るなよ君

葦手、

底清く澄むとも見えで行く水の袖にも目にも絶え（たゝ）ずもあるかな

……「いとほしく、よろづのことに手惜し（をえ）み給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。一日、戯れにものせしに（をしみ）、……「……かれよりかかる物あらむ使遣る（り）心よ」……「賜はせた（ざ）めれど、……何ごとにかあめる。（以下、原本ニ、二行半ホドノ余白アリ）『我ならぬ人にや』と思ふこそ、後ろめたけれ」……「これ、また、心あらむ者して奉らせて、帰り来ね（ぬ）」とて奉れつ。（一三〇九～一三一四）

注７　前田家本では「おとど、「この御手こそ、久しく見ね」とて見て（見て伊）、……藤壺の、「……『それ驚かせ（す）』……」。」（一二六七～一二六八）となっているここでは問題にしない。

注８　前田家本では「……若君、「……かしこに（う）、……」。……大将、うち笑みて、「大人しう、目に見す見す、人の親げ（か）にならせ給ひて。……「『早う奉りけるをこ（て）そ、……』」（一二八〇～一二八一）となっている。

注9　前田家本では「……一日(ひと)は、……御厨子に納めさせ給ひてき。かく(きく)はしたなき目をなむ見給へて(り)し」。藤壺、「……その喜び聞こえさ(ナシ)せしぞや。」(一三二七～一三二八)となっている。

注10　前田家本では「かうて、大宮は、孫王の君(すはうの宮)に、……岩の上に立てたる二つ(りこ)の鶴どもを……御方、御覧じて、「……『若(わが)君に』とて、手本あめりし、同じ手なめり」と聞こえ給へば、おとど、「げに、さなめり。異人のすべきわざにはあらず。これを見知らぬやうなるは(には)」(一三九六～一三九七)となっている。「すはうの宮」という人物は物語に見えず、また、仲忠と藤壺の仲介人が孫王の君であることから、「すはうの宮」は「孫王の君」と校訂する考えに従う。また、「わが君」であっても「若君」であっても、春宮も藤壺の若君も手本を貰っており、底本は「わかきみ」と清音であるはずであることから、この箇所は「我が君」「若君」のどちらでも解釈は可能である。

注11　前田家本では「弾正の(本(傍記))宮、「……」。……帥(うち)の宮、「若宮よりは、この君こそ、生ひ出で給ひぬべかめれ。(いとおかしげにおはすや、はゝにこそ。うちの宮・わか君よりはこの君を)いとらうらうじく優(遊人)にぞ生ひ出で給ひぬべかめる」など。」(一四七八～一四七九)となっており、異同が多い。ただ、異同の多い箇所は「手本」という単語が出てくる発話部分の続きの箇所であるため、ここでは問題にしない。

注12　前田家本では「「……かの梨壺の宮は、いとなつ(ゝ)かしううつくしげに、手(ナシ)も書き給ひ、……」。……「手ばかりは、大将の本(もと)あめりし。……帝(みいし)のたまふめり。」」(一七九四～一七九五)となっている。「なゝかしう」「みいし」では意味が通じないため、「なつかしう」「帝」と校訂する説に従う。また、前田家本には「手」が書かれていないが、この箇所は、朱雀帝の御前での進講の話題・いぬ宮の秘曲伝授・藤壺の若宮たちが遊びにしか興味を示さないことという話の流れがあるため、必然的に「書く」ものは絵ではなく字であると考えられる。また、この物語においては「字を書く」という言い方はなく、「手を書く」が使用されているため、この箇所も「手も書き給ひ」で統一してよいと考えた。「もと」については、本文に「大将のもと」「いとよう書き似せ給へるめり」とあることから、この「もと」は「国譲・上」巻で仲忠が若宮に献上した「手本」だと解釈して問題ないと考えた。

注13　伊井春樹「俊蔭の家集と日記類―『うつほ物語』蔵開巻の意義」（『中古文学の形成と展開―王朝文学前後』一九九五年四月）、芦田優希子「際立ちゆく〈琴の一族〉―「蔵開」の巻より」（『詞林』二一、一九九七年四月）、中野幸一「うつほ物語うつほ物語と源氏物語（特集：伊勢物語とうつほ物語）」（『國文學』四三　一九九八年二月）、大井田晴彦「俊蔭一族復興―「蔵開」における〈書物の力〉」（『書物と語り（新物語研究）』五、一九九八年三月）、大井田晴彦「物語における主人公の系譜――『うつほ物語』から『源氏物語』へ（文学史上の「源氏物語」）」（『国文学　解釈と鑑賞』六三（別冊）一九九八年六月）

注14　前田家本では「……世になく厳しき鎖（上）かけたり。その鎖（上）の上をば、金を縒りかけて封じたり。その封の結び目に、故治部卿のぬしの御名文字（みなりし）縒りつけたり。……雪を戴きたるやうなる嫗（女）・翁、……国々の受領などの、さしつべきを、対一つづつ（だいひとつゞ）預け、……」（九二一～九三二）となっている。「上」は「鎖」の「しやう」の音と共通するため、この字が使われたのではないか。また、「みなりし」では意味が通じないが、「故治部卿のぬしの」とあることから、「みな」に「御名」という漢字を当てるという解釈は肯える。また、前田家本においては「嫗」であるはずの箇所の多くが「女」となっていること、白髪で這うように来たという表現から、「嫗・翁」で良いと考えた。「だいひとつゞ」は意味が通じないため、「対一つづつ」と校訂する説に従った。なお、〈蔵開き〉については、序章の注参照。

注15　前田家本では「大将の君、蔵人して（ども）、……「……いと見つけがたくて取り出でて侍り（る）、『累代（いさい）の書の抄物といふ物見給ふ』とてなむ、……」。上、「……昔のごとくかしこき者どもも（物のともゞ）、……吏部（りさう）の朝臣をこそは頼もしきことには。『それを離れては、かしこしと思ふ者どもぞあらぬ（め）』と思ふに、……」。大将、「皆具して、なき書なく（は）侍りけり。……俊蔭の朝臣の父（せち）書き読みて侍りける、……」。……大将は、「家の記・（ご）集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の（は）日記せし一つ、母が和歌ども（はびはわごん）一つ、世を去り（えりとり）侍りける日まで、日づけしなどして書（を）きて侍りけると（を）、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ど（こと）も、……」……。上、「……かれ、とく（て）見るべき物ななり」。大将、「……『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづ（はつ）かなる女

子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出で(はて)まで来ば、そがためなり。……』となむ申して侍る。それに慎(つつ)みて、今まで奏せで侍りつる」。……上、「……よも崇りは(い)なさじ。……その家集ども・道(みし)の抄物ども持たせてものせられよ」とのたまふ。」(一〇五〇～一〇五五)となっており、異同が多い。「侍り(る)、『累代(いさい)の書……』については、「侍。るいさいの書」と読点の打ち方を変え、「るいさい」は「るいたい」と校訂する説に従って、「侍る。『累代の書』……」と校訂するべきかと考えた。この他の校訂については、「蔵開・中」巻での朱雀帝の御前での進講で読んだものとの比較をした結果、『うつほ物語　全　改訂版』(おうふう)の校訂に従ってよいものと判断した。

注16　前田家本では「俊蔭(をしかげ)のぬしの集」(一〇六二)となっている。俊蔭伝来の蔵から出てきた集で、「～のぬし」と呼ばれるのは清原俊蔭以外には考えられないため、「俊蔭のぬしの集」で良いか。

注17　前田家本では「一つには、例の女の手、二行に一歌(かた)書き」(一〇八九)となっている。「う」を「か」に誤写したものと考えた。

注18　「俊蔭一族」という用語が一般的だが、本論では、「清原一族」と「俊蔭一族」を使い分ける。俊蔭伝来の蔵から出てきた書物には清原俊蔭の父母と俊蔭の書物が収められていたため「清原一族」を使用し、俊蔭が異郷で入手した琴と奏法には「俊蔭一族」を使用する。

注19　第三章「書かれた〈手〉」参照

注20　伊藤禎子「書物の〈音〉」(『『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇七年一二月初出)

注21　前田家本では「「…さら(ゝ)ば、」……国々の詩(かみ)を、」となっている。

注22　「蔵開・下」巻に、承香殿の女御に仕えていたこれこそという女童が、仲忠から文を受け取る場面がある。

これこそ、被け物を持ちて思ふやう、「こればかり賜はむとにやあらむ」とて、つくづく見る。腰の方に、文結ひつけられたり。……この文を、「いとうれし」と思ふ。「かくののしる御手持ちたる人もなきものを、内裏わたりの人、いかでか見むとこそすれ。これ、一行にても、持ちたる人は、心憎くせしものを」と思ひて、隠しつ。(蔵開・下　五八三～五八四)

これこその思考から、仲忠の〈手〉が世間で評判になっていること、それを内裏の人々が見たがっていること、仲忠の〈手〉を一行でも持っている人間はそれを大事にするものだということが分かる。

注23　第四章「紙に文字を書く――手紙の機能」参照

第六章　清原家の〈学問〉の〈系譜〉を担う仲忠――先祖が書いた書物と学問の継承

『うつほ物語』首巻「俊蔭」巻では、清原俊蔭の父が式部大輔で左大弁であったこと（注1）、また俊蔭自身も漢学の才があったために遣唐船に乗ることになったということが語られる。しかし、俊蔭が異郷から帰ってきてからは、清原家の学問に関する記述はない。それが、「蔵開・上」巻で、俊蔭の孫にあたる藤原仲忠が俊蔭ゆかりの地、三条京極邸を思い起こし、そこにあった蔵を開いてからは、清原家が学問の家であることがことさら強調されるようになる。

たとえば、三田村雅子は、「琴の技能のみで俊蔭に連なっていた仲忠は、漢才の方面でも清原家累代の学業を継ぐ存在となる。」と指摘し（注2）、大井田晴彦もこれに同調している（注3）。また伊井春樹も、「人々を拒み続けていた蔵は、仲忠の手によって、あっけなく開いた。……この出来事は仲忠に清原一族の後継者としての自覚と誇りを覚醒させたのである。」と述べる（注4）。猪川優子は、「蔵の発見は、仲忠に自らの出自に対する問い直しを呼び起こした。」とした上で、「自らが蔵すなわち学問を受け継ぐ者であるという自覚を持って蔵の中へと入って行く。」と述べた上で、学問の家の後継者については、いぬ宮が入内した後に産んだ皇子が受け継ぐのではないかと結ぶ（注5）。

また、〈蔵開き〉（注6）をした後、朱雀帝や春宮、五の宮の前で進講を仲忠が行なった場面について、三田村雅子は、「俊蔭の集の発見とその進講によって、琴の一族としての俊蔭一族の神話性は復活し、琴の持つ意味が再生産される。あて宮でさえ獲得できなかった琴の妙技の価値の下落を、辛うじて喰いとめ、上昇さえさせたのは、書かれた物としての日記や家集の力であった。」（注7）と述べ、大井田晴彦は、「わずか仲忠・帝・春宮・五宮の四人のみによる、密室的なこの講書は、俊蔭一族と朝廷との過去のかかわりを問いなおさずにはおかない。」と指摘する（注8）。また伊藤禎子は、進講が仲忠の声によって行なわれていることに着眼した上で、「〈蔵開き〉の行為は、学問の物語の再始発であったわけではなく、音楽と学問の相互の越境を語り、互いに「書かれた物」でありつつも「音声」でもあるという、新たな展開へと進んでいたのである」と述べている（注9）。

忘れ去られていた学問が、俊蔭伝来の蔵について語り出されることによって物語に再登場してくる意味とは何だろうか。清原家が学問の家であることを再提示する必要性とは何だろうか。『うつほ物語』には、清原俊蔭を始祖とした〈琴の系譜〉があることは、先行研究で何度も論じられたところである。だが、系譜と呼べるものは、〈琴〉(注10)だけではないのではないだろうか。本章では、仲忠が受け継いだ「学問」の系譜について辿ってみたい。

一・〈蔵開き〉

〈蔵開き〉は、仲忠が京極邸を思い出す場面、「昔より、祖の伝はり住み給ひける所にこそありけれ。わが親の御時になくなりにたるを、我造らせて、母北の方に奉らむ」(蔵開・上　四六七)から始まる。仲忠は、京極邸について、「昔より、祖の伝はり住み給ひける所」と言っており、京極邸が「清原氏」の土地であると認識していることがわかる。そして、訪れた京極邸は、「昔の寝殿一つ、巡りはあらはにて、塗籠の限り見ゆ」(蔵開・上　四六七)という状態であった。他は荒廃してしまっているにも拘わらず、塗籠だけは残っているという不可思議な状態である。その塗籠とは別に、仲忠は敷地の西北の隅に蔵があるのを見つける。西北の隅、つまり乾の方角というのは、陰陽道では福神を祀る意味合いがある。その蔵には、「世になく厳しき鎖かけたり。その鎖の上をば、金を縒りかけて封じたり。その封の結び目に、故治部卿のぬしの御名文字縒りつけたり」(蔵開・上　四六七)とあり、ここでも、この蔵が清原家のものであることが確認できる。また、「故治部卿のぬしの御名文字縒りつけたり」とあることから、この蔵を最後に閉めたのが俊蔭であることが明瞭となっている。それを見た仲忠は、「これは、書どもならむ。昔、累代の博士の家なりけるを、一枚書見えず。その道ならぬ琴などだに、世の中にも散り、ここにも残りたるものを。これ開けさせむ」(蔵開・上　四六七)と、初めて清原氏が博士の家であることの証明を目の当たりにしている。

仲忠が蔵を見ていると、河原の方から、九十歳ほどの嫗と翁が来て、昔語りを始める。この二人の語りは、この京極邸が清原氏

のものであることを一層印象付けている。また、この二人の語りの、「世に聞こえぬ音声楽の声なむ絶えざりし。その音声楽を聞く人は、皆、肝心栄えて、病ある者なくなり、老いたる者も若くなりしかば、京の内の人は巡りて承りし。」(蔵開・上　四六八)により、俊蔭と俊蔭の娘の琴の霊異が顕される。嫗と翁の語りの、「その父母隠れ給ひにしかば、かの御娘は聞こえ給はずなりにき。」(蔵開・上　四六八)までは仲忠も知る内容であるが、俊蔭の娘と自身が北山に籠った後のことは、ここで初めて知る。「まかり寄る者は、やがて倒れて、多くの人死に侍りぬ。」「夜は、人にも見え侍らで、馬に乗りて来つつ、弓弦打ちをしつつ、夜巡りするやうになむ侍る。」(蔵開・上　四六八)とは、俊蔭の霊が守ってくれていることの証であり、また、「この嫗・翁の見奉り侍るに、わが国に見え給はぬ姿がおはする玉の男の見え給へる」(蔵開・上　四六八)は、嫗と翁にとって、仲忠の容姿が俊蔭の再来であることを示す。

蔵の周りを清め、自身も装束を改めた仲忠は、蔵を開けることにする。「承れば、この蔵、先祖の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠を放ちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この蔵、先祖の御霊、開かせ給へ」(蔵開・上　四六九)と、自身が清原一族の者であり、蔵を開けるに値する人物は自分しかいないのだということを俊蔭の霊に言い聞かせるかのような祈りの後、鎖に手をやると、蔵は開き、それによって仲忠は「これは、げに、先祖の御霊の、我を待ち給ふなりけり」(蔵開・上　四七〇)と確信する。蔵の中に入っていたものは「書ども、麗しき帙簀どもに包みて、唐組の紐して結ひつつ、ふさに積みつつあり。その中に、沈の長櫃の唐櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よきほどの柱ばかりにて、赤く丸き物積み置きたり。」(蔵開・上　四七〇)といったものであった。仲忠は、「口もとに目録を書きたる書」(蔵開・上　四七〇)だけを取り出し、元のように鎖をさして帰っていく。

三条殿にて、仲忠は、母である俊蔭の娘に蔵開きをしたことを伝え、目録を見せる。そこには、「いといみじくありがたき宝物多かり。書どもはさらにも言はず、唐土にだに人の見知らざりける、皆書きわたしたり。薬師書・陰陽師書・人相する書・孕み子生む人のこと言ひたる、いとかしこくて、多かり。」(蔵開・上　四七〇)とある。俊蔭の娘は、何故、父である俊蔭が自分にこれらの宝物を残してくれなかったのかと不満を言うが、仲忠は、「いとかしこくものし給ひける人なりければ、思すやうこそありけめ。これらをそこに持ち給ひては、いかにかはせさせ給はまし。今まではありなましやは」(蔵開・上　四七〇)とその理由を推測している。

この〈蔵開き〉の記事からは、京極邸、そしてその西北の隅にあった蔵が、清原一族のものであり、蔵を作ったのが清原俊蔭である

こと、また、仲忠は「藤原仲忠」と名乗ってはいるものの、少なくともこの場面においては「清原氏」の子孫であると認識されていると言えるだろう。さらに、嫗と翁の語りにより、首巻「俊蔭」巻が再びここで思い起こされていることも重要である。

「清原氏」の子孫であることを認識した仲忠は、この後にどのような行動をするのか。次節で見てゆく。

二、女一の宮の懐妊～いぬ宮の産養

前節で見た〈蔵開き〉の場面は「霜月」のことだが、この直後、翌年の「睦月」に、仲忠の妻である朱雀帝の女一の宮が妊娠する。そして、女一の宮の懐妊からいぬ宮の産養までの間、仲忠は「入る」ことを繰り返す。この間の仲忠の「入る」用例を以下に全て掲げる。

①かくて、返る年の睦月ばかりより、一の宮孕み給ひぬ。中納言、かの蔵なる産経などいふ書ども取り出でて、並べて、「女御子にてもこそあれ」と思ほして、「生まるる子、かたちよく、心よくなる」と言へる物をば参り、さらぬ物も、それに従ひてし給ふ。参り物は、刀・俎をさへ御前にて、手づからと言ふばかりにて、我、なほ、添ひ賄ひて、参り給ふ。

かくて、その年は、立ち去りもし給はず、かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ。

かかるほどに、子生み給ふべき期近くなりぬれば、女御の君、上に聞こえ給ふ……上、「さるべきことにこそあなれ。さる人をば、かねてより労りなどこそすれ。いかならむ」。女御、「何かは。かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを。誰も誰も、よに、疎かには」。（蔵開・上　四七一～四七二）

②かかるほどに、寅の時ばかりに生まれ給ひて、声高に泣き給ふ。中納言も驚きて、御帳の帷子を掻き上げて、「何ぞや、何ぞや」

と聞こえ給へば、尚侍のおとど、「あなさがなや。あらはなり」とて、女御の君に居隠れ給へば、「仲忠は、今宵は、目も見侍らず」と言ふものから、女御の君に、宮懸かり奉りて騒ぎ給ふを見れば、白き綾の御衣を奉りて、耳挟みをして、惑ひおはす。いと宿徳に、ものものしきものから、気高く、子めきて、御髪揺り懸けたり。わが親も、いづれとなくめでたし。同じ白き着給へり。中納言、「なほ、物、はた、籠れりける所かな」と見給ふに、後の物も、いと平かなり。（蔵開・上　四七三～四七四）

③尚侍のおとど、「生まれ給へる君の御臍の緒切り給はむ」とて、「ただ、人は候へ。人のするわざをこそはせめ。賜へや。この物、見苦しの蝸牛や」とのたまへば、つい居て、「何を召すぞ」。おとど、「下なる物一つ」とのたまへば、指貫を脱ぎて奉り給へば「否や、今一種を」とのたまへば、白き袷の袴一襲を脱ぎて奉りて、「あな、命長や」とて、御衣架のもとに立ち寄りて、入りて見給へば、御達笑ふ。（蔵開・上　四七四）

④中納言、御帳のもとに寄りて、つい居て、「まづ、賜へや」と聞こえ給ふ。尚侍のおとど、「あなさがなや。いかでか、外には」とのたまへば、帷子を引き被きて、土居のもとにて抱き取りたれば、いと大きに、首も居ぬべきほどにて、玉光り輝くやうにて、いみじくうつくしげなり。「いと大きなるものかな。かかればこそ、久しく悩み給ひつるにやあらむ」と思ひて、懐にさし入れつ。右のおとど、「いで、いで」とて寄りおはすれば、「ただ今は、さらに、さらに」とて見せ奉らず。おとど、「今からも、はた」とて笑ひ給ふ。

中納言、「かの龍角は、賜はりて、いぬの守りにし侍らむ」。尚侍のおとど、うち笑ひて、「いつしかとも、はた。さても、かやうの折には言ふやうかある」とのたまへば、「おほかたのことは、いかが侍らむ。この琴の族ある所、声する所には、天人の翔りて聞き給ふなれば、『添へたらむ』とて聞こゆるなり」。尚侍のおとど、典侍して、大将のおとどに、「かの、おのが琴、ここに要ぜらるめり。取らせむ」と聞こへ給へれば、急ぎて、三条殿に渡り給ひて、取らせておはしたり。三の宮、取り給ひて、中納言にさし遣り給ひつれば、唐の縫物の袋に入れたり。稚児を懐に入れながら、琴を取り出で給ひて、「年ごろ、『この手を、いかにし侍らむ』と思ひ給へ嘆きつるを、後は知らねど」などて、はうしやうといふ手を、はなやかに弾く。声、いとほこりかに、にぎははしきものから、また、

あはれにすごし。よろづ物の音多く、琴の調べ合はせたる声、向かひて聞くよりも、遠くて響きたり。……

中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風、いと声荒く吹く。……尚侍のおとど、御床より下り給ひて、琴を取り給ひて、曲一つ弾き給ふ。その音、さらに言ふ限りなし。中納言の御手は、面白く、凝しきまで、雲風の気色、色殊なるを、この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齢栄ゆる心地す。かかれば、宮は、御琴を聞こし召しつれば、ただにおはしつるよりも若やかに、「わざをしつる」とも思されず、苦しきこともなくて起き居給へり。中納言の君、「悪しかめり。なほ臥させ給ひて聞こし召せ」と申し給へば、宮、「ただ今は、苦しうもあらず。この御琴を聞きつれば、苦しかりつるも、皆やみぬ」とて居給へり。女御の君・尚侍のおとど、「風邪ひき給ひてむ」とて、騒ぎ、臥せ奉り給ひつ。琴は、弾き果て給へれば、袋に入れて、宮の御枕上に、御佩刀添へて、置きつ。

かかるほどに、明け果てぬれば、御格子ども、皆上げわたし、御几帳立てつつあるに、あるじのおとど、宮の御はらからの宮たち、崩れて、皆下り給へば、皆人も、下りぬ。おとど、宮たち、殿の君たち、並み立ちて、拝し給ふ。中納言の君は、かくし給へども、「あなかしこ」とも聞こえで、なほ、稚児抱きて居給へり。（蔵開・上　四七五～四七七）（注 11）

⑤かかるほどに、御乳参るべき時なりぬ。御薬、父の中納言の懐にて含め奉り、御乳付け、左衛門佐殿の北の方、御几帳のもとに候ひ給へば、女御の君、掻き抱きて、御衣着せ奉り給ふ。（蔵開・上　四七八）

⑥御湯殿すべき時もなりぬれば、その儀式、皆す。……典侍のおとど、「ここら、昔より、君たちに仕うまつりつるに、ほど大きに、蟹といふ物、ゆめばかりつき給はぬこそなけれ。二月浴むし奉りたるやうにこそおはすめれ」。中納言、「見給へ放たねば、さもあらむ」。「典侍候ひてましかば。いとかしこかりけり。親にはおはしまさずとも、立たせ給へや。女にこそおはしますめれ」と聞こゆれば、「何か、そは。『「そのわたりをもよく繕ひ給へ」と聞こえむ』とぞや」とのたまふ。（蔵開・上　四七八～四七九）

⑦さて、御湯殿果てぬれば、女御の君、抱かまほしう思せど、父おとど添ひ居給へれば、尚侍のおとど抱き給ひて、御几帳ささせて入り給ひて、宮の御方に臥せ奉り給ひつ。中納言御帳の内へ入り給へば、尚侍のおとど、「あなさがな。あらはなるに」とのたまへば、「何か。かかる宮仕へ仕うまつる人には、内外をこそ許し給はめ」とて慎み聞こえ給はねば、女御の君、外にゐざり出で給ひぬ。中納言、「久しく寝も寝侍らねば、乱り心地、いと悪しう侍る。罪許し給へ」とて、宮の御傍らにうち臥し給ひぬ。（蔵開・上　四七九）

⑧中納言は、例ものし給ふ東の廂に、儀式して、御手水・物の賄ひなどし据ゑたれど、母屋の隅より、頭もさし出で給はで、宮の御おろしをのみ参る。昼間の人なき折には、這入りつつ、宮の御傍らにうち休み、これかれおはすれば、御帳の外の土居に押しかかりて、居眠りし給へり。夜は、弓弦走り打ちつつ寝ず。（蔵開・上　四八一）

⑨藤中納言、「僻みたるやうなり。かはらけ取りてまうでむ」とて、紫苑色の織物の指貫、同じ薄色の直衣、唐綾の掻練襲着て出で給ふ。この頃、例よりも、かたち盛りなり。下襲の裾、いと長く走り引きて、かはらけ取りて出で給ふ。兵部卿の宮、「あなめづらしや。いみじくも木深くも籠られたりつるかな」とて、目を研ぎて、皆まもり給ふ。さらに難なき、帝の御婿なり。「源中納言、なずらひたり」と言ひしかど、今は、いとこよなし。（蔵開・上　四八六）

⑩右大将よろぼひて入り給へば、中納言、しどろもどろに酔ひて、西の御方に御送りして、「酒を食べて、食べ酔ひて」と、いと面白き声に歌ひて入りおはすれば、女御の君、いぬ宮掻き抱きて、御局へ入り給ひぬ。（蔵開・上　四九二）（注12）

⑪あるじのおとど、「いづ方か。中納言の居給ふ座なるや。誰をしるべにてか、正頼も侍らむ」。「中納言は、候ひにくければ」。あるじのおとどの、「仰せ言にて請じ入れ給へ」と、父おとどに申し給へば、「はや、まかり入れ」とのたまふ。あるじのおとど、「忠澄の

朝臣も、今宵は、なほ、まかり入れ」とのたまへば、二所ながら入りて居給ひぬ。（蔵開・上　四九六）（注13）

①は、女一の宮の懐妊から出産直前までを描いた場面である。仲忠は、俊蔭伝来の蔵から出てきた「産経などいふ書ども」を取りだし、「女御子にてもこそあれ」と思い、「生まるる子、かたちよく、心よくなる」と書かれた物を、全て自らの手で調理して女一の宮に差し出している。後にいぬ宮が誕生することを踏まえた上で、この場面を見てみると、〈蔵開き〉により出てきた書物の中に「産経」があり、それに従ったがために、女一の宮は女児を産んだかのような書かれた方がされているように読める。また、仲忠は、「かくて、その年は、立ち去りもし給はず。かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ。」とずっと屋敷から出ていないことが書かれ、それは、次の「かの朝臣、まかり歩きもせで、この頃は侍るなるを」という朱雀帝と仁寿殿の女御の会話からも確認できる。

つまり、女一の宮が妊娠したと判明すると同時に、仲忠は俊蔭伝来の蔵から出てきた書物を読み、そこに書かれた通りに女一の宮の世話をし、一方で、自身も籠って学問に打ち込んでいるのだ（注14）。またここで重要なのは、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物を仲忠が読む行為を指して、「学問」といういい方がされていることである。蔵から出てきた書物は、その全てが「学問」の対象になるものではないものの、ここで仲忠が書物を読む行為は「学問」であるとされ、以降、仲忠は「学問」を収めた人物であり、なおかつ「書物」を所持する人物と位置づけられる。

そして、女一の宮の出産が近づき、ついにいぬ宮が誕生する。それが、次に挙げた②の場面である。いぬ宮が「声高に」泣く声を聞いて、仲忠は、「御帳の帷子を掻き上げて、『何ぞや、何ぞや』と、御帳の中を覗いている。この仲忠の行為を、母俊蔭の娘が咎めてはいるものの、仲忠は「見る」ことをやめない。さらに、続きには、仲忠が「わが親」と述べていることから、仲忠の御帳の内側を「見る」という行為は継続していることがわかる。さらに、「中納言、『なほ、物、はた、籠れりける所かな』と見給ふに」とあることから、結局、いぬ宮の産声を聞いてから女一の宮の出産終了までの全てを、仲忠は見ていたということになる。

③は、俊蔭の娘がいぬ宮の臍の緒を切る際に、人を特定せずに呼び掛ける声を挙げた場面である。俊蔭の娘の声を聞いた仲忠は、「つい居て」御帳の側に来る。そして、俊蔭の娘の要望に従い、「下なる物」を二つ、指貫と白き袷の袴一襲を脱ぎ、「御衣架のも

とに立ち寄りて、入りて見」ている。この部分から、やはり仲忠は御帳の内に入っていっていることがわかる。

④では、「中納言、御帳のもとに寄りて、つい居て」という表現から、相変わらず仲忠が御帳のすぐ傍にいることが分かる。そして、いぬ宮を抱き取るべく、「帷子を引き被きて、土居のもと」にまで来る様子が描かれている。これらの記述から、仲忠は、御帳の内には入っていないものの、御帳の境の部分までは入ってきていることがわかる。さらに、仲忠は、いぬ宮を抱き取り、見せてほしいと頼む兼雅にも見せようとはしない。また、仲忠は「かの龍角は、賜はりて、いぬの守りにし侍らむ」と、いぬ宮を琴の継承者として位置付けるかのような発言をしている。そして、三条殿にある琴を取りに行かせると、「稚児を懐に入れながら、琴を取り出で給ひて、『年ごろ、「この手を、いかにし侍らむ」と思ひ給へ嘆きつるを、後は知らねど』などて、はうしやうといふ手を、はなやかに弾く」と、新生児を膝に抱えたまま、琴を弾き始める。

弾琴をする仲忠であったが、仲忠の琴は荒々しい天候を呼ぶため、俊蔭の娘が琴を弾く場面が続きにある。「この御手は、病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齢栄ゆる心地す。かかれば、宮は、御琴を聞こし召しつれば、ただにおはしつるよりも若やかに、『わざをしつる』とも思されず、苦しきこともなくて起き居給へり」とあることから、〈蔵開き〉で嫗・翁が言っていたことを裏付けるような描写がここでなされていることに気付く。また、「琴は、弾き果て給へれば、袋に入れて、宮の御枕上に、御佩刀添へて、置きつ。」と、先にあった仲忠の言の通り、龍角風をいぬ宮の守りとするかのように、「御佩刀」と共に置く。そして、夜が明け、正頼やその子供たちなど、多くの人間がやってきたとき、仲忠は、「中納言の君は、かくし給へども、『あなかしこ』とも聞こえで、なほ、稚児抱きて居給へり」と、未だにいぬ宮を抱えたまま、外に出て行っていないことが書かれている。

⑤は、乳付けの前にいぬ宮に薬を飲ませる場面だが、その際にも、仲忠はいぬ宮を自身の懐に抱いている。前の場面でもずっといぬ宮を抱き続ける仲忠が描かれたが、ここでも、いぬ宮を抱いたまま離さない仲忠が描かれている。

⑥は、典侍と俊蔭の娘によって行なわれる御湯殿の儀の場面である。ここでも、仲忠はその場から出て行かずに様子を見守っている。さすがに見かねた典侍が、「親にはおはしまさすとも、立たせ給へや」と言うものの、仲忠は出て行く様子がない。

⑦は、いぬ宮を抱きたいと思う仁寿殿の女御が、仲忠がいるためにそれが叶わず、代わりに俊蔭の娘が抱き、女一の宮の側にいぬ宮を寝かせる場面である。それを見た仲忠は、「御帳の内へ入」ってしまい、いぬ宮が生まれた場面の時と同じ言葉で俊蔭の娘に叱られているが、やはり出て行く様子はない。

⑧は、仲忠が東の廂にいないことが描かれる場面である。仲忠は本来、東の廂にいるべきなのだが、そこには用意しておくべきものを置いておくだけで、仲忠自身は、「母屋の隅より、頭もさし出で給はで」、昼間、人がいない時には、御帳の内に「這入り」そこに誰かが来ると、「御帳の外の土居に押しかか」っている。つまり、仲忠は、外側にあたる東の廂にはおらず、内側にあたる母屋から外に顔も出さずに、御帳の内にいるか、人が来ても御帳の境の部分にいるのだ。

⑨は、いぬ宮の七日の産養に、多くの人々が集まってきて宴を開いている様子が描かれた後の場面である。「藤中納言、『僻みたるやうなり。かはらけ取りてまうでむ』とて、紫苑色の織物の指貫、同じ薄色の直衣、唐綾の掻練襲着て出で給ふ」という部分から、母屋の中にずっと籠っていた仲忠が、やっと出てきたことがわかる。この場面までに仲忠が「外に出た」という記述はない。女一の宮がいぬ宮を出産する直前に、仲忠がいない時に仁寿殿の女御が女一の宮の様子を見に来た、という記述はあるものの、それだけである。このことから、仲忠は、少なくとも半年ほどもの間、建物の中にいたということになる。それは、次の兵部卿の宮の発言でも証明される。「いみじくも木深くも籠られたりつるかな」は、仲忠がうつほ育ちだということと掛けているのだということは先行研究で述べられているが(注15)、今、ここで重要なのはそこではなく、母屋の内に籠ったままずっと出てこないことが「木深し」という言葉から推察できるということである。

⑩では、泥酔した仲忠がいぬ宮と女一の宮のいる御帳の内に入る場面が描かれる。七日の産養の饗宴に遅れた仲忠は、正頼から「闕巡」を強いられる。何杯も飲酒して泥酔した仲忠は、「いと面白き声に歌ひて」、女一の宮といぬ宮がいる御帳の内に入っていく。しかし、すかさず女御の君がいぬ宮を抱いて、御帳のすぐ傍にあったと思われる大宮の元に連れていってしまう。

⑪では、仲忠の案内が必要な場面だというのに、正頼と兼雅が訪ねてきた東の廂に仲忠はいない。兼雅の呼びかけにより、母屋の中に居た仲忠は東の廂の間に出てくる。

ここまでに仲忠の「入る」という行動を見てきたが、①から⑩までは、仲忠は、母屋の中において、「入る」「出ずにそのままそこに居る」という行為を繰り返している。しかし、⑪では、母屋から東廂へ「出る」という状況にも拘わらず「入る」という表現が使用されている。この場面では、忠澄とセットにした「二所」という表現であるため、忠澄に合わせた「入る」という表現になっているのであろう。では、①から⑩までの、仲忠の「入る」という行為には、どのような意味があるのか。次節で考えてゆく。

三、籠る仲忠

仲忠は、二十代後半のある年の十一月に京極邸の〈蔵開き〉を行なった。そこで真っ先に取り上げられてくるのが「薬師書・陰陽師書・人相する書・孕み子生む人のこと言ひたる、いとかしこくて」(蔵開・上　四七〇)といったものである。そして、その翌年の一月に妻女一の宮が懐妊し、生まれてくる子が女の子であればよい、容姿も心も良い子になればよいと、仲忠は蔵にあった書物、特に「産経」を活用する。これは、「いぬ宮」という絶世の美少女が生まれてくるためには、仲忠が蔵を開け、何が蔵に入っているのかを把握し、そこにあった書物を読み、なおかつそこに書かれたことを実践しなければならないと仲忠が思っていたということになりはしないだろうか。

仲忠は女一の宮の世話をする一方、「書どもを見つつ、夜昼、学問を」していた(蔵開・上　四七二)。このようにして仲忠が屋内に籠っていた期間は、少なく見積もっても一月から八月までの半年以上にわたる。この期間に、仲忠は清原一族の学問を継承しているのだ。

また、確かに仲忠は、女の子が生まれるように、その子の容姿・心が良くなるようにと努力はしたが、それが結果に結びつくかどうかは定かではない。ただ、仲忠は、よく言われているように〈琴〉の系譜を担う者であり、清原家の学問を担う者であり、さらには、これより後の話になるが第五章で指摘したように〈手本〉の系譜を担う者でもある。このように考えると、仲忠の子は、何かし

らの系譜を担う者である可能性が非常に高くなる。

しかし、女一の宮がいぬ宮を身籠った時点で仲忠が次世代に継承できるのは〈琴〉のみであった。生まれてくるのが女の子と決まっていれば、〈琴〉だけで良いのだが、男の子であった場合には、その直前に開いた俊蔭伝承の蔵から出てきた書物に象徴される〈学問〉(注16)を継承させた方が良い。そのために、仲忠は、女一の宮が出産するまでの間、籠って清原一族の〈学問〉を継承していたのではないだろうか。

〈蔵開き〉の直前に嫗と翁が昔語りをする場面では、「俊蔭」の巻が回想され、「清原家」が全面に出てくる。また、いぬ宮が誕生し、七日目の産養にやっと仲忠が表に姿を現した時に、兵部卿の宮は「いみじくも木深くも籠られたりつるかな」と、仲忠が俊蔭の娘から秘琴を伝授された時に籠っていた木のうつほを想起させるかのような発言をしている。さらに、仲忠が任大将の喜びを朱雀帝に奏上した際の会話でも、仲忠が出仕しなかった理由を答えるときに、仲忠自身が学問をしていたことについて「籠る」という表現をしている。このように注意してみると、仲忠が学問をして籠っていた半年ほどの時間は、仲忠自身が清原家の〈学問〉を継承する時間であると同時に、次の世代に継承させるものを、〈琴〉以外にもう一つ獲得する時間でもある。そして、仲忠が〈学問〉を継承するためにいた母屋は、もうすぐ生まれてくる我が子に継承させるためのものとしての〈学問〉を、まずは自身が継承するための籠りの空間であったと考えられる。

一方、女一の宮がいぬ宮を出産してから七日の産養まで、仲忠は、屋内どころか母屋の中からも出ず、さらには御帳台の傍にいる様子が何度も描かれる。そして、この七日の間に、仲忠は龍角風をいぬ宮の守りとし、生まれたばかりのいぬ宮を膝に抱えて琴を弾く。これは、いぬ宮こそが、俊蔭を始祖とする〈琴〉の継承者であるということを示す行為以外のなにものでもない。「いぬ宮」が女の子であるから、〈琴〉を継承させる。そして、〈琴〉の継承者として育てようと決めたがために、仲忠は、膝にいぬ宮を抱いたまま琴を弾き、その琴に御佩刀を添えて守りにしているのだ。

今一度振り返ると、俊蔭伝来の蔵に入って行けるのは、〈蔵開き〉をした仲忠ただ一人である。そして、その蔵から持ち出した書物を持って仲忠は籠りの空間に入り、半年ほどの間に清原家の〈学問〉を修得する。このようにして、仲忠は〈学問〉を継承する者

となった。また仲忠は、母屋という空間の中で、御帳台や御湯殿といった、さらに区切られた空間に入っていき、ついにはそこからいぬ宮を抱き上げてしまう。そして、いぬ宮を抱えたまま〈琴〉を弾き、その〈琴〉と御佩刀を添えていぬ宮の守りとすることで、いぬ宮を、〈琴〉を継承する者としたのだ。

以上のように、仲忠の行動を見ていくと、『うつほ物語』とは、継承されていくもの――ここでは〈琴〉と〈学問〉を指す――を継承する者が、いかにして継承者となるか、というところを描いているといえる。継承する者は、籠りの空間において継承者となるのだ。『うつほ物語』という名がついたのは、「俊蔭」巻において「うつほ」の中で仲忠が〈琴〉を継承したことからであろう。しかし、「うつほ」のみが継承の場としてあるのではなく、継承の場である籠りの空間の代表として、仲忠が〈琴〉を継承した「うつほ」があるのではないだろうか。このように考えると、〈学問〉の継承の場とは、「俊蔭」巻の「うつほ」に通じると言える。

四．朱雀帝への進講

ここでは、〈蔵開き〉で出てきた書物を、仲忠が朱雀帝に進講する場面を見て行く。

①「などか、いと久しく。先つ頃、節会などありしに、『参られやする』と思ひしに、さもあらざりしかば、いとさうざうしくなむありし。人よりはむつましかるべき心地するを、疎き上達部などよりは。されば、ものせられむこそよからめ」。大将、かしこまりて、「日々に参り来べく侍るを、月ごろ、仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書どもなどの、いと侍りがたき所に、捨てたるやうにて侍りけるを、さすが、人の、え取り失はで侍りけるを、いと見つけがたくて取り出でて侍り、『累代の書の抄物といふ物見給ふ』とてなむ、文書といふ物見給へつきぬれば、世間のこと侍らぬものなりければ、籠り侍りぬる」。上、「よきことにこそはあなれ。学問など、心に入れてものせらるるは、朝廷のためにも、いと頼もしきことなり。……さる文書・書などをさへ尋ね出でら

れたらむ、いとかしこきこと。よろづの書どもなど、具して、皆ありや」。大将、「皆具して、なき書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りける、それが、皆書き読みて侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読みて侍りける、全く細かにして侍るめり。それをぞさるものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」。上、「いかなる物ぞ」。大将は、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」など奏し給ふ。上、「などか、今までものせられざりつる。有職どもの、いみじき悲しびをなしてし置きたる物、げに、いかならむ。なほ、朝臣は、ありがたき物領ぜむとなれる人にこそ。かれ、とく見るべき物ななり」。大将、「見給へしすなはち奏すべく侍るを、かの書の序に言ひて侍るやうにも、『唐の間の記は、俊蔭の朝臣のまうで来るまでは、異人見るべからず。その間、霊添ひて守る』と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ』となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せで侍りつる」……上、「朝臣の読みて聞かせむには、その霊ども、よも祟りはなさじ。今日は、府の者ども労ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」とのたまふ。（蔵開・上　五二七～五二八）（注17）

②かくて、一、二日ありて、大将殿、内裏の仰せられし書ども持たせて参り給ひて、そのよし奏せさせ給ふ。……俊蔭のぬしの集、その手にて、古文に書けり。今一つには、俊蔭のぬしの父式部大輔の集、草に書けり。「手づから点し、読みて聞かせよ」とのたまへば、古文、文机の上にて読む。例の花の宴などの講師の声よりは、少しみそかに読ませ給ふ。七、八枚の書なり。果てに、一度は訓、一度は音に読ませ給ひて、「面白し」と聞こし召すをば誦ぜさせ給ふ。何ごとし給ふにも、声いと面白き人の誦じたれば、いと面白く悲しければ、聞こし召す帝も、御しほたれ給ふ。大将も、涙を流しつつ仕うまつり給ふ。（蔵開・中　五三五）（注18）

③大将、「いとほし」と思ひて、かい直して、いと面白く読みなす。その声、いと面白し。しろくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし。（蔵開・中　五四二）（注19）

④「かかることあり」とて、御簾のもとに后の宮おはせば、上は、大将に御目くはせて、みそかに読ませ給ふ。后の宮、「内裏こそ、聞かせ給はざらめ。講師は、心せよ」とのたまへば、え読までとりくひもて候ふ。上、「いと悪き朝臣なりけり。かくな臆せられそ。ただ、言ふに従ひて読め。これは、誰も誰も読みつべけれど、そなに異人の読むまじき由のあれば、まづ読まするぞ」とのたまへば、少し高く読む。所々は、声にも読む。后の宮、いみじう憎み給ふ。されど、いとよく聞こし召す。異人は、え聞き知らず。（蔵開・中　五四八）（注20）

①は、仲忠が朱雀帝に書物の進講をするに至る経緯が示される場面である。朱雀帝が仲忠に「などか、いと久しく。先つ頃、節会などありしに、『参られやする』と思ひしに、さもあらざりしかば」と、節会にも来なかった理由を聞いている。それに対し、仲忠は、「仲忠が先祖に侍る人々のし置きて侍りける書ども」を得て、「籠り侍りぬる」と答えている。これは、前節で述べた、仲忠が屋敷から出ずに書物を読み続ける様子を「籠る」と解釈したことの根拠でもある。続く朱雀帝の、書物は皆あるか、どういったものがあるのかという問いに対し、仲忠は、「皆具して、なき書なく侍りけり。俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、有職に侍りける、それが、皆書き読みて侍りける、俊蔭の朝臣の父書き読みて侍りける、全く細かにして侍るめり。それをぞさるものにて、いといみじき物をなむ見給へつけたる」、「家の記・集のやうなる物に侍る。俊蔭の朝臣、唐に渡りける日より、父の日記せし一つ、母が和歌ども一つ、世を去り侍りける日まで、日づけしなどして書きて侍りけると、俊蔭、帰りまうで来けるまで作れる詩ども、その人の日記などなむ、その中に侍りし。それを見給ふるなむ、いみじう悲しう侍る」と奏上する。それに対し、朱雀帝は、「なほ、朝臣は、ありがたき物領ぜむとなれる人にこそ。かれ、とく見るべき物ななり」と、清原一族の書物を褒める。

また、仲忠は、宮中に赴くことができなかった理由として、「かの書の序に言ひて侍るやうにも、『唐の間の記は、俊蔭の朝臣のま

うで来るまでは、異人見るべからず。その間、霊添ひて守る』と申したり。俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ』となむ申して侍る。それに慎みて、今まで奏せで侍りつる」と述べ、それに対して朱雀帝は、「朝臣の読みて聞かせむには、その霊ども、よも祟りはなさじ。今日は、府の者ども労ることあらむを、今日過ぐして、しめやかならむ時に、その家集ども・道の抄物ども持たせてものせられよ」と、書物を進講するようにと命令している。

②は、実際に進講を始めた場面である。俊蔭の集を読むようにと朱雀帝に言われた仲忠は、「古文、文机の上にて読む。例の花の宴などの講師の声よりは、少しみそかに読」んだ。「みそかに読」んだのは、殿上に集まっている人々には聞かせないようするためである。つまり、ここは、朱雀帝と仲忠の二人だけがいる空間で、仲忠は俊蔭の集を見て読み、それを朱雀帝が聞いているという状況である。この直後、夜の御膳の時に、后の宮の五の宮が加わる。そして、翌朝、朱雀帝は五の宮を使いにして春宮を進講の場に呼び寄せるが、春宮は正午になってから参上し、遅れて仲忠が参上して、二日目からは、進講はこの四人で行なわれる。

一日中進講を行ない、そして夜も進講を行なって、朱雀帝、春宮、五の宮は楽器を弾き、仲忠は書を読む。進講二日目の夜を描いたのが③である。仲忠は、春宮のところに来た藤壺の手紙を見て動揺し、「僻読み」を多くするが、それを朱雀帝に指摘され、気を取り直して読みなおしたところ、それは、「声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし」であった。

④は、進講三日目の夜から四日目の暁までを描いた場面である。后の宮が進講を聞きにきたために、朱雀帝は仲忠に合図して、よりいっそう、小さな声で読ませている。后の宮から、「講師は、心せよ」との言葉がかかるが、朱雀帝は「これは、誰も誰も読みつべけれど、そゑに異人の読むまじき由のあれば、まづ読まするぞ」と言ったため、仲忠は、「少し高く読む。所々は、声にも読」む。これを后の宮は、憎たらしく思いはするものの、理解はできるとあり、それ以外の人は理解ができない、とある。

このように見てくると、朱雀帝の要請によって行なわれることとなった俊蔭の書物の進講は、朱雀帝、春宮、春宮の同母兄弟五の宮と、全て、皇統に関わる人物が聴衆として集められ、それ以外の人物の介入が許されていないことがわかる。唯一、后の宮だ

けが、仲忠が「声にも読」んだ際に内容を理解しているが、この后の宮こそが、春宮と五の宮の母であるので、皇統に密に関わる人物として考えて良い。

五・〈学問〉の〈系譜〉

前節において、仲忠による朱雀帝をはじめとした皇統関係者たちへの進講を見てきた。この仲忠の進講については、伊藤禎子が、声によって行なわれている学問であると指摘している(注21)。確かに、学問が声によって行なわれているということは重要だが、ここでは、別のことに着目したい。前節の③で、仲忠の声が大きくなったという記述があるが、その声が涼に聞えたという場面がこの後にある。

殿上には、源中納言・右大弁・中将、異人もいと多かり。……源中納言、大将の君に申し給ふやう、「などか、君は、昔より、いかばかりかは契り聞こゆる、『この御文を承らむ』とて、妻の懐を捨てて、かく寒きに、震ふ震ふうちはへ候ふ効なく、一文字をだに聞かせ給はぬ。少し高くだにやは仕うまつり給はぬ」。大将、「仰せ言あれば、高くは、え。そがうちに、苦しう侍れば、声も出でず」。中納言、「さて、いかで、昨夜は、ひととは、雲を穿ちて、空には上りし。このぬしこそは、『わが世の末の博士』とは思ひつれ。……」。(蔵開・中　五四四～五五五)(注22)

一部の許された人間しかいない空間で、仲忠による俊蔭の書物の進講は行なわれていたが、その場からは排除されていた涼にもただ一度のみ、仲忠の声は聞こえていた。俊蔭の書物の進講は、琴と同様、公開と非公開の狭間にあって、人々の関心を惹き寄せている。そのように考えると、この、進講の場とは、規模こそ違うものの、楼の上における秘琴披露の場と同様、学問披露の場である

と言える。

このように、「清原氏」を始祖とした〈系譜〉（注23）と、その〈系譜〉が継承してきた物を求める皇統を担う者たちがあり、彼らが「清原氏」の〈系譜〉を求めることによって周囲の人物たちも〈系譜〉の存在を知り、〈系譜〉を担う者たちが持つ物や技法を求めてゆくという構造は、〈琴〉だけではなく、〈学問〉でも同じことであると言える。論者は、これを〈学問〉の〈系譜〉と考えたい。そして、蔵を作り、そこに書物を納めて鎖をさしたのは俊蔭だが、〈学問〉の〈系譜〉の始祖は、俊蔭の両親であるということに注意しておきたい。物語の「主人公」として位置付けられる藤原仲忠は、藤原氏でありながらも、〈琴〉と〈学問〉という、清原家を象徴する二つの系譜を担っているのである。

注1　『うつほ物語　全　改訂版』の注には、「「式部大輔」は、式部省の次官で、儒者で、御侍読をした者の中から選ばれた。」「左弁官局の長官。『職原抄』には、「文才なき人これに居らず」とある。」とある。

注2　三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉――繰り返しの方法をめぐって――」（『東横国文学』一五、一九八三年三月）

注3　大井田晴彦「仲忠と藤壺の明暗――「蔵開」の主題と方法」（『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年。一九九八年二月・一九九八年三月初出）。この他に、蔵開きに関係する大井田晴彦の論文として、「蔵開巻梗概」（『国文学』一九九八年二月）、「「国譲」の主題と方法――仲忠を軸として――」（『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年）、「『うつほ物語』国譲巻の主題と方法――仲忠を軸として――」（『国語と国文学』一九九八年三月）などが挙げられる。

注4　伊井春樹「俊蔭の家集と日記類――『うつほ物語』蔵開巻の意義」（『中古文学の形成と展開――王朝文学前後』一九九五年四月）

注5　猪川優子「『うつほ物語』宮の君と小君――次世代の確執――」（『古代中世国文学』一八、二〇〇二年一二月）

注6　〈蔵開き〉については、序章の注参照。
注7　前掲の三田村論に同じ。
注8　前掲の大井田論に同じ。
注9　伊藤禎子「書物の〈音〉」『うつほ物語』と転倒させる快楽』(森話社、二〇一一年。二〇〇七年一二月初出)
注10　〈琴〉については、序章の注参照。
注11　前田家本では「……おとど、「今から(う)も、はた」とて笑ひ給ふ。……声、いとほこりかに、にぎは(はゝ)しきものから、また、あはれにすごし。……尚侍のおとど、御床(みゆる)より下り給ひて、琴を取り給ひて、曲一つ弾き給ふ。……中納言の御手(見て)は、面白く、凝(ちゝ)しきまで、」(九三九～九四三)となっている。
注12　前田家本では「右(左)大将よろぼひて入り給へば、中納言、しどろもどろに酔ひて、西の御方に御送りして、「酒を食べ(たゝへ)て、食べ酔ひて」と、いと面白き声に歌ひて入りおはすれば、女御の君、いぬ宮(女君・大君)掻き抱きて、御局へ入り給ひぬ。」(九七六)となっている。この時の左大将は源正頼であり、正頼が俊蔭の娘のいる西の御方に入っていくことはないため、「左大将」は「右大将」とするべきである。「酒をたゝへて」は「酒を讃へて」として特に問題はないが、『うつほ物語　全　改訂版』の注にあるように催馬楽の「酒を食べて」による表現だと考えると、「酒を食べて」とするべきであろう。「女君・大君」は、仲忠が女一の宮といぬ宮を掻き抱いて御局に入ったと解釈した場合、あるいは、女一の宮がいぬ宮を抱いて御局に入ったと解釈した場合、続く文章「中納言、入りおはして、宮の、鳥の舞見給ふとて、御帳の柱を押さへて立ち給へるを」と辻褄が合わない。この箇所について、女御の君が十の皇子を抱いて御局に入ったとするもの(塚本哲三、有朋堂書店、一九一八年・宮田和一郎『朝日古典全書』朝日新聞社、一九五一年)もあるが、河野多麻『日本古典文学大系』(岩波書店、一九五九年)の補注に従い、機転をきかせた仁寿殿の女御がいぬ宮を抱いて御局に入ったと解釈する。
注13　前田家本では「あるじのおとど、「いづ方か。(の)中納言の居給ふ座なる(の給さへ)や。誰をしるべ(人)にてか、正頼も侍らむ」。」(九八四～九八五)「いづ方の中納言のの給さへや」では意味が通じないため、『うつほ物語　全　改訂版』の校訂に従っ

た。「誰をしる人にてか」は、全く意味が通じないわけでもないため、このまま解釈しても問題ないと考えた。

注14　中嶋尚は「うつほ物語論(6)琴の族序説」(『東洋大学大学院紀要』三九、二〇〇二年)において、「あたかも京極旧庫を開いて貴重品の発見を見たことと、仲忠家における一女子を儲けた慶事とが、どこかで連なっているようにさえ受取れる」と述べている。

注15　『新編日本古典文学全集　うつほ物語』(中野幸一校注、小学館、二〇〇一年)は、「木深くも籠られたりつるかな」について、「奥深い、の意から転じて、ひっそりと目立たないさま。仲忠が北山のうつほに幼児期を過した過去を念頭に置いたものか」と注する。

注16　〈学問〉については、序章の注参照。

注17　この箇所の異同は第五章の注で確認しているため、前田家本との異同は載せない。

注18　前田家本では「手づから点し(天三)、読みて聞かせよ」……七、八枚の書なり(や)。果てに、一度は訓、一度は音(こゑ)に読ませ給ひて、」(一〇六二)となっている。「天三」では意味が通じないことから、「点し」と校訂する説に従った。「也」は「や」とも「なり」とも読めることからくる間違いと取り、また「や」では不自然なため、ここも「なり」のままで解釈した。「こゑ」ではよく分からないが、その直前が「訓」となっていることから、「音」と解釈する説に従う。

注19　前田家本では「声(うへ)うち静めて」(一〇七六)となっている。「うへうち静めて」では、朱雀帝が誦んだことになってしまうこととから、「声」と校訂する説に従った。

注20　前田家本では「后の宮、「内裏(たち)こそ、聞かせ給はざらめ。講師は、心せよ」……上、「……そゑに(そらに)異人の読むまじき由のあれば、まづ読ま(さ)するぞ」」(一〇九〇)となっている。

注21　前掲の伊藤論文に同じ。

注22　前田家本では「殿上には、源中納言・右大(中)弁・中将(中納言)、異人もいと多かり。」(一〇八二)となっている。諸注釈は一貫して「右中弁」を「右大弁」と校訂し、藤英のこととしている。しかし、「中納言」については、そのまま「中納言」とし、

源忠澄とするもの（塚本哲三、有朋堂書店、一九一八年・宮田和一郎『朝日古典全書』朝日新聞社、一九五一年・河野多麻『日本古典文学大系』岩波書店、一九五九年）と、「中将」に校訂し、良岑行正だとするもの（原田芳起、角川書店、一九六九年・室城秀之、おうふう、一九九五年、改訂版二〇〇一年・中野幸一『新編日本古典全集』小学館、一九九九年）がある。この場面の後に仲忠との会話に参加するのが「右大弁」と「中将」であること、また、忠澄は「右の大殿の君達」にも該当することから、「中将」と校訂することに異論はない。ただし、ここで敢えて正頼の長男である忠澄の名前を出すことで、正頼一族も仲忠の進講に興味を持ったことを強調した表現だと捉えても良いように思う。

注23　〈系譜〉については、序章の注参照。

第七章　清原家の〈学問〉の進講

『うつほ物語』「俊蔭」巻では、清原俊蔭の父が式部大輔で左大弁であったこと(注1)、また俊蔭自身も漢学の才があったために遣唐船に乗ることになったことが語られる。しかし、俊蔭が異郷から帰ってきてから後、物語前半中には、清原家の学問に関する記述は出てこない。物語後半の最初の巻である「蔵開・上」巻では、俊蔭の孫にあたる藤原仲忠が俊蔭ゆかりの地である三条京極邸を思い起こし、そこを訪れて敷地内にあった蔵を開く。仲忠が蔵を開いてからは、清原家が学問の家であることが再度語られ、ことさら強調されるようになる。このことは、仲忠に、自身が清原一族の人間であり、学業を受け継ぐべき存在であると認識させる(注2)。

また、〈蔵開き〉(注3)で出てきた書物を用いて、朱雀帝や春宮、春宮と同腹の五の宮の御前で仲忠が行なった進講(注4)は、「あて宮でさえ獲得できなかった琴の妙技の価値の下落を、辛うじて喰いとめ、上昇さえさせ」(注5)、「俊蔭一族と朝廷との過去のかかわりを問いなおさずにはおかない」ものである(注6)。

このように〈蔵開き〉をしたことで清原一族であることを認識した仲忠は、「楼の上」巻において秘曲伝授および秘琴披露をし、これをもって物語は終わる。楼での秘曲伝授、秘琴披露においては〈琴〉(注7)の「音」が重要である。しかし、音は後に残らず、視認することができないため、音そのものによって系譜を伝えることはできない。ここにおいて、〈蔵開き〉によって出てきた書物、中でも俊蔭の日記が意味を持ってくる。俊蔭の日記には、異郷での秘琴の入手と秘曲の習得がこと細かく書かれていた。俊蔭の日記によって秘琴の出所が裏付けられて初めて、秘琴披露は意味を持つ。つまり、秘琴披露をするためには秘琴の出所および秘曲の習得を証明する必要があり、その証明として俊蔭の日記があるのだ。このことにより、「蔵開・上」巻において仲忠が三条京極邸を思い起こし、蔵を開くことの最大の意味が、俊蔭の日記を入手することにあるとわかる。

だが、俊蔭伝来の蔵から俊蔭の日記を中心とした書物が出てきたというだけでは、秘琴披露の裏付けにはならない。書物を秘

琴披露の裏付けにするためには、確かに清原家の書物であるということ、また、その存在そのものを公開し、証明する必要がある。「蔵開・中」巻において、俊蔭の日記は、俊蔭の父や皇女である俊蔭の母が書いた書物とともに朱雀帝の御前で進講される。ここにおいて、俊蔭・俊蔭の父母の書物が「清原家のもの」であるという証明が朱雀帝によってされたことは確かである。では、朱雀帝への進講によって、清原家の書物はどのように位置付けられたのであろうか。また、仲忠に清原家の書物を進講させる契機を作ったのは朱雀帝であるが、朱雀帝は、進講によって何を得たのか。本章では、この二つの視点から、清原家の書物の進講について考えてゆく。

一・「一氏族の書物」という枠を超えた清原家の書物

「蔵開・中」巻において、朱雀帝・春宮・五の宮の御前で仲忠が清原家の書物を読むことは、本文では「書」(蔵開・中　五三五、楼の上・下　九一三)「講」(国譲・下　八一七)などと表記され、また仲忠は「講師」(蔵開・中　五四八)と呼ばれる。また、この他にも、「国譲・下」巻の詩宴で仲忠は講師を任せられる。その一方で、「沖つ白波」巻では、「史記の講書」「かの講書」(沖つ白波　四五九)と、「史記」は「講書」と表記される。『うつほ物語』において、「講書」という言葉が出てくるのは、「沖つ白波」巻の二例のみである。

「講書」を行なう者は「講師」と呼ばれるが、「講」「書」を行なう仲忠も「講師」と呼ばれる。では、「講」「書」が「講書」と書かれることはないのはなぜか。これは、単に、『史記』が漢文であるのに対し、清原一族の「書」が漢文だけではなく仮名によるものが多いからではないだろうか。仮名によって書かれた日記や和歌集を天皇の御前で読むことを「講書」とは呼べず、しかし、『史記』の進講と同等のものとして扱うべく、仲忠を「講師」と呼んでいるのだ。このように考えると、仲忠の進講は、「講書」とは呼べないものでありながらもそれと同等の扱いをされ、さらにその禄が「貞信公」の石帯であるということから、清原家の書物は、『史記』と同等かそれ以上のものとして位置付けられているといえる。

また、仲忠の進講を直接聞いていたのは、朱雀帝・春宮・五の宮であり、この他に、承香殿の女御や后の宮、更衣や「異人」といった人々が入れ換わりいるが、すぐ近くには多くの人々が参集していた。

上達部・殿上人あり。大将の、仰せにて、御書講ぜさせ給ふに、参り集ひ給へり。されど、「人に聞かせじ」とて、高くも読まず、御前には人も参らせ給はず。誦ぜさせ給ふばかりをぞ、わづかに聞きける。(蔵開・中　五三五)

進講が行なわれた場にはいないものの、進講が行なわれるにあたって上達部や殿上人が集まっているのだ。「上達部・殿上人」の詳細は、「源中納言・右大弁・中将、異人もいと多かり。右の大殿の君達、あまた」(蔵開・中　五四四)と、後に書かれている。だが、この人々は殿上にいるのみで、進講の行なわれている「昼の御座」には入ってこられない。それは、学問の公開の論理が琴の公開の論理(注8)と同じものであって、非公開の論理に貫かれていることを意味するのだろう。さらに、進講が行なわれた後には、殿上で饗宴が行なわれている(蔵開・中　五四四～五四七)。進講の場にはいないものの、声がわずかに聞えるほどすぐ近くに上位の人物たちが集まっていること、俊蔭・俊蔭の父の日記の進講の後に行なわれた飲食がただの飲食風景ではなく饗宴を描いたものであることから、清原家の書物の進講は、「清原」という一氏族の書物の枠を超えた、大々的な催しであったといえる。

二・清原家の書物の進講における春宮

一方、清原家の書物の進講を実際に聞いていた人物たちの反応はどうだったのか。仲忠による進講は、初日の夕暮れまでは朱雀帝と仲忠の二人だけで、俊蔭の集と俊蔭の父の集(注9)を読んでいる。この時、仲忠が「何ごとし給ふにも、声いと面白き人の誦じたれば、いと面白く悲し」かったので、「聞こし召す帝も、御しほたれ」なさったとあり、また、仲忠自身も「涙を流しつつ」誦んでいる

（五三五）。夕暮れに休憩し、夜になってから進講が再開される。この時に、后の宮腹の五の宮が加わり、しばらく誦んでいると、「女御・更衣」が来て、宿直の承香殿も参上している。朱雀帝は、仲忠の誦む声に合わせて琴を弾き、俊蔭の話をする。この日の進講は丑の刻まで続く。

進講二日目は、朝から朱雀帝・五の宮・仲忠の三人で行なっている。朱雀帝は、五の宮を使いにして春宮に進講に参加するように言う。春宮は午前の遅い時間（巳の刻）に返事をし、正午頃に参上している。だが、これより前に宿直所に下りたらしい仲忠は正午には参上しなかった。ここで注意したいのは、春宮が参上したことを伝えられた仲忠は即座に進講を行なうべく参上することはなく、「暗きほどになりて」（五四一）さらにそこから食事をした上で参上しているということだ。朱雀帝から進講の要請があった際には数日で準備を整え応じているのに対し、春宮が参上してからの仲忠の動きはあまりよろしくない。あて宮を入内させて以降、春宮の行動には難がある。妻女一の宮の元へ帰りたいという気持ちとは別に、やはり、あて宮を入内させた上、その後の行動も褒められたものではない春宮への、仲忠の感情は良いものではないようである。

こうして、二日目の夜からの進講は、朱雀帝・春宮・五の宮・仲忠の四人で行なわれることとなる。しかし、春宮は、朱雀帝が「あからさまに入らせ給へる」間に「『今宵は、書聞け』とのたまへば、心にもあらでなむ。」（五四一）と藤壺に文を書き、同じく朱雀帝が「傍目し給へる間」（五四一）に藤壺からの返事を読むという状態で、集中していない。この場面までに誦んでいたものは俊蔭の集であり、続いて俊蔭の父の集が出される。その場面を次に掲げる。

夜一夜、面白き句ある所を誦ぜさせ給ひて、御琴どもに合はせさせ給ふ。暁方に、いと面白き所あり、大将に誦ぜさせ給ひ、我も誦じ給ふ。五の宮に、「誦ぜよ」とのたまへば、ともかくものたまはで、うち出でて誦じ給ふ声、いと面白し。春宮、誦し給はず。（五四二）

この記述から、夜に始めて暁方までずっと進講が行なわれていたことがわかるが、重要なのは、俊蔭の父の集の面白い所を朱雀

帝が仲忠に誦ませ、自身も誦み、五の宮も声良く誦んだにも拘わらず、春宮だけが誦んでいないということである。進講の場にいるのは、仲忠と、皇統に直接関係のある朱雀帝・春宮・春宮の同母兄弟の五の宮である。このことから、仲忠の進講の重要性および皇統への関わりが読みとれるのだが、「誦む」という行為において、ただ一人それをしない春宮は、一見すると皇統から外れた人物のように見える。その一方で、「ともかくものたまはで」誦んだ五の宮が、春宮を押し退けて皇統に入り込む可能性も浮上してくるのだ。ここには、次期天皇の座をめぐる人間模様が仄見えている。

進講を始めてから三日目の朝、仲忠は殿上にいて、饗宴を行なっている。この際、朱雀帝からはやはり召しがあるが、仲忠は「空酔ひをし、空言をして」(五四七)参上しなかった。正午近くになってからやっと参上し、俊蔭の集を深夜(亥の時)まで誦んでいる。

俊蔭の集を誦んだ後は、俊蔭の母の和歌集を開けることとなる。この集は、様々な書体で書かれており、「歌・手、限りなし」(五四八)と評価される。そして、「四所さし向かひて、人に聞かせで聞こし召」(五四八)している。俊蔭の集を誦んだ際には朱雀帝の目を盗んで藤壺と文の遣り取りをし、俊蔭の父の集を誦んだ際には他の人物たちが「誦」んでいる中、一人だけ誦まなかった春宮が初めて興味を引かれている様子が描かれているのだ。さらに、「聞こし召し知りたる限りは、上も春宮も泣」(五四八)いており、これまで進講に興味すら持たなかった春宮が、涙している。この違いは何であろうか。この場には、后の宮もおり、朱雀帝は仲忠に目配せをして、女性たちにはわからないように「声にも」誦ませている(注10)。このことから、俊蔭の集、俊蔭の父の集よりもさらに、秘すべきものとして俊蔭の母の和歌集が位置付けられていることが窺える。ただし、秘すべきものであるということがそのまま春宮の興味を引くものとは言えないため、他の原因が考えられる。

かくて、暁方になりて、上、「かかる、理なり。この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。院の御姉の、女御腹なりけり。さりける人の、さる折々にし置きたりけることなれば、かくいみじきなり。……」(五四八)

これは、俊蔭の母の和歌集を誦んだ直後の場面である。「俊蔭」巻の冒頭は「昔、式部大輔、左大弁かけて、清原の大君、皇女腹に

男子一人持たり。」であり、俊蔭の母が皇女であったことは述べられているが、俊蔭の母への言及はこの一度きりであり、どのような人物であったかについては、この場面が初見となる。春宮が興味を持ったのは、俊蔭の母が皇女であったためではないか。このように見てくると、皇統とは直接関係のない俊蔭の父、皇女の子ではあるが官・位を辞した俊蔭(注11)の集の際には涙せず、祖父嵯峨の院の異母姉妹の和歌集の時のみ涙を流す春宮の行動は、一見皇統から外れた人物の行動に見えていたものの、実は皇統に最も近い人物としての行動だといえる。

しかし、朱雀帝は、春宮に難があるとみている。実際に、俊蔭の母皇女の和歌集を誦み、俊蔭の日記を誦んで夜が明けると、朱雀帝は春宮に対し、為政者としての教訓を授ける。その際に、「この朝臣こそあめれ。それは、行く先の御後見すべき人なめれば。」(五四九)と、進講を行なった仲忠が先々重要な位置に付くことを述べ、また「世保ち給ふべきこと近くなりぬるを、平らかに、そしられなくて保ち給へ。」(五五〇)と、春宮への譲位が近いことを述べながら、春宮を正しているのだ。

朱雀帝にとって、清原家の書物の進講は、藤原仲忠という有能な臣下の重要性を春宮に説き、また、日頃の春宮の行動を諫める場となっているといえる。

三・清原家の書物の進講と史実の進講

楼での秘琴披露をするにあたり、〈琴〉の一族の系譜を示す必要がある。この時、清原家の書物は有効な裏付けとなりうるが、それが確たるものとなるためには、「進講」が必要であった。また、朱雀帝が春宮の行動を諫め、譲位の意向を伝える場として「進講」の場を選んでいる。このような重要な場となる「進講」とは何か。そこで、歴史上の進講を見てみることとする。『うつほ物語』が成立したと考えられる十世紀末までに行なわれた進講に関わる資料を見てゆく。なお、史実の進講の一覧はこれまでの研究史にはない。独自で調べた結果、史実の進講は、次に挙げた表のようになる。

〈表・十世紀末までの進講一覧〉

	年	開始月日	講師	書物	場所
①	仁和四年	十月九日	大学博士善淵愛成	周易	—
②	昌泰二年	五月十一日	式部少輔藤原菅根	史記	—
③	昌泰三年	六月十三日	文章博士三善清行	史記	—
④	延喜四年	八月二十一日	前下野守藤原春海等	日本紀	宜陽殿
⑤	延喜十六年	七月十三日	博士八多貞紀	春秋穀梁伝	大学寮
⑥	延喜十九年	十一月是月	文章博士菅原淳茂	漢書	—
⑦	延長三年	五月八日	伊予権守橘公統	史記	大学北堂
⑧	承平五年	十一月是月	文章博士大江維時	文選	大学北堂
⑨	承平六年	十二月八日	阿波介矢田部公望	日本紀	宜陽殿
⑩	天慶二年	四月二十六日	矢田部公望	日本紀	宜陽殿
⑪	天慶五年	八月三十日	大学頭大江維時	洛中集	清涼殿
⑫	天暦三年	十月十六日	文章博士紀在昌	史記	—
⑬	天暦年中	—	図書頭藤原篤茂	漢書	—
⑭	康保二年	八月十三日	摂津守橘仲遠	日本紀	宜陽殿

右に挙げた表には、法華八講などの僧侶が行なうものは含まない。また、用例が康保二年までなのは、康保二年以降で『うつほ物語』が成立したと思しき十世紀中に行なわれた進講が見当たらなかったためである。このことを踏まえて、以下に詳細を見てゆ

く。

①仁和四年十月九日の進講(注12)は、二十二歳の宇多天皇の命によって行なわれている(注13)。宇多天皇は、仁和三年八月二十六日に立太子し、同日に父光孝天皇が崩御したため践祚し、十一月十七日に即位した。それから一年もしないうちに進講が行なわれているということになる。また、講師を務めた善淵愛成(よしぶちのちかなり)(六人部(むとべ)愛成)は、仁和二年に大学博士となった人物である。善淵愛成はこの時、正六位であるにも拘わらず、昇殿を許されている(注14)。さらにこの時、御読書の間でも公卿が昇殿を許されたとある(注15)。

②③⑦⑫はいずれも「史記」を講じている。②昌泰二年五月十一日の進講は、醍醐天皇の命によって行なわれている。講師を務めた藤原菅根はこの時従五位上で式部少輔と文章博士を兼任していた。また、指令を下したのは右大臣菅原道真である(注16)。③昌泰三年六月十三日の進講も醍醐天皇の命によって行なわれている。講師の三善清行は、進講の前の月の十五日に文章博士となっている。またこの進講は、②の藤原菅根が読み残した箇所を読むようにとのものであった(注17)。⑦⑫については、進講を行なったという記述が『日本紀略』にあるのみで、詳細がわからない。これらに共通することは、進講がいつ終わったかが書かれていないうえ、「大学北堂」で行なったという⑦以外は場所も書かれていないということである。

⑥⑬では「漢書」を講じている。⑥延喜十九年十一月には、菅原道真の五男である文章博士菅原淳茂による進講が行われている。なお、これが終わったのは三年後の延喜二十二年の冬であり、竟宴は翌延長元年三月七日のことであった(注18)。また、⑬の記事には詳細が載っていない。延喜十九年以前に『漢書』の進講が行なわれていないこと、延喜十九年の進講開始と延喜二十二年の進講終了の詳細な日付が不明なことや、⑬の記事の正確な日付が残っていないことから、『漢書』は天皇にとってさほど重要なものではなかったと思われる。

④⑨⑩⑭はいずれも『日本紀』についての記述である。ここで注意したいのは、日本紀を講ずる場が「宜陽殿」であるということだ。④延喜四年八月二十一日には、醍醐天皇の命で日本紀の進講が行なわれている。『釈日本紀』によると、この進講は宣陽殿の東廂で行なわれた(注19)。ここには、博士として前下野守藤原春海、尚復として紀伝学生谷田部公望・明経生葛井清鑒、その他

に三善文明などがいた。また、この進講は、延喜六年（九〇六）閏十二月十七日に終わっており、この時藤原春海は、大学頭となっている。さらに、侍従所において竟宴が行なわれている（注20）。また、延喜四年の進講では尚復として参加していた谷田部公望を講師とした宜陽殿における進講については⑨⑩の記述が残っている。ただ、承平六年は十二月八日に講じたことしか書かれていない。これは、「開講後に、天慶二年の東西の兵乱のために一時中絶した」ためである（注21）。しかし、⑩の天慶二年四月二十六日以降は、次に示したように何度も進講が行なわれ、その月日が詳細に書かれている。

四月廿六日、丁酉、諸卿参陣、但中納言師―、九、参議是茂、淑光等、就日本紀講所
四月廿八日、己亥、諸卿就日本紀講所、
五月三日、申辰、また上卿著日本紀講所、
五月十日、辛亥、上卿著日本紀講所、
五月十九日、庚申、また上卿已下著宣陽殿東廂日本紀講所、
五月廿二日　癸亥、又公卿就日本紀講所、（注22）

これらの日時に、具体的に誰が進講を聞きにきていたのかは『日本紀竟宴和歌』に詳しい。また、⑭康保二年八月十三日の記述でも、宜陽殿で日本紀を講じている。この進講の準備の記述もあり、康保一年二月二十五日には「散位正五位下橘仲遠」に日本紀を講ぜさせるべく、大学寮に尚復学生を進めさせたとあり、また、同年三月九日には、陰陽寮が日本紀を講ずべき日時を述べている。

⑤延喜十六年七月十三日には、博士で従五位上の八多貞紀が春秋穀梁伝を大学寮の本堂で講じている。

⑧承平五年一一月には、文章博士大江維時が、文選を大学北堂で講じている。なお、この進講は天慶二年（九三九）一〇月に終わっていることも伝わっている。⑪天慶五年八月三〇日には、大学頭となった大江維時が清涼殿で、洛中集を講じている。清涼

殿で行なわれる進講は、右記した進講の中では珍しい。

①から⑭までを見てきたが、この中で、日本で作成された書物は『日本紀』のみである。また、進講の場を見てみると、「清涼殿」「宣陽殿」といった内裏の中で行なわれた進講は『洛中集』『日本紀』の進講のみである。日本で作成され、かつ内裏の中で行なわれたという共通項を、『日本紀』の進講と仲忠の進講は持っている。よって次節では、『日本紀』の進講について見てゆく。

四・『日本紀』の進講と清原家の書物の進講

『日本紀』の進講については、その竟宴も含め、先行研究が多いため、以下にまとめておく。『釈日本紀』の開題には「日本紀講スル例」とあり、ここには養老五年・弘仁三年・承和六年六月一日・元慶二年二月二十五日・延喜四年八月二十一日・承平六年十二月八日・康保二年八月十三日の七回にわたり、日本紀の進講があったことがわかる(注23)。坂本太郎(注24)は、この七例のうち、養老・弘仁年間の進講については、資料が少ないながらも確かにこの年に日本紀の進講があったとしている。しかし、承和六年六月一日の進講は、『続日本後紀』承和十年六月戊午朔と同十一年六月丁卯(十五日)の記述から、承和十年の間違いであると指摘する。承和十年は弘仁三年からちょうど三十一年目にあたる年で、「このの ち講書は大体三十年ほどを間隔として開かれているが、その初めの例を開いたものとして意義が深い」。この承和の進講は、宣陽殿ではなく「建春門ノ南腋ノ曹司」で行なわれた。元慶二年二月二十五日の進講は『三代実録』に詳細が載っており、一度取りやめた時期はあるものの、藤原基経が熱心に聴講したため、三年余りをかけての念入りの進講となったのだろうと坂本は述べる。また、元慶の進講は、初めて竟宴が行なわれた進講でもあった。「これは漢籍講読のさいの慣例をここに移したものである。漢籍の場合は詩を賦したが、この場合は和歌を詠じた」。またこの時の和歌は三首ほどしか残っていないが、歌人は親王をはじめ三十人程度いたと「日本紀講例」にある。延喜四年八月二十一日から始まった進講と承平六年十二月八日から始まった進講の竟宴では、やはり親王をはじめとした四十人程度の歌人がいたことがわ

かっている。このうち、承平六年十二月八日から始まり、一度乱のために中止して、天慶二年から再開し、天慶六年に終わった進講の竟宴の記事が『日本紀竟宴和歌』に詳細に載っている。これを見ると、この竟宴にて和歌を詠んでいるのは、藤原利博、秦敦光、橘仲遠、葛井清鑒、三善文明、三統公忠、大江朝望、源公輔、藤原近相、平齊章、源泉、源俊、菅原在躬、橘実利、紀在昌、藤原有相、源治、藤原師尹、小野好古、大江朝綱、藤原俊房、大江維時、源公忠、源仲宣、源由道、藤原有聲、源國淵、藤原在衡、源庶明、伴保平、源高明、源清蔭、藤原師輔、藤原實頼、重明親王、矢田部公望である。親王とは別に、正七位から正三位までが列席していることが分かる。そして最後に、康保二年八月十三日から始まる進講があるが、ここでは竟宴が開かれておらず、この後に進講は行なわれなくなる。

以上のことから、『日本紀』進講は、三十年周期で内裏にて行なわれること、親王をはじめとした多くの人々が集まること、和歌を詠ずる饗宴が行なわれることがいえる。このうち、三十年周期であるということ以外は、清原家の書物の進講と同じである。また、『日本紀』進講を行なうために、たとえば誰を尚復学生にしたのか、『日本紀』を講ずべき日時はいつかといった、準備も大々的に行なわれている。同様に、『うつほ物語』でも進講が開かれるまでの経緯として、〈蔵開き〉があり、〈蔵開き〉によるいぬ宮誕生があり（注25）、いぬ宮誕生による仲忠の右大将昇進がある。そして、右大将昇進の喜びの報告を朱雀帝に行なった際に、仲忠は〈蔵開き〉によって出てきた清原家の書物の話をしているのだ。仲忠の進講までのこれらの事柄は、進講の準備として捉えることはできまいか。これらのことから、清原家の書物の進講は『日本紀』進講を踏まえているといえる。

では、そもそも『日本紀』の進講はなぜ行なわれるのか。長谷部によると、それは「確立した権威の固定化」（注26）のためだという。すなわち、『日本紀』進講は、天皇制の根幹に関わるものであり、その天皇の御代の正当性・権威を確立するものである。しかし、これをそのまま『うつほ物語』の進講に転用することはできない。なぜなら、そこには、固定化すべき「確立した権威」がないからだ。では、仲忠の進講はなぜ行なわれるのか。

先に見てきた通り、清原家の書物は進講によって一氏族の書物という位置付けを大きく越え、また、春宮は進講という場において、朱雀帝から為政者としての教訓を授けられた。ここで、清原家と春宮のそれぞれが確立するべき「権威」とは何か。それは、

前者は清原家の学問の家としての権威、後者は、春宮の次期天皇としての権威である。春宮の権威を先に見ておく。「あて宮」巻において、あて宮が春宮に入内することが決定した際に、出家してしまった者（仲頼・実忠）、財産に火を放つ者（三春）、天皇に直訴する者（滋野）など、政治情勢を大きく揺るがさんとする動きがあった。原因はもちろんあて宮の入内であるが、元凶は春宮である。あて宮求婚者は数が多く、仲頼・実忠・三春・滋野以外の者は都に残ったが、やはり朱雀帝からすれば、自身が譲位した後のことが心配になる状況である。この状況を脱するために春宮の権威を確立する必要があることは確かだ。しかし、春宮の権威の確立のみが目的であるならば、史実の進講のように、博士を呼び、多くの臣下を集めて『史記』や『洛中集』などといったものを講ずればよい。それに対し、清原家の学問の進講は『日本紀』の進講と同様な体裁をとっており、内容も『日本紀』と同様、天皇家と関わりのある人物たちの個人史である。また、仲忠に進講をするようにと命じたのは朱雀帝であったことを考え合わせると、春宮の権威を確立するために仲忠の進講が必要であったということにはならないだろうか。

この論理を検討する準備として、もう一つの可能性である、清原家の学問の家としての権威の確立を考えてみる。仲忠が〈蔵開き〉をするまで、清原家が学問の家であったことは忘れ去られている。忘れ去られていた学問の家が、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物によって再来する。「俊蔭」巻を見ると、俊蔭の漢学の才の素晴らしさについては書かれているものの、俊蔭の父は式部大輔で左大弁であったことのみが語られ、俊蔭の母については漢学についてはもちろん、その他のいずれの才についても言及されていない。しかし、朱雀帝の要請により、仲忠が持ちだした書物は、俊蔭・俊蔭の父の日記、俊蔭の母の歌集であった。そして、俊蔭の母の歌集を誦んだ際に、朱雀帝により、清原家が天皇家と深い関わりのある家だということが示される。このことにより、清原家の学問の家としての権威が確立される。清原家の学問の家としての権威が確立されると、清原氏の血を引き、進講を行なった仲忠の権威も確立する。その仲忠を臣下とすることは、天皇家の、ひいては春宮の権威の確立へと繋がっていく。

五・「献家集状」と『日本紀』進講を踏まえた清原家の書物の進講

「楼の上・下」巻で、三条京極邸において秘琴披露が行なわれて、『うつほ物語』は終わる。神田は、「楼の上」巻を「音の現前でなく、大演奏会にむけて都中の人々の気分をいやましに高めていくことを問題にして」いると述べる（注27）。人々の気分が高まるのは、素性・系譜が明らかになっている「清原家」が秘匿してきた〈琴〉の披露だからである。そして、〈琴〉の系譜を明らかにしたのは俊蔭伝来の蔵から出てきた書物である。

しかし、清原家の書物が出てきただけでは、人々が系譜の存在を認めることはない。ゆえに、朱雀帝への進講によって、清原家の書物が正当なものであることを証明する。既に言われていることだが、この進講は、菅原道真の「献家集状」を思い起こさせるという（注28）。仲忠が進講で誦む書物が祖父俊蔭とその父母の書や集であることを考えると、たしかにその通りであろう。だが、『うつほ物語』では、「献家集状」を基にするだけでは足りず、『日本紀』進講のように帝に進講することによって、清原家の書物の正当性を盤石なものとしているのだ。つまり、秘琴披露の準備として「清原家」のものでしかなかった書物を正当なものとして位置付けるべく、『日本紀』の進講の形態を採った進講が「蔵開・中」巻において行なわれたのだ。その一方で、朱雀帝が、問題を多く抱える春宮に対し教訓を与え、皇女の曾孫にあたる仲忠を後見として据えるというように、この進講は、天皇家の権威の確立も支えるものとなっている。

以上をまとめると、『うつほ物語』の仲忠の進講は、史実の『日本紀』の進講をふまえているがゆえに、清原家の学問の家としての権威付けと、朱雀帝の次の世の安定を図るものとなっている。また、「清原家のもの」でしかなかった俊蔭・俊蔭の父母の書物は、史実の『日本紀』の進講と重なることにより、その正当性が証明される。これにより、清原一族が皇族の血を引くこと、また、俊蔭一族に伝わる秘琴が、確かに俊蔭が異郷から持ち帰ったものであることが裏付けられ、「楼の上」巻の秘琴披露へと繋がっていくのである。

注1　『うつほ物語　全　改訂版』(室城秀之、おうふう)の注には、「「式部大輔」は、式部省の次官で、儒者で、御侍読をした者の中から選ばれた。」「左弁官局の長官。『職原抄』には、「文才なき人これに居らず」とある。」とある。

注2　三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉―繰り返しの方法をめぐって―」(『東横国文学』一五、一九八三年三月)、大井田晴彦「仲忠と藤壺の明暗――「蔵開」の主題と方法」(「俊蔭一族復興――「蔵開」における〈書物〉の力」の主題と方法」『書物と語り(新物語研究)』五、一九九八年三月、「うつほ物語巻々論(梗概付)第二部」『国文学』一九九八年二月)(『うつほ物語の世界』、二〇〇二)、大井田晴彦「蔵開巻梗概」(『国文学』一九九八年二月)、大井田晴彦「「国譲」の主題と方法――仲忠を軸として――」(『うつほ物語の世界』、二〇〇二年、「『うつほ物語』国譲巻の主題と方法――仲忠を軸として――」『国語と国文学』一九九八年三月)、伊井春樹「俊蔭の家集と日記類―『うつほ物語』蔵開巻の意義」(『中古文学の形成と展開―王朝文学前後』一九九五年四月)、猪川優子「『うつほ物語』宮の君と小君――次世代の確執――」(『古代中世国文学』一八、二〇〇二年一二月)などに指摘がある。

注3　〈蔵開き〉については、序章の注参照。

注4　先行研究において、朱雀帝・春宮・五の宮の御前で仲忠が清原家に伝わる書物を読む行為は「進講」もしくは「講書」と呼ばれる。『日本国語大辞典』によると、「講書」は「書籍を講義すること」、「進講」は「天皇、貴人の前で学問を講義すること。御前講義。」とあり、この場合は「進講」が意味としては近い。しかし、用例を見ると「講書」という言葉が平安時代から使用されているのに対し、「進講」という言葉は江戸中期から使用され始める。一方歴史書を見てみると「進講」という言葉が実際には仁和年間から使用されていることがわかる。よって、本論では、天皇の御前で行なわれる講義のことを全て「進講」という言葉で表す。

注5　前掲の三田村論に同じ。

注6　前掲の大井田論に同じ。

注7　〈琴〉については、序章の注参照。

注8　伊藤禎子「〈耳〉の音響」（『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇八年三月初出）

注9　おうふう頭注によると、俊蔭の集は古体の漢字、俊蔭の父の集は草書体で書かれているとある。また、俊蔭の父の集に関しては、「蔵開・上」巻に「父の日記せし一つ」（五二七～五二八）とあったが、ここでは実際に読んだ「集」で意味をとる。

注10　おうふうは、頭注にて「声」は漢字の音だろうが、仮名の歌をどのように読むのかよくわからない」としている。

注11　ただし、朝廷側から一方的に「治部卿かけたる宰相」（俊蔭　二一）にされている

注12　島田忠臣の『田氏家集』によると、この進講は、寛平元年十月九日に始まり同三年六月十三日に終わったとあるが、他の資料が仁和四年と伝えていること、また、先行研究――金原理「嶋田忠臣考」（『語文研究』二〇号、一九六五年）を参考にした――においても仁和四年で捉えていることから、本論でも仁和四年と捉える。また『康富記』（増補史料大成刊行会編『康富記　増補史料大成』臨川書店、一九六五年）には、「宇多御時読、博士善淵愛成、仁和四年十月十九日、以周易奉授天皇之日、敍正□中使右近少将源希衡命至廬、授其位記」とある。

注13　『日本紀略』（黒板勝美編『新訂増補　國史大系第十巻　日本紀略』吉川弘文館、日用書房、一九二九年）には仁和四年十月九日の記事に「癸酉。天皇始読二周易於大学博士善淵朝臣愛成一也。」とある。

注14　『釈日本紀』（卜部兼方著　狩谷棭斎校訂『続日本古典全集　釈日本紀・上』現代思潮社、一九七九年）には「或ハ召二非殿上ノ者一ヲ当日早且二蔵人奉レテ仰ヲ行事ス」とあり、その詳細が書かれている。

注15　『新儀式』第四「仁和四年。下二宣旨於左右近衛陣一。御読書間。公卿許二昇殿一者。」とある（『群書類従』）。

注16　『類聚符宣抄』（國史大系刊行會『国史大系　第27巻』吉川弘文館、日用書房、一九三三年）には、「右大臣宣。令下二従五位上行式部少輔兼文章博士藤原朝臣菅根一講中史記上者。　　昌泰二年五月十一日　　少外記小野保衡奉

同日仰二大学少允菅野君房一訖」とある。

注17　『類聚符宣抄』（前掲書）には、「被二右大臣宣一偁。令下二文章博士従五位下三善宿祢清行一。講中竟前文章博士藤原朝臣

菅根所二読遺一之史記上者。　　昌泰三年六月十三日　　大外記三統理平奉　　即日仰二大学少属時原有平一訖」とある。

注18　『本朝文粋』(國史大系刊行會『本朝文粋　国史大系第二十九巻下』(吉川弘文館、日用書房、一九四一年)には、「我君之馭二天下一也。憲二章六籍一。捜二獵百家一。留二玄覧於鳥策一。傾二清聴於蠹簡一。延喜十九年仲冬十一月。以二此書経一国之常典一。命二翰林菅学士一講レ之。……廿二年冬。篇軸漸盡。披授始畢。明年暮春。聊展二宴席一。」とある。

注19　『釈日本紀』(前掲書)

注20　日本紀竟宴については、梅村玲美『日本紀竟宴和歌の研究――日本語史の資料として――』(風間書房、二〇一〇年)が詳しい。

注21　坂本太郎『六国史　坂本太郎著作集第三巻』(吉川弘文館、一九八八年)

注22　國史大系刊行會『本朝世紀　国史大系第九巻』(吉川弘文館、日用書房、一九三三年)

注23　『釈日本紀』(前掲書)

注24　『六国史』(前掲書)

注25　第六章「清原家の〈学問〉の〈系譜〉を担う仲忠――先祖が書いた書物と学問の継承」参照。

注26　長谷部将司「『続日本紀』成立以降の『日本紀』――『日本書紀』講書をめぐって――」(『歴史学研究』八二六号、二〇〇七年四月)。なお、長谷部は「確立した権威の固定化」を図るべく読まれる書物が『日本紀』であることについて、以下のように述べる。

真に中国的な王朝交代がないという状況下では、王権が公認しうる天智天皇を始祖とする「王朝」成立の物語は、いつの時代であっても常に『書紀』ということになる。そのため、両統迭立的な状況が解消された直後に実施された二度の講書では、『書紀』の注釈を行う過程で『書紀』が本来的に有していた「王朝」成立の記憶を再び浮上させ、その記憶を新たに官人層に共有させたのである。これは、『書紀』によって主張され、一世紀近くを経てようやく浸透しつつ

あった皇位の「万世一系」の末端に、政争に負けた皇統を排除しつつ、同時に勝ち残った新皇統を直結させるための行為といえよう。

注27　神田龍身「エクリチュールとしての〈音楽〉―『宇津保物語』論序説」（『源氏研究』八、二〇〇三年四月）

注28　中丸貴史は、「テーマ 学問論」（『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年）において、道真が醍醐天皇に、自身の詩文集『菅家文草』、祖父清公の『菅家集』、父是善の『菅相公集』を献上したことについて、「道真の「学問の家」意識と父祖への「孝」意識がうかがえる」ことを述べ、「仲忠の「孝」と「学問の家」意識が連動して講書が展開される」と指摘する。

第八章　〈琴〉と〈学問〉の公開の場の論理――後半の巻々を中心に

『うつほ物語』は、漢学の才に長けた清原俊蔭が唐に行く船に乗り、難波して異郷に辿り着き、秘琴を入手するところから始まり、俊蔭の娘と孫の仲忠、曾孫のいぬ宮が楼の上で弾琴をする場面で終わる。このことから、『うつほ物語』は音楽、〈琴〉（注1）の物語であると言われてきた。しかし、俊蔭は漢学の才に長けていたからこそ遣唐使の船に乗ったのだし、仲忠は〈蔵開き〉（注2）をしたことで、学問の家の者というステイタスを再獲得し宮中での地位を高くしている。中丸貴史は、学問の論理が「琴と同様の論理構造をもつことに注意すべきである」と指摘している（注3）が、これは、徹底的な秘密主義に対して述べている。本章では、〈琴〉と〈学問〉の公開に共通する時刻表現・香り・空間に分けて、詳細に見てゆき、琴の論理と学問の論理との構造の相似性について様々な角度から言及する。なお、本章においては、〈琴〉の公開は、八月十五日に楼を降りてから行なったものではなく、七月七日の、奇瑞が起こる弾琴を指すものとする。たしかに、七月七日の記述は秘琴公開ではないが、〈琴〉の音を源涼や人々が聞いていること、また、七月七日の弾琴によって奇瑞が起きていることから、ここではあえて〈琴〉の公開と捉え、「秘曲披露」という言葉を使用する。

一・時刻表現の偏り

〈学問〉の公開と〈琴〉の公開に共通することとして、まず、十二支を用いた時刻表現が使用されていることが挙げられる。『うつほ物語』には、明るさに着眼した時刻表現は多くあるものの、十二支を用いた時刻表現が少ない。十二支別に述べるならば、「子」は、「子の日」の用例が多くあり、また、「乙子」が、嵯峨院の大后の六十の御賀（嵯峨の院　一九七）（菊の宴　三一四）とい

ぬ宮の百日の祝い（蔵開・下　六〇四～六〇六）に使用されているが、時刻表現で「子」は使われない。また、「卯」「戌」はそもそも物語内に出て来てすらいない（注４）。「子」「卯」「戌」以外の干支で、時刻表現として使用されるものをまとめると次の表のようになる。

〔表・『うつほ物語』における時刻表現〕

干支	番号	巻名	頁数	表現	場面説明
丑	1	俊蔭	三四	丑三つ	俊蔭の娘の懐妊中にさがのが夢を見た時間
	2	蔵開・中	五三七	丑二つ	清原家の書物の進講をしていた仲忠が、「丑二つ」という声を機に退出
	3	国譲・下	七九七	丑二つ	「丑二つ」の声を聞いて、藤壺（あて宮）が退出
寅	4	蔵開・上	四七三	寅の時	いぬ宮が誕生した時間
	5	国譲・下	八一二	寅の時	宮の君が誕生した時間
	6	楼の上・下	九一八	寅の時	藤壺の若宮たちが三条京極邸に来た時間
辰	7	春日詣	一三八	辰の時	正頼一家の春日詣において、奏楽が始まった時刻
	8	菊の宴	三一六	辰の二刻	嵯峨院の大后の六十の御賀が始まった時刻
	9	国譲・下	八一七	辰の一点	嵯峨の院での詩宴に朱雀院が上達部や親王を率いて参上した時刻
	10	国譲・下	八一七	辰の二点	嵯峨の院での詩宴に今上帝が行幸した時刻

			申		未					午				巳	
25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	
国譲・下	内侍のかみ	吹上・下	春日詣	楼の上・下	春日詣	楼の上・下	国譲・下	蔵開・中	嵯峨の院	俊蔭	俊蔭	国譲・下	蔵開・中	蔵開・中	
八一九	四〇一	二八二	一三八	九二〇	一四八	九二一	八一八	五四〇	一八七	四三	一四	七八三	五四七	五四〇	
申の一点	日申の時	日申の時	申の時	未の時	未の時	午限り	午の二点	午の時	午の時	午の時	午の時	巳の時	巳の時	巳の四つ	
嵯峨の院での詩宴で擬生の文題を提出させる時刻	相撲の節会。相撲人たちが出てこずにこの時刻になった	嵯峨院が吹上浜に着いた時刻	正頼一家の春日詣において、奏楽が終わった時刻	三条京極邸に嵯峨院が来た時刻	正頼が春日詣から帰邸した時刻	俊蔭の娘といぬ宮が楼を降りる時刻	嵯峨の院での詩宴で擬生の男たちに詩題を与えた	清原家の書物の進講二日目。春宮が参上した時刻	正頼邸の年末の仏事。三日目のこの時刻に結願。	北山にて俊蔭の娘が弾琴によって奇瑞を起こす。翌日のこの時刻までゆいこくの手を弾き続ける。	俊蔭が南風と波斯風を「琴の音かきたて、声ふりたてて」弾いていた時刻。この時、大空に音楽が響き、紫の雲に乗った天人が七人下りてくる。	忠雅の文に書かれていた立太子の儀を行なう時刻	清原家の書物の進講三日目。仲忠が参上した時刻	清原家の書物の進講二日目。朱雀帝が春宮を呼び、その返事を使いから聞いた時刻。	

酉				亥		
26	27	28	29	30	31	32
国譲・下	楼の上・上	楼の上・下	楼の上・下	蔵開・中	国譲・中	国譲・下
七八二 七八三	八七〇	九〇七	九二一	五四七	七二一	八二四
酉の時	酉の時	酉の時	酉の初め	亥の時	亥の時	亥四つ
藤壺の若宮に立太子の宣旨が下った時刻	いぬ宮が京極邸に移るために出発する時刻	時宗とさがのの孫たちが来た時刻	俊蔭の娘といぬ宮が楼を降りる時刻	清原家の書物の進講三日目。俊蔭の母の集を読み始めた時刻	桂邸での祓の時刻	嵯峨の院の花の宴から、今上帝が帰る時刻

右の表において、番号に下線がついたものが清原家の血族が中心となる催しである。これは、全三二例中半数を占める。残りの半数についても見てみると、八・九・一〇・一八・二五・三二は、嵯峨の院において開かれた行事――嵯峨院の大后の六十の御賀と詩宴――であり、二三は、嵯峨院が吹上浜に行幸した場面である。また、七・一六・二〇・二二は、正頼一家の神仏に関する行事であり、一三・二六は藤壺腹皇子立太子に関する記事である。三と二三は他の記事と関連のないものとなっているが、三については、他の「丑」の刻の例を鑑みるに、退出のタイミングを計るものとなっていることがわかり、また二三は、相撲の節会というやはり行事に関連する記事である。

そもそも、時刻表現が描かれるとはどういうことか。清原家・正頼一家・嵯峨院関連の場面に時刻表現が集中する意味とは何だろうか。中野幸一は、「国譲・下」巻の嵯峨の院での詩宴について、「細かな時刻区分にしたがって、人々の動きを簡潔に記すこの段の叙法は、晴儀の次第を書き残した漢文記録を髣髴とさせる。恐らくは、厳かに進行する公的な詩会の雰囲気を伝えようと

する作者の工夫であろう。」(注5)と述べている。正頼一家・嵯峨院関連の記事を見る限り、晴儀的なものであることは間違いないだろう。では、清原家関連の記事はどうであろうか。「蔵開・中」巻の朱雀帝御前での進講と、「楼の上・下」巻の秘曲披露とそれに関連する場面は、どの時刻に何をしたか、何が起きたかということが逐一書かれており、極めて儀礼的に書かれていることがわかる。また、ここから外れる一・四・五・一四・一五についても考えてみる。まず、一四・一五の「午」の刻は、全て琴を引き終わる時刻である。これだけではなく、一九の例で、やはり「午」の刻に秘琴を弾き終わった俊蔭の娘といぬ宮が楼を降りることからも「午」の刻は琴を弾き終わる時刻だと考えてよい。そして、一・四・五は、時刻は違うものの、いずれも清原家の血を受け継いだ子どもたちの出生に関わる記述である。清原家の血を受け継いだ子どもたちが、琴や学問の継承者になる可能性が高いことを考え併せると、清原家関連の時刻表現は、琴に関するものか学問に関するものしかないといえる。

以上のように時刻表現を一通り見てみると、時刻表現をすることによって、俊蔭一族・正頼一家・嵯峨院関連の記事は、全て晴儀的なものとして描かれているといえる。その中で、俊蔭一族の場面のみを取り上げてみると、清原家の学問進講と楼の上での秘曲伝授およびそれに関連する弾琴、そして、これらの系譜を担うであろう子どもたちの誕生の場面に分けられるといえる。

さらに注意して見てゆくと、以下のことに気付く。俊蔭一族の〈琴〉の音が人々の耳に入るのは、七月七日の秘曲伝授・弾琴と八月十五日の秘琴披露の二回である。ここで時刻表現に注意すると、「楼の上」の二巻における時刻表現は、表の二七でいぬ宮が京極邸に向けて出発する時刻から、一九でいぬ宮と俊蔭の娘が楼を降りる時刻までの間にのみ出てきていることがわかる。つまり、「楼」という秘曲伝授のための閉鎖空間――「籠り」の空間――に入る時から出る時までは、儀礼的な時空ということであり、この儀礼的な空間の中で行なわれた弾琴こそが、七月七日の場面なのだ。このことからも、冒頭で述べたように、八月十五日の秘琴披露ではなく、七月七日の秘曲披露こそが、「蔵開・中」巻の仲忠による清原家の書物の進講に通じるといえる。

二、香る様が描かれる香り

〈学問〉の公開と〈琴〉の公開に共通することとして、二番目に挙げられるのは香る様が描かれる香り（以下、本章ではこれを〈香〉と表記する）である。『うつほ物語』には、香が多く登場する。その大半は贈り物として登場しており、種類も多い。だが、実際にその香りについて言及されることは少ない。香の香りについて言及する際には、「香ばし」「匂ふ」という表現の二つのみを使用する。以下に香が「香ばし」「匂ふ」とされる例を全て掲げる（注６）。

①嫗・翁、老いの世に、見知らぬ、香ばしく麗しき綾掻練の御衣どもを得て、怖ぢ惑ふこと限りなし。（蔵開・上　四六九）（注７）

②女御、麝香ども、多く抉り集めさせ給ひて、裏衣・丁子、鉄臼に入れて搗かせ給ふ。……大いなる白銀の狛犬四つに、腹に、同じ薫炉据ゑて、香の合はせの薫物絶えず薫きて、御帳の隅々に据ゑたり。廂のわたりには、大いなる薫炉に、よきほどに埋みて、よき沈・合はせ薫物、多く焼べて、籠覆ひつつ、あまた据ゑわたしたり。御帳の帷子・壁代などは、よき移しどもに入れ染めたれば、そのおとどのあたりは、よそにても、いと香ばし。まして、内には、さらにも言はず。（蔵開・上　四八〇～四八一）（注８）

③［大将は、……宿直所に下りて居給へり。参る物ども、調じ据ゑたり。御装束は、蘇枋襲・綾の上の袴などにて、いと清らに香ばしくて奉れ給へり。……］（蔵開・中　五四〇）（注９）

④物の色、うつくしさ類なく、匂ひ深くて、例の御書仕うまつる。（蔵開・中　五四〇）

⑤宮はた起くれば、頭掻い繕ひ、装束せさせて遣りつ。藤壺に参りたれば、御達、「あな香ばしや。この君は、女の懐にぞ寝給ひける」。（蔵開・中　五四三）

⑥宮の御前には、御火桶据ゑて、火起こして、薫物ども焼べて薫き匂はし、御髪あぶり、拭ひ、集まりて仕うまつる。（蔵開・中　五五四）

⑦北の方、御かたち・様体、照り輝きて見ゆ。香の香ばしきことは、さらにも言はず。（蔵開・下　六一一）

⑧御薫炉召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す。鶴の香も、似る物なし。「白き鶴は」と見給へば、麝香の臍、半

らほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしく香ばしきものの、例に似ず。（国譲・中　六九六～六九七）（注10）

⑨かくて、九日の夜は、大殿、内裏の大饗の御前の物し給ふ。ここかしこより、いと清らにて奉り給ふ。右大将殿、大いなる海形をして、蓬莱の山の下の亀の腹には、香ぐはしき裏衣を入れたり。（国譲・中　六九四）

⑩いといみじう、香の匂ひはよに香ばしきよりも、……（楼の上・上　八五六）

⑪一、二町を経て行く人々、この楼の錦・綾の、こくばくの年月、さまざまの香どもの香に染みたる、風吹く度ごとに香ばしき、めであやしむ。（楼の上・上　八五七）

⑫尚侍の殿の御方より、心殊に設け給へる被け物、南の庭より取り続き歩みたる、色々にし重ねたる、いと清らに麗しく、薫物の香など匂ひめでたし。（楼の上・上　八七三）

⑬世になう香ばしき風、吹き匂はしたり。少し寝入りたる人々、目覚めて、異ごとおぼえず、空に向かひて見聞く。楼の巡りは、まして、さまざまに、めづらしう香ばしき香、満ちたり。（楼の上・下　九〇五～九〇六）

⑭いみじく清らなる高麗の錦の袋にてある、取り渡すに、匂ひたる香、えならず。（楼の上・下　九二七）（注11）

⑮楼の香ばしき匂ひ、限りなし。（楼の上・下　九四〇）

①③④⑤⑧⑨は仲忠の着物や贈り物、②は仁寿殿の女御が焚いた香、⑥は女一の宮の洗髪、⑦⑫は俊蔭の娘の着物、⑩⑪⑬⑮は楼の香り、⑭は朱雀院の要請により、俊蔭の娘が南風を取りだす場面である。またこのうち③～⑤⑦～⑮は、仲忠の〈蔵開き〉によって俊蔭伝来の蔵から出てきた香を使用していると考えられる。「芳香は俊蔭一族に特徴的なもの」と指摘される通り（注12）、「香ばし」き香りと「匂」の例から、〈香〉は意図的に物語で使用されており、それは主に清原の血を引く人々を描く際に香っていると言える。たとえば、次に掲げような例がある。

「蔵の唐櫃一つに、香あり」と言へるを取り出でさせ給ひて、母北の方にも一の宮にも奉り給へば、この御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは、取り出でて見給ふ。（蔵開・上　四七一）

右は、「蔵開・上」巻にて、仲忠が蔵を開いた際に、香を取りだした場面である。「この御族の香どもは、世の常ならずなむ」という記述以降、「この御族の香」は様々な箇所で香っている。特に、「国譲・中」巻で、仲忠から藤壺への匿名の贈り物には、他の場面では見られない〈香〉の表現が多い。

蓬莱の山を御覧じて、……岩の上に立てたる二つの鶴どもを取り放ちつつ見給へば、沈の鶴は、いと重くて、取る手しとどに濡る、「あな、いみじの物どもや」と言ひののしる。……御薫炉召して、山の土所々試みさせ給へば、さらに類なき香す。鶴の香も、似る物なし。「白き鶴は」と見給へば、麝香の臍、半らほどばかり入れたり。取う出て、香を試み給へば、いとなつかしく香ばしきものの、例に似ず。「あやしく、この物どもの心地ある香、異物に似ざらむ」。宰相の中将、「ある人の、忍びて申しし、『いとありがたき所より、治部卿の御唐物得られたり』とこそ申ししか」。おとど、「げに、さなんなり、去年の冬、人に聞かせで、御前にて御書仕うまつり給びき、かかる、世に似ぬ物など見ゆるは」などのたまふほどに、（国譲・中　六九六～六九七）（注13）

「類なき」「似る物なし」「なつかし」「例に似ず」「似ざらむ」で強調された「治部卿の御唐物」は、正頼によって「世に似ぬ物など見ゆる」と締め括られる。そして、この場面の後に出てくる〈香〉は、楼の香りなのだ。「楼の上・上」巻において、「楼の高欄など、あらはなる内造りなどには、かの開け給ひし御蔵に置かれたりける蘇枋・紫檀をもちて造らせ給ふ。黒鉄には、白銀・黄金に塗り返しをす。連子すべき所には、白く、青く、黄なる木の沈をもちて、色々に造らせ給ふ」（八五四～八五五）とあるように、仲忠が三条京極に建てた楼は、俊蔭伝来の蔵から出てきた香木によって造られている。さらに、その内装も、「その浜床には、紫檀・浅香・白檀・

蘇枋をさして、螺鈿磨り、玉入れたり。……いといみじう、香の匂ひはよに香ばしき」（楼の上・上　八五六・⑩の例）とあり、内装にも俊蔭伝来の蔵から出てきた香を使用して、それが「よに香ばし」く香っていることが書かれる。楼の素材が「世の常」ではない香りのする木でできているため、「一、二町を経て行く人々、この楼の錦・綾の、こくばくの年月、さまざまの香どもの香に染みたる、風吹く度ごとに香ばしき、めであやしむ。」（楼の上・上　八五七）と広範囲で香り、さらに「楼の香ばしき匂ひ、限りなし。」（楼の上・下　九四〇）と、嵯峨院と朱雀院にも認識されている。

さらに、楼の上で俊蔭一族が弾琴すると、弾琴による奇瑞と楼の香が交差して、「七日の月、今は入るべきに、光、たちまちに明らかになりて、かの楼の上と思しきにあたりて輝く。神遥かに鳴り行きて、月の巡りに、星集まるめり。世になう香ばしき風、吹き匂はしたり。……楼の巡りは、まして、さまざまに、めづらしう香ばしき香、満ちたり。」（楼の上・下　九〇五～九〇六・⑬の例）という状況になる。弾琴によって起こる奇瑞に「風」はよく出てきており、ここも強い風が楼の香りを運んでいるのだ（注14）。そして、再三述べているが、この楼の香りは俊蔭一族の纏う香りである。

ここまでに見てきた「香ばし」「匂」の用例に他の共通点を探してみると、仲忠が朱雀帝の御前で行なった清原家の書物の進講の例が複数あることに気付く。③④は仲忠の装束、⑦は仲忠の香りが宮はたに移ったという記事である。仲忠の装束は女一の宮が用意したものであるが、先掲した「蔵開・上」巻に、蔵の唐櫃の香を「母北の方にも一の宮にも奉」った（四七一）とあることから、この時に仲忠の纏った香りは俊蔭一族のものであることは明確である。また、先掲した「国譲・中」巻における正頼の「去年の冬、人に聞かせで、御前にて御書仕うまつり給びき、かかる、世に似ぬ物など見ゆるは」の「世に似ぬ物」という言葉によって、「香」と「学問」は結びつけられているのだ。

〈学問〉の公開と〈琴〉の公開とは話がずれるが、〈香〉に関する記述で見逃せないのが、次の進講三日目の昼近くの場面である。

かくて、巳の時、うち下りてのほどに、青鈍の綾の袴、柳襲などいと清らにて、今日の移しは、麝香・薫物・薫衣香、物ごとにし変へたり。（蔵開・中　五四七）

この場面の仲忠は、着物一枚一枚に違う香りを焚きしめていることがわかる。これは、通常ありえないことである。香りを放っていることと、様々な香りを組み合わせているということは、楼の構造と同じではないだろうか。進講の場面においては、仲忠だけではなく春宮も「装束きて」などの表現がされるが、春宮の装束に焚きしめた香りに関する記述は一切見当たらない。仲忠自身から様々な香りが漂い、その香りが他の香りに邪魔されることなく密室に充満してゆくのだ。

このように、「香り」は学問披露の場と秘曲披露の場においてのみ香る様が描かれているので、この二つの場は「香り」の観点から見た場合、相似関係にあると言えるのではないか。最後に、もう一つ、補足しておく。そもそも、俊蔭伝来の秘琴中の秘琴である「南風」と「波斯風」は、「深く一丈掘れる穴」の「上・下・ほとりには沈を積み」、それぞれ錦の袋と褐の袋に入っていた(俊蔭　一二二)。また、俊蔭伝来の蔵は、「蔵の唐櫃一つに、香あり」(蔵開・上　四七一)とはあったが、その他に、楼を造る材料となるほどの大量の香木があったはずである。このように考えると、秘曲披露の際に使用される〈琴〉と学問の進講の場で使用される書物は、双方ともに長い年月、狭い空間において香りに包まれていたことになるのだ。

三．雪と声が作りだす空間と楼

〈学問〉の公開と〈琴〉の公開に共通することとして、三番目に挙げられるのは「空間の構造」である。清原家の学問の進講が行なわれている間、外では雪が降り続いている。『うつほ物語』において雪は歌題となったり奇瑞に表れたりと用例数は多いが、積もる雪の様子を描く場面は『うつほ物語』に四例しかない。(注15)

①進講の場に参上する仲忠(蔵開・中　五四一)

雪少し高くなり、大殿油参りて、短き燈台、左右に立てたり。

（参考1）春宮と藤壺の贈答に雪が詠まれる（蔵開・中　五四一）

春宮　白雪のふればはかなき世の中を一人明かさむことのわびしさ

藤壺　憂きことのまたしら雪の下消えてふれどとまらぬ世の中はなぞ

（参考2）春宮と藤壺の贈答に雪が詠まれる（蔵開・中　五四四）

春宮　ふる効の何かなからむ淡雪の積もれば山とならぬものかは」

藤壺　山となる雪ぞゆゆしく思ほゆる絶えてこしぢのものとこそ聞け

②ますます降り積もる雪（蔵開・中　五四四）

かかるほどに、雪高く降りぬ。大将の君、宮の御もとに、かく聞こえ奉り給ふ。「……今朝の雪こそ、いと寒げなれ」と聞こえて、

……

（参考3）藤壺からの贈り物に「雪」が詠まれる（蔵開・中　五四六・五四七）

孫王の君　君がため春日の野辺の雪間分け今日の若菜を一人摘みつる

仲忠　白妙の雪間掻き分け袖ひちて摘める若菜は一人食へとや

（参考4）女一の宮から来た文に付けられた枝に雪が降りかかっている（蔵開・中　五四六）

例の宮はた、陸奥国紙のいと清らなるに、雪降りかかりたる枝に文をつけたる持て来て、

①は、進講二日目の夜の場面である。夜になるにつれて「雪少し高くな」っている。この表現を使用するならばこの直前に雪が降る様が描かれていても良さそうだが、これ以前に雪が降っているという記述は見当たらない。つまり、いつからかは分からないが雪が降っており、朱雀帝の「書は、夜なむ、いと興ある。」（蔵開・中　五四一）という言葉により初めて外を見ると、雪が少し高く積もっていたということになる。そして、②にあるように、この雪は翌朝になってますます高く降り積もる。雪が音を吸収する特性を持つこ

とを考えると、学問披露の場は、音の面でも空間の面でも雪によって閉鎖されていると言える。

このことを裏付ける場面が、①と②の間にある。それは、仲忠が俊蔭の集を誦んでいる場面である(蔵開・中　五四二)。春宮が藤壺と文の遣り取りをするのを見た仲忠は動揺し、「僻読み」を何度もする。それを朱雀帝に指摘された後、仲忠の誦みぶりは、「かい直して、いと面白く読みなす。その声、いと面白し。しろくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りな」かった。音量を大きくするだけであった場合、仲忠の声はすぐ近くの殿上の間にいた人々にも余すことなく聞こえたはずである。しかし、この「うち静めたる」仲忠の声は殿上の間にいた人々の中では源涼にしか聞こえておらず、それも「昨夜は、ひととは、雲を穿ちて、空には上りし。」(蔵開・中　五四五)と表現されている。ここまでを振返ると、「雪少し高くなり」、その後に仲忠の声が「雲居を穿ち」、さらに「雪高く降り」、その後に、再度、涼によって、仲忠の声が「雲を穿」っていたことが語られている。清原家の学問の進講が行なわれた場は雪によって閉鎖されており、その空間の縦の長さを、仲忠の声が強調して縦の空間を形成しているのだ。

また、三条京極の楼の場面でも、雪が降り積もっている。

③楼にて、俊蔭の娘が昔を思い出す(楼の上・下　八九五)

雪、夜より、いと高う降りて、御前の池・遣水・植木ども、いと面白し。二尺ばかり、いと高う降り積みたり。人々、「この年ごろ、いとかかる雪は降らずかし。これに歩きたるをば、おぼろけならずかし」と言ふを、尚侍の殿、あはれ、昔、かかる年ありきかし、……(注16)

「いとかかる雪」が降らなかった「この年ごろ」が何年ほどを指しているのかは定かではない。ただ、学問進講の場で大雪が降っていたことと、俊蔭の娘が「昔」と言っていることを考えると、「人々」が思い描いている大雪が降った時と、俊蔭の娘が思い描く大雪が降った時は一致していないのではないだろうか。つまり、人々が思いだしている大雪が降った日は、仲忠の学問進講のあった時であり、俊蔭

の娘が思いだしているのは、仲忠が幼かった時分である(注17)。この場面を次に掲げる。

④孝の子、仲忠(俊蔭　三八)

雪高う降る日、芋・野老のあり所も、木の実のあり所も見えぬ時に、この子、「わが身不孝ならば、この雪高く降りまされ」と言ふ時に、いみじう高く降る雪、たちまちに降りやみて、日いとうららかに照りて、……

仲忠が孝の子であることの証明となる場面の一つである。「楼の上・下」巻において、「俊蔭」巻が回想されるということの意味は大きいが、それ以上に、雪が積もったという表現が、「俊蔭」巻、「蔵開・中」巻、「楼の上・下」巻のみであり、清原一族・俊蔭一族が関係する箇所に限定されていることが重要であろう。

ここで、楼について見ておきたい。楼については、建造物としての意味やその使用法、配置、秘曲伝授の場としての問題について論じられてきたが(注18)、ここでは、その高さに注目したい。楼が高いこと、上り下りする建造物であることはもちろん、縦の空間であることは言うまでもない。縦の空間の、高い位置で弾琴をしたことに意味があることは、伊藤禎子の述べる通りである(注19)。

・折につけつつ、琴を替へて弾き給ふ、静かなる音、高う響き出で、土の下まで響く音す。(楼の上・下　九〇三)

・かの木のうつほに置き給うし南風・波斯風を、我弾き給ひ、細緒をいぬ宮、龍角を大将に奉り給ひて、曲の物ただ一つを、同じ声にて弾き給ふ。世に知らぬまで、空に高う響く。(楼の上・下　九〇五)

右の二例にあるように、縦の空間において、琴の音色は上に下にと響き、空間をさらに縦に広げている。また、楼という空間が閉鎖された空間であることにも注目したい。閉鎖された空間において音が垂直に響くという構造は、雪に囲まれ、閉鎖された空間において仲忠の声が「雲を穿」ったという清原家の学問の進講の空間に共通する。

次に、この場にはいない人々の動きに着目する。学問の進講の場には仲忠・朱雀帝・春宮・五の宮（・朱雀帝のキサキたち数名）しかいなかったが、彼らは仲忠の学問の進講を聞くべく集まってきている。また、進講の場からさほど離れていない殿上の間には、源涼をはじめとした人々が参集していた。一方の秘曲披露の場では、〈琴〉の音を源涼と「御供なる左衛門尉」が聞いており、また「面白きに、聞く人、空に浮かむやうなり。」（楼の上・下　九〇五）という記述から、名もなき人々が聞いているとわかる。何人もの人が声もしくは〈琴〉の音を聞く「空間」があるという点において、学問披露の場と秘曲披露の場は重なるのだ。

以上をまとめると、「楼の上・下」巻の秘曲披露の際の雪景色は、「俊蔭」巻を回想させる。それと同時に、秘曲披露の際の空間の設定は「雪」と「音／声」の響き方によって「蔵開・中」巻における進講の空間を彷彿とさせるのだ。

四．〈琴〉の公開と〈学問〉の公開の相似性

ここまでに見てきたように、「蔵開・中」巻での清原家の学問進講と、「楼の上・下」巻での秘曲披露には、時刻表現・〈香〉・空間という三つの共通項があった。時刻表現・〈香〉・空間の三つが重なり合っているということは、〈琴〉の公開と〈学問〉の公開が同じ論理構造に貫かれていることを示す。

ここで、仲忠が琴を弾くことによって奇瑞が起こる場面を見てみる（注20）。

①神泉苑の紅葉の賀にて、仲忠と涼の合奏（吹上・下　二九一～二九二）

かかるほどに、涼・仲忠、御琴の音等し、右大将のぬし、持たせ給へる南風を、帝に、「これなむ、仲忠が見給へぬ琴に侍るなり、仕うまつらせむ」と奏し給ふ。賜はりて、何心なく掻き鳴らすに、天地揺すりて響く。帝より始め奉りて、大きに驚き給ふ。仲忠、「今は限り、この琴、まさに仕うまつり静まりなむや。ねたくくちをしきに、同じくは、天地驚くばかり仕うまつらむ」と思ひぬ。

涼、弥行が琴、南風に劣らぬあり、このすさの琴を、院の帝に参らす。帝、同じ声に調べて賜ふ。仲忠、かの七人の一つてふ山の師の手、涼は、弥行が琴を、少しねたう仕うまつるに、雲の上より響き、地の下より響み、風・雲動きて、月・星騒ぐ。礫のやうなる氷降り、雷鳴り閃く。雪、衾のごと凝りて、降るすなはち消えぬ。仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。涼、弥行が大曲の音の出づる限り仕うまつる。□天人、下りて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。

朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな中なる乙女しばしとめなむ

帰りて、今一返り舞ひて、上りぬ。

②いぬ宮誕生後の仲忠の演奏（蔵開・上　四七六）

中納言、かかるべき曲を、音高く弾くに、風、いと声荒く吹く。空の気色騒がしげなれば、「例の、物、手触れにくきぞかし。わづらはし」と思ひて、弾きやみて、……

③楼の上での七月七日の演奏（楼の上・下　九〇五～九〇六）

かの木のうつほに置き給うし南風・波斯風を、我弾き給ひ、細緒をいぬ宮、龍角を大将に奉り給ひて、曲の物ただ一つを、同じ声にて弾き給ふ。世に知らぬまで、空に高う響く。よろづの鼓・楽の物の笛・異弾き物、一人して掻き合はせたる音して、響き上る。面白きに、聞く人、空に浮かむやうなり。星ども騒ぎて、神鳴らむずるやうにて、閃き騒ぐ。……夜いたう更けぬれば、七日の月、今は入るべきに、光、たちまちに明らかになりて、かの楼の上と思しきにあたりて輝く。神遥かに鳴り行きて、月の巡りに、星集まるめり。世になう香ばしき風、吹き匂はしたり。少し寝入りたる人々、目覚めて、異ごとおぼえず、空に向かひて見聞く。楼の巡りは、まして、さまざまに、めづらしう香ばしき香、満ちたり。三所ながら、大将おはする渡殿にて弾き給ふなり。下を見下ろし給へば、月の光に、前栽の露、玉を敷きたるやうなり。響き澄み、音高きことすぐれたる琴なれば、尚侍のおとど、忍びて、音の限りも、え掻き鳴らし給はず。色々の雲、月の巡りに立ち舞ひて、琴の声高く鳴る時は、月・星・雲も騒がしくて、静かに鳴る折は、のどかなり。

①では、仲忠が「南風」を「何心なく掻き鳴ら」しただけで天地が揺れている。この直前に、兼雅は俊蔭の娘に対し、「紀伊国の源氏、御供に率て上り給へりしに、神泉の御行幸、院の帝もおはしまして、御遊びあるべかなるに、侍従も琴仕うまつるべきに、同じくは、人にまさらむこそよからめ。かの、『しばし』とのたまひし琴は出だされじや」(吹上・下　二八八)、「世にありがたき物の音、一度、この侍従の仕うまつりたらむに。来し方・行く先あるまじきことをせさせむ」(吹上・下　二八九)と、今まで人前に出すことのなかった「南風」を出すように言っている。人前で弾琴すらほとんどしなかった仲忠は、兼雅に勧められて秘琴中の秘琴である「南風」を弾いて奇瑞を起こす。また、この時に源涼も弾琴しているが、涼一人の演奏で奇瑞が起きたかどうかは明確にされていない。しかし、仲忠と涼が二人で演奏する、あるいは交互に演奏すると、仲忠一人の弾琴よりも大規模な奇瑞が起こっている。

②は、いぬ宮が誕生した後に、誕生の場に相応しい曲を仲忠が弾いた場面である。この時の奇瑞は荒れたものとなったため、仲忠は弾琴をやめ、母俊蔭の娘に代わりに弾くように言う。俊蔭の娘の弾く琴は、「病ある者、思ひ怖ぢ、うらぶれたる人も、これを聞けば、皆忘れて、面白く、頼もしく、齢栄ゆる心地す」るものであり、出産を終えて伏せっていた女一の宮も起きだしてきた。しかし、両者の弾琴が起こした奇瑞は、①で見たような大規模なものではなかった。②は、いぬ宮の誕生を祝う意味があっただけで、公開の意味はない。

③は、俊蔭の娘・仲忠・いぬ宮という親子三代が楼の上にて同時に弾琴する場面である。『うつほ物語』に書かれる他のどの奇瑞よりもこの場面の奇瑞の記述が一番長い。また、これは多くの人々の耳に入っていることから、「公開」として位置付けて良いだろう。

①～③を見てみると、③だけではなく、①も「公開」として位置付けて良い弾琴であることに気付く。この①の場面で、なぜ仲忠は秘琴披露をしたのか。①の場面のさらに前、吹上にて、九日の菊の宴が盛大に催されている。そこでは、「文人に、難き題出だされ」、嵯峨院が「度々唐土に渡れる累代の博士の詩に劣らず、この男どもの作りまされるかな。……仲忠、俊蔭が後と言へども、俊蔭隠れて三十年、仲忠、世間に悟りありと言へども、かれが時に会はず。琴に於きては、娘に伝ふ。娘、仲忠に伝ふ。それだにありがたし。書の道さへやは、俊蔭、女子に教へけむ。すべて、仲忠・仲頼は、いとあやし。変化の者どもなめり」(吹上・下　二八五)と述

べている。仲忠は俊蔭その人から学問を学んではいないため、「変化の者」と言われるのだ。しかし、この場面は、仲忠が学問において俊蔭と結び付けられた初めての場面である。そして、この後帰京した仲忠は、兼雅の勧めによって紅葉の賀で秘琴「南風」を弾くのだ。

このように見てくると、「吹上・下」巻、「蔵開・中」巻・「楼の上・下」巻ともに、学問の才を帝に認められた後に秘琴披露・秘曲披露があるとわかる。〈琴〉の公開に先立って〈学問〉の公開があるということは、祖父清原俊蔭が学問を習得した後に琴を習得したこと、東宮学士になった後に嵯峨帝の御前で弾琴したことと重なる。前節までは、「蔵開・中」巻における〈学問〉の公開と、「楼の上・下」巻における〈琴〉の公開には、時刻表現・〈香〉・空間の三つの共通項があることを見てきた。そして、この三つが重なり合うということこそが、〈琴〉の公開と〈学問〉の公開が同じ論理構造に貫かれていることを示すことも述べた。それだけではなく、この節で見てきたように、〈琴〉の公開の前に必ず〈学問〉の公開があることから、〈学問〉よって〈琴〉の一族の系譜が裏付けられていることがわかる。このことから、〈学問〉の公開と〈琴〉の公開は一対のものとして考えられるのである。

注1　〈琴〉については、序章の注参照。

注2　〈蔵開き〉については、序章の注参照。

注3　中丸貴史「モチーフ《文化》書物」(『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年)

注4　この他、「未申」という表現も、「未申の外より見入れ給へば、中の障子も毀れたり。」(楼の上・上　八三六)、「この西の対の南の端に、未申の方かけて、昔墓ありける跡のままに、念誦堂建てたり。」(楼の上・上　八五四)、「かの未申の山よりこそまかり歩きしか」(楼の上・下　八九二)、「御車、中門より入れて、寝殿の未申の方の高欄を放ちて下り給ふ。儀式、いと厳し。」(楼の上・下　九一八)、「御方々、南の方、池・中島・釣殿、未申の堂の方、左右の反橋・楼の様など見給ふに」(楼の上・下

九一九)というように、方角を指す時のみ使用される。

注5　中野幸一『新編日本古典文学全集　うつほ物語③』小学館、二〇〇二年

注6　「俊蔭」巻に「親の御あたりの香ばしさに、」(一六)という表現がある。室城秀之『うつほ物語　全　改訂版』では、この「香ばしさ」を「懐かしさ」として捉えており、また、論者も「香り」の表現ではないと判断したため、今回の例には入れなかった。

注7　前田家本では「嫗(おんな)・翁」(九二六頁)となっている。

注8　前田家本では「多く抉り(くしり)集めさせ給ひて……大いなる白銀の狛犬四つに、腹に(はるに)、同じ薫炉据ゑて……御帳(三丁)の帷子・壁代などは、よき移しどもに入れ染めたれば(しめたれば)」(九五一)となっている。

注9　前田家本では「宿直所に下り(おも)て居給へり。」(一〇七二頁)となっている。

注10　前田家本では「「白き鶴は」(かいろ)と見給へば、」(一三九七頁)となっており、他に「かはな」「かかな」「かいかろ」といった異同がある。

注11　前田家本では「錦の袋にてある(り)、取り渡すに、匂ひたる香(が)、えならず。」(一八七九頁)とある。なお、「匂ひたるが」の「が」は、清音で書かれているはずであるため、「香」と解釈して問題ないと考えた。

注12　中野幸一(前掲書)

注13　前田家本では「岩の上に立てたる(り)二つ(こ)の鶴どもを……「あやしく、この物どもの心地ある香(が)、異物に似ざらむ」。宰相の中将、「ある人の、忍びて申しは、『いとありがたき所より、治部卿の御唐物得られたり(てこれたり)』とこそ申ししか」。おとど、「げに、さなん(より)なり、……」(一三九六～一三九七頁)となっている。なお、「この物どもの心地あるが」の「が」は、注11と同じ理由から、「香」と解釈して問題ないと考えた。

注14　風が香りを運ぶ例として、「祭の使」巻の「風に競ひて、物の香ども吹き加へぬ所々なし」(二二八)があるが、この前には香の存在が書かれていないため、香に限定する必要はない。

注15　〈琴〉の奇瑞に「衾雪」があるが、これは自然描写ではないため、今回の「積もる雪」からは除外した。

注16　前田家本では「御前の池・遣水・植木（からに）ども、いと面白し。」（一八一〇頁）となっており、「からに」では文意が通らないが、本論に関連する異同ではないため、特に重視しない。

注17　富澤萌未「モチーフ《生活》自然描写」（『うつほ物語大事典』勉誠出版、二〇一三年）では、この二つの場面に関して「俊蔭の娘・仲忠母子にとって強烈な印象を与えていたようである」と述べる。

注18　坂本信道「「楼の上」巻名試論――『宇津保物語』の音楽」（『国語国文』六〇-六、一九九一年六月）、岩原真代「『うつほ物語』中島の楼閣――新生京極邸の設計図を読み解く――」（口頭発表・國學院大學國文學會春季大会（國學院大學渋谷キャンパス）二〇一一年）、伊藤禎子「「楼の上」巻の世界」（上原作和・正道寺康子『うつほ物語引用漢籍注疏洞中最秘抄』新典社、二〇〇五年）など。

注19　伊藤禎子「秘曲の醸成」（『『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇五年一一月初出）

注20　『うつほ物語』における弾琴による奇瑞については、網谷厚子「うつほ物語と敦煌壁画・変文」（『講座　平安文学論究』第十二輯、風間書房、一九九七年）に一覧が示され、分類されている。

第九章　清原家の系譜の全てを担う仲忠と次世代の者たち

『うつほ物語』には〈琴〉の系譜（注1）がある。俊蔭は、乗っていた船が難破し、行きついた異郷で奏法とともに三十面の〈琴〉を入手する。帰朝した俊蔭は一世の源氏を得て娘を儲け、その後は外界との接触を一切絶って娘に秘曲伝授をした。俊蔭亡き後、娘は一子仲忠を儲けた。そして、都を離れて北山のうつほにて暮らす中で、娘はやはり仲忠に秘曲伝授をする。その後、仲忠の父藤原兼雅によって親子は都に迎え入れられる。成人した仲忠は、あて宮求婚者の一人となる。あて宮求婚譚収束後、仲忠は皇女を妻として迎え、一女いぬ宮を儲け、この子を秘琴伝承者として位置付ける。いぬ宮が七歳の時、俊蔭の娘が孫いぬ宮に秘曲伝授を行なう。この、俊蔭→俊蔭の娘→仲忠→いぬ宮の流れが、〈琴〉の系譜と言われるものである。

〈琴〉については、先行研究がさまざまな方面から指摘をしている。楽器としての〈琴〉については、西本香子の論考があり（注2）、また、上原作和も「秘伝として継承された宝器としての「琴の系譜」の論理が首尾呼応する物語として」『うつほ物語』を捉えている（注3）。

藤原仲忠について、三田村雅子は、俊蔭の娘は「どこまでも純粋に琴の世界を継承する」者であるのに対し、仲忠は「琴の中に、というよりは書物の中に、代々の想いを読みとる存在」だと指摘する（注4）。これに対し、中嶋尚は、「蔵開」において、初めて「仲忠が琴曲の伝授こそが自らの使命であると意識した」と述べる（注5）。

秘曲伝授の場については、猪川優子が「俊蔭一族は、「天の掟」によって授かった秘琴を閉ざされた空間の中で継承していく。……これらの空間は、一族と秘琴だけの空間であるという意味において、たとえ地上に作られた空間であっても、俊蔭が秘琴を授かった波斯国の空間に通じるものであるといえよう。」と述べ（注6）、野口元大も「楼上は、そうした異界の接点というより、神秘に閉ざされた聖なる空間の印象が強い。」と述べる（注7）。

また「楼の上」での秘琴公開の場面について、大井田晴彦は、「物語はかかる繁栄を手放しで謳歌などしていない。むしろ、「楼上」

に語られるのは、栄華と引き換えにしたものの重みである。仲忠、俊蔭女、藤壺、朱雀院、そして嵯峨院。彼らは皆、最上の境遇にありながら、その内面では満たされぬ憂愁を抱き続けている。」と、秘琴公開の場が必ずしも大団円ではないことを指摘している(注8)。この他にも、俊蔭の娘の体調が思わしくなく、そこに「死」を読む論考がある(注9)。また、伊藤禎子は、「俊蔭一族には「非公開の論理」がある。そこで生じた秘曲の「公開と非公開のせめぎ合い」によって、聴衆の興味は一族の音楽に集中させられる。」と指摘しており(注10)、これは、後に述べる〈学問〉の系譜にも関わっていく論考である。

以上、〈琴〉に関する論考を挙げた。ここで注意したいのは、俊蔭を始祖とし、いぬ宮まで伝授される〈琴〉の系譜は、血脈と一致しているということである。

従来の研究では、「俊蔭一族」によって形成される〈琴〉の系譜や学問の相承が取り扱われてきたが、本章では、「清原家」の人物を始祖とした系譜があり、そこに連なっていく人物が清原家以外の人物である可能性があることを示唆しながら、〈琴〉・〈学問〉・〈手〉の三つについて論じる。そして、これらを〈系譜〉(注11)として捉え、全ての〈系譜〉を掌握している仲忠に焦点を合わせる。また〈琴〉、〈学問〉、手本が誰に継承されていくのかを考察していくことで、「楼の上」での秘琴公開を大団円(注12)とみることができなくなる理由として、俊蔭の娘の死を思わせる記述とは別に、「清原家」そのものの滅亡が予見されることを示す。

一・〈琴〉と〈学問〉の〈系譜〉

「俊蔭一族」は〈琴〉の一族であると同時に、〈学問〉の一族でもある(注13)。第六章では、「清原」の血を引く継承者が「籠り」の空間において〈琴〉あるいは〈学問〉を継承することを明確にした。このことを図に示すと、左のようになる。

十一月　〈蔵開き〉
翌年一月　女一の宮懐妊・仲忠、女一の宮の世話をする。

【籠り】　仲忠、「かくて、その年は、立ち去りもし給はず。かつは書どもを見つつ、夜昼、学問をし給ふ」

八月　産屋の調度を用意。不断の修法など行う
十月十日ばかり　寅の刻、いぬ宮誕生

【籠り】　仲忠、母屋から出ずに、常にいぬ宮の近くにいる。いぬ宮を抱きかかえたまま弾琴。

七日の産養　仲忠、やっと外に出る

このことから、〈琴〉と〈学問〉が「継承」という観点において類似関係にあることを示した。

また、第八章において、公開の場の構造においても、〈琴〉と〈学問〉が相似関係にあることを確認した。これらのことと併せて、〈琴〉と〈学問〉の皇室との関わりについて指摘しておきたい。〈琴〉における皇室と「俊蔭一族」の関係については、対立するもの、依存するもの、その両方であると意見が割れている(注14)。おそらく、〈学問〉に関しても同様のことが言えると思われるが、特に〈学問〉については、皇室に依存して成立するものとして捉えることが重要である。それは、朱雀帝・春宮・五の宮の御前で、俊蔭の父母と俊蔭の書物を進講することで、この一族の価値を位置付けたことからわかる。また、第六章で述べたように、本論は、これまでの先行研究において指摘されてこなかった〈学問〉の〈系譜〉の存在を明らかにし、その始祖が俊蔭の父母であることを確認した

が、そうであればこの系譜に連なる者について「俊蔭一族」ではなく、氏名（うじな）を冠した「清原一族」という名称を用いる必要があろう。

さらに、継承されるもののうち、技術ではなく、物体にも目を向けてみる。

①俊蔭の遺言（俊蔭　二二）

「この屋の乾の隅の方に、深く一丈掘れる穴あり。それが上・下・ほとりには沈を積みて、この弾く琴の同じ様なる琴、錦の袋に入れたる一つと、褐の袋に入れたる一つ、錦のは南風、褐のをば波斯風といふ。……」

②俊蔭伝来の蔵を開いた仲忠（蔵開・上　四七一）

「蔵の唐櫃一つに、香あり」と言へるを取り出でさせ給ひて、母北の方にも一の宮にも奉り給へば、この御族の香どもは、世の常ならずなむ。書どもも、要あるは、取り出でて見給ふ。

①は、俊蔭が娘に、秘琴の中でも最も重要な「南風」と「波斯風」の存在を教えている場面である。この二つの琴は、乾の方角に穴を掘って埋めてあり、その「上・下・ほとりには沈を積」んでいる。②は、俊蔭の蔵の中から、香が出てきた場面である。この場面の後、俊蔭が異国から持ち帰った香についての場面がしばしばあることから、蔵から出てきた香が重要な意味を持つことは言うまでもないが、ここでは、その香の香りを纏ったものに注目したい。そもそも、この蔵は三条京極殿の乾の隅の方にあった。これは「南風」「波斯風」と同じような位置である。そして、その蔵の中にあった書物もまた、「南風」「波斯風」と同様に、香の香りに包まれていた。このように見てくると、継承される「物」という次元においても、〈琴〉と書物は同様に扱われている。

「籠り」の空間、公開の場の構造、継承される「物」において、〈琴〉と〈学問〉が類似・相似の関係にあることが確認できた。このことを踏まえた上で、〈学問〉の〈系譜〉について考えてみる。〈学問〉の〈系譜〉は、俊蔭の父清原の大君とその妻皇女→俊蔭→仲忠というように相承されている。ここで注意すべきは、俊蔭と仲忠の間に俊蔭の娘が入っていないことである。このことについては、物語

内でも再三述べられている。

・吹上宮にて、嵯峨院、人々の有能さに驚く（吹上・下　二八五）

仲忠、俊蔭が後と言へども、俊蔭隠れて三十年、仲忠、世間に悟りありと言へども、かれが時に会はず。琴に於きては、娘に伝ふ。娘、仲忠に伝ふ。それだにありがたし。書の道さへやは、俊蔭、女子に教へけむ。

・仲忠、蔵を開けようとして失敗し続ける。その心の内に祈ること（蔵開・上　四六九）

「承れば、この蔵、先祖の御領なりけり。御封を見れば、御名あり。この世に、仲忠を放ちては、御後なし。母侍れど、これ女なり。この蔵、先祖の御霊、開かせ給へ」と祈り給ふ。（注15）

・仲忠、朱雀帝に俊蔭伝来の蔵のことを奏上する際に、俊蔭の遺言を伝える（蔵開・上　五二八）

俊蔭の朝臣の遺言、先の書には、『俊蔭、後侍らず。文書のことは、わづかなる女子知るべきにあらず。二、三代の間にも、後出でまで来ば、そがためなり。その間、霊寄りて守らむ』となむ申して侍る。（注16）

右にあるように、俊蔭にとって、学問とは、女子に伝えるものではない。俊蔭の蔵から出てきたものは、実用的な「産経などいふ書ども」（蔵開・上　四七一）（注17）と、俊蔭や俊蔭の父清原の大君の日記、俊蔭の母の和歌集であるが、このうち、俊蔭が「学問」だと認めるのは、実用的な「書ども」と俊蔭や俊蔭の父清原の大君の手によるものである。しかし、朱雀帝の御前での進講において仲忠が誦んだものは、俊蔭と俊蔭の父、そして、俊蔭の母が詠んだ和歌集であった。つまり、朱雀帝の御前での進講において、俊蔭が「学問」と認めていなかったものが〈学問〉となっているのだ。また、人々が求める「学問」というのは、俊蔭の母皇女の和歌集も含めた〈学問〉である。つまり、書物は「学問」として認められるものもそうでないものも全て一緒に俊蔭が蔵に封じて保管したのだが、それが仲忠の手に渡った時点で、蔵にあったものが全て〈学問〉となったといえるのだ。

二、〈手〉の〈系譜〉

前節まで〈琴〉と〈学問〉について見てきたが、〈手〉についても〈学問〉から派生した系譜が認められる。〈手〉の系譜については第五章で述べたが、以下に補足とともにまとめておく。

「手本」の初例は『うつほ物語』(国譲・上　六五四～六五六)である。中国漢籍にも「お手本」の意味での「手本」の用例はない。「国譲・上」巻の場面では、藤壺の要請により、仲忠が藤壺の若宮たちに「手本四巻」を贈っている。また、『うつほ物語』全体を見渡してみても、「手本」を作成する人物は仲忠ただ一人である。『うつほ物語』には物の贈与が行なわれる場面が多く描かれる(注18)が、手本も贈与される。

ここで仲忠に焦点を合わせると、仲忠は、「蔵開・上」巻において、俊蔭伝来の蔵を開け、書物を入手している。〈蔵開き〉(注19)をしたことにより、自身が俊蔭一族であることを再認識した仲忠は、朱雀帝に対し蔵にあった書物の進講を行なう。この進講において、朱雀帝は、清原一族が皇族から分かれた一族であることを示す。また、この場で披露される俊蔭の父母や俊蔭自身の筆跡から、清原一族が能筆家の多い一族であったことが判明する。また、特に物語の後半部において、仲忠の〈手〉が素晴らしいものであるということが何度も示され、かつ、それが宮廷社会においては周知の事実となっていることが描かれる。仲忠は、蔵を開いてから半年以上もの間、家に籠って〈学問〉を習得した。そして、〈学問〉を習得したことが書かれた後に、清原一族の筆跡の素晴らしさ、仲忠自身の〈手〉の素晴らしさが語られるようになる。このように見てゆくと、仲忠が習得したものは〈学問〉だけではなく、俊蔭の母皇女のものまで含めた〈手〉もあったのではないだろうか。

さらに、登場人物の多いこの物語において、〈手〉についての言及のある人物は少ない(注20)。そのような中で、「蔵開・上」巻では、「俊蔭の朝臣の、手書き侍りける人なりける盛りに、」(五二七)と、俊蔭が能筆であったことが書かれ、「蔵開・中」巻では、「歌・手、限りなし。」「この母皇女は、昔名高かりける姫、手書き、歌詠みなりけり。」(五四八)と、俊蔭の母の筆跡の素晴らしさが述べら

れる。また、仲忠は、物語の前半ではその筆跡についての評価が全くされなかったにも拘わらず、〈蔵開き〉以降、筆跡の素晴らしさが語られ、唯一他人の筆跡を真似ることが可能な人物として描かれる。このことは、仲忠が、春宮・藤壺の若宮の「手本」を作成する能力を持った人物であったことを示すものである。

このように見てくると、仲忠は、〈琴〉とは別の、新たな「手」を入手したといえ、これに書物によって明らかとなった系譜と朱雀帝の言葉、そして、世間の評価が重なり合って、仲忠が能書・能筆の人物であり、「手本」を書くに相応しい人物として位置付けられていったのではないか。

そのような仲忠に、藤壺は何度も〈琴〉を若宮に教えるように要請する。しかし、「俊蔭一族」である仲忠は、それに応えることはしない。かつて、〈琴〉を教えるようにとの要請を拒んだ祖父俊蔭と同様、〈琴〉を教えることを拒んだ仲忠が、秘されている「琴」の技術の代わりに若宮に献上したのが、秘されている「清原一族」の筆跡を伝える「手本」だったのではないだろうか。

また、「手本」によって藤壺とのつながりを求める仲忠と、「手本」ではないもの、すなわち、〈琴〉を所望する藤壺というように、仲忠と藤壺の思惑はすれ違いを起こしている。仲忠が若宮へ手本を献上するかどうかは確信が持てずにいた藤壺だが、そこに、仲忠からとても豪華な手本が届いたことで、「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。」(国譲・上 六五五)(注21)と喜びを表す。そして、この直後に、仲忠に対して送った返事に「なほ、この人々は御弟子にし給ひて、これならぬことも知らせ給へ。」(国譲・上 六五六)と書いていること、またこれ以前に、仲忠から書を習うのだと言った若宮に対し「いとうれしきことかな。かの御弟子になり給ひて、よろづのわざし給へ」(国譲・上 六四一)と言っていることから、この喜びとは、これだけすばらしい手本をくれるのだから、「これならぬこと」「よろづのわざ」、すなわち琴も教えてくれるかもしれない、という藤壺の期待をも表しているといえる。しかし、「手本」は、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物と比較すると、その重要さは格段に落ちる。書物の進講は、蔵から出てきた書物そのものを用いて、「音読」によって行われる(注22)。「音」はあとには残らない。そして、このときに朱雀帝の御前に持っていかれる書物は、その場で仲忠によって読まれはするものの、書き写されることはなく、進講が終わり次第、仲忠が持って帰る。それに比べ、この「手本」は春宮や若宮に献上される。

ここで、仲忠が俊蔭の書を使用する場面を二例紹介する。一例目は、七月七日に、秘曲伝授を行なう場面(楼の上・下　九〇六)である。俊蔭の娘・仲忠・いぬ宮が揃って琴を弾いた後、仲忠は「治部卿の集の書の中に、唐土より、知らぬ国に至りて、下りて、道を行き給ひけるに、いみじうあはれに面白き所々に、四季の花咲き乱れ、ある所には、恐ろしくいみじきかたちしたる者集まりてあるわたりを過ぎ給ふとて、道のままに長く思ひ続けてあはれなる、声を出だして」誦み、また、「帰りて後、家の寂しきを眺めて、時につけつつ作り集め給へる詩」も誦んだ。朱雀帝への進講の場面で、仲忠の声が良いことは「声いと面白き人」(蔵開・中　五三五)、「書読む声、誦ずる声も、いとあはれに面白し。」(蔵開・中　五三七)、「いと面白く読みなす。その声、いと面白し。しろくあり。声うち静めて、いと高く面白く誦する声、鈴を振りたるやうにて、雲居を穿ちて、面白きこと限りなし。」(蔵開・中　五四二)というように、再三にわたり、強調されている。そして、仲忠が読むと、朱雀帝や春宮は「泣」く(蔵開・中　五四八)。さらに、面白き声の仲忠が「読む」のではなく「誦む」と、「聞こし召す帝も、御しほたれ」「大将も、涙を流」し(蔵開・中　五三五)、この場面でも、「聞き知らぬ人だに、涙落とさぬはなきに、まして、大将のこの所にて誦じ給へるは、声より始めて、面白うあはれなるに、御直衣の袖、まして、絞るばかりになる」(楼の上・下　九〇六)。程度の差はあるものの、清原一族の書を仲忠が読(誦)むことにより、仲忠自身を含めた人々は、泣くのだ。

二例目は、秘琴披露の場に行く意思を示す朱雀院の言を聞いた仲忠が、嵯峨・朱雀の両院を迎える準備をする場面(楼の上・下　九一四)である。「治部卿の集の中にある、唐土よりあなた、天竺よりはこなた、国々の詩を、その年ごろの有様を、かの大将書かせ給へる屏風、例に似ず、清らに麗し、皆ながら唐綾に描きて、縁の錦、裏より始めて、清らなり、」(注23)とあることから、ここでは、仲忠が俊蔭の集から詩を選び、描き写していることがわかる。ここで注意したいのは、この場面では「清ら」「麗し」という言葉が使用されていることである。

これらの例から、俊蔭や俊蔭の父母が作った物を仲忠がそのまま読(誦)み、書く場合には、その素晴らしさが語られていることがわかる。それに対し、同じく、俊蔭や俊蔭の父母の集から学んだ文字を書いた「手本」には「清ら」「麗し」という言葉は使用されず、藤壺や若宮が泣くこともない。以上のことから、仲忠が若宮に献上した「手本四巻」は、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物その

ものではなく、その筆跡のみを真似て書物から仲忠が書き抜きをした、仲忠独自の創作物だと言える。すなわち、仲忠が作成した「手本」は、清原一族の書物からは隔たったものとなっているのだ。他人の手に渡ってもよいものとして位置付けられるのが、この、仲忠が藤壺の若宮に献上した手本である。仲忠は、手本は献上するが、書物は献上しない。俊蔭の書物そのものを用いながらも、書写をさせて手元には置いておくことはできず、音のみで行なわれる朱雀帝の御前での進講と、自分の手元に置いておけはするものの、俊蔭の書物を元に、仲忠が二次創作をした手本では、その差は大きいといえるだろう。仲忠が若宮に献上した手本というのは、清原一族の書物からは切り離されたものと考えてよい。

今一度振り返ると、俊蔭や俊蔭の母が能筆であったことが語られることにより、そのような素晴らしい筆跡を伝える書物は、仲忠にとっては「手本」の代わりであったと言える。「清原家」の学問と筆跡を伝える媒体として、俊蔭伝来の蔵の書物はあり、そこから、外部に持ち出せるように、仲忠は新たに筆跡のみを使用して「手本」としたのだ。物体としての「手本」は変化してしまっているが、そこに書かれる「筆跡」は同じか、もしくは似たものであり、それらは継承されていく。

このように見てくると、仲忠が若宮に手本を献上した場面において、とても貴重なものをもらったと思い喜ぶ藤壺に対し、仲忠は、それほどたいしたものはあげていないと考えているということが指摘ができる。〈琴〉を教えて欲しいと要請する藤壺に対し、仲忠は〈琴〉を教える代わりとして、「手本」を献上しているのだ。だとすれば、藤壺の若宮は、決して仲忠から〈琴〉を習うことはできない。それにもかかわらず、藤壺は、「よろづのことに手惜しみ給ふ人」である仲忠からすばらしい手本をもらったと思い、〈琴〉の伝授にまで思いを馳せている。この場面は、仲忠と藤壺との意思のズレが大きく出てくる場面としても読むことができる。しかし、仲忠にとってはたいしたものではない「手本」も、〈手〉に焦点を合わせると、(俊蔭の父清原の大君とその妻皇女)→(俊蔭)→仲忠→藤壺の若宮(注24)という繋がりがある。このことから、〈手〉の系譜の存在もあると考えてよいのではないだろうか。

三、三つの〈系譜〉と継承されていくものの行く末

ここまで、清原俊蔭を始祖とする〈琴〉の系譜、清原俊蔭の父を始祖とする〈学問〉の系譜、そして〈学問〉の系譜から派生し、藤原仲忠が「手本」という形で示した〈手〉の系譜があることを指摘した。しかし、〈琴〉、〈学問〉、〈手〉の三つは同様のものとしてあるわけではなく、少しずつ違いがある。

〈学問〉と〈手〉は、それぞれ「書物」「手本」という物体を継承することが可能であるという点で同じだ。ここで、〈琴〉が物体として継承することが不可能だとするのは、俊蔭が異郷から持ち帰った琴は、物として贈与することは可能であるものの、贈与された人物が弾きこなせるわけではないためである。〈学問〉と手本に話を戻すと、〈学問〉は、『うつほ物語』において継承する場面がなく、朱雀帝への進講の場面は、「声」のみで行なわれている。その一方で、〈手〉は、「手本」そのものの贈与が描かれる。このため、「手本」を書いた仲忠と「手本」を元に字を練習する春宮と藤壺の若宮の筆跡は、とても似てくる。

〈琴〉と手本は、師となる人物が弾いたもの、書いたものと同じように弾かせる、書かせるという、学びとらせるという点では同じである。しかし、〈琴〉は音のみで「今・ここ」でしか実現しないのに対し、手本は継承する人間が常に持ち続け、いつでも見られるという違いがある。また、〈琴〉と〈学問〉は、「清原氏」が継承してきたものだという点では同じだが、それ以外に共通項はない。そして、〈琴〉、〈学問〉、〈手〉の全てに共通するものは、楽器としての〈琴〉、書物、手本は、物体としての継承が可能だということである。

ここまで、清原俊蔭を始祖とする〈琴〉の系譜、清原俊蔭の父を始祖とする〈学問〉の系譜、そして、仲忠が「手本」という形で示した〈手〉の系譜の、三つの系譜があることと、その全てを掌握しているのが仲忠であることを指摘した。これらのうち、〈琴〉の系譜はいぬ宮が継ぐ。しかし、ここで問題が出てくる。『うつほ物語』には、秘琴披露までしか書かれておらず、いぬ宮が無事に入内するかは分からない。いぬ宮が入内しなかった場合、〈琴〉の系譜の格は下がってしまう可能性が高い。また、本文中に、いぬ宮が春宮ではない人物と結婚する可能性があることが描かれている。

晦日に、御祓へし給ひに、二所ながら、御前厳しうて、河原に出で給へり。……平張いと近し、皇子の君、若君と遊び給ひて、

「いざ、かの平張に行かむ」とのたまひて、皇子、ふと掲げて入りおはします。いぬ宮、尚侍の殿の御傍らに、三尺の几帳立てて居給へるに、さし覗き給へる、うち見合はせ給ひつ。ふと後ろ向き給ふに、尚侍うち驚き給ひて、胸塞がりて、……（椎の上・下九〇三～九〇四）

これは、祓をしに行ったいぬ宮を、梨壺の皇子が垣間見をする場面である。「皇子、ふと掲げて入りおはします。いぬ宮、尚侍の殿の御傍らに、三尺の几帳立てて居給へるに、さし覗き給へる、うち見合はせ給ひつ。ふと後ろ向き給ふに」とあることから、入内するのではなく、梨壺の皇子に奪われる可能性もここで持ちあがっていると読むことができる。

右に見たように、〈琴〉の系譜は、仲忠の次の世代に継承されたが、その先行きに不安が残るというものである。これに対し、〈学問〉の系譜と〈手〉の系譜は、継承者からして明確にされていない。以下に、問題となる箇所を列挙する。

③仲忠の宮の君批判と小君称賛（椎の上・上　八四六）

「さらに。いと見苦しう、ただ宮の御真似をして、さがなう心強く、なまめかしき気も侍らず。されば、宮にも、あからさまにも率て参れば、見給はで、『生まれし時より、心恐ろしき者と見き。いぬ宮のはらからにはあらざめり。率て往ね』とぞ思ひ給ふ。おとどは、ただ、心に任せて見給ふ。不用の者なり。この君、仲忠らが教へむことも聞きつべし、手などもいとうつくしう書き、声もいとをかしうぞ侍る」。（注25）

④小君の学（椎の上・上　八五〇）

御物語聞こえ給ふ。おとど、「小君、一日、千字文習はし奉り給ひしかば、やがて、一日に聞き浮かべ給ふめりき。詩など誦じ給ふ、御声にはまさりためり。いと面白うあはれになむ」。（注26）

⑤秘琴披露後の贈り物について、俊蔭の娘と仲忠の会話（楼の上・下　九四一）

尚侍、大将に、「いとかたじけなき御幸を、いかが仕うまつるべからむ」。「唐土の集の中に、小冊子に、所々、絵描き給ひて、歌詠みて、三巻ありしを、一巻を朱雀院に奉らむ」。

③は、仲忠が自分の腹違いの弟である小君を称賛する場面である。〈学問〉の系譜を継ぐのは仲忠の実子である宮の君が妥当なのだが、宮の君は「いぬ宮のはらからにはあらざめり」「不用の者なり」と父によって批難されている。その一方で、小君は、「この君、仲忠らが教へむことも聞きつべし、手などもいとうつくしう書き、声もいとをかしうぞ侍る」と、兄に称賛されている。ここで注意すべきは、仲忠と宮の君は、清原氏ではないものの俊蔭の血が流れているのに対し、小君は、藤原氏である上に俊蔭とは血のつながりが一切ないということである。しかし、少なくとも、仲忠は、俊蔭の血が流れている宮の君に〈学問〉を継承させる気がないということは明白だといえる。

④は、小君の学問の様子を表した内容である。「小君、一日、千字文習はし奉り給ひしかば、やがて、一日に聞き浮かべ給ふめりき。詩など誦じ給ふ、御声にはまさりためり。いと面白うあはれになむ」とあるように、小君は、千字文を一日で習得した。先の例と合わせてみると、仲忠の実子である宮の君ではなく、仲忠の異母弟の小君が〈学問〉の系譜を担う者として有力視されているということが言えそうである。しかし、小君が習っているのは仲忠が作成した「手本」ではない。また、猪川優子は、いぬ宮が産むであろう皇子が学問の系譜を担う者なのだとの指摘をしている（注27）が、先述したように、いぬ宮が入内するかどうかは分からず、そういった意味での不安因子がある。そのように考えると、〈学問〉の系譜を担う者は、この物語では特定することができないのだ。

さらに、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物の一部は、ついに仲忠の手元を離れる。⑤では、秘琴披露後に、俊蔭の娘と仲忠が、朱雀帝への贈り物について話し合っている場面である。ここで、仲忠は、「唐土の集の中に、小冊子に、所々、絵描き給ひて、歌詠みて、三巻ありしを、一巻を朱雀院に奉らむ」と言う。これは、「蔵開・中」巻において、朱雀帝への進講の際に使用されていた本のうちの一冊である。「俊蔭」巻では、俊蔭は帝から春宮に琴を教えるようにと要請され、それを断っている。その代わりとして、俊蔭の孫

である仲忠が、当時の春宮である朱雀院に、その一部だけを献上したとも読める箇所である。祖父がしなかった皇統への琴の伝授の代わりに、孫が祖父の書物を献上するという、「俊蔭」巻のなぞりなおしとも取れるこの箇所は、しかし、〈学問〉という面から読んでみると、分散してしまっていることになるのだ。このように、〈学問〉の系譜を担う者が定まらないばかりか、俊蔭伝来の蔵から出てきた書物自体が、分散し始めているといえる。

最後に、〈学問〉の系譜から派生した〈手〉の系譜についてみておきたい。

かかるほどに、「右大将殿より」とて、手本四巻、色々の色紙に書きて、花の枝につけて、孫王の君のもとに、御文してあり。「『みづから持て参るべきを、仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。……」とて奉れ給へり。御前に持て参りたり。見給へば、黄ばみたる色紙に書きて、山吹につけたるは、真にて、春の詩。青き色紙に書きて、松につけたるは、草にて、夏の詩。赤き色紙に書きて、卯の花につけたるは、仮名。初めには、男にてもあらず、女にてもあらず、あめつちぞ。その次に、男手、放ち書きに書きて、同じ文字を、さまざまに変へて書けり。

わがかきて春に伝ふる水茎もすみかはりてや見えむとすらむ

女手にて、

まだ知らぬ紅葉と惑ふうとふうし千鳥の跡もとまらざりけり

さし継ぎに、

飛ぶ鳥に跡あるものと知らすれば雲路は深くふみ通ひけむ

次に、片仮名、

いにしへも今行く先も道々に思ふ心あり忘るなよ君

葦手、

底清く澄むとも見えで行く水の袖にも目にも絶えずもあるかな

と、いと大きに書きて、一巻にしたり。見給ひて、「いとほしく、よろづのことに手惜しみ給ふ人の、さまざまに書き給へるかな。……」……とのたまひて、白き色紙の、いと厚らかなる一重に、「……この本どもを、かくさまざまに書かせて賜へるなるなむ、限りなく喜び聞こえ。……」とて奉れつ。（国譲・上　六五四～六五六）（注28）

これは、藤壺の若宮に仲忠が四巻の手本を贈った場面である。傍線を引いた箇所は、いかにこの手本が素晴らしい贈り物であったかを示す部分である。また、仲忠からの手紙の内容「仰せ言侍りし宮の御手本持て参るとてなむ。」から、仲忠が春宮にも手本を献上したことがわかる。このように、〈手〉の系譜は、〈琴〉の系譜・〈学問〉の系譜とは違い、最初から血脈とは無関係になっている。仲忠が図ったのは家の復興だけではなく、いかに「清原家」のものを継承させていくかというところもあったのではないだろうか。

前述したが、〈琴〉の系譜と〈学問〉の系譜は、清原家のものであり、〈手〉の系譜は、仲忠によって作られてはいるものの、〈学問〉の系譜から派生したものである。このことを考えると、〈手〉の系譜も全く「清原家」と関係ないわけではない。だが、秘琴披露が行なわれる「楼の上・下」巻において、「清原家」の者は、俊蔭の娘しか残っていない。そして、その俊蔭の娘も、いぬ宮への秘曲伝授の直前には、体調が思わしくないことが何度も語られる。「清原家」の〈継承されていくもの〉は、〈蔵開き〉で清原氏の末裔であることを自覚した藤原仲忠という一人の人物に集約され、秘琴披露の場で、綺麗に組み合わされる。しかし、仲忠の次の代を考えると、誰が何を継ぐのか、継いだ人間がそれを伝えていけるかという問題が出てくる。俊蔭の娘が亡くなった場合、「清原家」は絶え、〈琴〉、〈学問〉、手本は、「清原氏」があったことを証明するものとして機能するはずである。『うつほ物語』は、清原俊蔭が漂流し、三十面の琴を手に入れるところから始まり、その娘が孫に秘曲伝授をして、披露し、清原氏が称賛されるというところで終わっている。これらの〈継承されていくもの〉は「うつほ」に代表される、「籠り」の空間の中で伝授される。しかし、これまでに非公開の論理に貫かれていた〈琴〉や〈学問〉が公開され、かつ系譜を担う次の世代に不安が残る以上、『うつほ物語』が書かなかったその先には、「籠り」の空間は存在せず、よって、「楼の上・下」巻における秘琴披露の場は、必ずしも「大団円」だとは言えないのである。

注1　〈琴〉については、序章の注参照。

注2　西本香子「「琴（キン）」と「琴（こと）」」（『明治大学大学院紀要　文学篇』二八、一九九一年二月）

注3　上原作和「《琴》の譜の系と回路――物語言説を浮遊する音――」（『〈源氏物語〉の生成』二〇〇四年）。なお、この論は、『源氏物語』の琴まで論じた上で、胡笳にまで言及している。

注4　三田村雅子「宇津保物語の〈琴〉と〈王権〉――繰り返しの方法をめぐって――」（『東横国文学』一五、一九八三年三月）

注5　中嶋尚「うつほ物語論1～5――琴の族序説」（『東洋大学大学院紀要（文学研究科）』三五～三九、一九九九年二月～二〇〇三年二月）

注6　猪川優子「『うつほ物語』の〈秘琴〉と〈あて宮〉：「繋がり」の形成をめぐって」（『古代中世国文学』九、一九九七年三月）。このほか、〈琴〉に関する猪川論には「『うつほ物語』仲忠の因縁：変化する琴の音」（『古代中世国文学』一四、一九九九年一二月）がある。

注7　野口元大「霊異と栄誉」（『平安文学論究』一二、一九九九年）

注8　大井田晴彦「栄花と憂愁――「楼上」の主題と方法――」（『うつほ物語の世界』風間書房、二〇〇二年。二〇〇一年三月初出）

注9　須見明代「「宇津保物語」における俊蔭女」（『日本文学（東京女子大学）』三九、一九七三年三月）、三田村雅子（注4）など。また、楼の上での秘琴公開には、「爛柯の故事」の引用が指摘されている（上原作和・正道寺康子編『洞中最秘鈔――うつほ物語引用漢籍註疏』新典社、二〇〇五年）。

注10　伊藤禎子「〈耳〉の音響」（『『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇八年三月初出）

注11　〈系譜〉については、序章の注参照。

注12　『日本国語大辞典』で「大団円」を引くと「小説、劇などの終わり、または最終のこと。特に、最後がめでたくおさまること。おおぎり。」と載っている。ここでは特に、「最後がめでたくおさまること」という意味での「終わり」という意味で、この言葉を使用する。

注13　三田村雅子は、俊蔭の娘は「どこまでも純粋に琴の世界を継承する」者であり、一方、仲忠は「琴の中に、というよりは書物の中に、代々の想いを読みとる存在」だと指摘する（注４）。これに対し、高橋亨は、俊蔭伝来の蔵にあった累代の書物が「仲忠に学問の家としての自覚を促すとともに、いぬ宮誕生の際にも用いられ、琴の家としての意識をも呼び起こした」とする（「うつほ物語　うつほ物語の琴の追跡、音楽の物語（特集:伊勢物語とうつほ物語）」『国文学　解釈と教材の研究』四三-二、一九九八年二月）

注14　三田村雅子は、秘琴公開の場に今上帝がいなかったことから、「王権に魅きつけられながら、どこまでも王権に反発する論理を繰り返し追いつめていく所に、宇津保物語の世界があったと見るべき」だと指摘し（注４）、大井田晴彦も「琴の家と朝廷の対立」があると述べる（「吹上の源氏――涼の登場をめぐって」『中古文学』五八、一九九六年一一月）。これに対し、猪川優子が「俊蔭一族にとって帝とは重要」であり、反逆の対象になり得ないと反論し（注６）、さらに戸田瞳が「俊蔭一族はその繁栄を皇室に支えられつつも、肝心な場面では彼らの侵入を遮断する」（「『うつほ物語』俊蔭一族と皇室の距離――琴をめぐる思惑――」『北海道大学　国語国文研究』一三八、二〇一〇年七月）と双方どちらかに偏るべきではないと述べる。

注15　前田家本では「先祖（せんじよ）の御領なりけり」（九二七頁）となっており、他に「せむそ」「せんそ」などの異同がある。

注16　前田家本では「わづか（はつか）なる女子知るべきにあらず……後出で（はて）まで来ば」（一〇五四頁）となっており、他に「はかなき女子」「はやかなる女子」などの異同がある。

注17　上原作和は、「俊蔭の末裔達は、有形無形に祖霊に守られつつ、「国家の要道」としての學藝を習得していた」と指摘する（「〈国家の要道〉たりし本文　日本古代思想史の内なる『源氏物語』」『源氏物語と文学思想　研究と資料――古代文学

論叢第一七輯』、二〇〇八年)。このように捉えると、仲忠は自身が習得した「国家の要道」としての學藝を、俊蔭の血を引くいぬ宮に活かしたと捉えられ、結果として、いぬ宮が「超越的な能力」を得たといえる。

注18　西山登喜は「うつほ物語は筋書きが語る表層ではなく、〈モノ〉が浮き彫りにする深層・様相を叙述しようと試みたのではなかろうか。」(「うつほ物語〈モノ〉が見せる相関図」『源氏物語の言葉と身体』青簡舎、二〇一〇年)と述べている。この他、『うつほ物語』の物の贈与に関する論として、上原作和「〈琴〉のゆくへ(1)――楽統継承の方法あるいは『うつほ物語』思想史的位相――」(『光源氏物語の思想史的変貌――〈琴〉のゆくへ』有精堂出版、一九九四年一二月)、三浦則子「『うつほ物語』の装束をめぐる表現――手紙の使いへの禄を通して――」(『国文白百合』三二、二〇〇一年三月)、西山登喜「うつほ物語〈モノ〉を「借りる」仲忠――基盤構築の方法――」(『日本文学』五八-五、二〇〇九年五月)がある。

注19　〈蔵開き〉については、序章の注参照。

注20　第三章「書かれた〈手〉」参照。

注21　この箇所の非常に異同が多いことは、第五章で述べたとおりである。また、仲忠の手本四巻の異同に関しては、大友信一「「右大将殿より」の「手本四巻」考」(『就実論叢(人文篇)』第二六号、一九九七年二月)に詳しい。

注22　伊藤禎子「書物の〈音〉」(『『うつほ物語』と転倒させる快楽』森話社、二〇一一年。二〇〇七年一二月初出)

注23　前田家本では、「くにぐ〳〵のかみを」(一八五一頁)となっている。

注24　〈手〉の〈系譜〉において、(俊蔭の父清原の大君とその妻皇女)と(俊蔭)というように、仲忠以前の人物たちに括弧を付したのは、これらの人物たちは、書が継承されたためにその筆跡が継承され、それを用いて仲忠が手本を作成したことの結果として〈手〉の〈系譜〉に組み込まれたためである。

注25　前田家本では「宮にも、あからさまにも率て参れば、見給はで(見給とて)、『……いぬ宮のはらから(はらかす)にはあらざめり。率て往ね』とぞ思ひ給ふ。……この君、仲忠ら(よ)が教へむことも……」(一七〇九頁)となっており、この他、「いぬ宮のいとかす」という異同がある。

注26　前田家本では「小君、一日（け君ひとり）、千字文習はし奉り給ひしかば、やがて、一日に聞き浮かべ給ふめりき（一めりき）。詩など誦じ給ふ、御声（御こ思）にはまさりためり。……」（一七一七～一七一八頁）となっており、この他、「こ君に」「わかこ君ひとり」「此君」・「へめりきかし」「一めりき」「へかりきかし」という異同がある。

注27　猪川優子『『うつほ物語』宮の君と小君――次世代の確執――』（『古代中世国文学』一八、二〇〇二年一二月）

注28　この箇所の異同は、（注21）を参照。

資料　『うつほ物語』における文字が書かれた物・文字と対になった贈り物一覧

「俊蔭」巻

該当例なし

「藤原の君」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
七一	四	源実忠	あて宮	兵衛の君	めづらしく出で来たる雁の子		
七三	九	源実忠	あて宮	兵衛の君	花桜のいと面白き花びら		
七四	八	源実忠	あて宮	兵衛の君	白銀の薫炉に、白銀の籠作り覆ひて、沈を搗き篩ひて、灰に入れて、下の思ひに、すべて黒方をまろがして		
七五	一七	源実忠	あて宮	兵衛の君	川島のいとをかしき洲浜に、千鳥の行き違ひたるなどして		
九一	一二	源仲澄	あて宮			蜘蛛の巣かきたる松の、露に濡れたる	

「忠こそ」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
一一八	四	一条北の方	忠こそ		小さき菖蒲		

「春日詣」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
一三八	一三	兵部卿の親王	あて宮		面白き梅の花を折らせ給ひて、沈の男作らせ給ひて、花の雫に濡れたるに		
一三八	一六	あて宮	兵部卿の親王		蓑虫つける花折らせ給ひて、それが下に、笠着せたる者ども立てて		一三八頁一四行目への返事。
一四八	一二	忠こそ	あて宮		散り落つる花びらに、爪もとより血をさしあやして		
一四九	二	春宮	あて宮	右近少将		柳	
一五〇	七	藤原仲忠	あて宮	孫王の君	をかしき松に、面白き藤の懸かれるを、松の枝ながら折りて持ていまして、花びらに		
一五一	一	源仲頼	あて宮	宮あこ君	をかしき柳の萌え出でたりけるに		

「嵯峨の院」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
一六〇	三	藤原仲忠	あて宮	孫王の君	面白き萩を折りて、葉に		
一六五	一三	三の宮	あて宮		御前の一本菊、いと高く厳しく、移ろひて、朝ぼらけに、めでたくい厳しう見ゆるに、露に濡れたるを押し折りて		「三の宮」とは仁寿殿の女御腹の三の宮を指す。
一六八	一五	源仲澄	あて宮		御前の花薄の中に、今、もとより生ひ出づる葉、秋も穂に出でぬを引き抜きて、その葉に		
一七〇	五	良岑行正	あて宮		白き御衣の袖に、涙かかりて、掻練なんど映りて濡れたるを、取り放ちて		
一七〇	九	あて宮	良岑行正		（白き御衣の袖に、涙かかりて、掻練なんど映りて濡れたる）傍らに		一七〇頁六行目への返事。

「祭の使」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
二〇五	二	藤原仲忠	あて宮		空蝉の身		
二一三	六	藤原仲忠	あて宮		朽ちたる橘の実		

二一四		複数人	複数人	（源仲澄）	御扇		
二二〇	一一	春宮	あて宮			常夏の花を折りて	
二二一	六	藤原兼雅	あて宮		海に臨きたる海人立てる洲浜に		
二二一	八	あて宮	藤原兼雅		漁りしたる洲浜に		二二一頁七行目への返事。
二二五	三	三春高基	あて宮	宮内の君	しこぶちに古めきたる箱二つに、東絹一箱・遠江綾一箱入れて、肌荒く強きちうしに		
二二七	九	曹頭進士	藤原季英			夏の衣の破れたる、朽葉色の下襲の困じたるを取りに遣りて	
二三三	一七	藤原季英	あて宮		中のおとどの東面なる竹の葉に		
二三六	一三	藤原仲忠	あて宮	孫王の君	白き蓮の花に、笄の先して	龍胆の花	

扇が回された順番は次の通りである。
源正頼
式部卿の宮の御方
藤原忠雅
中務の宮
源実正
藤原忠俊
藤宰相殿（忠俊弟）
源実頼

「吹上・上」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
二三七	六	藤原仲忠	あて宮	孫王の君	黒方に、白銀の鯉くはせて、その鯉に		
二三七	一二	あて宮	藤原仲忠	孫王の君	白銀の川に、沈の松燈して、沈の男に持たせ		二三七頁六行目への返事。
二五一		君だち	—		折敷の上の飾り。藤原仲忠は「花園の胡蝶」源仲頼は「林の鶯」源涼は「水の下の魚」良岑行正は「山の鳥ども」		折敷の詳細については二五〇頁を参照。
二五六	六	種松妻	君だち	よき童	合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ、花に蝶どもあまた据ゑて、その一つに		
二五六		複数人	複数人		（合はせ薫物を山の形に作りて、黄金の枝に白銀の桜咲かせて立て並べ、花に蝶どもあまた据ゑて）蝶ごとに		白銀の桜の花に書きつけた順番は次の通りである。藤原仲忠　源仲頼　源涼　良岑行正　清原松方

「吹上・下」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
二九七	一〇	源実忠	あて宮			鈴虫を奉りて	
二七六	一五	藤原仲忠	あて宮	孫王の君		（右に同じ）	二七六頁一四行目のものをさらにそのまま贈った。
二七六	一四	あて宮	藤原仲忠	孫王の君		（右に同じ）	二七六頁七行目のものをそのまま返却した。
二七六	七	藤原仲忠	あて宮	孫王の君		黄金の船に物入れながら	
二七一	三	種松妻	源仲頼 藤原仲忠 良岑行正		白銀の透箱四つづつ、黒方の炭一透箱、金の砂子に、白銀・黄金を幣に鋳たる一透箱の上に、歌一つ、やがて、結び目に結ひつけさせたり。		
二六二	一二	種松	君だち		藤の花、松の枝、沈の枝に咲かせて、金銀・瑠璃の鶯に食はせて		歌の題を書く。「絵詞」
							近正時蔭種松

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
三一七	九	俊蔭の娘	大后		御挿頭、尚侍の殿、松の下に、鶴据ゑて	白銀・黄金の若菜の籠、同じ壺ども、色々の作り枝どもに、よろずの宝物ども清らにし入れて	
三二一	八	后の宮	朱雀帝	源仲頼	今日の捧げ物さながら		「今日の捧げ物」とは、三一七頁九行目で俊蔭の娘が献上したものを指す。
三二一	一〇	朱雀帝	大宮			かねてよりさる御心ありて、黄金の山・威儀物などありて	
三二三	七	源実忠	あて宮			草木につけつつ	
三三三	三	藤原仲忠	あて宮			御祓への物取り具して奉る、黄金の車に黄金の黄牛懸けて、乗せたる人・つけたる人、皆金銀に調じて	
三四三	一	源実忠	兵衛の君			蒔絵の置口の箱一具に、綾・絹畳み入れ、夏の装束、綾襲にて入れて	
三四三	九	源実忠	兵衛の君			をかしげなる沈の箱一具に、黄金一箱づつ入れて取らせ給ふ	兵衛の君は、これを受け取らなかった。

「あて宮」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
三五四	一二	藤原仲忠	あて宮		蒔絵の置口の箱四つに、沈の挿櫛より始めて、よろづに、梳髪の具、御髪上げの御調度、よき御仮髻・蔽髪・釵子・元結・えり櫛より始めて、ありがたくて、御鏡・畳紙・歯黒めより始めて一具、薫物の箱、白銀の御箱に、唐の合はせ薫物入れて、沈の御膳に、白銀の箸・薫炉・匙、沈の灰入れて、黒方を、薫物の炭のやうにして、白銀の炭取りの小さきに入れなどして、細やかにうつしげに入れて奉るとて、御櫛の箱に		
三五五	三	源涼	あて宮			夏冬の御装束ども、装ひなど麗しうして、沈の置口の箱四つに畳み入れて、包みなど清らにて	

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
三四四	一三	源実忠	兵衛の君			白銀の箱に黄金千両を入れて	
三四四	一七	兵衛の君	源実忠			（白銀の箱に黄金千両を入れて）	三四四頁一四行目にて貰ったものを返却

「内侍のかみ」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
四一〇	一四	春宮	藤壺			御前に、生海松の、石・貝つきながらあるを取り給ひて	
三七一	一三	大殿の君	后の宮			「瑠璃の壺」を返却	「大殿の君」とは源季明の娘を指す。三七一頁九行目の贈り物を返却。
三七一	九	后の宮	春宮の御局ども			「瑠璃の壺」に入れた「かの御飲きの米」	
三七一	五	大宮	后の宮	宮の亮		黄金の壺の大きなるに、かの御飲きの米一壺入れて奉れ給ふ	三七一頁一行目への返事。
三七〇	一六	后の宮	大宮 藤壺	宮の亮		御産養、白銀の透箱十に、御衣十襲、御襁褓十襲、沈の衝重二十に、白銀の箸、匙・杯ども、皆同じ物、すみ物、いと厳し。碁手、銭百貫、大いなる紫檀の櫃に扱き入れて	
三五五	八	源実忠	（あて宮）	兵衛の君		装束	兵衛の君に、あて宮への取り次ぎを頼んでいる。

「沖つ白波」巻

該当例なし

「蔵開・上」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
四七〇	六	清原俊蔭	藤原仲忠		書ども、麗しき帙簀どもに包みて、唐組の紐して結ひつつ、ふさに積みつつあり。その中に、沈の長櫃の唐櫃十ばかり重ね置きたり。奥の方に、よきほどの柱ばかりにて、赤く丸き物積み置きたり。ただ、口も目録を書きたる書を取りと給ひて、……。		俊蔭伝来の蔵から出てきたもの。俊蔭は、仲忠個人を受取人として意図していたわけではないが、物に文字を書きつける例の一つとして掲げる。

「蔵開・中」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
五四五	一七	藤壺（孫王の君）	殿上に集まっている人々		大いなる白銀の提子に、若菜の羹一鍋、蓋には、黒方を、大いなるかはらけのやうに作り窪めて、覆ひたり。取り所には、女の一人若菜摘みたる形を作りたり。それに、孫王の君の手として、かく書きたる、		

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
五四七	一	仲忠	藤壺		物取り食ふ翁の形を、御膳まろがして作り据ゑて、それに、かく書き給ふ。		五四五頁一七行目への返事。
五八五	四	源涼 さま宮	藤原仲忠		洲浜	糸を藁にて、白き組をあらかにて、絹一匹を腹赤にて、そを五葉の作り枝につけて、十枝、鯉・鯛は、生きて働くやうにて、同じ作りの枝に、雉の嘴には黒方、皆白銀どもなり。鳩は黄金、その嘴には黄金入れたり。小鳥には黒方をまろがしたり。折櫃は白銀、沈の鰹、黒方の火焼き、鮑、海松・青海苔は糸、甘海苔に綿を染めて、下には綾、衝重二十六、蘇芳の物入れたり。	洲浜に書かれた文字は涼によるものである。
五八五	一一	源涼	藤原仲忠			昨夜の勝ち物の銭に、今一餌袋、白き添へて、	
五九六	一二	藤原仲忠	源仲頼の妹	近く使ひなる上童給ふ	（文を）ちうしのすくよかなるに包みて、「山より」と、少将の手にいとよく書き似せて、	米一石と炭二荷	「御厩の草刈・馬人、小さき童二人、大きなる童子」が「近く使ひ給ふ上童」と共に行った。

六〇五	四	仁寿殿の女御	藤壺		青き色紙に書きて、小松につけて
六〇五	一五	俊蔭の娘 藤原兼雅	いぬ宮		折敷の洲浜（「鶴二羽、しかよろひてあり。松、生ひたり。」）
六〇五 ― 六〇六		複数人	複数人		折敷の洲浜
六〇八	六	近江守	藤原兼雅	藤原仲忠	近江守が住んでいた家の地券とそこにある調度の目録
六一〇	一〇	藤原兼雅	中の君		（右に同じ）
					檜破子十、ただの十
「ただの十」とは、「ただの破子が十」という意味。	俊蔭の娘がいぬ宮の百日の祝いに贈った折敷の洲浜（六〇四頁一六行目参照）。	俊蔭の娘から贈られた折敷の洲浜に和歌を書きつけた順番は次の通りである。 藤原兼雅 仁寿殿の女御 俊蔭の娘 女一の宮 藤原仲忠	五九九頁一一行目参照。	「中の君」とは、故式部卿の宮の娘を指す。六〇八頁六行目のものを渡している。

「国譲・上」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
六四二	一〇	源涼 さま宮	藤壺			白銀に塗物したる鍵ども、ふさにつけつつ、いと多かりける中に	

「国譲・中」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
六九〇	一三	春宮	藤壺	これはた		「よきほどなる、白銀・黄金の橘一餌袋、黄ばみたる色紙一重覆ひて、龍胆の組して結ひて、八重山吹の作り花につけて」ある中に「大いなる橘の皮を横さまに切りて、黄金を実に似せて包みつつ、一袋あり」	準備は源顕澄と源涼が行なった。
六九一	一二	なま嫗（仲忠）	藤壺	孫王の君	側離れて黒き水桶の大きやかなる、四つつい重ねて…大きなる葉椀を白き組して結ひて、五つさし入れたり。取り入れたれば、ほどは桶の大きさなり。開けて見れば、一つには、練りたる絹を、飯盛りたるやうに入れたり。今一つには、綾を、同じやうに入れたり。今一つには、鰹・鮭などのやうにて、沈入りたり。葉椀の蓋に、		葉椀の蓋に書かれた文字は「なま嫗」によるものとあるが、この後に、孫王の君が仲忠が書いたものだと述べている。

六九四	六九三	六九二
一四	一三	一六
藤原仲忠	女一の宮 藤原仲忠	春宮
藤壺	藤壺	藤壺
右大将殿、大いなる海形を入れて、蓬莱の山の下の亀の腹にたり、香ぐはしき？衣を侍従・香衣香・合はせ薫物・黒方・枝ども並みを土に立ちたて、小鳥・海の面し色黒きに鶴四つ、皆、白きと黒ずして連なり、白きも、六色、はどに、つい、ど、大きさ、白銀を腹ふくらのほどに、せたり。そのあれがたき麝香・よろづ薬一腹づつ入れたり。その鶴に	子持ちの御前のおとの御膳、稚児の御衣・襁褓、清うして奉れり。白きい折櫃に、黄ばみたる絵描きて、白き、黄ばみたる銭積みたり。御石の台に、例の、鶴あり。洲浜に	
		御屏風・御座より始め給ひて、長持の脚つきたる三つ、唐櫃五具に、綾・錦よりり始めて、よろづの物入れさせ給へり。
九日の産養。	七日の産養。洲浜に書かれた文字は仲忠によるものである。	七日の産養。

七一六	一七	藤原兼雅	梨壺女三の宮中の君	「鮎かがりいとをかしげに作り置かせ」たものに苞苴を添えたもの。
七二二	一二	藤原仲忠	春宮の若宮たち	手づから、往来、月日書きて、籤立てて、御名し給へり。傍らに、……と書き、蘇芳文籤にして、赤き色紙に書きて、撫子の花につけたり。
七二三	一四	源祐澄	女二の宮の乳母	女の装ひ一領・白張の一重襲包みて
七三六	一〇	源季明に仕えていた人々	源実忠	名簿
七三九	六	源正頼	源実忠の元北の方	よい蜜・瓜・焼米・生海松・水蕗など奉れ給へり。北の方の御もとに、御文あり。……取り寄せて見給へばり、、いとよき瓜・よき水蕗、折櫃に積みて、大きなる瓮に、「大姫君、御覧ぜよ」と書きつけたり。開けて見給へば、白銀の瓮ども
			白銀の籌四つ、脚つけさせて、鋳物師ども召して作らせ給ひて、取り上ぐる魚ども取らせつ。鮎一籠・鮑一籠・石斑魚・小鮒入れさせ、苞苴など添へさせて、	
				梨壺・嵯峨の院の女三の宮・故式部卿の宮の中の君は、いずれも兼雅の妻。

「国譲・下」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
七七四	一五	藤原仲忠	源仲頼		大将持たせ給へりし唐櫃・御衣櫃、山籠りに、奉り給ふ。唐櫃には、浅香に沈の脚つけて、蘇枋を朽にして、白銀の鉢・金椀・箸・匙・茶匙・銚子・水瓶など、よろづの調度尽くし入れたり。御衣櫃には、御法服一つ、限りなく清らにて、夜の装束、綾の指貫に、織物の襖、綾の袿どもなどして、その襖に		七六九頁一七行目に「御衣櫃一掛・唐櫃一掛持たせ給ふ。」とある。

					に、練りたる絹・唐綾など入れて、糸を輪に曲げて組みて、沈の枕につけたり。		

「楼の上・上」巻

頁数	行数	差出人	受取人	仲介者	文字が書かれた物	文字と対になった贈り物	備考
八三四	一〇	藤原兼雅	宰相の上	大和介		「尾張より奉りし唐櫃あらば、入り物ながらやよからむ」とて召し出でたり。片方に、絹二十疋・綾十疋、今一つ方には、尚侍、「ここに、物入れむ」とぞのたまひて、掻練の綾の衣	

「楼の上・下」巻

該当例なし

	八三七	八四三	八四七	八七五
	一七	一四	一七	五
	藤原仲忠	梅壺	俊蔭の娘	朱雀院
	宰相の上	藤原兼雅	宰相の上	女一の宮 俊蔭の娘
	いと小さき小舎人童			蔵人
	衣箱一具に、唐綾の撫子の袿・濃き縹の袿・濃紫の織物の細長・三重襲の袴、今一つには、若君の御料に、いと濃き袿一襲・薄き蘇芳の綾の袿・桜の織物の直衣・躑躅の織物の指貫など入れ給ふ。女の袴の腰に、赤き薄様に、……とて、御文もなし。			
一襲・薄色の織物の細長・袴一具、山吹の綾の三重襲、「にそき給はむ」とて、斑絹と入れ給ふ。		山菅を一包にて、香の扇、薄様の中に入れ給ひて	白銀の透箱を二つか。この透箱の中身は、「一つには、唐綾五疋、今一つには、沈・紫檀の櫛」が入っている。	白銀の鬚籠二十、白銀・黄金して、若栗・松の実・棗など作り入れさせ給ひて
	「御文もなし」とあることから、「赤き薄様」に書かれたものは手紙として扱われていないことがわかる。			女一の宮と俊蔭の娘のそれぞれに、同じものが贈られてきている。

初出一覧

序章　本論の目的……書き下ろし

第一章　物に文字を書きつける

……「物に文字を書きつけること――『うつほ物語』の仲忠の例から――」（『学習院大学大学院　日本語日本文学』七、二〇一一年三月）

第二章　「書きつける」ことから見える言語認識

……「『うつほ物語』における言語認識――仲忠と実忠があて宮に贈った物からの一考察――」（『学習院大学人文科学論集』二三、二〇一三年一〇月刊行予定）

第三章　書かれた「手」

……「『うつほ物語』における「手」――登場人物たちの筆跡からの一考察――」（『学習院大学大学院　日本語日本文学』八、二〇一二年三月）

第四章　紙に文字を書く――手紙の機能

……「うつほ物語における手紙――人間関係を可視化する手紙の機能――」（『「記憶」の創生〈物語〉1971-2011』物語研究会、二〇一二年三月）

第五章　「手」の相承――文字の伝授と〈琴〉の伝授
……「「手」の相承――仲忠が若宮に贈った「手本四巻」――」（『古代中世文学論考』二八、二〇一三年三月）

第六章　清原家の〈学問の系譜〉を担う仲忠――先祖が書いた書物と学問の継承
……「清原家の〈学問の系譜〉を担う藤原仲忠――『うつほ物語』「蔵開・上」巻を始発として」（『学習院大学大学院　日本語日本文学』九、二〇一三年三月）

第七章　清原家の〈学問〉の進講……書き下ろし

第八章　〈琴〉と〈学問〉の公開の場の論理――後半の巻々を中心に……書き下ろし

第九章　清原家の系譜の全てを担う仲忠と次世代の者たち
……「『うつほ物語』の〈琴〉・〈学問〉・手本――全てを担う仲忠とそれを継承する者たち――」（『物語研究』一三、二〇一三年三月）

＊収めた再録論文は、全体にわたり加筆・訂正を加えているが、初出と比べ趣旨の変更はない。